

論文 / 著書情報  
Article / Book Information

題目(和文)	初期キリスト教ローマ帝国に於ける集中形式宗教建築の建築構成－内部立面構成に於ける造形理念－
Title(English)	
著者(和文)	篠野志郎
Author(English)	SHIRO SASANO
出典(和文)	学位:工学博士, 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:乙第1956号, 授与年月日:1989年7月31日, 学位の種別:論文博士, 審査員:平井聖
Citation(English)	Degree:Doctor of Engineering, Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:乙第1956号, Conferred date:1989/7/31, Degree Type:Thesis doctor, Examiner:
学位種別(和文)	博士論文
Type(English)	Doctoral Thesis

初期キリスト教ローマ帝国に於ける集中形式宗教建築の建築構成  
 - 内部立面構成に於ける造形理念 -

目次:

	v - y'
第1章：序論	1
第1節：研究の目的	1
第2節：従来の研究	3
第3節：研究の方法と範囲	4
第4節：用語概念の規定	6
註：第1章	8
第2章：初期キリスト教ローマ帝国に於ける建築制作者	10
第1節：建築制作に於ける職業名称	10
第2節：メハニコスとarchitectus	17
第3節：小結	22
註：第2章	23
第3章：集中形式洗礼堂に於ける建築構成	30
第1節：平面構成	30
第2節：ラテラン洗礼堂	34
第1項：概要	
第2項：コンスタンティヌス帝時代の建築構成	
第3項：シスト3世時代の建築構成	
第3節：ラヴェンナのオーソドックス洗礼堂	40
第1項：概要	
第2項：ネオン時代の建築構成	
第4節：リヴァ・サン・ヴィターレの洗礼堂	53
第1項：概要	
第2項：初期キリスト教期に於ける洗礼堂の建築構成	
第5節：カルアト・シムアンの洗礼堂	57
第1項：概要	
第2項：建築構成	

第6節：エフェソの洗礼堂	63
第1項：概要	
第2項：マリア聖堂・洗礼堂の建築構成	
第3項：ヨハネ聖堂・洗礼堂の建築構成	
第4項：エフェソの洗礼堂に於ける建築構成	
第5項：エフェソに於ける集中形式の建築構成	72
第7節：ソフィア聖堂の洗礼堂	
第1項：概要	
第2項：建築構成	77
第8節：洗礼堂の内部建築構成	
第1項：内部の立面構成	
第2項：内部立面に於ける表面の構成	
第3項：アプスと立面構成との関係	84
第9節：宗教建築としての用途	85
第10節：小結	87
註：第3章	
第4章：集中形式集堂に於ける建築構成	100
第1節：平面構成	100
第2節：サンタ・コスタンザ教会堂	103
第1項：概要	
第2項：建築構成	
第3項：内部意匠	107
第3節：ローマのステファノ聖堂	
第1項：概要	
第2項：建築構成	114
第4節：テサロニキのロトンダ	
第1項：概要	
第2項：ガレリウス帝時代の建築構成	
第3項：キリスト教・教会堂の建築構成	
第4項：内部意匠	118
第5節：エウフェミア教会堂	
第1項：概要	
第2項：建築構成	
第3項：聖域部の構成	

第4項：建築の特徴	
第6節：セルギオス・バッコス教会堂	125
第1項：概要	
第2項：建築構成	
第3項：内部意匠	
第4項：建築の特徴	
第7節：身廊の内部建築構成	138
第1項：内部の立面構成	
第2項：内部立面に於ける表面の構成	
第8節：宗教建築としての用途	145
第9節：小結	147
註：第4章	149
第5章：集中形式宗教建築に於ける構成の発展と系譜	163
第1節：ローマ時代『建築書』にみられる建築構成	163
第1項：両書に於ける構成の概要	
第2項：『建築書』に於ける 集中形式に類似した建築形態	
第3項：技術面に於ける集中形式との関係	
第2節：ローマ帝政期に於ける集中形式	173
第1項：神殿・靈廟・皇帝の住宅に於ける集中形式	
第2項：浴場建築に於ける集中形式	
第3節：ローマ帝政期と初期キリスト教期の 集中形式に於ける建築構成	186
第1項：集中形式に於ける平面構成	
第2項：壁式構成と柱・梁式構成	
第3項：ドームの構成	
第4節：小結	197
註：第5章	200
第6章：初期キリスト教期の集中形式宗教建築に於ける造形理念	206
第1節：初期キリスト教期の宗教思想	207
第2節：プロティノスに於ける美の構造	210
第3節：初期キリスト教期集中形式宗教建築に於ける 内部表面の構成とプロティノスの美学	213

第4節：小結	218
註：第6章	220
第7章：結論	222

論文 表目次：

- 表1-1： 集中形式の用語概念
- 表2-1： 建築に関連した職業名称
- 表2-2：  $\mu\eta\chi\alpha\nu\iota\kappa\omicron\varsigma$ とarchitectusの対照
- 表3-1： 洗礼堂の平面構成の比較対照
- 表3-2： 洗礼室の内部構成の対照
- 表4-1： 集中形式の遺構の概要
- 表4-2： 長堂形式に対応する集中形式の平面構成
- 表4-3： 堂内の架構形式・構成材料
- 表4-4： 堂内の仕上げ材料
- 表4-5： 集中形式の遺構の用途
- 表5-1： FaventiusとVitruviusの『建築書』の対照表
- 表5-2： 建築理念に関するVITRUVIUSとFAVENTIUSの対照表
- 表5-3： 浴場に於ける集中形式の部屋の機能
- 表5-4： 集中形式宗教建築に於ける構成の系譜
- 表6-1： プロティノスに於ける美に関する概念と言説

図版目次：

- 図3-1：ローマ時代のラテラン聖堂周辺 (after G.B. Giovenale)
- 図3-1：ルネサンス期のラテラン聖堂周辺 (after R. Krautheimer et.al.)
- 図3-2：ラテラン聖堂・洗礼堂平面図 (after R. Krautheimer et.al.)
- 図3-3：ラテラン聖堂・洗礼堂推定復元図 (after Giovenale)
- 図3-4：ラテラン聖堂・石棺浮き彫り (after Giovenale)
- 図3-5：ラテラン聖堂・シスト3世時代の洗礼堂推定断面図  
(after Giovenale)
- 図3-6：ラテラン聖堂・シスト3世時代の洗礼堂推定復元図 (by Giovenale)
- 図3-7：オーソドックス洗礼堂・現状立面図 (by Kostof)
- 図3-8：オーソドックス洗礼堂・現状平面図 (by Kostof)
- 図3-9：オーソドックス洗礼堂・現状断面図 (by Kostof)
- 図3-9a：オーソドックス洗礼堂・低層部オブス・セクティル (by Kostof)
- 図3-10：オーソドックス洗礼堂内部 (by Kostof)
- 図3-11：オーソドックス洗礼堂・低層リングの図柄の建築概念平面図  
上：Kostof案、下：筆者案
- 図3-12：オーソドックス洗礼堂・ドームモザイク (after Kostof)
- 図3-13：リヴァ・サン・ゲイタルの洗礼堂・発掘平面図 (by Steinmann-Brodbeck)
- 図3-14：リヴァ・サン・ゲイタルの洗礼堂・復元平面図、断面図  
(after Steinmann-Brodbeck)
- 図3-15：カルアト・シムアンの全体図 (after Tchalenko)
- 図3-16：カルアト・シムアンの建設第1期 (after Tchalenko)
- 図3-17：カルアト・シムアンの建設第2期 (after Tchalenko)
- 図3-18：カルアト・シムアンの建設第3期 (after Tchalenko)
- 図3-19：カルアト・シムアンの洗礼堂 (after Tchalenko)
- 図3-20：カルアト・シムアンの洗礼堂・復元平面図 (after J.H. Emminghaus)
- 図3-21：カルアト・シムアンの洗礼堂・復元断面図 (after J.H. Emminghaus)
- 図3-22：エフェソの MARIA 聖堂・平面図 (after C. Foss)
- 図3-23：エフェソのヨハネ聖堂・平面図 (M. Buyukkolanci)
- 図3-24：エフェソの MARIA 聖堂・洗礼堂隅柱 (M. Buyukkolanci)
- 図3-25：エフェソの MARIA 聖堂・洗礼堂復元断面図 (東西) (by F. Knoll)
- 図3-26：エフェソのヨハネ聖堂・洗礼堂復元平面図、断面図  
(after Buyukkolanci)
- 図3-27：エフェソの浴場・復元図 (by F. Fasolo)

- 図3-28：エフェソのビザンティン浴場 (by Knoll)
- 図3-29：エフェソのビザンティン浴場・カルダリウム復元図 (by Fasolo)
- 図3-30：ソフィア聖堂・洗礼堂現状平面図 (by Van Nice)
- 図3-31,32：ソフィア聖堂・洗礼堂復元平面図、断面図 (after Dirimtekin)
- 図4-1：フィリピの教会堂D (by D. Pallas)
- 図4-2：セルギオス・バックス教会堂1階平面図 (by Ebersolt)
- 図4-3：サン・ヴィターレ聖堂1階平面図 (after C. Mango)
- 図4-4：テサロニキのロトンダ・教会堂時期平面図 (after Pazara)
- 図4-5：ガリチン山のテオトコス教会堂1階平面図 (after Krautheimer)
- 図4-6：ファールの集堂1階平面図 (by Butler)
- 図4-7：コンジューの教会堂1階平面図 (by Hoddinott)
- 図4-8：エウフェミア教会堂平面図 (by Belting)
- 図4-9：ステファノ聖堂現状平面図 (after Krautheimer)
- 図4-10：サンタ・コスタンザ聖堂全体平面図 (after Effenberger)
- 図4-11：サンタ・コスタンザ聖堂ヴォールトモザイクの図柄対応概念図
- 図4-12：サンタ・コスタンザ聖堂・15世紀の内部スケッチ (after Frutaz)
- 図4-13：サンタ・コスタンザ聖堂・断面図 (after Effenberger)
- 図4-14：サンタ・コスタンザ聖堂・内部 (by Effenberger)
- 図4-15：ステファノ聖堂・内部推定復元スケッチ (after Krautheimer)
- 図4-17：ステファノ聖堂・15世紀の内部スケッチ (after Krautheimer)
- 図4-18：ステファノ聖堂・復元案 (after Krautheimer)
- 図4-19：テサロニキのロトンダの初期キリスト教期概要 (after Pazara)
- 図4-21：ロトンダ・ガレリウス帝時代の平面図 (after Pazara)
- 図4-22：ロトンダ・ガレリウス帝時代の断面図 (after Pazara)
- 図4-23：ロトンダ・教会堂時代の断面図 (after Pazara)
- 図4-24：ロトンダ・内部 (by C. Mango)
- 図4-25：ロトンダ・ドーム概要 (by E. Kitznger)
- 図4-26：ロトンダ・ドーム低層部モザイク詳細 (by E. Kitznger)
- 図4-27：ロトンダ・アンボ詳細 (by Hoddinott)
- 図4-28：エウフェミア教会堂・聖域部全景 (by Belting)
- 図4-29：アンティオクスの私邸平面図 (by Belting)
- 図4-30：エウフェミア教会堂・平面図 (by Belting)
- 図4-31：エウフェミア教会堂・入口部分発掘詳細 (by Belting)
- 図4-32：アンティオクス私邸・外部復元図 (by Belting)
- 図4-33：エウフェミア教会堂・復元断面図 (by Belting)

- 図4-34：エウフェミア教会堂・テンブロン復元図 (by Belting)
- 図4-35：セルギオス・バックス教会堂現状周辺 (by Bildlexikon)
- 図4-36：セルギオス・バックス教会堂・2階平面図 (by Ebersolt)
- 図4-36a：セルギオス・バックス教会堂の柱列のリズム
- 図4-37：セルギオス・バックス教会堂・ナルテックス木製階段 (by Mathews)
- 図4-38：セルギオス・バックス教会堂・外観 (by Mathews)
- 図4-39：セルギオス・バックス教会堂・北面 (by Ebersolt)
- 図4-40：セルギオス・バックス教会堂・南面 (by Mathews)
- 図4-41：セルギオス・バックス教会堂・内部 (by Mathews)
- 図4-42：セルギオス・バックス教会堂とペテルス・パウロス教会堂の  
配置概念図
- 図4-43：エイレネ教会堂の南面 (by U. Peschlow)
- 図4-44：セルギオス・バックス教会堂・ドーム外観 (by Mathews)
- 図4-45：セルギオス・バックス教会堂・ドーム見上げ (by Mathews)
- 図4-46：セルギオス・バックス教会堂・エクセドラ (by Mathews)
- 図4-47：セルギオス・バックス教会堂・周歩廊 (by Mathews)
- 図4-48：セルギオス・バックス教会堂・断面図 (by Ebersolt)
- 図4-49：セルギオス・バックス教会堂・柱頭 (A) (by Mathews)
- 図4-50：セルギオス・バックス教会堂・柱頭 (B) (by Mathews)
- 図4-51：セルギオス・バックス教会堂・柱頭 (C) (by Mathews)
- 図4-53：セルギオス・バックス教会堂・1階エンタブラチュア (by Ebersolt)
- 図4-54：エイレネ教会堂・内観 (by Peschlow)
- 図5-1：ドムス・アウレア (after MacDonald)
- 図5-2：ドムス・アウレア、集中形式の部屋 (after MacDonald)
- 図5-3：ボンベイの住宅アトリウム (by Ward-Perkins)
- 図5-4：ドムス・アウレア、集中形式の部屋の概要 (after MacDonald)
- 図5-5：ウァッラ・アドリアーナ全体図 (by Ward-Perkins)
- 図5-6：ヒッファ・アドリアーナ平面図 (from 『ヴィッラ・アドリアーナ』)
- 図5-7：アポロ神殿 (from 『ヴィッラ・アドリアーナ』)
- 図5-8：ヒッファ・アドリアーナ全体図 (by H. Mielsch)
- 図5-9：ミッハ・アドリアーナ平面図、概要図 (after Ward-Perkins)
- 図5-10：パンテオン全景 (after MacDonald)
- 図5-11：パンテオン内観 (by Ward-Perkins)
- 図5-11a：パンテオン断面図 (by MacDonald)
- 図5-12：パンテオン平面図 (by MacDonald)

- 図5-14：ポンペイ、フォルムの浴場平面図 (by Brodner)  
図5-15：加サ、アントニヌの浴場平面図 (by Brodner)  
図5-16：カラカラ帝の浴場平面図 (by Ward-Perkins)  
図5-17：コンスタンティヌス帝の浴場平面図 (by Ward-Perkins)  
図5-18：ディオクレティアヌス帝の浴場平面図 (by Ward-Perkins)  
図5-19：ローマ、コンスタンティヌス帝の凱旋門 (by Kitznger)  
図5-20：ハルミラの劇場、スカエナエ・フロン (by M. Bieber)  
図5-21：テサロニキ、デメトリオス教会堂身廊 (by G. Swthriou)

## 第1章：序論

### 第1節：研究の目的

ディオクレティアヌス帝によるローマ帝国の東西分割と相い前後して、キリスト教の教会組織は帝国に於ける社会的地位を確立してゆく。しかし、330年にローマ帝国の首都をコンスタンティノーブルへ遷都して以降、西ローマ帝国の凋落に伴い、文化・政治的主導は東ローマ帝国、通称ビザンティン帝国へ移行する。こうした政治状況にあって、遺構を見る限りキリスト教建築は、地中海を取り巻くローマ帝国領内で活発な活動状態を呈している。キリスト教建築は一般住宅からの転用を考慮すると、3世紀に出現する(1)。しかし、宗教建築としての建築課題の展開は、コンスタンティン帝による313年のミラノ勅令以降、すなわち「教会の平和」以降、出現すると考えられている。これは宗教建築の形態としての独自性獲得への試行期間と考えることができる。この活発な展開期は、6世紀のユスティニアヌス帝の治世に完成を迎えるため、4世紀から7世紀にかけての期間が、一時代区分として一般的に是認されている(2)。この時代はビザンティン初期と命名されるが、遺構の分布は、ビザンティン帝国、即ち東ローマ帝国の範囲を越え、旧ローマ帝国全域に広がっている。従って、本研究では、この時代の宗教建築を包摂する領域概念として、初期キリスト教ローマ帝国という用語を設定している。

この時代の建築は西欧キリスト教建築の骨格を形作るものとして極めて重要であり、その実態と造形理念はキリスト教建築を考える上で、無視できないものである。しかし、通史的な観点では、ペプスナーもこの点に殆ど触れていない(3)。また、この時代の宗教建築は初期キリスト教、及びビザンティン建築史の中で検討されているが、形態の分類や意匠の系統だてに議論の集中する傾向にあり、作り出された建築空間に対する実態や造形理念という点では、十分なものとは言えない(4)。

一方、初期キリスト教ローマ帝国における宗教建築の2潮流とし

て、長堂形式と集中形式との対立的な2形式を指摘することができ  
る(5)。この2形式は後に、ドーム付設長堂形式の教会堂へ統合され  
ると一般的に結論されている(6)。これより以降、多様な建築形式が  
派生するが、集中形式はルネサンス期に再び主要建築形式として研  
究の対象となる(7)。これは、集中形式の建築構成における造形理念  
が、ルネサンス期に再び意識されて追求されるようになったことを  
示している。この様に、初期キリスト教ローマ帝国の建築形式の一  
つである集中形式は、西洋建築史の流れにおいて、無視できない枢  
要な史的位置を占めるものである。

しかし、個別的な研究や調査報告を除くと、建築構成という観点  
から点在する遺構を横断的に検討し、仮説を提起しようとする論考  
は見当たらない。即ち、代表的な集中形式をもとに、建築制作者の  
理念をもっとも如実に反映している一つと考えられる内部の立面構  
成に付いては、初期キリスト教・ビザンティン初期の建築に関する  
限り、全体として考究されていない。事実、今日の遺構は、創建時  
の建築構成を窺うことを困難にするものも少なくない。しかし、集  
中形式という建築形式が成立する限りで、遺構は当時の造形理念を  
内包していたと言えよう。即ち、建築の構成要素の断片化した集合  
である遺構は、かつて存在したはずの造形理念が混乱した状態で現  
在に呈示されていると考えられるからである。従って、今後発掘や  
修理に伴う資料的な拡充と研究の進捗があるにしても、現時点で問  
題とする地域・時代の宗教建築における、共通した認識の得られて  
いない集中形式の建築構成を検討することは、集中形式の建  
築を今後探求してゆく上で、上記した観点から不可欠な研究  
段階を形成していると考えられる(8)。

こうした事実や研究状態から、本論は初期キリスト教期に宗教建  
築の一形式である集中形式について考究する。このうち、特にこれ  
まで触れられることのなかった建築内部の実態に論考の重点をおい  
ている。本論において実態という用語は、遺構の相互関係を通して  
現れる、規範を含む空間構成の全体を意味している。論点としては、

これまで典型的に扱われることのなかったこうした建築の構成の規範について検討し、この結果を前代のローマ建築と比較対照させることを通して、その建築構成の展開と系譜とを明らかにする。更に、こうした展開に於て特質と認められる建築構成について、制作者の造形理念がどの様に内包されているのかについて、仮説を呈示しようと試みている。

## 第2節：従来の研究

従来の研究に於いては、初期キリスト教建築の2形式を教会堂建築として一義的に論じ、初期キリスト教教会堂の特徴を述べるのに終始している。従って、建築の構成により包み込まれる空間の特質が問題にされるのではなく、建築の部分に用いられる意匠の通覧による典型的特徴の指摘に留まっている。この教会堂建築の空間性という問題については、イタリア系の研究者の論考が多く、代表的論者S. Bettiniは、Lo spazio architettonica da Roma a Bisanzio (Bari, 1978)で、初期ビザンティン建築の空間特性について述べている。しかし、彼にしても、ビザンティン建築に於ける従来のヘレニズムとローマという対立図式を踏襲するに留まり、代表的な1・2の遺構を比較するのに留まっている。従って、集中形式を普遍的なその時代の形式として捉え、共通する建築の空間原理を探ろうとはしていない。集中形式の全般的な研究の動向としても、本論の3章・4章で後述しているように、個別的な地域、或は遺構についての論考に限定され、現在のところ集中形式という統合概念で語ろうとはしていない。一方、こうした個別の研究の中に、全体への視座を探ろうとするもの、或は敷衍し得る仮説を提出する論考が含まれているのも事実である。こうした例のうち、R. Krautheimer, "Success and Failure in Late Antique Church Planning" (Age of Spirituality, New York, 1980)は、集中形式の教会堂をfreak (奇形)として示唆し、ローマ的な宮廷建築の宗教建築への移植失

敗例として捉えるという、優れた指摘をしている。こうしたローマ建築の移植との考えは、K. Lehmann, "The Dome of Heaven"やI. Lavin, "The House of Lord"(Art Bulletin, vol.44, 1962)にも窺え、ドーム架構や平面展開の歴史的必然性を指摘している。事実、集中形式の多くはドームを架構されている。B. Smith(The Dome, Princeton Univ. Press, 1971)はこのドームについて論考し、ドームが架構に於ける合理性からではなく、空間の象徴性から採用されたと指摘する。また、集中形式と長堂形式とを対立的に捉えようとする視点は、G. Stanzel(Längsbau und Zentralbau als Grundthemen der Frühchristlichen Architecture, Wien, 1979)にもみられる。ここでStanzelは建築が包み込む空間を問題にすべきと新たな視点を提出しながらも、議論を平面の構成に終始させている。

こうした従来の研究動向から、集中形式は初期キリスト教期の建築の一形式とされながらも、その全体に於ける建築としての実態や構成の特質について、とりわけ制作者の造形理念にとって合目的な建築であったかについては、検討されていない。

### 第3節：研究の範囲と方法

初期キリスト教期の集中形式の建築は地中海を取り巻く地域全体にわたり、広範囲に分布している。しかし、こうした地域でローマ帝国の植民地として機能した地域は、文化を移植された地域であり、先導的な役割を果たす地域の建築に追従したものと捉えることが可能であると考えられる。また、現況の発掘量と資料的な精度は、こうした植民地域の遺構を同一水準で検討することを、必ずしも可能としていない。本論に於いても取り上げた幾つかの地域の遺構は、建築としての完成度に明かな劣化が認められる。こうした事実は、本研究で形態展開に於ける文化的先導性という理由から、キリスト教文化に於ける特記すべき役割を演じた地域、及び独自の建築文化を保有していた地域について、主として論じることを妥当とする。

これらの地域の建築は初期キリスト教の建築文化全体を包括するものではないが、全体を敷衍し得る建築として捉えることができよう。即ち、主として考究される建築の地域は、シリア・小アジア・バルカン・イタリアに及び、こうした地域の建築が当時の建築文化の中心地であったと本論では理解している。

また、建築の構成の展開を検討する本論の目的から、検討する遺構はその創建時の状態を捉える必要が生じる。しかし、初期キリスト教期の現在の資料的背景から、遺構の全てにわたり創建時の状態が回復されるわけではない。即ち、本研究では各々の遺構の資料状態の整備および不備による限界を、研究を始めるに当たって内包している。事実、初期キリスト教宗教建築の集中形式である遺構のうち、創建時の状態をそのまま保存している例は皆無である。現在でも宗教建築として利用されている遺構にしても、度重なる修理が行われている。しかし、こうした遺構はむしろ例外的で、大部分は遺跡となり、紙上の推定復元によってしかその創建時の状態を想起できない。従って、再現された集中形式の建築構成は、現在の研究水準によって左右され、個々の実例によって復元の程度に偏差を生じている。このことは、検討を加え得る遺構が恣意的に選ばれ、必ずしも上記した地域の代表的建築のみが検討されるわけではない。特に、初期キリスト教期に於いて、キリスト教文化全般にわたり主導的地位を占めるアンティオキアが、今だに発掘の進められない状態であり、重要な点を本研究が欠落させているのは否めない事実である。こうした初期キリスト教宗教建築に於ける集中形式の実例は、今後、研究・調査によってより一層明らかにし得るものなのか、予断を許さない。従って、現在得られる資料から、集中形式の実態とその特質についての仮説を提示するのも、研究を進捗させる一助となると考えることができよう。

上記したように、集中形式の遺構を総体として考究するのに否定的側面もあるが、建築の造形理念の存在を措定する限りで、研究の方法についての肯定的側面が得られる。即ち、この造形理念のもと

に、個々の遺構には、偏差があるにしても、かつて存在したはずの構成の規範が内包されていると考えることができる。そのため、この実態を現状に於いてできる限り復元的に想起して、建築の特質を指摘するのは妥当な方法といえよう。また、この妥当性によって、資料の恣意性は緩和されよう。即ち、対象とする集中形式の実例は、現在の研究や調査の進捗、また遺構の保存状態により、不可避な限定を受けるが、実態の内包状態を現在に呈示していると考えることができる。

こうした観点から、3・4章で個別に検討するように、主として現在復元的にその創建時の概要を再現し得る遺構と、補助的に部分や単位のみ創建時の状態が判る遺構とを検討に用いた。更に、宗教建築では、宗教空間の観照者への呈示が構成の主目的の一つと考えられる。従って、建築の構成として、本論では、外部を除く内部の立面構成を主として問題とする。この明らかにされた構成を、世俗的建築との対比、当時の美意識の所在との2点から検討し、宗教建築としての集中形式の特質を明らかにする。

#### 第4節：用語概念の規定

集中形式という用語の概念を検討するため、初期キリスト教およびビザンティン建築の概説書等から、概説書で用いられている建築形式の用語と、そこで著者が規定したと推定される集中形式の概念を整理し、表1-1に対照させた(9)。表から明らかなように、建築形式と集中形式とも、用語として統一して使われているとは言えない。しかし、Strzygowskiを除く他の概説書では、長堂形式に相当する *basilica* という用語が共通して使われている。一方、この用語法上の不統一性の原因として、建築形式において対象とする遺構の認識範囲が個々の研究者によって異なることを指摘できよう(10)。即ち、これら建築形式の一つである集中形式の概念規定は、集中形式を平面形態として捉えるか、立体として捉えるかにより異なってくる。

立体として捉える観点では、集中形式の要件として、ドームの存在が指摘される場合もある(11)。しかし、今日の遺構状態をみると、ドーム構成を留めるものは少ない。この様に概念の混乱は、集中形式という用語が広範に用いられながらも、概念として統一された規定のないことを示している。従って、論考を進めるうえで、集中形式で取り扱うべき建築を確定するため、概念を自覚的に限定する必要がある。

上記した点と表1-1から、集中形式の概念は長堂形式の概念と相反する形態が選定されるべきと考えられる。また、上部の構成を失っている遺構も多いことから、平面形態を分類の根拠とするのは、十分に妥当と考えられる。この平面形態の顕著な対立点は、2形式の身廊に相当する主空間に現れている。従来、この形態として、円形・正多角形（正方形を含む）が挙げられている。本研究の態度もこれに反対するものではないが、正方形平面では基本的な壁面数が4となり、長堂形式の身廊を構成する壁面数と一致してしまう点、更に正方形平面自体がドーム付設長堂形式の発展型とも考えられるギリシャ十字形平面の身廊の中心部を成すベイの形態とも一致する点から(12)、正方形平面は現状において2形式の相違や類似を明確にするうえで、適切な形態とは考え難い。即ち、正方形平面の遺構は、集中形式の建築としての実態や特質が明らかにされたうえで、概念の拡張化により検討することが可能になると考えた。従って、本研究の集中形式について、対象となる遺構の範囲を確定するための概念規定は、主空間の平面形態が円か、正方形を除く正多角形に限定した。

註：第1章

1. cf. A. Perkins, The Art of Dura-Europos, Oxford, 1973.
2. C. Mango, Byzantine Architecture(BA), New York, 1975, pp.9f, & Idem., Byzantium, New York, 1980, pp.1-9, 256-281。ここでMangoは7世紀までの時期を建築にとって'Early Christian(Late Roman)'と呼びうると述べ、また'Early Christian'と'Early Byzantine'はほぼ同義であると主張している。また、Ward-Perkins("The Role of the Craftsmanship in the Formation of Early Christian Art", ACIAC, vol.9-1, pp.637-52)は、4世紀初期のコンスタンティン帝の時代が、美術史における転換期であるとする。
3. N. Pevsner, An Outline of European Architecture, Penguin Books, 1972(1943)。Pevsnerはユスティニアヌスの時代を解説するが、初期キリスト教ローマ帝国の宗教建築の展開については触れていない。
4. ビザンティン建築の通史では、数多い中から、以下の3点を、代表的なものと考えることができる。D. Talbot-Rice, Byzantine Art, Penguin Books, 1968(1935); R. Krautheimer, Early Christian and Byzantine Architecture(ECBA), Perican History of Art, 1975(1965); C. Mango, op.cit.。また、造形理念という点では、S. Bettini, Lo spazio architettonica da Roma a Bisanzio (Bari, 1978)がある。
5. D. Talbot-Rice, Byzantine Art, Penguin Book, 1968 (1935), pp.65-117.
6. Loc.cit.
7. R. Wittkower, Architectural Principles in the Age of Humanism, New York, 1965(1962)。他に詳しい。
8. 辻佐保子博士(『古典世界からキリスト教世界へ』、岩波書店、1982、pp.1-5)も同様な見解を示されている。
9. 使用した概説書は以下の通りである。D. Talbot-Rice, op.cit.;  
J. Strykowski, Origin of Christian Church Art, New York, 1973(1923); BA: ECBA: J. Hirscher ed., Art in the Christian World, London, 1982; W. Koch, Baustilkunde, Munchen, 1982.
10. G. Stanzl(op.cit.)は、集中形式を長堂形式への対立形式として捉え、自律的な概念規定をしていない。
11. D. Talbot-Rice(op.cit.), F.W. Deichmann("Romische Zentralbauten", Rom, Ravenna, Konstantinopel, Naher Osten(RRKNO), pp.47-56); V. Beridze("Architecture Georgienne Paleochretienne", CCARB, vol.20, 1973)らは、集中形式の概念規定としてドームの存在を指摘する。
12. ギリシャ十字形平面は、ミストラの教会堂のように、1階が長堂形式、2階がギリシャ十字形平面という形式をも生み出している。cf. H.

Hallensleben, "Untersuchung zur Genesis und Typologie des  
'Mistratypus'", Marburger Jahr.Kunstwiss., vol.18, 1969,  
pp.105-118.

## 第2章：初期キリスト教ローマ帝国における建築制作者

本章では、本研究が問題としている建築を制作した者について検討する。この制作者の実態を検討することは、当時の建築における造形理念の背景を明らかにする上で重要である。この理由として、初期キリスト教ローマ帝国における建築制作者の実態とは、建築の形態及び空間に表現された時代的な合目的性を間接的に顕示するものと考え得るからである。この時代の建築家像については、G. Downeyの優れた論考もあるが、文献の解釈に於て是認できない点もあり、本章では彼の論考に敬意を表しながらも、再考を試みるものである(1)。

### 第1節：建築制作における職業名称

職業名称の存在は、その言語文化を保持する社会に名称が指定する組織体と組織間の関係との確立を意味している。初期キリスト教ローマ帝国の史料は、限定的な内容であり、日常生活に関する記述は極めて稀な例とされている(2)。従って、この時代の職業名称にしても、全容は窺うべきもない。しかし、幾つかの限られた史料から、表2-1に上げた職業名称の一端を、窺うことが出来る(3)。表2-1ではさらに、用語の意味とそれをを用いた著者の年代を明示してある(4)。表2-1に示された用語と辞書の関連語との関係から、字義どおりの解釈を行うと、以下のように概ね定義できる。

ἀρχιτέκτων - ἀρχη (起源、長) と

τέκτων (技術者、職人) とから作られた用語。技術者や職人の長。

μηχανικός等(5) - μηχανή (機械) という用語から派生。機械を扱うなり、制作する技術者。

τεχνίτης - τεχνή (技能、技術) という用語から派生。職人。

οἰκοδόμος - οἶκος (家) という用語から派

生。一般的な建築工事の職人。

λιθοόξοοοο等—λιθάς, λιθοόςあるいは  
λίθος (石) という用語から派生。石の加工技術者。

πλινθάριοοο等—πλινθός (煉瓦) という  
用語から派生。煉瓦製造者。

ξύλοκοπόοο等—ξύλον (木材) という用語か  
ら派生。大工。

ζωγράφοοο—該当する語源不明。画家。

μουσώτηοο—該当する語源不明。モザイク職人。

上記の職業名称の使用された年代を表2-1でみると、μουσώτηοοとπλινθάριοοοを除いて(6)、各用語は初期キリスト教の時代以前から使用されている。その内、ἀρχιτέκτων・μηχανικός・τεχνίτης・οἰκοδόμοοοの職業名称は、ギリシャ古典期から使用されており、建築生産における伝統的な職業であったと言えよう。即ち、こうした名称のほとんどは、初期キリスト教時代に周知されたものであった。これら初期キリスト教時代の職業名称の一端から、当時の建築生産において組織化と分業化とが計られていたことを推定できる(7)。

一方、こうした職業名称の語源となる言葉の概念から、名称の形成に至る経緯について、分類を試みることができる。即ち、

λιθοόξοοοο、πλινθάριοοο、ξύλουργόοοの語源が具体的な材料名を示すことから、これらの職業において材料への関与の仕方は必ずしも明かではないにしても、この名称の者達はその材料を扱うことを示していると推定できる。また、材料ではないが、具体的な作業内容を知り得る職業として、ζωγράφοοο、μουσώτηοοがある。それに対してἀρχιτέκτων、μηχανικός、τεχνίτης、οἰκοδόμοοοは、建築生産との関与を予測できるが、具体的な作業内容の範疇は明かではない。即ち、前2者の職業名称は建築生産における作業範囲を限定化する傾向にあり、後者は建築生産全般に作業を敷衍

する傾向にある。このことは、後者の作業内容が互いに重複する可能性を否定し得ないことを示している。従って、建築生産における分業化の実態を明らかにする上で、後者の職業名称についてその作業を具体的に検討する必要がある。

6世紀の建築生産の公式記録であるプロコピウスの『建築』は、問題とした職業名称について記している(8)。

このうち、 $\tau\epsilon\chi\nu\acute{\iota}\tau\eta\varsigma$ については、3箇所で見られる。その記述を以下に示す(9)。

- 1).  $\delta\ \mu\acute{\epsilon}\nu\ \omicron\upsilon\acute{\nu}\ \beta\alpha\sigma\iota\lambda\epsilon\upsilon\varsigma\ \alpha\phi\alpha\sigma\iota\sigma\tau\acute{\iota}\theta\epsilon\alpha\varsigma\ \chi\alpha\tau\eta\mu\acute{\alpha}\tau\omega\nu\ \acute{\alpha}\pi\acute{\alpha}\nu\tau\omega\nu\ \acute{\epsilon}\varsigma\ \tau\acute{\eta}\nu\ \omicron\iota\kappa\omicron\delta\omicron\mu\acute{\eta}\nu\ \acute{\epsilon}\pi\omicron\upsilon\delta\acute{\eta}\ \acute{\iota}\acute{\epsilon}\tau\omicron\varsigma,\ \kappa\alpha\iota\ \tau\acute{\alpha}\varsigma\ \tau\epsilon\chi\nu\acute{\iota}\tau\acute{\alpha}\varsigma\ \acute{\epsilon}\kappa\ \pi\acute{\alpha}\nu\tau\eta\varsigma\ \gamma\acute{\eta}\varsigma\ \acute{\eta}\gamma\epsilon\iota\lambda\epsilon\nu\ \acute{\alpha}\pi\acute{\alpha}\nu\tau\alpha\varsigma\ (1, i, p.10)$
- 2).  $\omicron\acute{\epsilon}\ \mu\acute{\epsilon}\nu\ \omicron\upsilon\acute{\nu}\ \tau\epsilon\chi\nu\acute{\iota}\tau\acute{\alpha}\varsigma\ \tau\acute{\alpha}\ \acute{\epsilon}\pi\iota\tau\epsilon\tau\alpha\gamma\mu\acute{\epsilon}\nu\alpha\ \acute{\epsilon}\pi\omicron\upsilon\delta\omicron\nu,\ \acute{\eta}\ \delta\acute{\epsilon}\ \acute{\alpha}\phi\iota\varsigma\ \acute{\epsilon}\pi\prime\ \acute{\alpha}\delta\phi\alpha\lambda\omicron\upsilon\varsigma\ \acute{\eta}\acute{\omega}\rho\eta\tau\omicron\ \pi\alpha\beta\alpha\ (1, i, p.30)$
- 3).  $\tau\epsilon\chi\nu\acute{\iota}\tau\omega\nu\ \delta\acute{\epsilon}\ \kappa\alpha\iota\ \acute{\epsilon}\pi\iota\delta\eta\mu\iota\omicron\upsilon\gamma\gamma\omega\nu\ \pi\lambda\acute{\eta}\theta\omicron\varsigma\ \acute{\epsilon}\pi\alpha\gamma\alpha\gamma\omega\nu\ \beta\acute{\alpha}\theta\acute{\omicron}\nu\ \tau\epsilon\ \kappa\alpha\iota\ \acute{\alpha}\pi\omicron\upsilon\acute{\omega}\tau\epsilon\rho\omicron\nu\ \tau\omicron\iota\varsigma\ \acute{\epsilon}\nu\omicron\iota\kappa\omicron\upsilon\delta\iota\ \pi\alpha\rho\acute{\epsilon}\beta\chi\epsilon\tau\omicron\ \delta\acute{\epsilon}\iota\mu\alpha\delta\upsilon\alpha\iota\ \tau\acute{\alpha}\varsigma\ \alpha\upsilon\tau\omega\nu\ \acute{\iota}\delta\acute{\iota}\alpha\varsigma\ \omicron\iota\kappa\acute{\iota}\alpha\varsigma\ (11, x, p.170) (10)$

3つの文章を通して明らかなのは、 $\tau\epsilon\chi\nu\acute{\iota}\tau\eta\varsigma$ が全て複数形で用いられている点である。即ち、 $\tau\epsilon\chi\nu\acute{\iota}\tau\eta\varsigma$ は個人の集合体として各作業に関与している。1)はニカの反乱(523年)によって灰燼に帰したソフィア聖堂の再建についての記述、2)はソフィア聖堂再建中の記述、3)は荒廃したアンティオキア復興の記述であ

る。τεχνίτηςはそれぞれの記述から、建設現場での工事遂行者であることが判る。また(11)、1)や3)の記述から、τεχνίτηςは彼らの居住地ばかりでなく、建築工事によって遠隔地へも赴いたことが判る。即ち、場所の如何に関わらず、τεχνίτηςという集団が工事を遂行し得た以上、帝国領内の建築に対しては、造形における或る一定の規範が存在していたと、思量することが出来る(12)。更に、ソフィア聖堂と住宅という、聖俗両面の建築に携わったことから、建築の種別により扱う領域の分類は職業名称上で存在しない。これらのことから、τεχνίτηςとは、建築工事全般を遂行する職人を意味していた。

一方、残りの3つの用語については、全て個人名が明らかである。その内、οἰκοδόμοςは1箇所で使用されている。

4). τῶν μὲν ἄλλων τὰ πλεῖστα ἐν ἑτέροις μοι βυγγέγραπται  
λόγοις, ὅσα δὲ αὐτῷ ἀγαθὰ οἰκοδομουμένῳ θεοδημιούργηται,  
ἐν τῷ παρόντι γερράφεται (I, i, p. 6) (13)

更に、οἰκοδομίαという用語については、以下の記述がある。

5). οἰκοδομία τις ἐκ γῆς ἀνέχει (I, i, p. 16) (14)

4)は「建築について」の執筆目的を記した箇所で、οἰκοδομουμένοςは皇帝の呼称として用いられている。5)は教会堂の作り方を述べた箇所で、建設活動全体を指している。従って、οἰκοδόμος、或はοἰκοδομουμένοςとは、建築関係の特定の職業としてより、建設を推進し、活動全般に関与した責任者としての意味と解することが出来る(15)。

次に、ἀρχιτέκτωνについては、以下のように記述されている。

6) Ἀπολλόδαρος δὲ ὁ Δαμασκηνός, ὁ καὶ παντὸς  
γερονῶς ἀρχιτέκτων τοῦ ἔργου, φραζέτω...  
πεποιήται δὲ Τραϊανὸς τότε καὶ φρουρία δύο τοῦ  
ποταμοῦ ἐφ' ἑκάτερα, καὶ αὐτοῖν Θεοδώραν μὲν

ἔπωνόμαδιν τὸ ἐν τῇ ἀντιπερας ἠπειρῶ, πόντες δὲ  
τὸ ἐπὶ Δακκίας ὀμωνύμων τῷ ἔργῳ ἐκλήθη  
(IV, vi, 270f.) (16)

ここでἀρχιτέκτωνと呼ばれるアポドロスは、ローマ皇帝トラヤヌス(98-117 AD.)の主任「建築家」のことである(17)。また、文中ではトラヤヌス建造とされるが、川(ドナウ川)の両岸に建てられた砦も、現実にはアポドロス設計のものと推定できる。この様に、ἀρχιτέκτωνと呼ばれる者は、土木・建築の両面に互り活動している。プロコピウスが使用したἀρχιτέκτωνという用語はこの1例に限られるため、具体的な仕事内容が判るにも関わらず、彼がローマ時代の建築家architectusとしてこの用語を使用したのか、当時の特定の意味を持つ言葉として使用しているのか、判然としない。しかし、他史料で教会堂を建てたものとして、個人名が残されているものもあることから、当時の用語概念では確定されたものとして使用されたと推測される(18)。即ち、ローマ時代からの建築家architectusの概念が、多少の変更を受けたにしても、存続して用いられた。

μηχανικόςについては、5人の人物の名が記されている。

7). Χρύσις ἦν τις Ἀλεξανδρεὺς, μηχανοποιὸς  
δεξιός, ὅπερ βασιλεῖ τὰ ἐς τὰς οἰκοδομίας  
ὑπηρετῶν, τὰ πλείστα τῶν τε ἐν πόλει Δάρας καὶ  
τῇ ἄλλῃ χώρῃ γεγονότα ἐξείργατται (II, ii, p.116) (19)

この文中に現れるクセリスはバルシャ国境沿いの都市ダラスを皇帝の命により復興する。文中から明らかなように、彼は皇帝の助言者(βασιλεῖ ὑπηρετής)であることから、μηχανικόςは身分の高い職業であったことが判る。また、彼は洪水を防ぐ方法を夢に見、皇帝に以下のように進言した。

8). ὁ μὲν αὐτίκα δεῖον ὑποτοπήσαν τὸ πρᾶγμα  
εἶναι, τὴν τε μηχανὴν καὶ τὴν τοῦ ὀνείρου  
ὄψιν ἐς βασιλέα γράφας ἀνήνεγκε, ἄκτα γραφῆδας  
τὴν ἐκ τοῦ ὀνείρου διδασκαλίαν (II, iii, p.116) (20)

即ち、γράφω、σκιαγράφω(21)という用語から、皇帝の眺めたものは、治水事業に関する計画図面であったことが判る。この様に、クセリスは土木・建築両面にわたり建設活動を行い、現場と離れたところでも、自分の計画を客観的に他人に伝える方法と能力を持つ者であった。こうした事実は、μηχανικόςが職人として建設現場で作業を行った可能性に対し、否定的側面を示唆している。

更に、μηχανικόςとして、インドロスとイオアニスとが、記述から知られる。

9). ἐς ταῦτα δὲ πάντα Ἰδιδωρός τε καὶ Ἰωάννης  
μηχανοποιοὶ τὴν ὑπουργίαν παρέβχοντο, Βυβάντιος  
μὲν Ἰωάννης, Ἰδιδωρός δὲ Μιλήσιος γένος, Ἰδιδωροῦ  
ἀδελφιδούς ἔνπερ ἔμπροσθεν ἐπεμνήσθεν νεανίαί  
μὲν ἄμφω, δύναμιν δὲ φύσεως ὑπὲρ τὴν ἡλικίαν  
ἐπιδειξάμενοι καὶ τῇ ἐμπειρίᾳ τῶν τοῦ βασιλέως  
δυνακμόδοντες ἔργων (II, viii, p. 154) (22)

文中の2名のμηχανικόςは、ゼノビアの都市施設の建設に携わっている(23)。この都市施設として、教会(ἱερός)、軍隊宿舎(στρατιωτικῶν σημείων οἰκία)、浴場(λουτρών)、ストア(στόα)が上げられている(24)。この様に、建設活動においてμηχανικόςは限定的な建築の種類を扱ったのではなく、世俗・宗教建築全般に関し活動している。

最後にアンセミオスとインドロス(25)について、プロコピウスは最も紙面を割いて記している。

10). Ἀνέμιος δὲ Τραλλιανός, ἐπὶ σοφίᾳ τῇ καλουμένῃ μηχανικῇ  
λογιώτατος, οὐ τῶν κατ' αὐτὸν μόνον ἀπάντων, ἀλλὰ καὶ  
τῶν αὐτοῦ προγεγενημένων πολλῶν, τῇ βασιλέως ὑπουργεῖ  
ὀπουδῇ, τοῖς τεκταινομένοις τὰ ἔργα ρυθμίφων, τῶν  
τὲ γενησομένων προδιασκευάων ἰνδάλματα, καὶ

μηχανοποιὸς δὲν αὐτῷ ἕτερος, Ἰβίδωρος ὄνομα, Μιλήσιος  
γένος, ἔμφρων τε ἄλλως καὶ πρέπων Ἰουβτινιανῶ  
ὑπουργεῖν βασιλεῖ (I, i, p.10)

11). Μηχαναῖς δὲ πολλαῖς βασιλεύς τὲ Ἰουβτινιανὸς καὶ  
Ἀνθέμιος ὁ μηχανοποιὸς δὲν τῷ Ἰβιδώρῳ οὕτω δὴ  
μητρωροφούμενην τὴν ἐκκλησίαν ἐν τῷ ἀσφαλεῖ  
διεπράξαντο εἶναι (I, i, p.22)

12). βασιλεὺς δὲ τότε τοῖς ξυμπεπτωκόσι ξυντραχηθεῖς καὶ  
περιώδυνος γερωνός, τοὺς τὰ μηχανικὰ εὐδοκιμοῦντας  
εὐδὺς μετεκάλει, Ἀνθέμιον τε καὶ Ἰβιδωρον  
(II, iii, 116f.) (26)

10)と11)は、首都のソフィア聖堂(ἐκκλησίᾳ)の建設に関する記述であり、12)は既出のクセリスの夢の計画に表れたシリアの都市ダラスにおける惨状を皇帝が知ったときの記述である(27)。10)から、この2名は宮廷に伺候しており、当時、既に有名なμηχανικόςであったことが判る。更に、μηχανικόςであるためにはμηχανικήと呼ばれる学問、或は技術体系を修めた者でなければならなかった。プロコピウスにとってこのμηχανικήの内容は、11)と12)の記述から、建設活動に関する体系的な知識を意味していたと、推定できる。また、12)で既出のクリセスの計画を皇帝が検討する前に、意見を聞くためアンセミオスとイシドロスを呼び寄せている点(28)、10)と11)において、プロコピウスが示すアンセミオスとイシドロスの記述形式から、3名のμηχανικόςについては、アンセミオス・イシドロス・クセリスという序列が存在したことを窺わせる。

この様に、プロコピウスの建築職業名称についての記述の内、他の職業にはみられない資格として、μηχανικόςが直接皇帝と協議している点を指摘できる。従って、μηχανικόςと呼ばれる職業は、極めて社会的な地位が高い職業であった。即ち、μηχανικήという知識体系を保有するμηχανικόςは、

プロコピウスにとってローマ時代の宮廷付きarchitectusに類似する内容の職業であったと推定される。以上のように、μηχανικόςという用語は、表2-1に示した字義通りの解釈と、プロコピウスが用いた現実社会における概念とで、際違った相違を見せている。従って、初期キリスト教ローマ帝国における建築制作での責任者として、μηχανικόςの実態を明らかにするには、architectusという用語との対比的関係を問題としないといけない。

## 第2節：μηχανικόςとarchitectus

μηχανικόςの具体的概念については、アレキサンドリア出身の数学者パバスが、彼の幾何学注解書の最後で説明している(29)。μηχανικόςの知識については、以下のように記されている。

13). τῆς δὲ μηχανικῆς τὸ μὲν εἶναι λογικὸν τὸ δὲ χειρουργικὸν οὐ περὶ τὸν Ἑρῶνα μηχανικοὺ λέγουσιν (p. 614) (30).

この文から明らかなように、μηχανικόςはμηχανικήと呼ばれる知識体系を修得した者であり、その知識体系は理論(λογικός)と実技(χειρουργικός)とに分割できる。理論に該当する学問には、幾何学(γεωμετρή)、代数学(ἀριθμητική)、天文学(αστρονομία)、それに物理学(φυσικός)がある(31)。一方、実技としては、冶金学(χαλκευτική)、建設学(οἰκοδομική)、絵画(ζωγραφική)、技芸(τεκτονική)、そして、これら実技の実地面での応用(ἐν τούτοις καταχεῖρα ἄσκησις)がある(32)。この様に修得すべき知識は多方面に及び、当時の科学・技術の水準が現代に較べて低いとしても、個人の能力で殆ど不可能に見える量となっている。ここでパバスの示す2分類は、内容的に見ると純粋科学と応用科学に対

応している。即ち、パバスの述べる χειρουργικόςとは、「手によって行われる作業」(33)という字義通りの実技の意味とは違い、λογικόςで得た知識を実社会で適用した際に、その作業が関与する分野と見なすことが出来よう。この解釈によれば、修得すべき理論と実技の知識体系は、全く異なる領野の知識ではなく、相互に密接な関連を示している可能性が高い。

一方、パバス自身も、多量の知識を修得できるかについて、疑問を感じていた傾向が認められる。

14). μὴ δυνατοῦ δ' οὕτως τὸν αὐτὸν μαθηματῶν τε τοιαύτων περιγενέσθαι καὶ μαθεῖν ὅμοια τὰς προειρημένας τέχναις παραγγέλλουσι τῷ τὰ μηχανικὰ ἔργα μεταχειρίζεσθαι βουλομένῳ χρῆσθαι ταῖς αἰκείαις τέχναις ὑποχειρίοις ἐν ταῖς παρ' ἑκάστα χρεΐαις ( 614f. ) (34)

この様に、μηχανικόςに成り損ねた者もいることをパバスは示唆し、その者達に対しても、限られた分野での活動を勧めている。従って、知識体系の各分野には、専門家が存在したと推定される。また、但し書きのような14)の文章から、パバスの主張する具体的なμηχανικόςの概念は、理想としての像であり、実態として幾らかの相違を示していた可能性も否定できない。

こうしたμηχανικόςが実社会でどのような作業を行ったかについて、パバスは「日常生活に於て最も必要である技術者」(35)として、以下の者を挙げる。

15). τῶν μηχανημάτων, μηχανικῶν καὶ αὐτῶν κατὰ τοὺς ἀρχαίους λεγομένων (μεγάλα γὰρ οὗτοι βάρη διὰ μηχανῶν παρὰ φύσιν εἰς ὕψος ἀνάγουσιν ἐλάττωνι δυνάμει κινουῦντες ).

16). τῶν οργανοποιῶν τῶν πρὸς τὸν πόλεμον ἀναγκαίων καλουμένων δὲ καὶ βιθήρα καὶ τὰ παραπλήγεια τούτοις ἐξαποπέλλεται εἰς μακρὸν οὐδὲ μῆκος τοῖς ὑπὲρ αὐτῶν γινόμενοις ὀργανοῖς καταπαλιτικοῖς .

17). τῶν ἐδίως πάλιν καλουμένων μηχανοποιῶν (ἐκ βάθους γὰρ

- πολλοῦ ὕδαρ εὐκολώτερον ἀνάγεται διὰ τῶν  
 ἀληματικῶν ὀργάνων ἧν αὐτοὶ κατασκευάζουσιν).
- 18). καλοῦσι δὲ μηχανικοὺς οἱ παλαιοὶ καὶ τοὺς θαυμασι-  
 οφροῦς, ἧν οἱ μὲν διὰ πνευμάτων φιλοτεχνοῦσιν, ὡς  
 Ἡρῶν Πνευματικοῖς, οἱ δὲ διὰ νευρίων καὶ ἐπάρτων  
 ἐμφύτων κινήσεις δοκοῦσι μιμεῖσθαι.
- 19). μηχανικοὺς δὲ καλοῦσιν καὶ τοὺς τὰς σφαιροποιίας  
 [ποιεῖν] ἐπιτάμενους, ὅφ' ἧν εἰκὼν τοῦ οὐρανοῦ  
 κατασκευάζεται δι' ὁμοιῆς καὶ ἐγκυκλίου κινήσεως  
 ὕδατος. (616f') (36)

パパスの挙げた作業内容がμηχανικόςの関与する作業の全  
 体であるとは、「日常生活に於て最も必要」という記述から言えな  
 いが、現実の社会とμηχανικόςの関わり方の一端を窺うこ  
 とができる。ここで、パパスは5種類の仕事を挙げている。即ち、  
 15)機械技術者としてのμηχανικός (μαγναναρι-  
 ός)、16)兵器制作者としてのμηχανικός (οργα-  
 νοποιός)、17)揚水機械の制作者としてのμηχανι-  
 κός、18)流体力学を応用する者としてのμηχανικός  
 (θαυμασιουργός)、19)球体構造物の制作者としての  
 μηχανικόςである。15)、16)、17)の仕事は、いずれも機械  
 の制作に関するものであり、用いられる分野から、15)建築・16)軍  
 事・17)土木との関連を推測し得る。即ち、機械という同一の範疇に  
 関わる知識も、いくつかの応用部門を有することを示唆する。一方、  
 18)で触れられるヘロンは、13)でパパスによってμηχανικ-  
 όςとして指摘される人物と同一で、1~3世紀の数学者であり、  
 文中の「ブネブマティコス」とは自動機械の制作に関する著書であ  
 る(37)。内容的にこの著作は、熱力学を用いた自動人形の制作法に  
 終始している。こうした自動機械が、当時の人々にとってθαυ-

μηχανικός (wonder, miracle) であったことは、想像に難くない。19)での球体の構造物とは、文章からその制作過程について不明であるが、ドームのような構造体を示していると考え得る(38)。従って、19)は建築関係の仕事であったと思量される。この様に、日常生活という限定された活動領域で、建築は15)と19)で記されたように、μηχανικόςの作業に關与するものであった。

こうしたμηχανικόςの概念に対し、既に職業名称として類似する関係を示したarchitectus(=ἀρχιτέκτων)の概念との関係が問題となる。即ち、初期キリスト教ローマ帝国のμηχανικόςが、ローマ帝国のarchitectusから転化したものかどうかを問題とする。

architectusはギリシャ語のἀρχιτέκτωνを語源とし、紀元前7世紀より認められている(39)。このギリシャ古典期のἀρχιτέκτωνについて、プラトンは以下のように規定する。

20). καὶ γὰρ ἀρχιτέκτων γε παῖς, οὐκ αὐτὸς ἐργατικός  
ἀλλὰ ἐργατῶν ἄρχων. (p.15) (40)

従って、ἀρχιτέκτωνは職人を統括する立場にいる者である。更に、作業内容と保有する知識とについて、以下のように記している。

21). (ἀρχιτέκτων) Παρεχομένος γὰρ πού γινώσκει ἄλλ' οὐ  
χειρουργίαν. (p.14)

22). Ταύτη τούτων ἀμπάδας ἐπιβτήμας διαίρει, τὴν μὲν  
πρακτικὴν προβείπων, τὴν δὲ μόνον γνωστικὴν. (p.10) (41)

即ち、21)からἀρχιτέκτωνは実際に作業を行う者ではなく、知識によって建築活動に参加する。また、22)から知識そのものが、実技と理論から構成されていることが判る(42)。この考え方は、基本的にパバスの規定したμηχανικόςと類似しているが、パバスは実技(χειρουργικός)すらも修得すべき知識としてとりあげている(43)。

このギリシャ語のラテン化された用語として、architectusを規定し得る(44)。この職業の具体的内容については、ヴィトルヴィウス

の「建築書」で説明されている(45)。ここでarchitectusの知識は、理論(ratiocinatio)と制作(fabrica)から形成される(46)。理論としては、「作品を比例の方法によって証明しうるもの」であり、制作としては「造形の意図にかなうあらゆる材料を手によって達成」するものである(47)。更に、architectusに要求される学問として、文章の学(litteratura)、描画(graphido)、幾何学(geometria)、歴史(historia)、哲学(philosophia)、音楽(musica)、医術(medicina)、法律(iuris)、天文学(astrologia)をあげている(48)。ヴィトルヴィウスは理論と制作という知識の分類をしたが、必要とされる学問には、この分類が明示されていない。しかし、文脈から、これらの学問は全て理論に含まれると思量される。この点は、パバスの知識を純粹科学と応用科学に分類する態度と、際だった対照を示している。パバスに比べ、ヴィトルヴィウスの要求する知識量は多いが、彼はこれら知識を建築を制作するのに必要程度修得すれば良いと、但し書きを付けている(49)。こうした点から、ヴィトルヴィウスにとってarchitectusの知識は、パバスの述べる応用科学の建築分野に限定される傾向にあった(50)。表1-2は、パバスの  $\mu\eta\chi\alpha\nu\lambda\iota\kappa\acute{o}\varsigma$  とヴィトルヴィウスのarchitectusとを対照させたものである。

このarchitectusという用語は西欧中世にも使用されている。

23) Fabres autem sive artifices Graeci vocant, id est structores. Architecti autem caementarii sunt qui disponunt in fundamenis(51).

この様に、architectusは職人とほぼ同義に使用されている。また、初期キリスト教時代においても、シリアの碑銘に  $\alpha\rho\chi\iota\tau\acute{\epsilon}\kappa\tau\omega\nu\cdot\tau\epsilon\chi\nu\acute{\iota}\tau\eta\varsigma$  の名称があり、Lassusはこれら幾つかの名称を同義と解している(52)。従って、この時期、初期キリスト教ローマ帝国において、 $\alpha\rho\chi\iota\tau\acute{\epsilon}\kappa\tau\omega\nu$  の社会的地位の相対的な低下を、推測できる(53)。この様にarchitectus(= $\alpha\rho\chi\iota\tau\acute{\epsilon}\kappa\tau\omega\nu$ )の概念は、アルベルティ(54)によって再規定

されるまで、ヴィトルヴィウスの概念を退化させたものとして理解されていたと、思量される。

### 第3節：小結

以上の検討から、初期キリスト教ローマ帝国においては、 $\alpha\rho\chi\iota\tau\acute{\epsilon}\kappa\tau\omega\nu$ と呼ばれる職業の上に、社会的地位の高い $\mu\eta\chi\alpha\nu\iota\kappa\acute{o}\varsigma$ という職業が存在した。この職業にある者はローマ時代のarchitectusに較べても、より充実した科学的な知識体系を保有していた。また、事績を見る限り、一応用部門として彼らの建築活動を定立でき、実態に最も近い包括的な役割としては当時の科学者であった(55)。従って、Downeyの主張するように、 $\mu\eta\chi\alpha\nu\iota\kappa\acute{o}\varsigma$ を建築家に相当すると考えるのは適切でない(56)。Downeyの仮説の典拠の一つであるプロコピウスの著述は、当時の建設活動の公式記録であることから、記述された $\mu\eta\chi\alpha\nu\iota\kappa\acute{o}\varsigma$ の業務が建築に限定される必然にあった。即ち、 $\mu\eta\chi\alpha\nu\iota\kappa\acute{o}\varsigma$ は当時の科学・技術を体系的かつ総合的に修得した者の呼称であり、建築にもこの知識が適用された。この $\mu\eta\chi\alpha\nu\iota\kappa\acute{o}\varsigma$ に比肩し得る他の時代の人物としてイタリア・ルネサンス期のレオナルド・ダ・ヴィンチを挙げることは、「建築家」としてのヴィトルヴィウスやアルベルティとの類似を指摘するより、 $\mu\eta\chi\alpha\nu\iota\kappa\acute{o}\varsigma$ の実態からの逸脱がより少ないと言えよう(57)。

また、建築に限れば、初期キリスト教ローマ帝国での建築職種において、分業化と拡充化が計られていることを、十分に窺い得る。更に、これらを統括したと措定できる $\mu\eta\chi\alpha\nu\iota\kappa\acute{o}\varsigma$ は、上記の検討から、宗教的な知識を要求されていたと、必ずしも考えられない。即ち、当時の建築が技術的な合目的性によって構成されたとの分析視点は、初期キリスト教ローマ帝国の建築全般を考究する上で、十分に妥当な前提と成り得る。

註：第2章

1. G. Downey, "Pappus of Alexandria on Architectural Studies", ISIS, vol.38, 1948, pp.197-200, & "Byzantine Architects: their Training and Methods", Byzantion, vol.18, 1946-1948, pp. 99-118.
2. C.Mango, *op.cit.*, pp.233-255. ここでMangoはビザンティン帝国の史料が、教会関係の典礼や教義に関するものに限定される傾向にあると述べている。
3. ここでは、職業名称の選択として、Procopius, Buildings, H.B. Dewing ed., Loeb Class. Lib.,1971.と H. J. Magoulias, "Trades and Crafts in the Sixth and Seventh Centuries as Viewed in the Lives of the Saints", Byzantinoslavica, 1977, pp.11-35. を使用した。Magouliasはここで、6世紀の建築活動について、Vita Symeonis Stylitae Iuniorisが重要な史料であると報告している。また、表2-1では、辞書において関連する用語から、職業名称を選んでみいる。更に、ビザンティン期の用語法で、同一と思える意味の単語を異なった形で、同一著作において使用する傾向がある。本論では辞書の意味が同一のものは、同語異形として理解した。このビザンティンの用語法については、修辭的な規範を解説した文法書がまだ刊行されておらず、こうした同語異形と思える用語の使用理由は明かでない。
4. 辞書としては、汎用性のあるものとして、Liddell & Scott ed., Greek-English Lexicon, 1973.を用い、使用された時代が紀元後でもあることから、Sophocles ed., Greek Lexicon, 1914.をも用いた。その他 H.Frisk ed.,Griechisches Etymologisches Wörterbuch, 1960.と E. Boisacq ed., Dictionnaire Etymologique de la Langue Grecque, 1923.と、G.W.H. Lampe ed., Patristic Greek Lexicon, 1961-67.とを検討したが、前2書の辞書で後者を補完し得るため、用語の意味には前者のみ用いた。また、辞書中、語尾変化の相違する同意語や、結合単語の相違による同意語も、取り上げた。本論に於ては以後、代表的な用語によって、他の同意語をも指し示すものとする。
5. Procopiusは  $\mu\eta\chi\alpha\nu\iota\kappa\omicron\varsigma$  という用語も使用しているが、Friskの語源辞典 (*op.cit.*) 以外に、この用語は見あたらない。 $\mu\eta\chi\alpha\nu\iota\kappa\omicron\varsigma$ -maschinenbauer (H. Frisk ed.)。
6. 職業名称として、6~7世紀の出典に表れるが、煉瓦製造もモザイクも、前代から建築に汎用された材料であるから、建築制作における業務としては存在した。
7. Ward-Perkins("The Role of the Craftsmanship in the Formation of Early Christian Art", *op.cit.*)は、初期キリスト教ローマ帝国における工房(workshop)の拡充を示唆する。
8. その他、Procopiusは  $\zeta\omega\rho\rho\alpha\phi\acute{o}\varsigma$ 、 $\lambda\iota\theta\acute{o}\varsigma$ 、 $\lambda\iota\theta\acute{o}\delta\omicron\mu$

οσ, λιθοῦργοςを記している。しかし、G.Downey ( "Byzantine Architects", op.cit.) が指摘するように、Procopius「建築について」はユスティニアヌス帝の事績を講えるのを目的としており、コンスタンティノーブルのソフィア聖堂の建設活動を除けば、建築生産に付いて触れている記述は僅かである。

9. 本論では、言葉の意味を検討するため、意識を避け、多少判りにくくても、原文に忠実な翻訳を筆者が試みている。
10. 1)「かくして皇帝は建設に際して生じる費用に躊躇せず、急いで(工事を)始めた。そして、τεχνίτης 達を全土から集めた。」、2)「こうして、τεχνίτης 達は支持されたことを実行した。(それによって)アーチは全く安定して持ち上がった。」、3)「(皇帝に)連れてこられた多くのτεχνίτης 達とἐπιδημιούργος 達とは、より簡単に、また何の困難もなく、人々のための個人住宅を立てることに携わった。」  
【筆者訳】
11. Liddell & Scott ed.によれば、ἐπιδημιούργοςは、行政職の一つであり、住宅再建に際し、彼らは行政面の作業を行ったと思われる。しかし、ἐπιδημιούργος (magistrates sent annually by Doric states to their colonies: Liddell & Scott ed.) とあり、Sophocles ed.の辞書にこの単語がないため、キリスト教ローマ帝国における具体的内容は明かでない。
12. F.W. Deichmann("Westliche Bautechnik im romischen und römischen Osten", RRKNQ, pp.712-782)は、シリア方面への建築技術の伝は軍隊によって成されたと示唆する。
13. ここではοἰκοδομῆωの分詞形であるοἰκοδομοῦμένωνから形成された言葉として、οἰκοδομόμενοςを解し、οἰκοδόμοςと同じ意味と解釈した。「(皇帝の事績の)他の重要な事柄は、他の書物に私が記しており、現在の書物に於て(の目的)は、彼(皇帝)がοἰκοδομαίμενοςとして、いかに人々のために偉大な奉仕を成したかを記すことである。」  
【筆者訳】
14. Loebの翻訳では、οἰκοδομίαを「石積み作業」と訳しているが、Liddell & Scott ed.の辞書によれば、「the building of a house」、Sophocles ed.では「οἰκοδομη—a building up」とあり、材料や作業内容を示す用語ではない。「いわゆる、οἰκοδομίαとは地面から(建築を)建ちあげる(作業の)ことである。」  
【筆者訳】
15. Downey(op.cit.)やMagoulias(op.cit.)は、οἰκοδόμοςを一般的な建築労働者と考えている。
16. ここで、φραζέτωはφραζέτοの誤植として、解釈した。「ダマスカス出身のアポドロス、行うべき全ての仕事のἀρχιτέκτωνは(トラヤヌスのために橋を)考案した。・・・こうして、トラヤヌ

スはそのとき、川の各々の岸に2つの砦を建てた。領土の反対側にあるのはテオドラと名付け、ダキアにあるものは、その仕事に対する名称として、ポントスと呼ばれた」【筆者訳】

17. アポドロスはその他、トラヤヌスのフォルム・オデイオン・浴場等を設計している。cf. Macmillan Encyclopedia of Architect, New York, 1982, pp.91-94.
18. J.Lassus, Sanctuaires Chrétiens de Syrie, Paris, 1947, p.262ff.
19. 「クセリスはアレキサンドリアの者で、才能に恵まれた *μηχανοποιός* であった。彼は建設活動に於て、皇帝にとっての助言者として、都市ダラスに於て、また残りの地域に於て、行うべき多くの仕事を完成させた。」【筆者訳】
20. 「彼（クセリス）は神聖なる出来事（夢）をすぐ思い巡らし、皇帝に対し考案したものと夢の概要を図に描いて贈った。その図とは、夢による教えを図化したものである。」【筆者訳】
21. γραφω—to draw line with a pencil, σκιαγραφω—to paint in light and shade, sketch out (Liddell & Scott ed.)
22. 「これらの全ての仕事に対し、*μηχανοποιός* であるイシドロスとイオアニスが力を貸した。イオアニスはコンスタンティノーブルの出身であり、イシドロスはミレトスの生まれで、私が既に記したイシドロスの甥である。この両者の若者は彼らの時代を越えて、皇帝の壮麗な事業を遂行する資質を有する者であった。」【筆者訳】
23. Procopius, op.cit., II, viii, p.148ff.
24. " οὐ μόνον δὲ τῇ πόλει τὰ ἐς τὴν ἀσφάλειαν οὕτως ὁ βασιλεὺς ἐπρυτανευσεν, ἀλλὰ καὶ ἱερὰ ταύτη ἀνέθηκε καὶ στρατιωτικῶν σημείων οἰκίας. ἔτι μέντοι λουτρῶνας καὶ στοὰς προσεποίησεν αὐτῇ δημοσίας. (この皇帝は、その都市にとって、そこで安全性を確立したばかりでなく、そこにとって教会と軍隊宿舎を建てた。更に、浴場とストアとを、人々への奉仕者として、付け加えた。) (Procopius, op.cit., II, viii, p.154)". 文中、建設者として皇帝が指名されているが、これは名誉称号としての指定で、現実に計画を推進したのは、2名の *μηχανικός* である。
25. 註22で記したように、前出のイシドロスの叔父。
26. 10) 「トラレス出身のアンセミオスは、同時代の者ばかりでなく、過去の者に対しても、非常に高度な *μηχανική* の知識を保有せる者であり、熱心に皇帝に仕えた。彼は（現在に於て）作るべきものをなし、将来必要になるであろう建築物も作った。そして、もう一人の *μηχανικός* であるミレトス生まれのイシドロスは、もう一人の (*μηχανικός*

の)知識を有する者であり、皇帝ユスティニアヌスのために、顕著な活動をした。」、11)「沢山のμηχανική に対し、皇帝ユスティニアヌスとμηχανοποιός であるアンセミオスは、イシドロスと共に、ここで教会を建ち上げ、安定した状態に完成させた。」、12)「それから皇帝は混乱した状態に陥り、μηχανική (の作業)について著名であるアンセミオスとイシドロスとをすぐ呼び寄せた。この2名について、私は既に述べているところである」【筆者訳】

27. この他、アンセミオスとイシドロスに関する記述は、I, i, p.28.とII, iii, p.118.にある。また、μηχανικὸςに関する記述は、対象となる人物について不明であるが、I, i, p.30.にある。
28. Procopius, op.cit., II, iii, pp.116 ~122.
29. パバスは紀元3-4世紀のアレキサンドリアの数学者であり、彼の著述については以下の3冊が、現在知られている。I. Thomas ed., The Greek Mathematical Work II, Loeb Class. Lib., pp.564-621: L. Gulielmo ed., Pappi Alexandrini Mathematicae Collectiones 1659: F. Hultsh ed., Pappi Alexandrini Collectionis quae supersunt. 本論では、I. Thomas ed.の抜粋を使用した。μηχανικὸςについてはpp.614-621に全文掲載されている。Thomasは対訳を行っているが、意味を厳密に確認するため、意識を排し、ここでは筆者が新たに翻訳した。
30. ここで、“τῆς μηχανικῆς”を“ἡ θεωρία τῆς μηχανικῆς”と解釈した。13)「ヘロンに関するように、μηχανικός はμηχανικήの知識が一方で理論であり、他方で実技であると言う。」【筆者訳】
31. I. Thomas ed., op.cit., p.614.
32. Loc.cit.。また、ここでDowney(op.cit.)は、パバスがοἰκοδομηκῆνを一応用部門として取り上げた点について、触れていない。むしろ、Downeyはこのοἰκοδομηκῆνを拡大解釈し、全体に及ぶものと考えている。
33. “of technical dexterity, worked by hand”(Liddell & Scott ed.): “performing by the hand”(Sophocles ed.)
34. 文頭の絶対属格の訳し方を、原因とするか、期間とするかで、Thomas (op.cit.)とDowney(op.cit.)との間で見解が相違する。本論では、Downeyの期間とする意見に首肯した。更に、τεχνήという語が前出のλογικόςとχειρουργικόςの両方を指すのか、χειρουργικόςのみを指すのか、文章から判然としない面もあるが、προειρημένον (πρῆρω - notice, order beforehand) という受動分詞の使用から、一般的に前出の知識全体を指すものと解した。14)「(μηχανική)は非常に多岐にわたる知識であるため、既に推奨した技術を同時に修得したり、また理解し

たりするのが難しいとき、各々の技術で尽力するよう、(人々は) *μηχανική* の仕事を遂行しようと望む者に対して、修得した(限りで)技術を必要とされる事柄に使用するのを推奨する。】【筆者訳】

35. "μάλλιστα δὲ πάντων ἀναγκαϊόταται τέχνηαι τυρχάνουσιεν πρὸς τὴν τοῦ βίου χρεΐαν (全ての物事の中で最も必要とされる技芸は、日常生活の義務に於て生じる(行われる)。【筆者訳】) (Pappus, op.cit., p.616)."
36. 15) 「*μηχαναριός* とは、古代の者が *μηχανικός* と呼んだ者である。即ち、彼らは機械によって非常に重い物を、自然の力を越えて僅かの力で動かし、高いところへ持ち上げる。」、16) 「戦争に於て必要とされる *ὄργανοποιός*、彼らは *μηχανικός* と呼ばれる。(なぜなら、(*ὄργανοποιός* は) 鉄や石やその他それらに似たものを、彼らによって作られた投てき器によって、遠くへ飛ばす。」、17) 「個人的に再び *μηχανοποιός* と呼ばれる者がいる。(なぜなら、彼らは非常に深いところから、彼らが準備した揚水器によって、簡単に水を汲み上げる。」、18) 「古代の人たちによって、*μηχανικός* と呼ばれた *δυναμιογράφος* がいる。この *δυναμιογράφος* の職業にある者達は、ヘロンのプネυμαティコスのように、空気の流れによる技術を好んだ。また、彼らは紐や綱によって模倣された生き生きした動きを出現させた。)、19) 「( *οὐκ τῆς ὄργανοποιΐας* ) を *μηχανικός* と呼ぶ。その球体の下(基)に、天空の実態(イメージ)は水平であり、かつ巡回する動く水を通して実現される。】【筆者訳】
37. B.Woodcraft ed., The Pneumatic of Hero of Alexandria, London, 1851.
38. G. Downey(op.cit.,p.118 & "On Some Post-Classical Greek Architectural Terms", Extracted from the Transactions of the American Philological Association, vol.77, 1946, pp.22-34)は、ビザンティン帝国のギリシャ語で、*σφαίριον* や *ἡμισφαίριον* がドームを示す用語であると指摘し、この19)の *μηχανικός* の作業を建築に関するものと推定する。
39. J.J. Coulton, Greek Architects at Work, London, 1977, pp.15-29. ここで、Coultonは、紀元前650-50年にかけて、100人以上の *ἀρχιτέκτων* の名前が記録されていると述べている。また、ギリシャ古典期の *ἀρχιτέκτων* は、職人層から台頭した職種であったと推定する。
40. Plato, The Statesman, H.N.Fowler ed., 1975(1925), Loeb Class. Lib., p.15. 20) 「なぜなら、*ἀρχιτέκτων* とは、労働する者では全くなく、労働者達の長である」【筆者訳】
41. 21) 「(*ἀρχιτέκτων*) とは手による仕事ではなく、知識によって得た

ものを(仕事に)提供する」、22)「このように、全ての知識は分割される。一方は、実技と呼ぶもので、他方は純粹に理論である。」

【筆者訳】

42. Coulton(op.cit.)は、現実の ἀρχιτέκτωνが、プラトンの規定する内容と異なり、より職人に近い存在であった点を、示唆している。
43. プラトンとパパスとでは、知識・理論等の日本語に対応するギリシャ語に相違がみられ、一概に比較できない可能性も否定できない。
44. C.T. Lewis ed., Latin Dictionary(Oxford)には、architectus= ἀρχιτέκτωνとある。
45. 森田慶一編、「ウィトルーウィウス建築書」、東海大学出版会、1976。
46. Ibid., I, i.
47. Ibid. 森田訳による。
48. Ibid.
49. Ibid.。ウィトルーウィウスは、これらの知識を完璧に取得した者は、architectusでなく数学者になってしまうと記している。
50. ウィトルーウィウスは、architectusの行うべき仕事として、日時計の制作(gnomonica)、建設(aedificatio)、機械の制作(machinatio)を挙げている。
51. この文章は、N.Pevsner, "The Term 'Architect' in the Middle Age"(Speculum, vol.17, 1942, pp.549-562)中に引用された、中世の百科全書Isidore of Seville, 'Etymologiarum Libri'を用いた。ここで、Pevsnerは西欧中世に於て、architectusの概念が地域的に異なると述べている。「一方に於て、労働者は技術を修得した者で、ギリシャ語の τέκτωνες に相当する。即ち、彼らは建設者である。他方、ARCHITECTUSは平面を決定する石工である。」【筆者訳】
52. J. Lassus, op.cit., 1947, pp.262ff.
53. C. Mango(op.cit., p.24)は、ἀρχιτέκτωνと呼ばれる職業が、時代と共に、職人と同義で使用されるようになると指摘する。
54. L.B. Alberti, Ten Books on Architecture, J. Lioni & J. Rykvert tran., London, 1965.
55. プロコピウスによって記された μηχανικόςであるインドロスとアンセミオスは、ユークリッド幾何学の註解書を記すなど、科学者としての性格が強い。また、G.Mathew(Byzantine Aesthetic, New York, 1971(1964))によれば、ビザンティン時代を通じ建築空間は、深さ・広さ・高さからなるユークリッド空間として知覚されていた。  
cf. Macmillan Encyclopedia of Architect, New York, 1982, pp.84-87 & pp.467-469. また、アンセミオスについては、下記の論文・解説書がある。T.H. Heath ed., "The Fragment of Anthemios of Burning Mirror and the Fragmentum Mathematicum Bobiense",

Bibl.Mathematica, vol.3: G.L. Huxley, Anthemius of Tralles, Cambridge, 1959: E. Damstaedter, "Anthemius und seine 'künstliches Erdbeben' in Byzanz", Philologus, vol.88, 1933, pp.477-482.

56. G. Downey, *op.cit.*, pp.199-200.。ここで、Downeyは、Pappusの提出している記載内容を建築に関する知識とし、μηχανικόςをビザンティン時代の建築家と考えている。即ち、Downeyにとって、μηχανικήの学問とは建築学である。
57. W.Schmidt, "Leonardo da Vinci und Heron von Alexandria", 1902. Schmidtは、ヘロンの著作をダ・ヴィンチが知っていたとする。また、ビザンティン期の文化とルネサンスとは密接な関連を示すが、これについては以下に示す論考がある。cf. D.J. Geanopolos, Byzantine and Renaissance, Hamden, 1973: S. Runciman, The Last Byzantine Renaissance, Cambridge, 1964: G.C. Miles, "Byzantium and Arabs", D.O.P., vol.18, 1964, pp.3-34: K.M.Setton, "The Byzantine Background to the Italian Renaissance", A.P.S., vol.100, 1956, pp.1-76.

### 第3章：集中形式洗礼堂に於ける建築構成

本章は、集中形式の洗礼堂において、造形理念を内包する建築構成を明らかにしようとするものである。このうち、特にこれまで触れられることのなかった建築内部の実態に論考の重点をおいている。1章で記したように、本論において実態という用語は、遺構の相互関係を通して現れる、規範を含む空間構成の全体を意味している。また本章では、集中形式洗礼堂以外の建築から当時の建築の特徴として認められた構成を、問題とする遺構に適用するのを極力避けた。この理由は、集中形式洗礼堂以外の建築構成により、断片化している洗礼堂の建築の構成を補うことで、問題とした遺構間それぞれで共通する構成を曖昧にし、今後、集中形式洗礼堂以外の建築と構成を比較するための基盤を失わないようにと考えたからである。このように本章においては、集中形式の他種建築と集中形式洗礼堂とを比較し、集中形式の特質を明らかにする上で、その比較を可能にするための基礎的な資料となる洗礼堂の実態に付いて検討する(1)。

集中形式の概念規定により、Khatchatrianの報告から初期キリスト教ローマ帝国における洗礼堂を選定したものが表3-1である(2)。表3-1の地域名から明らかなように、集中形式洗礼堂は帝国全土に分布している。即ち、イタリア、北アフリカ、シリア、小アジア、パレスチナ、バルカン半島に分布しており、初期キリスト教ローマ帝国の領土にくまなく広がっている。従って、集中形式の洗礼堂は地域的な限定を蒙ることなく、当時の建築における一形式として広く用いられたものであることが判る。このことは、2章で論考した建築制作者による建築技術の帝国内への普及の問題と相まって(3)、初期キリスト教ローマ帝国における集中形式洗礼堂を、汎用された建築形式の一つとして検討する視座を提供している。

#### 第1節：平面構成

初期キリスト教の入会儀礼を執り行った洗礼堂は、原則的に教区の主要教会にとって不可欠な施設であった。しかし、コンスタンティン・ポルフィロゲニトスの『儀式集』には、以下のような記述がある(4)。

Καὶ εἶδ' οὗτος ἐν τῷ κατεκείνῳ ἦτορ μετεκείνῳ  
ευκτηρίῳ τῆς Ἁγίας Τριάδος... Ἐἶτα ἐξέρχονται  
εἰς τὸν βαπτιστήριον.

このように当時の儀式の参加者はすべてキリスト教徒であるにもかかわらず、儀式が洗礼堂を使用していることから、洗礼堂を洗礼儀式以外にも使用した可能性がある。こうした洗礼堂の建築では、遺構の保存状態や研究の進捗により、立面構成の把握できる範囲について較差があるが、平面構成についてはほぼ均質な資料を得ることができる。表3-1は初期キリスト教ローマ帝国における集中形式の洗礼堂平面についても、平面の分割できる単位における相互の比較対照を行ったものである(5)。平面の分割された単位としては、前室・周歩廊・身廊(洗礼室)がある。表3-1では、洗礼堂全体と主空間である洗礼室との2点について検討した。更に、表3-1においては、平面全体の構成として、教会堂から分離して建つか(分離)、教会堂に対する建設位置(位置)、分離している例の分離の程度(形式)の3点を、洗礼室の構成として、洗礼室が接続する部屋(接続室)、洗礼室の外部形態(外形)と内部形態(内形)、洗礼室に認められる構成の要素(構成要素)、洗礼室の扉数と位置(扉)を、比較対照した(括弧内は表3-1に記された項目)。

洗礼堂と教会堂の関係を見ると、集中形式の洗礼堂は46例中の5例を除き、教会堂から分離した独立の構造体として建てられている。教会堂から分離せずに複合化していると推測される5例についても(6)、アルジェリア・ギリシャ・ダルマティアと地域の懸隔が見られ、複合化は地域的な類型となり得ていない。従って、集中形式の洗礼堂が教会堂とは別の構造体として、一般的に独立して建てられていたことが判る。

一方、教会堂に対する位置としては、東を除く場所に建てられている。更に、南面・北面に建つ例にしても、西寄りや東寄りの両方が認められる(7)。この様に、集中形式の洗礼堂は東側の教会堂アプス背部を除く、どの位置にも建てられたことが判り、相対的な方位における規範は認められない。

教会堂に対する分離の程度(表3-1の項目/形式)としては、教会堂に近接して建つ例(A)、教会堂から離れているものの接続の施設を持つ例(B)、教会堂から懸隔して建てられ接続の施設を持たない例(C)の3つの形式を認めることができる。(A)については、教会堂と対になって建てられ、使用に於ける相互関係を推測できる。一方、(B)、(C)についても教会堂との関係が判明しているものについて、相互関係を推測できる。即ち、接続の施設を持つカルタゴとラベンナの洗礼堂(B)では、列柱廊に匹敵する施設が、発掘により判明している(8)。また、修道院敷地内の南端の入口脇に設けられたカルアト・シムアンの洗礼堂(C)では、改修に伴い、南側に長堂形式の礼拝堂が設けられた(9)。こうした事実から、洗礼堂は教会堂に匹敵する建物と対になって構成され、相互の繋がりを密接にした関係にあったと看做せる。

この様に洗礼堂と教会堂の関係には、結合の強化が示されているが、接続位置に関しては比較的自由であったことが判る。

これに対し、表3-1を見る限り、洗礼室の平面構成では、平面形態そのものが室内の構成要素を支配したとは考えられない。即ち、接続する部屋としては、周歩廊・前室・周歩廊と前室の両方・接続室のないものがあり、これらのどれもが優勢な傾向を示すとは言えない。このように洗礼室に接続する部屋について、接続形式の傾向を認めることはできない(10)。また、扉数は比較的自由に設けられており、内部形態と外部形態の関係が洗礼室のニッチ数や扉数に影響を与えたとも考え得ない。しかし、洗礼室の内部形態としては、八角形か円形かの形態が主流を占めている。ここで、Khatchatrianの報告は洗礼室の上部の形態まで触れていないが、いくつかの洗礼堂

では上部の内形と外形が一致するものも有り、下部で外形4角形・円形・8角形の洗礼堂も、上部で外形8角形内形8角形と一致するものも多いと考えられる。従って、集中形式の洗礼室が選択した正多角形の形態は、論理的可能性とは別に、限られたものであったことが判る。

一方、洗礼室内の構成要素としては、ほぼアプス、ニッチ、柱に限定することができる(表3-1)。また、表3-1から構成要素としてアプスの有無や柱の有無に関する例は、遺構の全体数において、両者共ほぼ半分づつを占めている。従って、こうした有無によって対立している形式の洗礼堂が、当時共存している。ここで洗礼室内に用いられた柱では、その建てられる位置によって、中央部・壁際・壁付きという3種類に分類できる。

このように最も均質な資料を得られる平面構成の比較対照にあっては、洗礼堂が教会堂との関係を強化しながらも、分離された独立の構造体であること、また、洗礼室内において、8角か円形、柱の有無、アプスの有無という、二元的な構成要素が存在する。従って、初期キリスト教ローマ帝国の集中形式洗礼堂における洗礼室の平面構成では、これら二元的な構成要素による類型が存在したと考えられる。こうした洗礼室平面構成において明らかになった共通する構成要素が、立面構成でどのように展開されているか検討することをおして、洗礼室の内部空間の実態を明示し得るものと考えられる。そこで、個々の洗礼堂に於ける建築の構成が問題とされなければならない。

集中形式洗礼堂の初期キリスト教時代における建築構成の復元的考察は、現在の研究の進捗に左右され、結果的に検討できる遺構を恣意的に限定している。本論においては、復元的考察を可能にする遺構として、ローマのラテラン教会の洗礼堂、ラベンナのオーソドックス洗礼堂、リバ・サン・ヴィターレの洗礼堂、コンスタンティノーブルのソフィア聖堂の洗礼堂、エフェソのマリア聖堂の洗礼堂とヨハネ聖堂の洗礼堂、カルアト・シムアンの修道院の洗礼堂を検

討した。以下、それぞれの節で、これらの洗礼堂の建築構成を内部  
立面へと論を発展させるため、修理・発掘の報告をもとに個別的に  
検討する。

## 第2節：ラテラン洗礼堂

### 第1項：概要

現在、セリアン丘の東側に位置しているラテラン教会は、ローマ  
時代のローマ南東の端の市壁脇に建てられた、ローマにおける最も  
古い教会である(図3-1)。中世に至るまで、この教会は聖ピエトロ、  
すなわち現在のバチカンの上位に教会の位階上位置づけられていた。  
創建後多くの改修のため、教会堂をはじめとする各種建築物は概ね  
ルネサンス以後の状態を示している。

洗礼堂は教会の敷地の北西に建てられ、周囲に付属する礼拝堂を  
付設している(図3-2)。洗礼堂自体は洗礼堂の前室に当たるプロナ  
オスと洗礼室から構成され、室内には中央部に8本の円柱で囲われ  
た洗礼盤がおかれている。洗礼堂は4つの礼拝堂を付設している。  
また、この洗礼堂は教会堂から切り放されて建てられている。

洗礼堂の敷地には、発掘から最古層に紀元前1世紀の住居趾が発  
見されている(11)。この住居趾において、洗礼堂が建てられている  
場所には、個人用の浴場が設けられていた。

その後、コンスタンティヌス帝がマクシミアヌス帝に対する戦勝  
記念として、マクシミアヌス帝の軍隊宿舎のあったラテラン地区に  
教会を寄進した。この正確な時期は不明だが、コンスタンチヌス帝  
治世下の初期であったと推定されている(12)。教会堂の建設にとも  
ない、洗礼堂も建てられたものと考えられる。事実、後の記録によ  
れば、この洗礼堂の建設のため、柱をはじめとし、種々の建築部材  
の下賜されたことが次の記述から判る(13)。

"Hic constituit columnas in baptisterium basilicae

Constantinianae, quas a tempore Constantini' Augusti fuerant congregates."

コンスタンティヌス帝以前にも、個人用の浴場がキリスト教の洗礼施設として用いられたが、洗礼堂として完備されたのはコンスタンティヌス帝の時代であった(14)。

その後ローマヘゴート族が侵入し、洗礼堂を破壊したことにより教皇シスト3世(432-440)が洗礼堂を再建した。現在の洗礼堂の中層部にまで続く壁体がこの時期のものに相当する。この再建によって、規模そのものは大きく変化しなかったが、洗礼堂は円形平面から八角形平面へと変更されている(15)。

5世紀中期に教皇イラロ(461-468)により南西にサン・ジョバン・バティスタ、北東にサン・ジョバンニ・エバンゲリスタ、北西にサンタ・クロッチェのそれぞれの礼拝堂が付設され、教皇ダルマタ(640-642)により東にサンタ・ヴェエナチオ礼拝堂が設けられた。

その後、中世に洗礼堂についての記録はなく、具体的な状態について不明である。

16世紀になると、修理という観点から、洗礼堂について当時の状態やそれ以前の状態についての検討がなされた。ラフレリーやパンヴィニウスは洗礼堂について16世紀以前の状態を推定し、図化している(16)。またこの時期、ラテラン教会を示した銅版画の中に、洗礼堂の外観を窺うことができる。

更にこの時期の改修後、1637年に教皇ウルバン3世によって行なわれた改修により、現在目にする洗礼堂の状態が完成された。

以上の事実から、ラテラン洗礼堂は初期キリスト教建築において最も早い時期に建てられた集中形式の洗礼堂であることが判る。本研究においては初期キリスト教期という観点から、コンスタンチヌス帝、及びシスト3世の時代における洗礼堂を検討する(17)。

## 第2項：コンスタンティヌス帝時代の建築構成

コンスタンティヌス帝による洗礼堂の壁体と、その下にある個人用の浴場を洗礼堂として代用した壁体とを比較すると、洗礼堂はコンスタンティヌス帝により規模が拡大をされている(18)。コンスタンティヌス帝の時代、すなわち4世紀初期の洗礼堂は円形の外周壁によって囲まれているが、この壁と前室の壁の構成は異なっている(19)。従って、4世紀初期の創建時に、洗礼堂は付属する前室を持っていなかったものと推定される。また、外周壁の残された部分には、壁から突出した台座状の壁が8箇所見いだされている(図3-3)(20)。この台座は壁と同じ組成であり、また壁から切り離されていないことから、柱の台座ではなく、壁付柱の下部の痕跡と考えられている(21)。また、外周壁には壁を穿った痕跡があり、開口部あるいはニッチ等が幾つか設けられていたと考えられている(22)。外周壁の内部と外部の形態がともに円形であることから、この洗礼堂は周辺から独立した構造体であったと推定される。

ここでコンスタンティヌス帝により下賜された8本の柱は、立てられた位置がはっきりしない(23)。しかし、コンスタンティヌス帝によって下賜された建築部材を、洗礼堂の建設の際に使用しなかったとは考えられない。そのため、現状と同じように中央部の洗礼盤周囲に建てられたと考えられている。即ち、現在目にする中央部にある柱やアーキトレイヴ等は、コンスタンティヌス帝によって下賜された部材と考えられている。

コンスタンティヌス帝治世の初期の洗礼堂の痕跡として、発掘により見つかっている壁の組成を、現在の洗礼堂で壁の他の部分に認めることはできない。従って、コンスタンティヌス帝の洗礼堂の立面構成を遺構から推測することはできない。しかし、現在のラテラン教会に残された初期キリスト教期の石棺の浮き彫りに、この洗礼堂の外部形態と推定し得る2種類の建物を認めることができる(図3-4)。この浮き彫りに表われた2種類の円形建築の相違点は、一方が天頂にオクルスを設け採光を行なうのに対し、他方が外周壁・上部にアーチ形の窓を設けている点にある。この時期のローマにおけ

る円形建築としては両者のものがあるため、形態だけからではどちらかをコンスタンティヌス帝のものか確定できない(24)。しかし、窓を外周壁に設けた円形建築の例では、ドーム天頂に✠という紋章が刻まれている。この紋章はコンスタンティヌス帝によって使用されたものであることから、後者のものがコンスタンティヌス帝の洗礼堂と推定できる(25)。

この洗礼堂では外周壁が構造体となっており、中層部に窓が開けられることから、発掘で見つまっている付け柱は構造補強として機能したと考えられる。従って、コンスタンティヌス帝から下賜された柱は、洗礼盤周囲に現在のように立てられ、洗礼盤のみを覆うバルダッキノを支持する柱として用いられたと考えられる。即ち、これらの柱は主体構造から独立した内部空間の調度を構成する部材として用いられた可能性が高い(26)。また、石棺の洗礼堂浮き彫りにおいては洗礼堂に直接入る扉が設けられており、前室に当たるプロナオスは見あたらず、発掘で洗礼室のみからなる構造体という推定を裏付けている。

### 第3項：シスト3世時代の建築構成

コンスタンティヌス帝の洗礼堂からほぼ100年後、この洗礼堂は再建された(27)。この再建は教皇シスト3世によってなされ、その洗礼堂の状態は、後世のパンヴィニウスの記述によって部分的に知り得る(28)。即ち、パンヴィニウスは以下のように記している。

Baptisterium igitur totum est forma actangula; in medio habet fontem in terra excavatum ad quinque ulnas...Fons, ut dixi, octo maximis et elegantissimis porphyrelicis columnis, qua octangula tota exaedificatio est, a Xysto collatis, ornatus est; supra columnas peristilia marmorea varij operis, interius quidem elegantissima, extra vero pura, in quibus incisi sunt hi versus quos supra scripsi:Gens

sacranda polis., etc. Octo columnarum capitula  
quatuor corinthia sunt et totidem ionica. Supra  
peristilij coronam totidem aliae columnae sunt  
marmoreae, quatuor strictae albae cum capitulis  
ionicis, quatuor puro e granito cum corinthijs, quae  
tholum fontis octo fenestrellis rotundis decoratum  
sustinent, a Paulo III ul insignia indicant reparat-  
um et ligneis laquearibus elaboratis ornatum.(29)

パンヴィニウスの記述する洗礼堂がどの程度、古い時代に遡るか明かでないが、大規模な改修が記録上ルネサンス以後に限られるため(30)、シスト3世時代の洗礼堂の概要を示すものと看做し得る。このパンヴィニウスの記述から、当時の洗礼堂の状態を以下に示すようにまとめることができる。即ち、外形が八角形で、中央部に洗礼盤が据えられ、その周囲に8本の柱が立てられている。更に、この8本の柱の上に、ペリスティルと呼ばれる層があり、その上に8本の柱で囲われた8個の窓があり、その上にドームがのっている。内部はモザイクで飾られていたと推定される。また、パウロ3世によって、周歩廊の天井部が木製に代えられた点を示唆している。既に記したシスト3世の年代記によれば、中央8本の柱はコンスタンティヌス帝によって下賜された柱に照応する。従って、平面的に変化したのは外周壁であり、洗礼盤周囲の構成は前代を踏襲したといえる。このようにパンヴィニウスの記述から内部立面を構成すると、内部は4つの層から構成される。この内ペリスティルと呼ばれる層が具体的にどのような構成なのか、明かではない。しかし、このペリスティルが大理石を貼り付けて構成されることから、オプス・セクティルのような色彩の異なる大理石を貼り合わせたものとして理解することができる。

一方、現在の洗礼堂の壁体を検討すると、シスト3世時代に構成された壁を認めることができる(31)。現在の洗礼堂の壁はコンスタンティヌス帝の円形の基礎の上ののっていることから、低層部の壁

はシスト3世時代のものである(32)。それによれば、シスト3世時代の壁が洗礼盤上部の現在の第2層に当たる柱列の上、ほぼ下から5mに到る箇所まで認め得る。この面には窓の側面に設けられる壁、またその下にTerral Windowのようなアーチ形開口を認めることができる。第2層部の柱列はパウロ3世によって挿入されたものであるため、シスト3世時代にどのようなであったかは不明である(33)。即ち、パンヴィニウスの記述で8個の窓がある面と、ペリスティルに相当する面の一部が、シスト3世時代の壁に照応する。こうしたことから、パンヴィニウスの記述は、現在その状態が不明である洗礼盤上部の第2層柱列面を除き、シスト3世時代の状態を報告するものと推測される(34)。

更に、周歩廊は現在格天井で組まれているが、シスト3世時代ヴォールトが架けられていたと、Giovenaleは推定している(35)。しかし、パンヴィニウスの記述からこの点を類推することは可能だが、現在の壁面にヴォールトの迫元を示すだけの痕跡はみられない。

これに対し、前室ではシスト3世時代の壁が、現在の天井上部に達するまで残されている。この壁は天井上で三角形を形作り、現在の天井上に野縁を残している。このことから、シスト3世時代の屋根は現在のような片流れのものではなく、前室正面を平側とする三角屋根であったことが判る。また、野縁の痕跡が認められることから、天井位置は現在より高く、木製であったことが判る(36)。

洗礼堂の開口等については、ドラム上部に8つの窓があったことを除き、不明である。とりわけ、周歩廊の採光という点については、現在表面仕上げがなされているため明かでない(37)。しかし、シスト3世時代以後、3方向に礼拝堂が設けられた点を考えると、壁体に通行を可能にした開口の存在を推測し得る。

洗礼堂にどのような装飾が施されていたかについては、痕跡が残されていない。しかし、前室には北東側のアプス上の半ドームにシスト3世時代と推定されるモザイク、それにアプス壁面にオプス・セクティルが部分的に残されている(38)。洗礼堂にはパンヴィニウ

スの記述から、大理石貼り付けやモザイクの存在を推定できるが、プロナオスにおいてシスト3世時代にモザイクや大理石貼り付けが同様に認められることから、洗礼堂の装飾として確実性の高いものと考えられる(39)。

以上の検討から、シスト3世時代の洗礼堂の概要を図3-5のように示し得る。ここで、周歩廊がヴォールトか木造天井かについて、その両者がローマ帝政期の建築や初期キリスト教教会堂に認められることから、決定し得ない。また、Giovenaleは上部窓脇につく柱を持ち送り（ブラケット）の上に据えているが（図3-6）、これの痕跡を認めることはできない。従って、パンヴィニウスの記述で各層が明確化されて述べられていることから、窓脇に立つ柱はコーニスかエンタブラチュアのような層の見切り部材の上に立てられたものと考えの方が妥当といえよう。

#### 第4節：ラヴェンナのオーソドックス洗礼堂

##### 第1項：概要

一般的にオーソドックス洗礼堂と呼ばれるラヴェンナのカテドラルの付属洗礼堂は、現在独立した構造体として教会堂の北に位置している。外壁は最上部の浅いロンバルディア・アーチの連続を除くと、無装飾の煉瓦壁で構成される。この煉瓦壁の中で、北西の壁に埋め込まれている馬にのった男のレリーフは後世のものである。

外形は八角形の塔を構成し、低層部の各隅には4つのニッチが設けられている。このため、外側からみると、低層部で洗礼堂は各隅を丸くした4角形を構成し、内部の平面構成は4つのニッチを持つ八角形となっている。外壁の垂直方向は不明瞭な3つの層から構成される。地面からニッチの屋根までを低層部とすると、南側に大理石の額縁によって枠どられた唯一の入口がある。ニッチの屋根からロンバルディア・アーチを上部に持つ窪みの下端までを中層とする

と、この層には各面にアーチ型の窓が一つずつ設けられている。浅い窪みの部分が上層に相当し、窪みの間に設けられた煉瓦壁は付け柱を模している。南東と西の上層部には、アーチ窓の開口が設けられている。外壁にはかつて洗礼堂に接続していた建物を推測させるような痕跡も留められていない（図3-7）。

内部壁面は外壁同様、3層に分節される。即ち、低層部、中層部、高層部であり、この高層部がドーム層となっている。低層部平面において、柱が地盤面より50cm低い位置に設けられた柱礎に立てられている。大理石板により作られた洗礼盤は八角形であり、中央に据えられている。建物の隅に設けられたニッチの内、南東のものには大理石の聖壇があり、北東にはウルン（甕）が設けられている。低層部の構成は、八角形の各隅から僅かに内側に離れて立てられた8本の柱とアーチによって特徴づけられる（図3-8,9）。

中層部は、構成において最も複雑な面であり、低層部からはコーニスによって分離される。各隅に柱が立ち、この柱間に架けられたアーチの内側にそれぞれ2本の細い柱が立てられ、その柱頭をつないで3つのアーチが架けられている。このうち中央部のアーチはいちばん大きい。この中央部のベイに窓が設けられている。両側のベイにあるスタッコのエディキュラには、予言者の像が浮き彫りで付けられている。それぞれの隅に立つ柱の上にある柱頭は、ペンデンティヴを通してドームへと繋げられている。

ドーム層において、ドーム表面はモザイクで覆われ、そのモザイクによって3つのリングに分割されている。最上部のリングにはヨルダン河で洗礼を受けるキリストが描かれ、中部のリングには二方向に行進する使徒が描かれている。そして、最下部には建築的な図柄が描かれている。

洗礼堂の創建時に対応する史料は、ほとんど残されていない。宮廷年代記作者であるプロコピウスにしても、彼の多大な6世紀の歴史記述に於いて、この洗礼堂については全く記していない(40)。彼の記述によれば、ラヴェンナは軍事的な観点から、自然地形によっ

て守られている都市であった。即ち、ラヴェンナは陸地に面して河で境界づけられ、海側からは潮の干満の落差により近づくことが困難な都市であった(41)。このようにプロコピウスはラヴェンナの地の利を解説しながらも、当該の洗礼堂について何も述べていない。

ラヴェンナはホノリウス帝により、403年に西ローマ帝国の首都に定められた。ミラノからの遷都は、地方の一寒村にすぎなかったラヴェンナを都市に発展させることとなった。この発展の第一段階は、クラッセの教会堂周辺が都市の中心を構成したと考えられている(42)。5世紀末から6世紀初期にかけて、都市はオストロゴース族によって占拠された。その後、540年にベリサリオス將軍によってビザンティン帝国の領土に組み入れられた。

このように、西ローマ帝国と東ローマ帝国（ビザンティン帝国）の両帝国にラヴェンナは含まれ、都市の発展が東ローマ帝国の建築の発展と平行して起こっていることから、初期キリスト教期において東西文化の両義性をもつラヴェンナは、歴史的に重要な位置を占めている。従って、ラヴェンナの建築にはビザンティン帝国の中心と際立った相違と類似とが認められる。

洗礼堂が史料に現われるのは、9世紀のラヴェンナの年代記作者であるアグネルスによってである(43)。彼の*Liber Pontificalis Ecclesiae Ravennatis*によれば、ラヴェンナの大聖堂は建設年代のはっきりしないものの、司教ウルススの監督のもと建設された。この建設時期について、4世紀末と5世紀の初期との2つがある(44)。この5世紀の中ごろについて、アグネルスは以下のように記している。

Fontes Ursiana ecclesia pulcerine decoravit. Musica  
et auratis tessellis apostolorum imagines et nomina  
camera circumfinxit, lapideis descriptum est helem-  
entis.(45)

このように、洗礼堂は司教ネオンによって改修された。

ネオンの碑文は9世紀のアグネルスの時代、洗礼堂に残されている。

たはずだが、アグネルスによって記されたネオンの洗礼堂の具体的な改修については明かでない。つけ加えて、史料そのものが9世紀に記されていることから、5世紀の洗礼堂の状態についての正確な記述そのものを疑うことも可能である。

アグネルスの時代から16世紀まで、洗礼堂の状態に関しては不明である。16世紀以降遂行されたそれぞれの改修を通し、洗礼堂の創建時の形態は大きく変更されたと考えられる。1566年には大司教は修理を命じ、7年後に修理工事が始められた。この修理工事の一部として、聖所に大理石が供給され、東面と西面の窓が開けられ、床が修理された(46)。

17世紀には、Capella del Sacramentoの新たな建築活動のもと、大聖堂の北側にあり洗礼堂に付属していた建物が取り除かれた(47)。18世紀には、1760年代に行なわれた修復が、主任司祭であるプロスペロ・グロッシとジュリオ・フランセスコ・ヴァルネリの監督のもと、詳細にわたり記録されている。この修復の過程でドームに架かる木造の屋根が変更された。更に、中庭に通じる南東のニッチにある扉が塞がれ、司教館に通じる南面の扉が開けられた(48)。発掘を通し、建築家カミロ・モリギアは大聖堂の北側に古い壁の痕跡を発見した。その痕跡が墓地の壁から大聖堂の北側の壁にまで伸びていた事実から、ヴァルネリはこれがかつて洗礼堂と大聖堂とを繋いでいた列柱廊の壁の痕跡であると推定した(49)。1781年、地震後の修復において、2つの窓が南と北の面に開けられた。

19世紀の半ば、洗礼堂は画家フェリチェ・キベルと建築家フィリッポ・ランチアーニにより修復された。この修復において、ランチアーニは洗礼堂の周囲を発掘し当時の地盤面より3m深い位置に創建時の床を発見した。更に、彼は南西と北西に2つのニッチを発見し、北面と西面に創建時の2つの扉を当時の地盤面の下に見つけた(50)。

1937年から1939年にかけて、最後の修理が行なわれ洗礼堂の現在の状態が確立された。

上記したように、16世紀以降の改修・修理が洗礼堂について発見した事実から、アグネルスAgnesの記述を信じる限りで、洗礼堂の形態の変更は5世紀から16世紀の間に既に起こっていたと考えることができる。こうした変更、修理、発見ということを総合的にみると、洗礼堂は以下に示すように創建時の状態から変化したと考えられる。即ち、洗礼盤のおかれた床、扉の位置、外壁の構成、ニッチの数である。

しかし、16世紀以前については、洗礼堂の状態について明かではない。その一方で、アグネルスが報告を記した時代の洗礼堂の状態は、初期の状態をとどめるものとして重要と考えられる。アグネルスの記述が信頼できるものとする、アグネルス以前の洗礼堂の創建と改修について以下に示す4つの可能性を呈示できる(51)。

1. 洗礼堂は司教ウルススによって大聖堂が建てられた同じ時期に建設された。即ち、4世紀末から5世紀始めにかけて建設された。その後、司教ネオンによって5世紀中期に改修された。次に、司教マクシミアヌスによって6世紀中期に再び改修された。
2. マクシミアヌスによる改修を除き、上記1と同様。
3. 洗礼堂は司教ウルススにより創建され、その後マクシミアヌスによって改修された。
4. 洗礼堂は司教ネオンによって創建され、その後マクシミアヌスによって改修された。

いずれにせよ、全ての仮説は初期キリスト教期において、洗礼堂が少なくとも一度は改修なり修理を行なわれたものであることを示している。

しかし、大聖堂が新しい首都の設置とともに建てられたとき、洗礼堂は教会堂の施設の一つとして必要とされたはずであると考えられる。従って、洗礼堂は司教ウルススの5世紀初期に、すなわちラヴェンナへの遷都後、速やかに建てられたものと考えられる。また、ネオンの碑文が堂内にアグネルスの時代に存在した事実から、洗礼

堂の第1回の改修は司教ネオンの時代に行なわれたと推定される。このように5世紀の大司教座にラヴェンナが制定された後、洗礼堂はその世紀に改修されたと考えられる。その後、司教マクシミアヌスが改修を行なったかどうかについては、彼の活動についての史料的な不備から明らかにすることはできない。

このマクシミアヌスが洗礼堂の改修にどの程度関与したかについて、研究者間でその質と量に関し意見の相違がみられる。特にその中で、Casaloneは現在の内部の状態をほとんどマクシミアヌスによるものと仮定する(52)。マクシミアヌスによる改修は、洗礼堂の低層部の壁に残されたモノグラムが存在によって説明される(53)。更に、マクシミアヌスがラヴェンナのサン・ヴィターレ聖堂の建設に関与している事実は、彼が洗礼堂の改修にも関与したとの仮説を例証するものと考えられている。その一方で、マクシミアヌスに関するアグネルスの記述で、洗礼堂に関する内容は全く触れられていない(54)。特にCasaloneはネオンとマクシミアヌスの間の時代に行なわれた改修に否定的であるが、このことを確証する事実は洗礼堂の建物にも史料にも発見されていない(55)。当然この仮説への反対として、この有名な司教のモノグラムは彼の業績を講えるものとして、後世に挿入されたものだとする考え方が成立する。従って、内部の構成をマクシミアヌスに帰す正当性は必ずしも強固なものではない。特に、アグネルスがこの洗礼堂に関してマクシミアヌスに全く触れていない事実は、彼が6世紀に行なった改修はごく限られたものであったことを示唆するものと考えられる。

いずれにせよ、アグネルスの年代記が9世紀に書かれたものであることから、彼の記述のみから洗礼堂の初期の状態を確定するのは、洗礼堂の献堂が5世紀初期であるという事実を除き不可能である。

## 第2項：ネオンの時代における建築構成

既に記したように、洗礼堂の5世紀の状態は明かではない。しかし、その後の16世紀にまで続く時代、考古学や修理による発見は、

洗礼堂の創建時の形態とその後の第一回の修理後の形態とをある程度まで明らかにすることを可能にする。

本論では洗礼堂の創建時の建築構成より、ネオンの時代の洗礼堂の建築について検討している。その理由は、ドーム架構を除けば(56)、ウルススとネオンとの時代に於ける構成を識別することのできないことがあり、全体にわたる概要の判る時代を選んだためである。

ネオンの時代と現在の洗礼堂の最も際だった違いの一つは、床レベルの問題である。ランチアーニの発掘により(57)、2つの床レベルが発見された。それらの床は現在の地盤面よりそれぞれ1.75mと3m低い位置にある。1.75m低い位置にある床は9世紀から11世紀にかけて建てられた大聖堂の鐘楼と床レベルが同じであることから、中世に属するものと考えられている(58)。しかし、鐘楼の床レベルが現在の地盤面より2.05mの深さにあることから、洗礼堂の床レベルの変更は鐘楼の後で起こったものといえる。また、3mの深さにある床レベルは大聖堂の創建時の床が現在の地盤面の3m程下にあることから、5世紀の床と考えられる。更に、この創建時の床に付随して、創建時の洗礼盤が現在の洗礼盤の下に発見された。

この他に、ランチアーニは二つのニッチを発見し、このことから創建時の洗礼堂はそれぞれの隅にニッチを持つ形態であることが判明した。同時に2つの扉が発見された。しかし、研究者の中には、シンメトリーの観点から、ランチアーニによって報告されていないにもかかわらず、各面に扉があったと推定する者もいる(59)。

外壁はネオンの時代にドームが建設されるのに伴い、高くなった。しかし、5世紀の段階で外壁の上部の状態がどのようなものであったか明かではない。いずれにせよ、ロンバルディア・アーチは中世に用いられた意匠形式であることから、Kostofによって示されたこの部分の形態は信頼するに足るものと考えられる(60)。

16世紀の修理において、洗礼堂の中層部の4面にあった窓は塞がれた(61)。18世紀には、洗礼堂には2つの構造体が付設された。一

つは西側であり、他は東側の司教館である(62)。こうした事実にもかかわらず、現在の外壁にこうした構造体との接続を推測させる痕跡は見あたらない。このため現在の外壁に創建時の煉瓦は全く用いられていないものと結論される。

創建時の扉位置は聖所の反対側の北壁と南西の壁に設けられた(63)。この外側に洗礼堂と大聖堂とを接続した列柱廊があったと推定されている。更に、機能的な観点から、洗礼堂は周歩廊によって取り囲まれていたと考えられている(64)。しかし、ランチアーニは洗礼堂の周囲に舗床の痕跡を発見していない。従って、周歩廊は存在しなかったか、存在したとしても床仕上げがなされていなかったものと言える。しかし、洗礼堂が脱衣や着衣のための補助的な空間を必要としても、必ずしもそれが周歩廊である必要はない(65)。事実、どの様な史料もこの周歩廊の存在について述べているものはない(66)。更に、周歩廊が存在したのなら、周歩廊の屋根は、恐らくニッチの屋根より低い位置で洗礼堂の外部に張り出したものと考えられる。しかし、このような建築としての外観は、建築の構成として満足のゆくものであったとは考えがたい。従って、むしろ構造体として別になった前室が洗礼室外部に接続したものと考えられる。この場合、2つの扉で前室との接続は充分であり、また前室の屋根は洗礼堂の洗礼室の外観を阻害するものとはならなかったと考えられる。

列柱廊についても、周歩廊と同様な不明確さがある。ヴァルネリは大聖堂と司教館の間に古い壁の残されたものを発見したが、これらの壁が5世紀に設けられた列柱廊の痕跡かどうか確証することはできない。14世紀以降、いくつかの史料中でsub-porticuと表現される構造体があり、教会の敷地において列柱廊があったものと考えられる(67)。従って、14世紀以前について不明としても、14世紀以後に列柱廊のあったことは確実と言える。洗礼儀式においては、洗礼後の堅信礼のため、洗礼堂から教会堂へと潤滑な移動がはからねばならなかった。このため、列柱廊は洗礼堂の初期において設けら

れねばならないものと考えられる。従って、発見された列柱廊に匹敵するものが初期においても存在したと考えられる。

一方、19世紀までに、洗礼堂の内部状態は5世紀の状態から大きく変化している。従って、今世紀の研究者は建築・装飾の両面にわたる洗礼堂の状態を、実証的かつ理論的に復元した。この内部の構成は3層からなる。以下に、低層部から高層部まで、ネオンの時代の内部構成について検討する。

ネオンの時代は現在よりも3m低い位置に床があった。内部の構成は、外壁から離れて柱が高い台座に据えられ、洗礼盤が中央に据えられていた。低層部の柱とアーチの現在の構成に関し、柱頭の上にあったアーチの下端は、床が上げられた後で新たに使用された柱の長さに合わせて切りとられた(68)。

低層部にみられるオプス・セクティルはアーチの背後のイントラドスに回り込んでいないことが、Kostofの調査によって発見された。即ち、このオプス・セクティルはアーチに沿って切りとられている(図3-9a)。従って、この壁に張られた大理石は創建時に低層部の構成として、アーチによる壁面の構成が行なわれた後で表面に貼られたものと考えられる。また、ランチィアーニが創建時の床レベルで柱を据える高い台座を発見している事実から、洗礼堂の創建時に外壁から離されて独立した柱が建っていたことが判る(69)。このオプス・セクティルやブラインド・アーケードの使用は初期キリスト教の長堂形式の教会堂にも表面の構成として認められるものであることから、これらは洗礼堂の初期に用いられたものと考えられる。

低層部のコーニスの上端からドームの迫元までの中層部は、洗礼堂の内部立面構成において最も複雑な面となっている。8角形の各面で、大きなアーチの内部に3つのアーチが設けられる。大きなアーチは隅に立つ柱の上部のインポストによって支持され、3連アーチの中央のものは中層部にある窓を枠どっている。この大きなアーチは煉瓦によって架構されるのではなく、創建時には穴開き煉瓦をつないで構成された(70)。また、穴開き煉瓦が構造材としてドーム全

体に用いられている事実から、中層部の大きなアーチは、5世紀の中期に司教ネオンによって架けられたドームと同じ時期に作られたものと、Kostofは推定している(71)。一方、ドームと外壁の間にある創建時のコーニスは、中層部の大きなアーチの頂部よりも高い外壁の位置に設けられている。そのため、中層部の壁面の構成は創建時に、柱・梁による構成の代わりに、柱・アーチで構成することに、なんら不都合はない。特に、低層部がアーチで構成されていたことから、中層部もアーチで構成されていたと考える方が妥当である。いずれにしても、現在の中層部のアーチによる構成はネオンの時期には存在していた。

中層部の3連アーチの形式は後期ローマ建築の壁面装飾の形式に類似している(72)。更に、初期キリスト教期の教会堂において、ナルテックスから身廊にはいる主入口は3つの扉によって構成された。この3つの扉は聖と俗との間の分離を凱旋門の比喩を用いて強調することにあつた。この文脈において、中層部のアーチ構成は洗礼堂の初期に用いられた蓋然性が高い。このように、現在のアーチによる中層部の構成は、ネオンの時代の構成をとどめるものと考えられる(73)。

この層で、アーチに枠どられた面にはエディキュラが設けられている。エディキュラの総数は16である。即ち、8角形の全ての面に、2つのエディキュラが中央の窓を挟んで設けられ、内部には予言者の像が設けられている。Kostofはアグネルスが大聖堂でスタッコによるエディキュラが用いられたことを記録していることから、洗礼堂についても同様にスタッコのエディキュラを用いることが自然であるとし、そのためこのエディキュラの構成を初期に作られたものと推定している(74)。しかし、同じ手法が聖堂と洗礼堂に用いられたことを示す史料の根拠はない。更に、Kostofは内部において中層部で窓から光を取り入れるため逆光になり、中層部でモザイクを用いるのは適切でないと示唆している。この論点を支持するなら、予言者の像は同様に逆光で捉えにくいことになる。一方、中世の修復

でいくつかの窓が塞がれた(75)。この窓が塞がれた状態において、光は取り入れられないことから、中層部のこうした装飾構成は視覚的に有効になったものと考えられる。更に、窓の両側のエディキュラは、それぞれ3角の風破とアーチ型の風破をとって、交互に用いられている。従って、建築としての調和は、ドーム層と対応させると乱れることになる。即ち、ドームの低層部の図柄では、8角形に沿って2種類の図柄を用いている。一方をA、他方をBとすると、8つの面で、ABABABABの並び方をしている(76)。逆に、中層部において、3角の風破を持つベイをaとし、窓のベイをbとし、アーチの風破を持つベイをcとすると、全ての面はabcという並び方になる。即ち、bのベイは異なった構成のベイを両側に持つこととなる。中層部がドームの低層リングへと上部へ向かう視線を誘導することを考えると、構成における調和という観点から、左右対称による連続感は打ち破られている。このことは2つの面が異なった時期に設けられたという点を示唆していると考えられる。ドームの年代はネオンの時期であるように(77)、中層部もネオンの時期に属するとすると、ドームの低層リングのモザイクが中層部との調和を考えずに用いられたとは考え難い。

また、機能的な観点で、中層部は教会の2階回廊に相当すると理解されている。エディキュラにおける逆遠近法の使用により、Kostofは教会における2階回廊の擬似空間を再現したものと考えている(78)。しかし、4世紀から5世紀にかけて、テサロニキのデメトリオス教会堂やコリントのレカイオン教会堂のようないくつかの長堂形式の教会を除くと、この時期に教会堂で2階回廊を設けるものはむしろ例外的であるといえる。更に、2階回廊を持つ初期キリスト教の教会堂において、2階回廊は身廊や側廊と異なり教会堂内の聖空間と看做されていなかった可能性が高い(79)。この構成についてKostofは、2階回廊の優越した場所から中央を見おろしている予言者たちが、洗礼儀式を臨んでいることを暗示していると考えている(80)。しかし、予言者が立つエディキュラが逆遠近法で構成さ

れていることを考えるとき(81)、予言者たちは2階回廊の縁より背後に立つこととなり、原理的に洗礼儀式を臨む位置に立っていない。

こうした矛盾のため、エディキュラは5世紀以後の時代につけ加えられたものと考えられる。更に、これらの予言者の像の技術的な稚拙さに注目すると、エディキュラはマクシミアヌス以後に構成されたと考えられる。即ち、マクシミアヌスによるサン・ヴィターレ聖堂では、全体にわたる装飾構成が洗礼堂のエディキュラに比べ、はるかに洗練され高度な技術を示しているからである。

ネオンの時代に完成したドーム層は3つのリングから構成されている。それぞれのリングは異なった主題のモザイクで飾られている。これらの主題は、低層のリングで建築的な図柄が用いられ、中層のリングで12使徒の行進が描かれ、上層のリングでヨハネによるキリストの洗礼場面が描かれている。

低層リングの建築形態は、ローマ建築のスカエナエ・フロンと考えることができる(82)。それぞれの面は隣の面から垂直に延びる燭台に似た図柄によって分離されている。図3-10に示したように、平面として半円をなすと考えられる中央のエクセドラは柱によって囲まれている。しかし、エクセドラの曲面は建築の正面から始まっているので、図3-10の柱aとbは柱cから同じ深さの位置に建てられたに違いない。この矛盾点を解決するために、このモザイクが表現しようとしている建築の形態は図3-11に示したように考えることができる。図3-11の形態に類似したものは、異教の神殿の聖域に見いだされる構成と類似している。即ち、このモザイクによって表現された形態はローマ建築の中に広く汎用された建築の構成形式であることが判る(83)。このモザイクの象徴的な意味として、建築の形態そのものが、12使徒や洗礼によって示される天空を支えるものとして捉えることができる(図3-11a)。

この8つの建築形態は2種類に分類できる。即ち、一方は椅子をエクセドラに置き、他方は聖書をのせた台をエクセドラに置いてい

る。これらの図柄が8つの面に交互に繰り返されている。従って、先に示したようにABABABABというリズムが水平に広がる低層のリングで繰り返される。

中層リングでは、2方向に進む12使徒の行列が描かれている。即ち、北西から南東に向かう行列は、キリストの足元にある聖壇で出会うことになる。更に、それぞれの使徒は植物様の垂直の仕切りによって分離される。従って、このリングは12に分割されている。即ち、12使徒の数は下にある8つの面に対応していない。

全ての使徒は王冠を携え、上のリングにいるキリストにそれを捧げるのを意図していると推定されている(84)。

最上部のリングでは、キリストの洗礼を洗礼堂の聖壇の据えられたニッチに向かって見上げるとき、正立した図柄を捉えることができる。このモザイクの図柄は洗礼堂の装飾構成の主題をなしている。従って、図柄を正しく見上げるための水平方向の主軸線が装飾構成において形成されている。

このように、ドーム層を注意深く検討すると、低層のリングから上層のリングに向かう図像学的な内容を理解することができる。このことは、洗礼堂を使用する者が天空の序列構造ばかりでなく、洗礼儀式にともなう聖なる時間の移行をも認識できるように計画されたものであることを示唆している。しかし、使徒の数が12であることから、使徒の描かれる場所としては長堂形式の壁面の方がより適合性の良いことがわかる。サン・アポリナーレ・ヌーヴォー聖堂において(85)、同様の構成が主軸線に平行する壁面に認められる。即ち、身廊の西端に建築的な形態が描かれ、それに続いてアプスに向かう人物の行進が描かれている。この人物のそれぞれは垂直の植物用の図柄で分離されている。従って、各々の図柄は洗礼堂のものと類似している。洗礼堂では、この同じ図像構成が垂直方向に並べ代えられたものと言えよう。

このように、ネオンによるドーム層の装飾構成において、長堂形式の壁面構成の文脈を集中形式のドーム面に移行することによって、

垂直方向に於ける分節の手法は異なった主題の序列の階層を明らかにしている。即ち、長堂形式の深さが、集中形式の高さに変換されている。更に、二つの軸線が存在した。一つは東北のアプスへ向かうものであり、他は螺旋状にドームの頂部へと向かうものである。

上記の検討から、建築の構成として図3-12のように示すことができる。当然、それぞれの建築の要素のどれがネオンに属し、どれがウルススに属するか決めることはできない。いずれにせよ、洗礼堂の建築はネオンの時代には図3-12のように構成されていたと考えられる。

#### 第4節：リヴァ・サン・ヴィターレの洗礼堂

##### 第1項：概要

この洗礼堂はスイスのリヴァ・サン・ヴィターレの教区の教会堂に付属している。洗礼堂は教会堂の聖域部の北側に設けられ、東・南・北の3方向を付属する建物と繋げられ、西側の中庭に面している（図3-13）。東側には物置があり、北には司教館がある。南側には洗礼堂と教会堂の間に、聖具室がある。

洗礼堂の建築は低層部・中層部・高層部の3層によって構成される(86)。低層部は丸みのある石で、内部のニッチの上、外壁に突出する持ち送りの位置まで、積まれている。この部分は外形が4角形で、内部が8角形の堂となり、4隅にはニッチが設けられている。その他、東側にアプスがある。出入口は現在、南と西の浅いアルコーブの中にある。中層部は四角い石を積んだ壁を作り、ドーム迫元にまで達している。西面に煉瓦で枠どられた丸窓の痕跡を窺うことができる。この他、窓の痕跡を東・北・南の各面に認めることができる。また、この層では低層部のニッチに相当する部分がなく、外周・内周とも8角形平面となっている。高層部は中層部の上のドーム層に相当する。ドームは煉瓦によって構成され、中層部との接合

部の目地は乱れている。

洗礼堂には中央部に洗礼盤が2段になって設けられている。即ち、床が上昇することにより、初期の洗礼盤の上に新しい洗礼盤が置かれている。

洗礼堂に使用された建築部材や装飾は、限られたものとなっている。部材として、現在残されているのは、外壁面で低層部と中層部との境に突き出ている、砂岩の持ち送りである。この持ち送りは一定の高さに並び、アカンサスの浮き彫りが施されている(87)。装飾としては、西面の外壁、東側のニッチと南・北面に一部フレスコの痕跡を認め得る。

この洗礼堂についての史料は見つかっていない(88)。そのため、この地域の歴史叙述が洗礼堂の創建年代推定の根拠となっている。この地域にはローマ時代より集落が形成されており、ローマ帝国の文化領域に属していた。更に、5世紀中期、この地方へのキリスト教の伝導活動が行なわれたこと、また、450年にはテサロニキ出身の司教がここから首都コンスタンティノープルへと派遣されていることから、キリスト教文化の定着と東方ビザンティン世界との密接な関係を確認できる。こうした事実から、司教座教会堂の建設時期を500年前後と推定し得る(89)。

## 第2項：初期キリスト教期に於ける洗礼堂の建築構成(90)

ここではSteinmann-Brodbeckの報告書から、初期洗礼堂の建築構成を検討し、その妥当性を検証する。また、そこから推論される初期の特徴についても検討する。

洗礼堂周辺の発掘から、周歩廊の存在が確認される(91)。この周歩廊の壁と発掘された洗礼堂の初期の壁とが材質・積み方の形式とも同じである点、また周歩廊の床が洗礼堂と同じレベルである点、南側の扉敷居と洗礼室南側扉敷居が同じレベルであることなどから、周歩廊は洗礼堂の創建時に存在していたことが判る。Steinmann-Brodbeckは、この周歩廊の各面に窓と扉があったと推定している

(92)。しかし、北面の洗礼室の扉に対応する位置で、周歩廊の壁に扉の痕跡がみられないことから、発掘からは南側の壁を除き扉の存在を確認し得ない。南側にはこの他、教会堂へと伸びる壁が南側周歩廊壁に接続しており、南側の扉によって教会堂と洗礼堂との関係を推測し得る。一方、教会堂内に教徒でない者が入ることはできなかったので(93)、洗礼儀式の際、他の壁面に洗礼堂へ導く扉が存在したことは推定できる。しかし、それが各面に設けられねばならない蓋然性はない。

発掘で発見されている床の数から、洗礼堂では創建時も含め7回の建築工事が行なわれている。平面そのものの変化は東側アプスに限定される。このアプスは創建時の床レベルには存在しない。即ち、床がモルタルで突き固められている創建時の平面形態は、東西・南北の軸に対し対称型となり、隅部にニッチを設け、各面に扉が設けられていた(94)。アプスの接続は最初の改修によって行なわれた。このアプスは現存するものではなく、発掘によって発見されている3つのアプスの内、最小の大きさのものである。また、この改修によって、洗礼堂内の床に大理石によるオプス・セクティルが施され、ニッチの床にモザイクが施された。更に、洗礼盤の東側には十字形の大理石が床にはめ込まれている。こうしたことから、洗礼堂に於いては、とりわけ東側の構成に重点が置かれていたことが判る。ここで、アプスの大きさが時代とともに大きくなることから、アプスの重要性が増していったと推定される。

洗礼堂の主な機能である洗礼のための洗礼盤は、中央に置かれている。初期の洗礼盤は、現在の洗礼盤の下に置かれている。この洗礼盤は、東を除いて、内側に3段の階段が設けられている。従って、東側はカテクメンのためではなく、司教の位置する場所であったと言えよう。このように、洗礼盤、及び平面そのものを含み、洗礼堂で東側の場所が優位性を示していると考えられる。

内部は、低層・中層・高層の3層に分けることができる。低層部、すなわち外壁にある持ち送り位置まで、壁は発掘された創建時の壁

と同じ組成であり、創建時の壁と看做し得る。一方、中層部は調査によると、創建時と同じ構成も見られるが、異なった壁の構成も見受けられ、後世に補修されたことが判る(95)。このようなことから、低層、中層については補修されているにしろ、初期の状態を伝えるものと考え得る。しかし、窓の形状等は、周辺の壁の積み方が乱れていることから、大きく変化していると考えられる。とりわけ、煉瓦で枠組みされる開口部は後世のものとする。しかし、周歩廊に屋根が架けられることから、採光に当てられる面は中層部に限定される。従って、中層部に窓があったことを推定し得る。Steinmann-Brodbeckは窓を東西南北の各面に一つずつ、すなわち4個つくものとしている。しかし、ラヴェンナやソフィア聖堂の洗礼堂で中層部に設けられる窓は、各面に1つずつあり、この洗礼堂に於いても同様であったと考えられる。また、荷重という点からも、窓のある面とない面を交互にする妥当性はない。

次に、高層部にはドームが設けられている。材料は煉瓦で、中層部との接合部、すなわち迫元の目地は均一ではない。また、迫元には角材が現在壁の内部に埋め込まれており、壁に沿って周囲を巡っている。こうしたことから、現在のドームは後世のもので、屋根は当初、木造の小屋で架けられていたと推定できる。更に、初期にドーム構造であったものが木造化されるとは考え難い。Steinmann-Brodbeckは創建時よりドームが架けられていたと、類似の形態の洗礼堂がドームを持つことから推論しているが、妥当性はない。即ち、平面形態の類型はドーム架構を保証するものではない。また、Steinmann-Brodbeckの比較する同一の文化圏に属するラヴェンナのオーソドックス洗礼堂に於いては壁が煉瓦で構成され、ドームは穴開きチューブで構成されている。このように、平面形態は同じでも、構成の手法には違いが見られ、同一の構造形式とは言えない。しかし、ドームそのものを木造で作った可能性はある(96)。

装飾として現在目にすることができるのは、床のオプス・セクティルとモザイク、建築部材として外壁に突出している持ち送りであ

る。発掘の結果、明かとなった初期の壁面の仕上げは漆喰の上塗りだけとなっている(97)。

こうしたことから、壁面に大理石やモザイクが使用されていたとは考えられない。また、床の大理石やモザイクにしても、創建時ではなく、第1回目の改修によって使用されたことが、発掘された床の状態から報告されている。従って、洗礼堂の建設が、経済的な制約を受けていたと考えられる(98)。

しかしその一方で、使用された持ち送りにアカンサスの浮き彫りがあることから、洗礼堂が無装飾であったとは考え難い。とりわけ、ローマ建築から影響を受けている以上、層による分節の部材が用いられなかったとは考え難い。この点について、洗礼堂の範例となるラヴェンナのオーソドックス洗礼堂では高価なモザイクや大理石の使用は重要性が高いと考えられる場所に限定され、視覚的に意味がない箇所についてはスタッコによって削り出だされている。即ち、壁体が一体化してドーム迫元にまで達するため、用いられるコーニスは構造的な要求より、視覚的な壁面の伝統的取扱を擬装している。このスタッコによる部材の削り出しは、ローマ帝政期の建築に於いて一般的な手法であった(99)。従って、その手法の簡便さから、また廉価な点からも内部で用いられたと考え得る。

これに対し、構造的な制約を受ける部材、すなわち周歩廊の屋根を受ける持ち送りのような部材は、スタッコでは役にたたず、石材が用いられたと言えよう。

以上のように、創建時の様態をSteinmann-Brodbeckの報告書をもとに検証した。その結果、初期の洗礼堂の建築構成は、図3-14のように示すことができる。

## 第5節：カルアト・シムアンの洗礼堂

### 第1項：概要

北シリアはローマ時代、経済的に最も豊かな地域の一つとして栄え、隊商ルートに沿い都市が発達した(100)。この地域のこうした経済的な基盤は、4世紀から7世紀まで維持されたと考えられている(101)。このように初期キリスト教時代において、北シリアは閉ざされた地域ではなく、中央との経済的な接触をはじめ、宗教的・文化的な頻繁な交流を認め得る(102)。このような背景を元に、北シリア全般の建築に関し、アンティオキアをその原型とし統一的形式をもつ建築が建てられた(103)。

カルアト・シムアンは、この北シリアのアンティオキアとエデッサの間に位置する岩山の上の廃墟である。ここは聖シメオンの柱上苦行の場として聖域化され、数多くの宗教施設が建てられていた(104)。台地状の岩山は人工的に整地され、広さはおよそ1200㎡に及ぶ(105)。この岩山の北端に十字形の聖シメオンの教会堂が建てられ、その南端、すなわち聖域への主出入口の東側に洗礼堂の遺構がある(図3-15)。

洗礼堂に関する年代記をはじめとする史料は発見されていない。従って、年代は遺構の様式の比較を通して判定されている。

カルアト・シムアンは聖シメオンを記念して(106)、皇帝ゼノンによって476年に聖シメオンの柱の周囲が聖域化された。このときに岩山に建築物はなかったと考えられている(107)。一方、473年までにアンティオキアやコンスタンティノーブルで、聖シメオンを記念した儀式が種々執り行われるようになり、必然的に聖シメオンの聖地が建設の対象として考えられるようになった(108)。また、現在の遺構と、カルアト・シムアン付近の5世紀後半に建てられた建築の遺構を比較すると、柱頭の装飾やその他の装飾の様式に類似性を認め得るので(109)、聖域の建設活動は5世紀末から6世紀初めにかけて行われたと推定される。建設に際して岩山は人工的に整地されており、短時間で大工事が遂行されたと考えられている(110)。

Tchalenkoによれば、洗礼堂は3期の建設時期によって現在の状態を示すようになった(111)。それによれば、第1期は洗礼室と周歩廊

のみで洗礼堂は構成され、同時期の建物として殉教者教会堂が指摘される。第2期は洗礼堂のバシリカ部と外側のポーチコが増設された。同時期に、殉教者教会堂の東南に設けられたバシリカがあり、装飾形態の類似性を窺える。また、第1期の洗礼室の壁と第2期のバシリカの壁は、石積みに於て同じ形式を示している(112)。装飾の形態から、この時期を5世紀末から6世紀初めと推定している。第3期は洗礼堂に付属する建築が洗礼堂の東と西に建てられている(図3-16,17,18)。従って、洗礼堂の主要構造体が建てられた時期は2期からなり、計画そのものはバシリカの付設によって完了すると考えられる。

その後、10世紀にこの修道院建築の複合体は周囲の岩山に壁を巡らし、城砦化される(113)。この城砦を後にカルアト・シムアンと呼ぶようになった(114)。その後、10世紀に2度にわたる攻撃にさらされている(115)。発掘の結果、11世紀に該当する発掘品が見つからないことから、11世紀以降、廃墟となったと考えられている(116)。

## 第2項：洗礼堂の建築構成

遺構の状態から、洗礼堂は創建時の建築形態を復元して考察することが可能である。以下に、現状を踏まえ創建時の建築の構成を検討する(117)。

洗礼堂は聖域である岩山の南端、殉教者教会堂から南へ200mほど離れた位置に建てられている。周辺には洗礼堂の東側に宿泊施設に相当する細長い建物が建てられ、更に、洗礼堂のバシリカ部に接続する細長い建物が東西方向に伸びている。この東西方向に伸びる建物の東端に、聖域にはいるプロピライアが設けられている。

洗礼堂の建てられている位置から判断して、聖域が入信者の参入しか認めていないのは明かであり、配置に於ける建築の機能性を認めることができる(118)。

洗礼堂本体は北に洗礼室を含む部屋が配され、南側に周歩廊と壁

を共有するバシリカが設けられ、バシリカの東側と南側を除き、ポーチコが巡っている。このように、洗礼堂は洗礼を行う洗礼室と、その周囲の周歩廊、周歩廊の外側に巡らされたポーチコ、それに周歩廊の南側に接続するバシリカからなる。洗礼室は外部が4角形で、内部が8角形から構成され、東側に半円形のアプスが突出し、4角形の各隅に東側では半円のニッチが、西側では4角形のニッチが、床を一段上げて設けられている。洗礼室内部の東側アプスに、洗礼盤が設けられ、アプスの南北の壁に、それぞれ洗礼盤に導かれる通路が設けられている。従って、計画としては洗礼室から洗礼盤に入水するのではなく、外側の東廊から直接洗礼盤に入るようになっている。この洗礼盤の床にはモザイクの痕跡が認められたと報告されている(119)。また、洗礼盤内に水の流入、流出に用いられる設備である導管は見つかっていない(図3-19)(120)。

洗礼堂は東側を除く、南・北・西に出入口が設けられ、周歩廊に接続している。この周歩廊では洗礼室の4隅から南北方向に壁が伸び、4つの廊に分割される(図3-19)。南北の側廊はそれぞれ洗礼室の4隅に対応する位置に一对の柱が台座の上に立てられ、側廊を3つの区画に分割している。従って、東南・東北・西南・西北の4隅にはほぼ正方形に近い平面の区画が生じている。東廊はアプスの突出によって廊として機能<sup>し</sup>るとは考えがたい。ポーチコへは、北廊・南廊、そして西廊に各々一つづつ扉が設けられ、繋げられている。南側の廊から、隣接するバシリカの北側の側廊への出入口が設けられている。

隣接するバシリカは3廊からなり、側廊と身廊は4本の円柱によって分割されている。身廊の西壁に出入口が設けられ、東端にアプスが突出している。

洗礼儀式的中心的機能を有する洗礼室は、低層・中層から構成されている。低層部はアプス両脇の付け柱を除き、壁を9mの高さに上げ、コーニスを巡らしている。アプスには3つの窓が設けられ、東側のニッチに2つの窓が設けられるが、周歩廊が外側に巡るため

外光を直接採り入れてはいない。アプス・ニッチとも、上部はアーチ型によって枠取られている。中層部には各面に上部アーチ型の窓が設けられている。また、各入り隅部には、コーニスの上に礎盤を設け、円柱を立てている。この円柱に柱頭をのせ、その上にインポストを置いている。中層部の外側にも、各出隅部にコーニスの上に礎盤を設け柱をのせる内部と同じ形式を採用している。この中層部は、低層部の上5mに達している。

この洗礼室の低層・中層の構成から、屋根は木造の小屋を架けたと考えられている(121)。この木造の屋根をTchalenkoは内部でインポストに架けられ、入り隅の柱によって荷重を下部に伝えるものと考えている(122)。しかし、ローマ建築、及び他のシリアの建築から、屋根架構を壁で受ける方が工法上から妥当であると考えられる(123)。本論に於いては、屋根架構は八角形のドラムにのせられたものと推定している。従って、内部のインポストには天井の支持材が架けられたものと考えられる(124)。

周歩廊・ポーチコへは低層部上端から片流れの屋根が架けられたことが、周歩廊を分割する壁やアーチ型から判断できる(図3-19)。周歩廊に窓は東と北に設けられている(125)。また、バシリカと共有する南廊の壁にも窓が設けられており、かつて外部に接していたことが判る。この周歩廊に用いられている柱によって支持される控え壁的な障壁は、東西方向にある壁として用いられたのではなく、周歩廊の意識の上での分離に用いられている。東西方向に伸びる周歩廊の北廊、南廊に於いては、ヴォールトを用いることもできるし、また5mほどのスパンであることから、母屋材を受ける控え壁も必要ではない。即ち、木造小屋を洗礼室と周歩廊の外壁との間に梁材を架け渡し、構成することも可能である。従って、柱の上にアーチを架けて上部を壁としている構成は、構造的な要請によるとは考えがたい。そのため、この構成は洗礼堂に於ける、意匠を含めた計画性から理解すべきと考えられる。このように、周歩廊の分離・分割形式を検討すると、東廊・西廊・北廊・南廊に於いて、東・西の廊

が画然と分割されるが、南・北の廊に於いては、緩い分割が行われ、空間の分離の方法に2種類の手法が用いられている。

バシリカは身廊と側廊が柱列で分割され、この柱上のアーケードの上部に壁を持ち上げている。柱列の東西端部はそれぞれ壁付き柱となっている。窓は柱によって持ち上げられた壁に高窓として設けられ、採光は身廊にのみ入れられるようになっている。

材料としては付近の石切り場から切り出された石材を積んで壁を構成している(126)。壁は接着にモルタルを使用せず、切り石を積み上げるだけで構成される。また、柱頭・柱等の建築部材も、現場で生産された(127)。

架構法としては壁を積んだ上に木造の小屋を架ける(128)、ローマ帝政期のバシリカ式の木造屋根架構と同じと考えられる。Tchalenkoは構造的に上部の屋根荷重が、周歩廊を分節する障壁によって周歩廊外壁に伝えられたと考えるが(129)、控え壁のように設けられている障壁の位置が低層部上端にしか達していないため、横力に対して有効であったとは考えがたい。従って、構造形式としては洗礼堂を構成する各部が独立して建ち、上部の構造を支えていると考えられる。このように、洗礼堂は洗礼室・周歩廊・バシリカ・ポーチコによって領域の構成の識別をされるが、周歩廊に於いては更に細分化され、それぞれ独立した空間の集合によって構成されている。この周歩廊の細分化と同様に、洗礼室に於いてもアプスやニッチの付加によって、洗礼室が細分化される。しかし、周歩廊に於いては、構成が全体を分割する方法であるのに対し、洗礼室では主となる部屋に副次的部分を接合することで構成される。

建築部材・装飾とも、洗礼堂に於いては、余り報告されていない。Tchalenkoは柱頭等の建築部材は現場で制作され、統一した形態が用いられていることをのみ報告している(130)。また、洗礼盤の床にはモザイクの痕跡が認められ、洗礼盤の内壁に大理石が用いられたことは判っている。内壁の仕上げは石積みの壁に仕上げ材を留めた穴等の痕跡が残っていないことから、内部は石積みの壁のまま仕上

げられたと考えられる。

外部に面する窓には、5世紀のシリアで汎用された帯状の装飾が用いられている。

以上の構成から、細部の様式や構成については明かではないが、全体の建築空間を復元的に考えることは可能である。その復元案を、図3-20,21に示した。

## 第6節：エフェソの洗礼堂

### 第1項：概要

ローマ帝政期の東地中海の中心的な港湾都市であったエフェソには、初期キリスト教期に創建された2つの教会堂がある(131)。

一方は市内に建てられたマリア聖堂であり、ローマ帝政期に市場にあったバシリカを改修し、教会堂としたものである(132)。この教会堂で431年と449年に公会議が開かれたことから、5世紀初頭には教会堂としての全容を整えていたものと考え得る。教会堂は7世紀の火災によって消失したものと推定されている(133)。この教会堂の西側アトリウムの北に、洗礼堂の遺構がある(図3-22)。洗礼堂について歴史記述は触れておらず、建設年代は床のモザイクの様式から400年前後と推定されている(134)。従って、教会堂と洗礼堂はほぼ同時期に建設されたと考えられる。

他方の教会堂は、福音伝導者ヨハネの墓所があったとされる郊外のアヤシュルクの丘に建てられた、ヨハネ聖堂である。この教会堂は390～420年に創建され、それ以前にはヨハネの殉教者礼拝堂があったとされる(135)。この後、廃墟となった教会堂はユスティニアヌス帝によって取り壊され、司教ヒパティウスの時代に再建された(136)。ユスティニアヌス帝によって再建された教会堂は、現在の遺構によってその形態を判断し得る。それによれば、教会堂はベニスのサン・マルコ聖堂やコンスタンティノーブルの聖使徒聖堂に類似

したものであったと推定されている(137)。洗礼堂は教会堂の北の側廊の北に、付属するいくつかの部屋と構造体とを一体化し建てられている(図3-23)。遺構からこの洗礼堂の構造体は、教会堂の構造体と構造的に分離していることが判る(138)。洗礼堂は遺構の状態から、改修されている可能性が高く、付属する各部屋の建設年代も同時期とは考え難い(139)。従って、洗礼堂の建設年代は現状のものが、ユスティニアヌス帝の時代の遺構か、それ以前のものか明確ではない。現在、付属する東側のアプスのある部屋の入口扉枠に、以下に記すような碑文が残されている(140)。

Ἐκτίσθη ἡ πᾶσα προόψις τοῦ βηκρήτου ἐπὶ Ἰωάννου  
τοῦ ἀριωτάτου ἀρχιεπιβκόπου οἰκονομούντος  
Ἰωάννου τοῦ ἐλάχιστου διακόνου.

この碑文から、5世紀の司教ヨハネスの時代を創建時とする考え方がある。その一方で、ユスティニアヌス帝による再建時に洗礼堂も新たに建てられたとする説もある(141)。しかし、洗礼堂で用いられたとする装飾の様式から、Büyükkolancıはユスティニアヌス帝以前の5世紀の遺構と推定している(142)。

これら2棟の集中形式の洗礼堂の他に、エフェソには幾つかの集中形式の遺構が発掘されている(143)。これらは発掘された遺物や遺構の設備の状態から、浴場建築の一部を為すものであったことが判る(144)。

## 第2項：マリア聖堂・洗礼堂の建築構成

教会堂のアトリウムの北側に、アトリウム外壁に接して洗礼堂の遺構がある。洗礼堂は西側に矩形の2部屋、周歩廊、中心となる洗礼室から構成されている。洗礼室は半円形のニッチとヴォールトを架けられた通路とが、厚い壁に交互に設けられている。この洗礼室は内部がほぼ円形で直径9m程の平面であり、壁の外部の直径は16mとなり、東西で外側の円は切り落とされた形になっている(図3-

22)。内部平面の中央部に東西方向から進入できる洗礼盤が埋め込まれている。現状の遺構はニッチにある半ドーム部まで残されている。遺構の状態、及び発見されている断片等から、洗礼堂が建っていた時代の状態を、ほぼ復元し得る。

洗礼室はニッチ部の床が30cm程上がり、その床から1.6m程上に幅2.3m程の窓が周歩廊へと開いている。この窓の上部は一部残されており、アーチ型によって枠どられている。ニッチの上部は半ドームで構成され、スタッコによる貝殻模様で装飾されていた。洗礼室内部の壁面は、現在残されている低層部に大理石が張りつけられ、その大理石の壁面に十字形の図柄が彫り込まれている。この低層部の上部に中層部に相当する壁面が残されている。中層部には、現状から窓の設けられていたことが判る(145)。低層部と中層部とは、洗礼室床から4m程のところでコーニスによって分節されていた。このコーニスはニッチ、及び通路ヴォールトの起拱点に当たるため、低層部に属する面がコーニス上に残り、中層部と低層部との壁面の分節は明確なものではない。この中層部の壁面の状態は仕上げ材の断片も残されておらず、明かではない。しかし、低層部で仕上げ材が残されていたり、他の発見されている断片等から中層部の仕上げ材が発見し得ない点は論理的ではない。従って、中層部の仕上げ材は、断片化されても大理石のように材質が明確に残されるものではなく、ニッチの半ドームに使用されたスタッコのような材料が用いられていたと推定し得る。事実、壁面の見切り材として、低層部と中層部の間にコーニスが用いられているので、異なる仕上げ材の使用が可能であった。

上層部の痕跡は不明である。しかし、構造体である洗礼室の壁面が3.5m程の厚みのあることから、ドームを架構していた可能性が高い(146)。更に、ドームが煉瓦で構成されていたとすると、壁との材料に於ける差はなく、高層部の建築形態を確定する材料の発見はできない。そのため、ドームが架けられていた痕跡が残されない。従って、上層部の構成はドームによって架構されていたと考えられる

(147)。Knollはこのドームと中層部とがコーニスによって分節されたと考えているが、コーニスの断片や痕跡は見つけられていない(148)。しかし、コーニスも部材としてスタッコでつくることができ(149)、大理石と違い部材の断片が見つけられないと考えることができる(150)。

周歩廊に続く東西・南北に設けられた通路は南北で周歩廊にできるが、東西では南北壁面に扉が設けられ、通路のヴォールトは外周壁にまで達している。従って、周歩廊は南北に2分されている。周歩廊の構成は明かでないが、ニッチ部に窓が設けられていることから、外光を採り入れる窓が開けられていたと考えられる(151)。また、外壁が洗礼室の壁に比して薄いため、ヴォールトを架けたとは考えられず、木造の小屋を架けたと考えられる。

洗礼室の構造は煉瓦の層と切り石の層を交互に積み上げてゆく工法によって、構成されている。

内部装飾は部分的にしかならかにできない。床材としては、洗礼室に大理石が敷かれ、周歩廊の床は部分的に色大理石を貼り合わせている(152)。また、大理石による窓の格子が断片として発見されている(153)。

以上の考察から、推定される復元案として、図3-24,25を提示し得る(154)。

### 第3項：ヨハネ聖堂・洗礼室の建築構成

ヨハネ聖堂の北側に設けられている洗礼室は、東西にアブスのある縦長の部屋、八角形の洗礼室、その洗礼室の周囲にある周歩廊からなり、東側にあるアブス付の部屋はその東にあるスケプロフィラキオンに接続している。このように、ヨハネ聖堂に付設された洗礼室は、複合的な建築として教会堂から分離して建てられている(155)。教会堂からの連絡口は北側側廊に2つ、ナルテックスに1つ扉が設けられ、洗礼室に於いては東西のアブス付の部屋の南壁にそれぞれ1つ、周歩廊の南壁に一つ設けられている。

現在、構造体として地盤面から4m程の高さまで残されている。壁は煉瓦の層と切り石の層を交互に積む工法で構成されている。また、内部の仕上げ状態についても、現状の遺構は創建時の状態を復元するのを可能にする痕跡や断片が発見されている(156)。

洗礼堂は外径15.20m、内径9mの8角形平面によって構成され、各辺に半円形のニッチが設けられている。このニッチの内、東西南北にあるものは周歩廊への出入口が設けられ、東北・東南・西北・西南にあるニッチの床は、洗礼室の床より20cm程高くなっている。洗礼室中央部には洗礼盤が埋め込まれ、導入の階段位置から、東西方向の軸線を認め得る。洗礼室の壁際には、1.15mに達する台座の上に柱が建てられている(157)。この柱は壁から独立して建っている。この柱の上には扁平なインボストの柱頭が、アカンサスの葉を彫り込まれのせられている。現在、残されている柱頭から、壁に当たる側には荒い仕上げが施され、模様がない。従って、この洗礼堂用に柱頭は作られたものと考えられる。この柱頭の上には、アーキトレイブがのせられていたと考えられている。このアーキトレイブは発見された状態から、十字形の浮き彫りを施され、壁と緊結されずに、接着されただけで、柱によって支持されていた(158)。従って、部分的にアーキトレイブはルソートを構成していたと考えられる。このルソート上にあっただと考えられる2層目の柱構成は、発見されていない。柱・梁の構成に於いて、1層分のみが用いられたとは考え難いので、2層目の柱・梁の構成は他の建築へ転用されたものと考えられる(159)。また、発見されている大理石のアーキトレイブ断片に、1層目のアーキトレイブと異なる模様のものであり、同時に発見されている柱頭の形式にも異なるものがあることから、2層目の柱・梁構成に用いられたものと推測し得る(160)。事実、この中層部は現在の遺構では失われている。しかし、採光等の観点から、また発見された建築部材の使用箇所という観点から(161)、中層部が存在したことを確証するに足ると考え得る。また、高層部の架構形式については、壁の厚みから考え、ドームが架けられていたと考え得る。こ

のドームの架構形式として、Büyükkolancıはペンデンティヴが使用されたと推定している(162)。

仕上げ材料として、洗礼室の床は2色の大理石板が敷かれていた。ニッチの上部には大理石の貼付けが一部残っていることから、下部も同様に大理石が貼られていたと言える。従って、洗礼室の低層部の壁は大理石貼付けで仕上げられていたと考えられる。また、モザイクの断片が発見されていることから、ドーム部にモザイクが使用されていた可能性が高い。

ニッチ部の床から2.15mの高さにニッチの窓が幅1.05mで設けられている。この窓の位置は高さが低く、周歩廊が周囲にあるため、直接外光を採り入れる窓とは考え難い。また、周歩廊も外光を採り入れる窓を設け得る壁面は、配置と平面計画から、北壁に限定される。従って、ニッチ部の窓は採光として有効であったとは考えられない。

周歩廊には南壁の外壁面を除き、7つの壁面に、全部で15のニッチが設けられている。ニッチは床から50cmの高さに設けられ、奥行きは60cmとなっている。従って、洗礼室に付設されたニッチと異なり、独立した空間とはなっていない。周歩廊の床は、オプス・セクティルで構成され、壁は洗礼室側で大理石を張りつけている(163)。一方、ニッチの内部ではフレスコ画により大理石の模様が描かれていることから、ニッチに設けられた壁はフレスコで大理石模様を構成していたと推測される。

周歩廊の外壁は、洗礼室に比べて薄いことから、木造の屋根が架けられていたと考えられる。また、洗礼室の壁の外側に、雨樋の痕跡が認められることから(164)、屋根は3角屋根が架けられ、棟が周歩廊の中央にあったと考えられる。

周歩廊につながる東側の部屋で、アプスの床は一段上げられ、その床はモザイクで仕上げられている。残りの床は大理石が貼付けられていた。また、アプスの壁面にはフレスコ画が描かれている。西側の部屋も、床は大理石が貼られ、壁にはフレスコ画が描かれてい

る。東側の部屋に祭壇が設けられていることから、洗礼儀式に関連して使用された部屋と考えられる。以上の点を考慮して、復元案に図3-26を示し得る。

#### 第4項：エフェソの洗礼堂に於ける建築構成

ヨハネ聖堂とマリア聖堂の洗礼堂はエフェソにあり、ほぼ同じ時期に建てられている。さらに、平面形態に於いても類似を認められる(165)。こうしたことから、両者の洗礼堂はほぼ同様の建築構成であったと推測し得る。このことは、両者の構成を補完的に扱うことで、エフェソに建つ洗礼堂の建築構成の概要を示し得ることを示唆するものと考えられる。即ち、マリア聖堂の洗礼堂に於いては、その全体の構成が明確であり、ヨハネ聖堂の洗礼堂に於いては、全体の装飾等の表面仕上げについて詳しい。

構造体は煉瓦層と切り石層を交互に積み上げてゆくもので、初期キリスト教期のコンスタンティノープルの壁工法に於いて、一般的なものである。また、構造体となるのは壁であり、ヨハネ聖堂に於いて用いられた内部立面の柱・梁式構成は構造的な役割ではなく、装飾として用いられている。

内部立面は低層・中層・高層の3層から構成されていたと推定される。窓を設ける面としては、低層部のニッチ壁面、中層部の壁面に限定される。ここで、低層部壁面の窓は外側に周歩廊が巡ることから、採光としての機能性は希薄であり、洗礼室の洗礼堂に於ける空間として自律性を弱めている。とりわけ、ニッチが閉ざされている場合、ニッチは洗礼室に従属的な空間となるが、ニッチに窓が設けられることにより、ニッチの洗礼室への副次的な空間としての意味は弱まっている。堂内の採光は従って、専ら中層部から行なわれたと考えられる。

平面構成に於いて、2つの洗礼堂には洗礼室から最も離れた外側に位置する部屋の構成に違いがある。しかし、部屋の繋がり方という点に注目すると、前室・周歩廊・洗礼室という構成の類似が認め

られる。このように、洗礼堂は洗礼を行なう主空間ばかりでなく、それに付設する空間を伴うことで儀式を執り行なうことができた。特に、ヨハネ聖堂の洗礼堂に於いては、アプスを持つ部屋が東西に設けられており、洗礼儀式が洗礼盤によってのみ充足されるものではなかったことが判る。

出入口は両者とも東西南北に設けられているが、洗礼盤に設けられている階段位置から、儀式に於ける軸線としては、東西軸が優先していたと考えられる。

装飾、或は内部の仕上げとして、洗礼室に於いては低層部に大理石を貼り、高層部をモザイクで仕上げた可能性が高い。また、床材も大理石が多用されている点から、仕上げ材として大理石を用いることが、一般的であったと言える。しかし、中層部の仕上げとしては、スタッコが用いられている可能性が高い。このように外光を採り入れる面に於いて、仕上げ材の簡略化が行なわれている。従って、仕上げ材が効果的にその材質感を伝え得る面として、低層部と高層部が選出され、中層部はそれら2つの層への光を供給する採光層としての性格が強い。

また、装飾材料の用い方に於いて、空間、或は建築部分の優劣が立面構成ばかりでなく、平面構成の部分にも表われていると考えられる。即ち、ヨハネ聖堂に於いて、周歩廊の洗礼室側の壁と外壁とで、用いられる材料の優劣が表れている。外壁側では洗礼室側の壁に用いられた大理石を擬して、フレスコによる簡略化が計られている。

一方、建築部材に用いられる装飾は、浅い浮き彫りを施した硬直した曲線が多く、ローマ時代の正規の装飾から簡略化されて使用されている。即ち、形式そのものは遵守されているが、形式の簡略化が行なわれている。

こうした材料については、構造用の材料と仕上げの材料とで使い分けを認めることができる。構造体として用いられる材料は煉瓦と切り石であり、この材料は視覚が捉える面に用いられていない。表

面に用いられるものは大理石、モザイク、スタッコ等である。このように、構造材と仕上げ材との明確な分離によって、建築が構成されることが判る。

#### 第5項：エフェソに於ける他の集中形式の建築構成

エフェソにおいて、洗礼堂と形態が類似している構造体が2棟発掘されている。両者とも洗礼堂に先行するか同時期の遺構であり、機能的には浴場のカルダリウムに相当する(166)。平面形式は中央に水盤が置かれ、周囲にニッチを配し、連絡路で他の部屋に通じている(図3-27,28)。

個人浴場と呼ばれる遺構は、切り石を積み上げて、外部4角形、内部円形の建築であり、水盤の周囲に柱が建てられ、水盤の上部が突き出ている(167)。柱の上にはアーキトレイブが巡り、周囲を取り囲む廊のヴォールトを受けている。このアーキトレイブの上にドームを支えるドラムが立ち上がっている。遺構の状態から、外壁に窓は設けられておらず、採光は上部ドラムかドームから行なわれたと考えられる。ここでは、柱の上にアーキトレイブ、その上に壁というローマ時代の一般的な構成形式が見られる。この形態は、ローマのラテラン教会堂の洗礼堂に類似している。

一方、ビザンティン浴場と呼ばれる遺構は外形4角形で、内部8角形の平面で4つの半円形ニッチが中央の8角形に付設されている(168)。ニッチは大理石の敷居によって、床が上げられている。8角形の各隅に柱が立てられ、この柱はニッチによって繋げられ、上部にペンデンティヴのドームがのせられている。従って、復元案で見られるように(169)、中層部がなく、低層部と高層部とで構成されている(図3-29)。現在失われているが、中央部に水盤があったと考えられている。更に、ニッチと中央の部屋との床はモザイクで構成され、壁面には絵画が描かれていた。

このように、洗礼堂と2つのカルダリウムは低層部の構成に於いて類似している。また、装飾形式に於いても類似がみられる。相違

している点は、個人浴場に置いては水盤と周歩廊の間に柱列がある点、ビザンティン浴場に於いては中層部のない点である。従って、エフェソに於ける洗礼堂の建築形態というものは、世俗建築(170)から遊離したものではなく、一般的に用いられていた建築の形態や構成の形式をキリスト教宗教建築に転用したものと考えられる。その一方、浴場建築に於ける集中形式のカルダリウムは全体の複合建築に於ける一部分を構成し、平面構成の中心とはなっていないが、洗礼堂に於ける集中形式の採用は、平面構成に於いて中心を形成し、洗礼堂自体を分離した独立の構造体としている。

## 第7節：ソフィア聖堂の洗礼堂

### 第1項：概要

かつてソフィア聖堂の洗礼堂として使用されたと考えられる建物は、現在教会堂の南西に建っている(図3-30)。外部の平面形態は4角形で、上部で各隅は部分的に引っ込んでいる。西面と東面で主体構造体から突き出た部分は、前室とアプスに相当する。建物の北にはソフィア聖堂と洗礼堂の間に囲われた中庭があり、洗礼堂の北面にはポーチコが付けられている。この中庭へは現在通路が設けられておらず、塞がれた状態にある。ポーチコの東端には洗礼盤が残されている。現在、洗礼堂は完全に塞がれている。建物の低層部には4つの窓があり、その上の層には8つの窓が設けられている。

建物の内部には装飾や建築部材は全く残されていない。内部の壁にはトルコ式のオーナメントが僅かにみられるが、全体としてはモルタルで表面を覆われている。従って、現状から建物の創建時の状態を想起することは難しい。

17世紀以来、建物はスルタン・ムスタファ1世(1617-1623)とスルタン・イブラヒム(1640-1648)の霊廟として使用されている。オットーマン年代記によれば(171)、霊廟へと機能を変更された時期に

土が室内に運び込まれ、床が上げられた。17世紀の霊廟への改修される以前、オットーマン年代記によれば、建物は油の倉庫として使用されていた(172)。従って、コンスタンティノーブルの陥落後、建物は宗教的な機能を失っていたと考えられる。

7世紀から13世紀にかけて、洗礼堂に関する史料は見当たらないが、記録からソフィア聖堂には2つの洗礼堂が存在した。1つはオリンパスとも呼ばれる大洗礼堂で、聖堂のアプス付近、北東の隅に位置していた。他方は、小洗礼堂と呼ばれ、聖堂の南西の隅に位置していた。現在、北東に残る円形の建物スケプロフィラキオンはその位置と形態から、創建時はソフィア聖堂の大洗礼堂であったと、Ebersoltは推定した(173)。一方、9世紀の宮廷の『儀式集』を調べたSwiftは聖堂の北東にあるスケプロフィラキオンを小洗礼堂と推定した(174)。しかし、現在の建物の状態を検討したMathewsは、北東の円形の建物を大・小洗礼堂とする説を退け、コンスタンティヌス帝時代にソフィア聖堂と共に建てられたスケプロフィラキオンであると結論した(175)。更に、彼は大洗礼堂をスケプロフィラキオンの隣に建てていたはずだと推論している(176)。

ソフィア聖堂の洗礼堂は史料上、563年パウルス・シレンティアリウスによって初めて記されている。ここで記された洗礼堂は教会堂の北側に位置しており、大洗礼堂であることが判る(177)。また、この記述から、大洗礼堂はユスティニアヌス帝の時代にまだ建てていたことが判る。必然的にこのことは、404年の火災後、大洗礼堂は再建され、ユスティニアヌス帝以後に失われたことを示している。

逆に、南西に位置したと言われる洗礼堂の創建年代については、研究者の間で意見が2つに分かれている。その一つは洗礼堂がユスティニアヌス帝以前に建てられたとするものであり、他方はユスティニアヌス帝自身によって建てられたとするものである。史料的にこの洗礼堂については、コンスタンティノーブルへ1200年の巡礼者であるノブゴロドのアントニエによって記された記述に限定されている(178)。

このように歴史記述に建物の年代を求められないことから、建築物そのものの検討から年代を推定するほかない。Schneiderは煉瓦と砂岩を交互に積む壁の形式から、ユスティニアヌス帝の時代に洗礼堂が建てられたと結論した(179)。Dirimtekinは洗礼堂の内壁の構成と仕上げ状態がソフィア聖堂と同じである点に注目し、ユスティニアヌス帝の時代に建てられたと推定した(180)。これとは逆に、Eyiceは構造的な観点から、洗礼堂は教会複合体の他の建築と系統的なつながりを有していない点、北側ポーチコの2本の柱の柱頭がセルギオス・バックス教会堂の柱頭にソフィア聖堂よりも類似している点、洗礼堂に使用されたモルタルの色彩がソフィア聖堂と異なっている点から、ユスティニアヌス帝以前の建造とした(181)。奇妙なことに、最後のモルタルの点については、EyiceとDirimtekinは対照的な見解を示している。更に、建築形態の様式上の検討から、Salzenbergはアプスの形態に注目し、それがソフィア聖堂よりも前の状態を示すとした(182)。こうした矛盾点を解決するため、Dirimtekinは構造体そのものはユスティニアヌス帝以前に属するものの、内部の仕上げはソフィア聖堂と同時期と結論した。

## 第2項：建築構成

DirimtekinとEyiceの建築調査によれば(183)、霊廟に改修される時に床が上がり、低層部に窓が設けられた点を除くと、洗礼堂の構造体そのものは、大きく変化していないと推定されている。改修された点として、内部の壁の装飾は剝かれたと推定され、洗礼盤は洗礼堂の外に運び出されたことと、北側の扉が現在塞がれている点を指摘する。

洗礼堂そのものに対し、建設場所とその周囲はビザンティン期の建築活動により、大きく変化した。即ち、6世紀以前、アウグステオンは教会堂の南に位置していたため、ソフィア聖堂とアウグステオンの間に広大な敷地が残されていた。そして、聖オリンピアスの伝記によれば(184)、ここにポーチコ・工房・個人の住居・司教館

が5世紀に建設された(185)。司教館はまたこの地域に5世紀以降に建てられたので(186)、Mangoによると、ソフィア聖堂の南側は住居区画を含む建築複合体で占められていた。当然のこととして、教会堂と住居区画との動線への配慮がなされたと考えられる。事実、カルアト・シムアン洗礼堂やアブ・メナの洗礼堂に於いては、中庭やポーチコが前室の前に設けられていた(187)。この列柱によって囲まれる中庭の構成は、コンスタンティノーブルに於いても、ソフィア聖堂の北に位置するエイレネ教会堂の南側にも認められる(188)。従って、洗礼堂の周囲の構成は教会堂と密接な関係にあったと推測される。現在、教会堂と洗礼堂の間に設けられた斜路が6世紀のユスティニアヌス帝の時代に建設されている(189)。従って、洗礼堂周辺の構成は6世紀に変更されている。この斜路は司教館の玄関へと達していた(190)。Mangoはこの司教館が6世紀までに、その場所にあったと推定する(191)。この斜路の建設により、それまで自由に入ることのできたはずである洗礼堂の北側の中庭は、塞がれることになった。従って、ポーチコをもつ中庭の構成は、創建時から大きく変化したと言える。

このため、ポーチコに立つ2本の柱は創建時のままであるか疑わしい。即ち、エンタブラチュア無しで下の柱の柱頭の上に直接上の柱を据える点、また扉枠を直接下の柱に接続させている点は、コンスタンティノーブルの同時期の他の建築には見られない形式である(192)。従って、この柱頭から洗礼堂の年代を推定することは疑わしい(193)。

しかし、周辺が時代と共に変化したことに対し、主体構造である洗礼堂は初期の状態を留め、内部のモザイクないしフレスコを13世紀初期に留めていた(194)。このことは、洗礼室の内部は初期の状態、ないし初期に近い状態に保持される必要があるほど、重要であったことを示唆するものとも考えられる。また、内部壁面には大理石が貼られていたと推定されている(195)。このように、内部に大理石が貼られていたとすると、他の検討した洗礼堂同様、低層部と中層部

の見切りとしてコーニスも用いられた可能性が高い。このように、洗礼堂の機能的な配置は、内部に於て強く保持されたと考えることができる。即ち、機能的には洗礼堂と教会堂は、緩い結合関係を示していたと言える。

一方、洗礼室内部はDirimtekinにより簡単に計測されている(196)。ここで、創建時ないし計画された平面が正八角形をなすという仮定に立つと(197)、単純な比例関係を示している。この場合、八角形は一辺12.88mの正方形に内接し、ドームの迫元までが12.88mとなる。従って、ドームの高さはドーム天頂まで16.05mに対し、3.17mとなる(図3-31,32)。これらの3つの寸法は、ほぼ単純な比に還元される。即ち、 $16.05:12.88:3.17 \approx 5:4:1$ である。更に、ビザンティン尺はWülzingerとUnderwoodによると31.5cmとなり、上記した寸法はほぼこの単位寸法の整数倍になる(198)。また、各隅にあるニッチの高さは、Dirimtekinの断面部によると、ほぼ迫元の高さまでの半分となっている。従って、高さに関する比例関係は、 $12.88:6.44:3.17 \approx 4:2:1$ となっている。

しかし、Dirimtekinによって提示された他の寸法は、ビザンティン尺の整数倍と合致しない。こうした寸法体系の検討には、詳細な計測を今後待たねばならない。

このように、洗礼堂の空間構成を見ると、単純な比例関係が建築に適用されたと考えられる。この比例関係の採用はローマ帝政期の建築から由来するものと考えられる。しかし、パンテオンのドームと比較すると、洗礼堂のドームは立ち上がりが浅いため、球の中心はドームの迫元よりも低い位置に設定されている(199)。必然的に、パンテオンのように平面の中心は球体に内接せず、むしろ平面の中心は球体の内部に含まれることになる。このことは、平面そのものが球体に包み込まれる傾向を示すものと考えられる。

更に光は中層部から内部に流れ込む。従って、人間の知覚を考えると、洗礼堂のドームと低層部とは、中層部の光の層によって、分割される。このことは、ソフィア聖堂のように、ドームの浮遊感を

生じさせるものとなっている。

#### 第8節：洗礼室の内部建築構成

ここまで、洗礼室の遺構を検討したが、その結果これらの洗礼室は資料的な制約から、復元的な考察に程度の差が見られる。しかし、洗礼室については、ほぼ遺構は内部の構成を均一に検討することを可能にしている。従って、この節では洗礼室について、内部の建築構成を横断的に検討し、共通する傾向について考察する。この共通する特徴を洗礼室の建築構成の実態として捉えることができる。表3-2は、7棟の洗礼室について、建築の構成を比較対照させたものである。これらは帝国領内の各地に分散し、地域的に限定されていない。また、限られた遺構の数ではあるが、平面で見られた共通する構成要素が立面へと展開されても、立面で互いに共通する構成を示すならば、その構成は検討した遺構ばかりでなく、当時の洗礼室全般に付いてほぼ妥当性をもつものと考えられる。

#### 第1項：内部の立面構成

洗礼室の内部立面は見切り部材や架構形式の相違により、層に分節される(200)。この内、4層から構成されるラテラン洗礼室(図3-5)、また初期キリスト教時代の内部の構成が不明のリバ洗礼室(図3-14)とソフィア洗礼室(図3-31,32)を除くと、他の遺構では上中下の3層から構成される。便宜的にこれを下から、第1層・第2層・第3層とすると、第3層がドームに相当する。一方、カルアト<sup>・347</sup>洗礼室(図3-21)ではドームがないため、第1層・第2層から内部立面は構成される(201)。従って、カルアト<sup>・347</sup>洗礼室は、ドームを第3層とする本論の分節化を有効としながらも、2層から構成される。

ドームを含めて3層構成になっていない遺構も、復元的な考察をもとにすると、3層構成であった可能性が生じる。ラテラン洗礼室では、既に記したようにコンスタンティヌス帝による円形の平面形

態が、シスト3世によって八角形に改められた。このコンスタンティヌス帝による創建時の構成で、外壁の上部に設けられた窓は、内部で第2層に相当し、採光層として機能したと考えられる。このように、創建時の洗礼堂は3層によって内部立面が構成されていたと推定できる。一方、4層構成はシスト3世による再建の結果である。即ち、洗礼堂では洗礼盤周囲の構成が建築的に扱われ、ドームへと繋げられた。この結果、シスト3世時の立面構成は、4つの層から構成されていた。即ち、下から第1層としての柱列、第2層の「ペリスタイル」と呼ばれる大理石を張り付けた層、第3層の採光層、そして最後の第4層に当たるドームである。第2層と第3層の間には、パンヴィニウス(202)の*versus quas supra scripsi*という記述から、碑文を刻んだフリーズに相当する部材があったと考え得る。従って、第1層と第2層の間と同様に、エンタブラチュアに匹敵する部材が第2層と第3層の間にも用いられたと推定される。これに対し、リバ洗礼堂とソフィア洗礼堂では、こうした層の見切り部材に関して、漆喰と考えられる現在の表面仕上げのため、明らかでない。しかし、リバ洗礼堂では痕跡から、ソフィア洗礼堂ではアントニアデスの推定から、見切り部材が内部で用いられなかったとは考えられない。また、この両者共、現在、外壁の上部に採光用の窓が設けられ、3層の内の第2層に相当する壁面に窓を設けていることが判る。従って、この2棟の洗礼堂も見切り部材によって分節された、3層構成であった可能性が高い。

このように、内部の立面構成においては、シスト3世によって改修されたラテラン洗礼堂を除くと、他の遺構では第2層に相当する壁面に採光層を設けていると考え得る。従って、集中形式洗礼堂では3層構成を一般的な規範とした可能性の高いことが窺える。

平面構成で類型化されたように、この内部の各層の立面構成では、柱・梁式、アーケード式のように柱による柱・梁式構成と、壁のみからなる壁式構成の2種類を弁別できる。カルアト・シムアン洗礼堂の第1層では、アプス開口面の両脇にアーチを支える壁付き柱が

現れるだけであるが、第2層では入隅に柱が立つ。従って、ここでの柱は第2層の壁厚を減らし、荷重の軽減を計ったと考えられる(203)。このように、構造的な合目的性を伴い柱を用いたと考えられるものに、ラテラン洗礼堂やオーソドックス洗礼堂がある。ラテラン洗礼堂では、創建時に主体構造から分離していたと推定される洗礼盤周囲の天蓋(バルコニ)に使用された柱が、再建時にドームを支える主体構造部材へと変換されている。従って、再建後の洗礼室は、洗礼盤とその周囲の空間との2つに分節されていた(204)。一方、オーソドックス洗礼堂(図3-12)では、八角形の入隅に壁から分離した柱式の構成を認めることができる。この柱式の構成は創建時からのもので考えられている(205)。即ち、第1層は台座・柱・インポスト式の柱頭・スパンドレル状の壁・コーニスという構成になっている。第2層もドームへの連続を除けば、同様の構成であったと推定できる(206)。また、ドームへと天井を改修した後に、ドーム荷重は入隅の柱による構造形式で支持されるようになったと推定されている(207)。従って、改修後に柱式の構成は構造的に重要な役割を担うようになったと考えられる(208)。このように、オーソドックス洗礼堂では、外壁を構造体から独立させながらも、スパンドレル状の壁面によって外壁の壁式構成と柱による柱・梁式構成とを一体化している内部の構成がみられる。

このオーソドックス洗礼堂の第2層における3連アーチは構造的な必要性がないため、装飾的な形式として採用されたと考えられる。一方、これと同様に装飾的な柱による立面構成を、ヨハネ聖堂・洗礼堂(図3-25)に認めることができる。ここで柱・梁式構成は第1層と第2層にわたり用いられていたと推定できる(209)。第3層にはドームが架けられたと推定されている(210)。第1層は壁際で台座の上に柱を立て、インポスト状の扁平な柱頭に不整形なアーキトレイブ(ルソト)をのせている。このアーキトレイブ(ルソト)は壁に接するだけで、緊結されていない(211)。従って、壁と柱とが構造的に一体化されているとは考えられない。第2層も同様に柱が立てられた

と考えられるが、ペンデンティヴドームが架けられたとすれば、柱頭はアーチによって繋げられたと考えられる。しかし、壁厚から判断してドーム荷重は外壁に支持されると考えるのが妥当である(212)。従って、ヨハネ聖堂・洗礼堂の柱・梁式構成は洗礼室内で自立した独立の構成と考えられる。この柱式の構成が主体構造としての壁式構成から独立していることを示すものに、2つの構成が同一の立面で一致せずに用いられている点を指摘できる。即ち、第1層でニッチの半ドーム迫元に設けられたコーニスが堂内壁面を巡るため、柱による立面構成と外壁の構成における分節化が一致していない。このことは、視覚的に内部立面の構成を捉えると、ヨハネ聖堂・洗礼堂の第1層では、壁と柱とのそれぞれ異なる2重の構成形式が同一面に用いられている。このように、ヨハネ聖堂・洗礼堂では柱・梁式の立面構成が構造的な合目的性によって採用されたとは考え難い。

このように、平面構成において洗礼室の中央部と壁際に見いだされた柱列は、内部の立面構成において、それぞれ2種類の形式に分類できる。中央部に用いられた柱列は、洗礼盤の天蓋を支持する柱として、堂内の装飾における一形式と考えられる用いられ方をされるものと、主体構造として洗礼室の上部構造を支える形式との2種がある。これと同様に、壁際の柱列にも、構造的な合目的性と装飾性との2形式を認めることができる。特に壁際に柱の立つ遺構では、構造的な実体性を不問に伏せば(213)、視覚的な規準から同一の内部立面の構成を示している。即ち、柱・梁式構成の採用においては、視覚を規範として内部空間の表面での構成を類似したものにするよう、内部立面の分節化が押し進められた傾向を認めることができる。またこのことは、建築技術における構造的な課題が、建築の内部立面の構成を表現するという観点から後退している点を、示唆していると考えられる。

## 第2項：内部立面に於ける表面の構成

このように内部立面構成に於いて、建築表面の仕上げの材料が建築を制作する側にとって、留意された。洗礼室で柱・梁式構成が用いられた立面構成では、壁面がこの構成の背景となっている。この部材による分節が行われない壁面やドームの広がりを持つ面では、構成の課題として仕上げ材料が問題となる。仕上げ材料としては、カルプト<sup>カンプナ</sup>洗礼堂を除くと、壁体の構成材料をそのまま見せていない（表3-2）。

表3-2から明らかなように、第1層の壁面仕上げとしては、大理石板を一般的に貼り付けている。これに対し、リバ洗礼堂では、少なくとも創建時の仕上げとして漆喰を塗っただけであることが判る。一方、大理石の貼り方まで判る例として、オーソドックス洗礼堂がある。ここではアルコーブ内の壁をオプス・セクティルで構成している（図3-9a）。このオプス・セクティルはスパンドレルの背面にまで伸びる印象を、見た目には与えている。しかし、実際には壁面のオプス・セクティルはスパンドレルのアーチに沿って切り取られている。この事実は、仕上げを行う壁面は最初から限定された領域として捉えられていたことを示している。即ち、内部立面の第1層においては、柱による柱・梁式構成と壁の壁式構成による2重の構成が視覚的な同一面に意図されていたと看做し得る。

これに対し、第2層では、保存状態から確定的に述べることはできないにしても、仕上げ材料が大理石等の材料であれば発掘等で発見されるはずの断片が余り見つからないことから、スタッコ等の塗り壁であった可能性が高い。これは、既に記したように第2層が採光層として機能したために、逆光状態で壁の仕上げを視覚的に充分捕捉できず、大理石・モザイク等の高価な材料を用いるのを避けたと考えられる。この考え方を補強する事実として、シスト3世のラテラン洗礼堂で、第2層と第3層とが3層構成の第2層に匹敵する位置にもかかわらず、採光層である第3層の下にある第2層では、パンヴィニウスの記述から、大理石貼り付けで仕上げられている。即ち、視覚的な有効性が、材料の選択に関係していることを窺わせ

る。

検討した遺構では、オーソドックス洗礼堂のみドームに仕上げが残されている。しかし、ラテラン洗礼堂やヨハネス洗礼堂においても、現在失われているものの、痕跡から初期キリスト教時代にモザイクが使用されていたと推定されている(214)。一方、後代の記述から、ソフィア洗礼堂のドームにもモザイク画のあったことが判る(215)。この記述は1200年頃のものであり、初期キリスト教期のままであったとは即断できないが、他の洗礼堂のドームのモザイクと画題内容が類似していることから、概略に関しては保持されたものと考えられる。即ち、モザイク画にはキリストのヨルダン川でのヨハネによる洗礼場面、ヨハネが人々を教化する場面、そしてヨルダン川での信徒の洗礼場面が描かれていた。この画題内容は、オーソドックス洗礼堂と一部同じである。オーソドックス洗礼堂では、ドーム面を3層に分節し、それぞれの層で画題が異なっている(図3-11 a)(216)。即ち、最上層にはキリストの洗礼場面、その下に王冠を携えた12使徒の行列場面、この下の最下層に2種類の建築図像を8角形のそれぞれの面に対応し交互に配した場面からなる。中間層の使徒行列の場面では、使徒間が縦に伸びる植物様の模様によって分離されている。ドーム面の下層と中層の輪の分割を見ると、下層が8面、中層が12面となり、上下への連続した面の調和が得られていない。従って、ドーム面は各層の画題による独立した意味の連続によって認識されたと考えられる(217)。即ち、下層の建築により中層・上層の天空が支持され、中層で上層のキリストの足元に当たる場所へ、使徒が両方向から王冠を運んでいると解釈される(218)。このように、ドーム面の図像構成において、上昇する階層構造(ヒエラルキー)が認められる。また、初期キリスト教時代のラベンナにおけるアリアン洗礼堂でも、オーソドックス洗礼堂のドーム上層・中層に見られたのと同じ構成が認められる(219)。この洗礼堂創建時、及びモザイクの年代は6世紀前半とされる。ここでは、キリストの洗礼を示す上層と使徒の層とが鳩によって繋げられ、図像は階層構造を示し

ているが、使徒の出会う位置がキリストの頭の側であり、位置関係はオーソドックス洗礼堂と逆転している。このように現在残っている洗礼堂のドーム面の図像構成には、各層を階層構造化することで、上方へ向かう軸線が存在している。こうした図像構成は一般的なものとして、他の洗礼堂に於いても認められている(220)。従って、図像構成に付いては、洗礼堂において画一化を予測できる。

このように、洗礼室の内部の仕上げ状態としては、全般として構造材料を被覆する傾向が認められる。また、全般として、逆光となって壁面の状態をよく捕捉できない第2層には簡略化された仕上げ材料が用いられ、その他の面には光をよく反射する材料が用いられている。

### 第3項：アプスと立面構成との関係

ドーム面の図像によって、上方向への軸線を認めることができたが、この軸線は水平方向にも認められる。洗礼堂の平面の構成要素として、アプスの有無がある。カルアト・シムアンの洗礼堂とソフィア洗礼堂では、東側にアプスが設けられている。一方、リバ・サンヴィターレの洗礼堂では、第1回目の改修で東側にアプスが設けられ、その後の改修でもアプスの拡張が行われている(221)。従って、洗礼堂に対してアプスの存在が重要な施設の一つであったことを推測させる。このアプスによって、洗礼室の連続した壁面の階調が崩れるため、視線を誘導すると考えられる。

これに対し、オーソドックス洗礼堂にアプスはないが、東南のニッチに聖壇が設けられている。この東南の位置がドーム面のキリストの足元に相当する(222)。従って、聖壇に面してドームを見上げたとき、キリストが正立して見えることになり、アプスへ向かう軸線の存在を措定できる。

この様に一般的に東側に設けられるアプスにおいて、軸線の存在可能性は表3-1のアプスと扉位置との関係にも現れている。即ち、アプスのある洗礼堂では西側に扉のある例が多く、洗礼堂において東

西方向の軸線の存在を認めることができる。

#### 第9節：宗教建築としての用途

宗教建築のうち、洗礼堂は比較的機能を限定されるため、その使われ方を他の宗教建築と違って明らかにできる。教会の建築複合体の一部を成す洗礼堂は、宗教的用途に供される建築であるため、洗礼堂の機能性という問題を想起させる。この機能性の指標は洗礼堂が使用される際の構成における利便性・合目的性によって示される。即ち、明らかにされた建築構成の規範は宗教建築としての特殊性に由来するか否かによって、対比される建築の範疇が規定される。

使用時の洗礼堂の様態を示すものとしては、宗教儀礼を考えることができる。初期キリスト教時代の宗教儀礼の全貌は、現状にあって窺うべきもないが、断片化された文献を通し、洗礼堂に於ける概要を推測することは可能である(223)。特に、宗教儀礼は宗教建築を先験的に規定すると考えられることもあり、両者の対応関係の存在は構成の規範を統辞化する可能性もある。

洗礼堂は原則的に洗礼によりキリスト教への入信の儀式に供された建築である。洗礼自体は入水を通して死と再生を象徴した(224)。即ち、初期キリスト教において最も重要な活動の一つである秘跡の授与を(225)、一年の内の定められた日に行った(226)。儀式の具体的な次第は宗派間による相違を想定できるが、洗礼が初期キリスト教の教理上の問題に抵触しない入会儀式という性格から、次第の骨格そのものは類似したものと思量される(227)。この儀式について、初期キリスト教時代のシリア地方における注解書を見ると、次第は14に分節化された行為からなる(228)。そして、洗礼後に教会堂で堅信礼が行われた。入水以前の行為として、志願者の脱衣、東からの聖なる光の拝受、証人による先導、記銘、塗油等の行為が含まれ、入水以後、塗油、王冠の拝受、白衣の着衣、香をたく等の行為が、洗礼室内で行われた。従って、儀式に伴う多様な要求を、洗礼堂の

建築構成は前提としなければならなかった。

こうした儀式の時間に伴う移動性への建築構成の適応性として平面構成を指摘できるが、表3-1からも明らかなように、幾つかの規範の存在を除けば、平面構成の画一化は認められない。この事実は、洗礼堂の平面構成が洗礼儀式と一対一に対応するというLassus(229)の主張を反証する。しかし、洗礼室に一般的に認められる複数の扉の存在、また教会堂との密接な関係に、一年の内の定められた数日(230)に行われることから必然的に生じたと考えられる、多数の志願者や証人の潤滑な移動が、平面構成に反映されていたと推定できる。

しかし、先述したシリア地方の注解書の文脈では、東側から光が導入される点を除けば(231)、立面構成に言及している箇所はない。また、検討した洗礼堂においては、東に限定されず、各方位に窓が設けられている。即ち、洗礼志願者の動きに伴うそれぞれの場所における意味を確定できるにしても(232)、その場所と立面との関係は不明である。従って、洗礼堂の立面構成に認められた規範は、宗教的な機能性との関係において捉え得るとは考え難い。これは洗礼室の仕上げに見られるように、宗教建築における構成の象徴的な意味論を否定するものではないが(233)、宗教建築としての構成が儀式のような時間の流れによって統御された可能性を否定的なものとしている。

このように、宗教的な機能性は、史料制約から確定的に断言できないが、洗礼堂の建築構成全般に援用されるのではなく、局限された領域に限って、対応していたと推定できる。

## 第10節：小結

集中形式の洗礼堂には、広範な地域に分布するにもかかわらず、平面構成において類型が見いだされた。また、この類型のうち、初期キリスト教時代の洗礼室を復元して考察すると、差異はあるものの、立面構成の規範を概ね認めることができる。即ち、構成として、

内部立面は3層に分節され、外壁面上部を採光層として用いている。また、各層で仕上げ材料は異なり、採光層で廉価な材料の使用される傾向を認めることができる。更に、洗礼室に柱を用いた洗礼堂では、柱による柱・梁式構成と、壁による壁式構成の2重化された構成を内部立面に適用する傾向を窺える。しかも、柱による線的な構成においては、建築の構造形式と装飾形式の識別が視覚上曖昧になり、類似した内部立面構成として現れる傾向を認めることができた。このことは、視覚的に識別できる建築の構成が、構造形式を一義的に意味することからの離脱を暗示させると考えられる(234)。この視覚という観点から、集中形式洗礼堂には東とドーム頂部へと構造化された軸線の存在する可能性を窺うことができる。以上を、洗礼堂における造形理念から由来する構成の規範の一部として考えることができる。こうした検討を通して、共通する構成を含む洗礼堂の実態から、帝国の各地に建てられた集中形式洗礼堂には、共通する造形理念が適用されていたと考えられる。

また、こうした建築の実態の合目的性を、初期キリスト教の儀式時における、洗礼堂の使用法で説明できるとは、現在の研究水準から言い難い。逆に、構成をどのように視覚的に捉え得るかという問題は、宗教建築としての集中形式洗礼堂が非宗教的な制作者の技術的展開によって構成された事実から(235)、洗礼堂において建築としての重要な一般的課題であったと考えられる。即ち、本章において、他種建築と対比する際に基礎となる、集中形式洗礼堂の建築構成における共通性が明らかにされた。

註：第3章

1. ここで言う他種建築とは、規模の大きな集中形式のキリスト教関係の建築、更に初期キリスト教時代における集中形式の世俗建築、及び異教の建築を指している。
2. A. Khatchatrian, Les Baptistères Paléochrétiens, Paris, 1962.  
Khatchatrianの選定例の中には洗礼堂としては規模の大き過ぎるものや洗礼盤の発見されていないものもある。
3. vid. 本論第2章
4. cf. A. Vogt ed., Le livre des Cérémonies, belles lettres, 1967, vol. 1, p.5. (そこで、聖テウリアドス教会の隣かその次の礼拝堂へ進み、  
・・・それから彼ら(テスティアス)は洗礼堂へと向かう) 【筆者訳】
5. Khatchatrian(op.cit.)は、コンスタンティノーブルのChalkoprateriaとMyrelaionの遺構を洗礼堂として選定していない。また、彼の著作は、文献目録としての性格が強く、記載内容についても事例間で大きな相違がある。このようなことから、表3-1では、判断を保留せざるを得ないものもあった。
6. Khatchatrian(op.cit.)は、平面図のみを掲載しているので、ここでは平面の状態から判断している。
7. Khatchatrianは、教会堂の全体を示していないため、南・北面については、東西側を判断できる例が少ない。
8. カルタゴについては、発掘報告、S. Boyadjiev, "La rotonde souterraine de Daniys-el-Karita a Carthage", ACIAC, vol.9-2, 1978, pp.117-130.を参照した。また、ラベンナについては、S.K. Kostof, The Orthodox Baptistery of Ravenna, New Haven, 1965.を参照した。
9. cf. G. Tchalenko, Villages aniques de la Syrie du Nord, Paris, 1958, pp.223-276, & pl.71-79.
10. 洗礼室に接続する部屋は、発掘の進捗で発見されるものも多く、即断を許さない面もある。
11. R. Krautheimer et.al., Corpus Basilicarum Romae, vol.5, 1977, Rome, p.24.
12. Ibid., p.89.
13. Libro Pontificale, p.234, nella vita Sisto III, (この者は(シスト3世)コンスタンチヌスのバシリカの洗礼堂に柱(複数)を立てた。それらの柱は、コンスタンチヌスの時代に用意されていた。【筆者訳】)
14. Giov. Battista Giovenale, Il battistero Lateranense, 1929, p.5.
15. Idem.
16. Ibid., fig.49 & 51.
17. 洗礼堂に付設された3つの礼拝堂も初期キリスト教期に属するが、本

論の集中形式という概念の規定からはずれること、また洗礼堂から建築として分離されているので、ここでは主体となる洗礼堂についてのみ検討する。

18. G.B. Giovenale, op.cit., fig.25 & 32.
19. Ibid., pp.117-127.
20. Ibid., p.73, table 1.
21. 壁付柱はローマ建築の、とりわけ帝政期の壁構造の建築において汎用されている。cf. RIA, pp.97-120.
22. Giovenale, op.cit., p.73.
23. vid. 註 13.
24. すなわちバンテオンに代表される形式が前者であり、ミネルヴァ・メディカに代表される形式が後者である。
25. ~~✕~~ という紋章は  $\chi\rho\iota\sigma\tau\omicron\varsigma$  の省略形で、コンスタンティヌス帝がマクセンチウス帝と戦う際に楯に用いた紋章である。
26. G.B. Giovenale(op.cit., p.82)はこうした形式の洗礼堂をアフリカで発掘された洗礼堂に認めることができるとする。
27. cf. Idem., Il Libro Pontificale, Nella vita di Sist III (432-440).
28. Hon. Panvinius, De praecipuis Urbis Romae sanctioribusque basilicis, quas septem Ecclesias vulgo vocant, Roma, 1570, p.463, Chap.II. (cf. Ibid., op.cit., p.112.)
29. 「従って、この洗礼堂は全体として八角形の形態である。中央部で5ウルナ程下がって、泉水(盤)がある。・・・洗礼盤(既に述べているところの)、それに8つの大きくて素晴らしい斑岩から作られた柱とが(シスト3世によってこの柱は全体として据えられたが)設置された。柱の上部には異なった形、内部として非常に美しく、とりわけ真実の明るさからなる大理石のペリスタイルがある。こうした部分で上部の方に何かの碑文がある。神に捧げられた家は光輝いている。8本の柱のうち、4本の柱頭はコリント式であり、同数の残りはイオニア式である。ドラム上部には、同じ数の別の柱が大理石である。そのうち幾つかは白い大理石で、イオニア柱頭であり、幾つかは光輝くグラナイトのコリント柱頭のものである。それらは飾られたドラムの8つの窓から洗礼盤のドームを支えている。パウロ3世時代、その時の修理の痕跡は美しく飾られた木製の天井に示されている。【筆者訳】」
30. 記録上、洗礼堂の改修はレオン10世(1513-1521)、パウロ3世(1534-1549)、ウルバン8世によってなされた。
31. cf. Giovenale, op.cit.
32. Giovenaleは壁の構成を  $\alpha \sim \kappa$  に分類し、シスト3世時代の壁がコンスタンチヌス帝の壁の上に接続するものであるので、この壁  $\epsilon$  をシスト3世の再建によるとする。

33. Ibid., p.103.
34. Lafreryの洗礼堂断面図が1544-77年に作成され、洗礼堂の古い形態、すなわちシスト3性時代の状態を伝えていると考えられている。しかし、Giovenaleも指摘しているように(pp.89-91)、ペリスティルに相当するThermal Windowの形式が、壁体で確認される位置より低く、第1層の8本の柱の上にあるアーキトレイヴにのっている。即ち、Thermal Windowの下にあった層が、Lafreryの図ではない。また、ドームの上部にランターンがのせられているが、パンヴィニウスの記述はこの図に相当する箇所はない。GiovenaleはThermal Windowがあったとしても、構造上の軽量化から行なわれたものであり、中層部にも大理石が貼りつけられて、Thermal Windowの穴は塞がれていたと示唆している(p.106)。
35. Ibid.,p.103.
36. Giovenaleは天井におけるヴォールトの可能性について、壁厚がヴォールトを支えるには薄すぎることを指摘している(p.124)。
37. Ibid., pp.112-113.
38. このオブス・セクティルは現在の天井面の上にまで達している。従って、シスト3性時代のものと推定できる。
39. Giovenaleはプロナオスの状態から洗礼室の装飾は一層壮麗なものと推定している(p.132)。
40. Procopius, History of the War, Loeb., vol.1-6.
41. Ibid., vol.5, 15-24.
42. A. Ghezzi, "Il Battistero degli Orthodoxi di Ravenna: Problemi ed Aspetti Architettonico-strutturali e decoration", Felix Ravenna, vol.35(86), 1962, p.11.
43. A. Agnellus, "Codex pontificalis ecclesiae ravennatis", A. Testi-Rasponi, Raccolta degli Storici italiani, vol.11-3, pp.196-97 & 200, Bologna, 1924. 本論ではKostofが言及したものを使用した。
44. この不明確さはAgnellusの記述に由来する。もし洗礼堂が大聖堂と同時に建設されたのなら、ラヴェンナでUrsusが司教になった時期が洗礼堂の建設時期として決定的となる。Kostofはこの点について以下のように考えている。"The controversy centers around the statement in Agnellus that Bishop Ursus died on an Easter day which fell on the thirteenth of April: Post hec vero omnia consumata et edificia pleniter constructa, infirmitatena modicam sensit corporis, quasi eructuans redidit spiritum Idus Aprilis. In tale pace et tranquillata vitam finivit in die sancte Resurrectionis"(Codex, p.68).Easter fell in April in the years 389, 396, 398, 402, 410, 413, 415, 424, 426, and 429."(p.12, note 9

- ) cf. S.K. Kostof, The Orthodox Baptistery of Ravenna, New Haven & London, 1965.
45. cf. *Ibid.*, p.11. (彼ネオンはウルススの聖堂の洗礼堂を美しく飾った。モザイクと金の石を用い彼はヴォールトの周囲に使徒の名とそのイメージをしるし、壁を様々な石で覆った。彼の名はモザイクの中に刻印されている。【筆者訳】)
46. *Ibid.*, p.21.
47. *Ibid.*
48. *Ibid.*, pp.22-23 & the document 12(p.148).
49. *Ibid.*, p.23.
50. *Ibid.*, pp.25-6.
51. 本論において洗礼堂に関して以下の論考を検討した。O. Demus, Byzantine Mosaic Decoration, New York, 1976: E. Kitzinger, Byzantine Art in Making, Cambridge, 1977: ECBA,: A. Khatchatrian, Les baptistère paléochrétiens, Paris,1962: S.K. Kostof, *op.cit.*:S. Bettini, 'Il battistero della cattedrale', ACIAC, vol.9-2, 1975, pp.563-590: M. Mazzotti, 'Il battistero della cattedrale di Ravenna', CCARB, vol.8, 1961, pp.255-278: C. Casalone, 'Recherche sul battistero della cattedrale di Ravenna', RINASA, vol.8, 1959, pp.202-268.
52. C. Casalone, *op.cit.*, 242f.
53. Kostof, *op.cit.*, fig.27.
54. Agnellus XXVII, 'De Maximiano', c.80 in C. Mango ed, the Art of the Byzantine Empire, Englewood Cliffs, 1972, pp.106-7.
55. Casalone, *op.cit.*, p.243.
56. Gerolaによってドーム面のエクストラドスの下部の壁面にコーニスの痕跡が発見されている。従って、創建時の洗礼堂はこのコーニスにのせられる木造の天井が張られていたと考えられている。
57. F. Lanciani, Cenni intorno ai monumenti e alle cose piu notabili di Ravenna, Ravenna, 1871. Lancianiの発掘についてはKostof (*op.cit.*)の報告を使用した。
58. Kostof, *op.cit.*, 44f: Casalone, *op.cit.*, p.204.
59. A. Ghezzi, *op.cit.*, 17f.
60. Kostof, *op.cit.*, p.44 & fig.7.
61. *Ibid.*, p.21.
62. *Ibid.*, figs. 12 & 11.
63. *Ibid.*, 36f.
64. M. Mazzotti, *op.cit.*, p.262.
65. Ghezzi(*op.cit.*, p.14)は洗礼儀式の補助的空間としてポーチコや周歩廊が必要であると指摘している。

66. Kostof, op.cit., p.39.
67. November 2, 1367, Indict. V., "Ravenne in quaita Gazu sub porticu ecclesie Saneti Joannis in Fontibus ante ecclesiam Maiorum prope sapulturam Balbis" (from Kostof).
68. M. Mazzotti, op.cit., 216f.
69. Kostof, op.cit., p.35.
70. Ibid., p.33.
71. Ibid., p.41.
72. 凱旋門において、3連アーチの形式は、柱・梁の構成の背後の面に用いられている。
73. Kostof, op.cit., 42f.
74. Ibid., p.95.
75. 1566年から1781年にいたる修復で、創建時の窓の状態が現在のように回復された。(cf. Kostof, op.cit., pp.21-23.)
76. 低層のリングでモザイクの視点は窓のちょうど上部にある図柄へと導かれる。それに対し、3角とアーチの風破は左右対称形の内部壁面の構成を混乱させている。
77. Kostof, op.cit., 42f. Bettini, Trinci, CasaloneはドームがUrsusの時代に作られたものと考えている。一方、Kostof, Krautheimer, Ghezzi, Mazzottiはコーニスの事実からドームをネオンの時期と考えている。
78. Ibid., p.71.
79. T.F. Mathews, The Early Churches of Constantinople, London, 1980(1971), p.128.
80. Kostof, op.cit., p.75.
81. Ibid., 73f.
82. Kostof, op.cit., p.78.
83. cf. RIA,.
84. Bettini, op.cit., p.44.
85. E. Kitzinger, Byzantine Art in the Making, Cambridge, 1977, p.62.
86. 洗礼堂に関する報告書として本論に於いては、S. Steinmann-Brodbeck, "Das Baptisterium von Riva San Vitale", Zeitschr. Schw. Arch., vol.3, 1941, pp.191-244.を使用した。以下に示される建築の特徴もこの論考の図版を使用している。
87. Steinmann-Brodbeckは持ち送りの数について明示していない。
88. Idem.
89. Steinmann-Brodbeckは洗礼堂の建築形式から、他の建築との比較を通し、創建時を500年頃、第1期の改修を550年頃としている。ここでは、発掘で得られた結果から、明確な年代を設定する事実が得られていな

- いため、とりわけ他建築と比較すべき意匠が失われているため、歴史的な背景から初期キリスト教期の創建とした。
90. ここでは創建時の洗礼堂を建設後、短期間で改修が行なわれたと推定されているので、改修後の洗礼堂を問題にもしている。そのため、創建時の形態や形式ではなく、創建時をも含む初期の建築の状態を議論の対象とした。
91. 洗礼堂周辺の全域にわたり発掘はなされていない。しかし、東・西・南・北の各面に同種の壁が見つかることから、周歩廊は洗礼堂の周囲を巡っていたものと考えられる。
92. *Ibid.*, p.215.
93. 初期キリスト教に於て、教徒でないものは教会堂のとりわけ身廊・側廊等の聖なる空間への入室はきびしく制限された。
94. この点は、アプスと東側壁の接続目地が現われていることから判る。
95. 壁の構成については断面図fig.3 & 4を参照した。
96. ローマ帝政期より、簡便なドーム工法として木造ドームが表われている。cf. Deichmann, "Die Eindeckung von S. Stefano Rotondo", *RRKNO*, Wiesbaden, 1982, pp.416-429.
97. 見つかるフレスコ等については、その様式からロマネスク時代以降のものだと結論されている。また、初期の壁面仕上げについては、床との取り合い近辺に認められる。
98. こうした経済的に廉価なドームとして、木造ドームは用いられた可能性がある。
99. MacDonal, *The Architecture of the Roman Empire*, London, 1965, 174ff.
100. *ECBA*, pp.145-152.
101. *Ibid.*
102. cf., *The Cambridge Medieval History*, vol.4-1, 1966, pp.43-60.
103. このシリア全般に於ける教会の統一性について、M.M. Mangoが指摘している。Idem., "The Architecture of the Syriac Churches", Birmingham, 1981, & "The Continuity of the Classical Tradition in the Art and Architecture of the Northern Mesopotamia", *DO-Sympo*, 1980, pp.115-129.
104. 岩山には殉教者礼拝堂、修道院、修道院墓所、洗礼堂、付属宿泊施設等があった。cf. G. Gegorge, *Syrie*, Paris, pp.80-87.
105. G. Tchalenko, *Villages Antiques de la Syrie du Nord*, Paris, 1958, p.229.
106. 聖シメオンは386年に生まれ、459年に没するまでの間、人生の大半を柱の上で過ごしたと言われる。
107. Tchalenko(*op.cit.*, p.227)は"la vie de S.Symeon"から、聖シメオンの生存中に建築物はなかったとする。

108. Ibid., p.228.
109. Ibid., p.231.
110. Ibid., p.229. またこの短期間の大工事に付いては、C. Mango(BA, p.79)やKrautheimer(ECBA, p.145)も指摘している。
111. Tchalenko, op.cit., pp.240-241.
112. Ibid., p.237.
113. Ibid., p.241.
114. Degorge, op.cit., p.80.
115. Tchalenko, op.cit., p.246.
116. Ibid.
117. 洗礼堂を復元的に考察するため、以下に記す資料を検討した。Tchalenko, op.cit.: J. Lassus, Sanctuaries Chretiens de Syrie, Paris, 1947; J.H. Emminghaus, "Das Taufhaus von Kal'at Sim'an in Zentralsyrien Baubeschreibung und -interpretation", Tortulae Studien zu altchristlichen und byzantinischen Monumenten, 1966, pp.82-109.
118. 配置から考えても遺構は洗礼堂である妥当性が高く、Lassus(op.cit., p.227)の主張する殉教者礼拝堂の可能性は低い。
119. Degorge(op.cit., p.86)やEmminghaus(op.cit., p.87)はモザイクの存在を指摘するが、その図像を具体的に記していない。
120. カルアト・サムアンがシリアにあり、しかも岩山の上であることから、水を得にくく、他の地域の洗礼堂のように水を流し続けることは不可能であったと考えられる。
121. Degorge(op.cit., p.86)は屋根をドームとして考えているが、ドームを構成した部材の報告はない。また、Emminghaus(op.cit., p.87)は壁厚から考えて、ドームが架けられた可能性はないとする。
122. Idem., p.275.
123. cf. H.W. Beyer, Der Syrische Kirchenbau, Berlin, 1978(1925), pp.137-176.
124. 洗礼堂の天井に付いては指摘されていないが、柱上部のインポストの存在から天井が張られていたと推定される。また、B.Smith(The Dome, Peinceton, 1971, pp.10-44)がシリア地域のドームに付いて指摘しているように、木造のドームが架けられた可能性もある。
125. Emminghaus(op.cit., p.86)は西壁の窓は後に設けられたものとしている。
126. Tchalenko, op.cit., p.240.
127. Ibid., p.266.
128. Ibid., p.264. 基礎部に於いても、岩盤を掘りこんで切り石を埋め基礎としている。
129. Ibid., p.275.

130. Ibid., pp.264-266.
131. エフェソの都市としての発展はコンスタンティノーブルに先行するものであり、3世紀のエフェソで用いられた建築形式は4世紀のコンスタンティノーブルでも現われている。cf. ECBA, p.112-4.
132. C. Foss, Ephesus after Antiquity, Cambridge, 1979, p.52.
133. Ibid., p.54.
134. ECBA, p.114.
135. Krautheimerは創建年代を300年前後とする。また、形態としては4葉形の十字形平面にヴォールトが架けられたものとする。cf. *Idem.*, p.37.
136. Foss (*op.cit.*, p.88) は再建が535/536年に開始されたものとし、Krautheimer (*op.cit.*, p.257) は548-565年にかけて建てられたものとする。
137. Foss, *op.cit.*, p.89. また、Procopius (Buildings, V i 4-6) は、この教会堂があらゆる点でConstantinopleのSt. Apostle聖堂に似ていると記している。
138. M. Büyükkolancı ("Zwei neugefundene Bauten der Johannes-Kirche von Ephesus", JM, vol.32, 1982, 236f) は左側にある遺構をスケプロフィラキオンと推定する。
139. Büyükkolancı (*Ibid.*, 245ff.) によれば、洗礼堂の東西にあるアプスのある部屋は洗礼堂の建設後付属されたものであることを示唆している。
140. 「(聖人) ヨハネスの最も小さな僕として、聖なる司教ヨハネスによって、この小さな建物の全ての表われるべき構成が作り上げられた。  
【筆者訳】」
141. Ibid., p.251.
142. Ibid., 252f.
143. F. Miltner, "XXI Vorläufiger Bericht über die Ausgrabungen in Ephesus", JÖAI, vol.43, 1975, pp.1-63; F. Fasdo, "L'architettura Romana di Efeso", Bollettino del Centro per la Storia dell'Architettura, vol.18, 1962.
144. *Idem.* 発掘された集中形式の遺構は建築的な取扱や設備の状態から、浴場のカルダリウムに相当する部屋と考えられている。
145. F. Knoll ("Die Marien-Kirche in Ephesos", Forschungen in Ephesos, vol.4, 1932, pp.43-50) は、この窓の存在について遺構状態から確認しているが、その具体的な形状については述べていない。
146. F. Knoll (*Ibid.*) は、壁体の厚さから木造小屋を架けるよりも、ドームを架ける法が合理的な構法である点を指摘する。
147. 低層部のヴォールトや半ドームも一般の煉瓦で構成されている。cf. Knoll, *op.cit.*
148. Ibid., p.49.

149. vid., 註99.
150. Knoll(Ibid.)は復元案に於て中層部の窓の間に繋ぎ材としてコーニス  
を設けているが、この部材についての記述は本文中にない。
151. Knoll(Ibid.)はこの外壁の窓については報告していないが、復元案に  
於て窓が設けられている。vid., fig.47.
152. 周歩廊の床はオプス・セクティルと考えられるが、Knollの記述では大  
理石による模様とのみ記されている。"Den Fussbodenbelaga bildet-  
en Marmorplattenn, im Umgange wurde teilweise alter Fussboden-  
belag mit Plattenmustern wieder verlegt"(p.47).
153. Knoll(op.cit.)はこの格子を中層部の窓に使用されたものと考えてい  
るが、その根拠を明らかにしていない。この他、Krautheimer(op.  
cit.)は床のモザイクについて触れているが、Knollの記述にはモザイ  
クはない。
154. 復元案はKnollの復元案をもとにしているが、一部明確な根拠を欠く部  
材については図3-24,25に含んでいない。
155. Buyukkolanci(op.cit.)は教会堂と洗礼堂の間にある空隙をナルテック  
スと考えているが、平面の構成を見る限り(図3-23)教会堂と洗礼堂  
は分離して建てられていると考えるべきである。
156. これらの発掘報告については、Büyükkolanci(op.cit.)の記述や図版を  
使用している。
157. Büyükkolanci(Ibid.,p.243)はこの台座が他の建築で使用されていた転  
用材と考えている。
158. Idem.
159. Büyükkolanciは2層目の柱等が発見されていないことのみを報告して  
いる。
160. Ibid., pl.51 & 52.
161. Loc.cit.
162. Ibid., p.243.
163. Ibid., p.245.現在残されている壁の痕跡や釘の状態から大理石の貼ら  
れたことが判る。
164. Ibid., p.245. Buyukkolanciの記述では、この雨樋の位置が明確でな  
い。また、彼は周歩廊の屋根として、ヴォールトの可能性もある点を  
記している。
165. 洗礼室と周歩廊との構成に於いては類似しているが、その外側に設け  
られる空間に付いては形態の差が生じている。
166. F. Fasdo(L'architettura Romana di Efeso)によれば、個人浴場と呼  
ばれる遺構は2-3世紀頃のもので、ビザンティン浴場と呼ばれるも  
のは4-5世紀のもので推定されている。
167. Fasdo, op.cit., fig.46,47.
168. ビザンティン浴場については、F. Miltner, op.cit.,の論考を検討し

- た。
169. Fasdo, op.cit., fig. 75.
170. cf. A. Berger, Das Bad in der Byzantinische Zeit,
171. Ottoman chronicles: Evliya Selevi, vol.1, p.354. この記述についてはF. Dirimtekinの論考を使用。Idem., "The Baptistery of Saint Sophia", Turk Arkeologi Dergisi, vol.12-2, pp.54-87.
172. Ibid.
173. Ebersolt, op.cit.
174. E.H.Swift, Hagia Sophia, New York, 1940, pp.173-177.
175. T.F. Mathews, The Early Churches of Constantinople, London, 1980, p.17. しかし、Mathewsによれば、J. Ebersoltはこの建物は  
大洗礼堂で、5世紀に立てられたと推定している。Idem., Saint-Sophie de Constantinople, Paris, 1910.
176. Mathews, op.cit., pp.13-19. Mathewsは大洗礼堂は404年の火災で燃え落ちたと推定している。
177. C. Mango ed., The Art of the Byzantine Empire 312-1453, Englewood Cliffs, 1972, p.84.
178. Ibid., p.237.
179. A.M. Schneider, Die Grabung in Westhof der Sophien Kirche zu Istanbul, Berlin, 1941, pp.23-45.
180. Dirimtekin, op.cit., p.70.
181. S. Eyice, "Le baptistery de Saint Sophie d'Istanbul", ACIAC, vol.2, 1975, pp.265-267.
182. W. Salzenberg, Alt-Christliche Baudenkmale von Constantinopel, Berlin, 1854, p.19.
183. Dirimtekin, op.cit. & Eyice, op.cit.
184. "The Vita of St. Olympiadis", Analecta Bollandiana, vo.15, 1896. Vita S. Olympiadisの記述はC. Mangoによった。Idem., The Brazen House, Kopenhagen, 1959.
185. Ibid., p.54.
186. Ibid., 52f.
187. Eyice, op.cit., p.262.
188. cf., U. Peschlow, Die Irenenkirche in Istanbul, Tubingen, 1977.
189. R. Cormack & E.J.W. Howkins, "The Mosaics of St. Sophia at Istanbul: the Rooms above the Southwest Vestibule and Ramp", DOP, vol.31, 1977, p.200.
190. Loc.cit.
191. Mango, op.cit., p.52, note 18.
192. 建築の図版についてはT.F. MathewsのThe Byzantine Churches of Istanbul(Penn.State Univ., 1976)を参照した。

193. ポーチの柱頭はソフィア聖堂のものよりセルギオス・バックス教会堂やサン・ヴィターレ聖堂のものに似ていると言われる。しかし、ビザンティン建築に於いては、部材が再使用される可能性もある。
194. Mango ed., op.cit., p.237.
195. E.M.Antoniades, EKPHPASIS THS AGIAS SOPHIAS, Athens, 1983 (1907-9), p.126.
196. Ibid., 69f.
197. Dirimtekinは内部の高さを計測したが、この高さが現在の床からドーム高さを示すものかどうかははっきりしない。本論では、彼によって計られた高さは現在の床から120cm低い創建時の床からドーム天頂までの高さと考えた。また、寸法が記されていない断面に関して、ドーム迫元までの高さは図版から正方形の一辺と等しいと推定した。
198. WulzingerとUnderwoodはビザンティン尺を31.5cmと考えているが、Antoniadesは31.23cmと考える。K. Wulzinger, "Die Apostlekirche und die Mehemedije zu Konstaninopel", Byzantion, vo.7, 1932, p.28; P.A. Underwood, "Some Principles of Measure in Architecture of the Period of Justinian", Cahiers Archéologiques, vol.3, 1948, p.65; E.A. Antoniades, EKFRASIS THS AGIOS SOFIAS, Athens, 1907.
199. G. Lessr., Gothic Cathedrals and Sacred Geometry, London, 1957, pp.23-26.
200. ドーム面の様な架構形式が壁面からも明らかに分離するものは、立面構成として分節されるが、壁面において、現状で見切り部材がないものについては、分節を判断できなかった。これらは、修理報告等をもとに検討することで、後述するように分節を判断している。
201. B. Smith(op.cit.)がシリア地域の建築について指摘するように、木造のドームの架けられた可能性も否定できない。この点について、M.M. Mango("The Architecture of the Syriac Church", Architecture of the Eastern Churches, Birmingham, pp.13-26;"The Continuity of the Classical Tradition in the Art and Architecture of the Northern Mesopotamia", DO Sympo., 1980, pp.115-129)が述べるように、シリア地域の建築の原型であるアンティオキアの建築が明かでない現状において、決定的な意見の提示は困難である。
202. Hon. Panvinius, op.cit., p.463.
203. Emminghous, op.cit., p.88 & Tchalenko, op.cit., p.275.
204. Giovenale(op.cit., p.103)は、8角形の外壁と洗礼盤周囲の柱列との間にヴォールトが架けられていたと推定する。また、A.Tschira("Die ursprüngliche Gestalt des Baptisteriums an der Lateransbasilika", Mitt.Deu. Arch.Inst., vol.57, 1942, fig.1)の復元案では8角形の入り隅に付け柱が突出し、中央柱上部からのアーチを受けてい

- る。
205. Kostof, *op.cit.*, pp.9-30.
206. *Ibid.*, p.41.
207. Kostof(*op.cit.*, p.48)は柱式の構成が主体構造であると指摘する。また、Casalone(*op.cit.*, 213f)は、これを内部と外部からなる2重の構造形式と呼ぶ。一方、Ghezzi(*op.cit.*, p.36)は、初期の外壁における構成が現在混乱しており構造形式を一概に確定できないとする。本論においては、Kostof, Casaloneの主張を支持した。
208. 改修前のドームのない状態では、壁体が小屋を支え、柱が天井を支えていたと考えられる。
209. Büyükkolancı, *op.cit.*, pl.51&52.
210. Büyükkolancı(*Idem.*)は小アジアでペンデンティフの使用を一般的とし、このドームをペンデンティフドームとする。
211. *Ibid.*, p.243.
212. *vid.*, 註212。Büyükkolancıは隣接する聖具室の復元案としてドームを外壁の上にのせている。cf. fig.6.
213. 構造的な役割を果たすか果たさないかを問題にしないという意味で、用いた。
214. Büyükkolancı, *op.cit.*, p.244. Giovenale, *op.cit.*, p.132.
215. C. Mango ed., *op.cit.*, Englewood Cliffs, 1972, p.237.
216. Kostof(*op.cit.*, 42f)は、モザイクの年代を一部修理が施されたにしろ、ネオンの改修時、即ち初期キリスト教時代とする。
217. E. Kitzinger, *Byzantine Art in the Making*, Cambridge, 1977, 58ff.
218. *Loc.cit.*
219. *Ibid.*, 60f. & T. Bruno, "Il battistero degli Arian a Ravenna", *Felix Ravenna*, vol.3-37, 1963, pp.5-82.
220. cf. L. Bruyne, "La decoration de baptisteres paleo-chretiens", *ACIAC*, vol.5, 1954, pp.341-369.
221. Steinmann-Brodbeck, *op.cit.*, 202f.&214f.
222. Kostof, *op.cit.*, fig.41.
223. cf. T.F. Mathews, *The Early Churches of Constantinople*, Univ. Park, 1980(1977)
224. D.G.Dix, *The Shape of the Liturgy*, London, 1978, p.260; J. Pelikan, *The Spirit of Eastern Christendom*, Chicago&London, 1974, p.114.
225. cf. H.I. マルー著、『キリスト教史 2』、上智大学中世思想研究所、1980
226. Ch.Strube, *Die westliche Eingangs-seite der Kirche von Konstantinople in Justiniani-scher Zeit*, Wiesbaden, 1973, p.51  
: D. Randic-Miocevic, "Tipologia dei battisteri Saloniani" &

- Idem., "Battisteri in ambienti rurali nell'Adriatico Orientale", CCARB, vol.19, 1972, pp.267-279 & 281-295; A.H.S. Megaw, "Excavation at the Episcopal Basilica of Kourion in Cyprus in 1974 & 1975", DOP, vol.30, 1976, pp.345-371.
227. Dix, op.cit.
228. S.Brock, "Some Early Syriac Baptismal Commentaries", OCP, vol.46, 1980, pp.20-61
229. J. Lassus, Sanctuaries chretiens de Syrie, Paris, 1947, p.305.
230. Ch.Strube (op.cit.)によると、Weihnachten, Epiphanie, Pfingsten, Osterwocheに洗礼儀式が決められていた。
231. Brock, op.cit.
232. Brock, op.cit.
233. K.Lehmann, "The Dome of Heaven", Art Bull., vol.27, 1945, pp.1-27.
234. ギリシャ・ローマ（帝政期以前）の建築においては、構造と装飾とを分離して論じることとはできず、各々を不可分の要素として、建築が構成されていると考えられる。即ち、視覚的に識別できる構成が、構造形式を示していたと考えられる。
235. vid., 本論第2章.

## 第4章：集中形式集堂に於ける建築構成

洗礼堂同様、初期キリスト教ローマ帝国で集中形式によるキリスト教建築としては、内部で教徒等による儀式を執り行ったと推定される比較的規模の大きな建物がある。これらは規模の小さい洗礼堂のような建築と比較するより、相互の比較を通し、補完的に集中形式としての建築構成の実態、とりわけ内部の立面構成の特徴を探ることが妥当であると考えられる(1)。この理由として、本研究が主として検討する内部の立面構成において、空間や壁面の増大を伴う規模の違いが、架構形式や装飾形式に異なる構成の手法を適用した可能性を否定できないからである。本章においては、遺構間の比較対照に伴い、建築構成の実態を類型的に明示し得るものと考えた。この観点から、前章の洗礼堂における構成の規範に準拠し、規模の大きなキリスト教の宗教建築に付いて検討し、遺構間の対照によって集中形式の建築構成の実態と造形理念の表現として共通する構成を明らかにするものである。また、初期キリスト教の主要な儀式を執り行う場は、一般的にエクレシアと呼ばれている。この語の原義としては「人々の集まる場所」を指摘できる(2)。この原義的な内容から、本論では儀式を執り行う建築としての集会施設を「集堂」という名称で総称する。

初期キリスト教の集中形式の遺構は、表4-1に示すように、北アフリカ沿岸を除き、帝国領内に分散して見いだされる(3)。遺構数は少ないものの、遺構の特定地域への集中はみられず、帝国における建築形式として一般的に受け容れられていたことが判る。

### 第1節：平面構成

集中形式の集堂については、教会堂D(図4-1)とセルギオス・バツコス教会堂(図4-2)を除き、附属施設を持たない独立した構造体と看做すことができよう(4)。初期キリスト教ローマ帝国に於て、機能的に汎用性をもつ建築は長堂形式と考えられている(5)。そのため、

この集堂自体の平面構成を、当時広範な使用の認められる長堂形式の教会堂の平面の構成単位に準拠するものと看做し、その対応関係を検討したのが表4-2である。即ち、長堂形式の教会堂における平面の基本的な構成単位として、アトリウム・ナルテックス・身廊・側廊・2階回廊・ベマ・アプスを選定し得る(6)。表4-2においては、こうした基本的と考え得る構成単位で、対応しない集堂も多い。このうちセルギオス・バックス教会堂、サン・ヴィターレ聖堂(図4-3)、テサロニキのロトンダ(図4-4)、ガリチン山のテオトコス教会堂(図4-5)、教会堂D、ファールの教会堂(図4-6)、コンジューの教会堂(図4-7)においては、アトリウムや2階回廊の欠損や存在不明があるものの、全般として長堂形式に準拠した構成単位によって平面が構成されている(7)。一方、幾つかの構成単位については、概ね遺構の中に存在を確認できる。即ち、身廊・側廊(周歩廊)・アプス・ナルテックス(前室)に相当する構成単位は、集中形式の集堂全般に互に見いだすことができる。また、ベマを欠くものもあるが、エウフェミア教会堂(図4-8)身廊のように、調度による構成として設けることも可能であることから、現状において失われている遺構もあると推測される(8)。このように集中形式の集堂にとって、これらの構成単位は不可欠なものとして、集中形式の平面構成に規範的に援用されたものと推定される。

次に、身廊の外側を周歩廊(側廊)は回るが、平面においてアプス前部に相当する部分がベマに当てられている(9)。このベマの身廊に面する柱間は、身廊の他の柱間より広く取られる例もみられ、平面構成における重要なベイであったと推測される(10)。更に、周歩廊はこのベマによって分断されるため、結果的に聖域に向かう2つの側廊と看做すことができる。このことは、集中形式の集堂においても、周歩廊の一部を当てる聖域は、集堂の他の部分より分離された領域であることを示している。一方、エウフェミア教会堂では、教会へ改修時に西側外壁に新たに扉が設けられ、東側の聖域に向かう方向性が与えられた(11)。即ち、身廊からの聖域の強調、

また側廊の聖域への繋りにおいて、集中形式の集堂では聖域への方向性が平面構成で企画されていると考え得る。このように形態的な平面の比較ではなく、集堂の方向性についてみると、長堂形式と集中形式とは類似を認めることができる。

一方、平面構成において身廊と側廊の分離形式をみると、遺構を概ね2種類に分けることができる。即ち、一方は同種類の柱を立て並べ身廊と側廊を分離する形式であり、他方は2種類の柱によって分離されるものである(12)。同一の柱を用いる集堂には、ステファノ聖堂(図4-9)、サンタ・コスタンザ教会堂(図4-10)、ファルールの集堂(13)が相当する。これに対し、2種類の柱が用いられた集堂では、柱の構成材料に差を認め得るものもある(14)。サン・ヴィターレ聖堂では、八角形の各隅に立つ柱は煉瓦を積み上げて作られ、この不整形な煉瓦柱の間に設けられるエクセドラに切り出された石柱が2本立てられている(15)。また、セルギオス・バッコス教会堂では、同様に各隅に煉瓦層と切り石を交互に積んだと推定される不整形な柱と、その間のエクセドラに石柱が2本用いられている(16)。また、この工法はコンスタンティノーブルで同時期に建てられたエイレネ教会堂にも認められる(17)。このように、2種類の柱は形態の相違ばかりでなく、建築構成における構造的な体系(システム)の相違も示していると考えられる。また、この2種類の柱構成のみられる集堂に限り、2階回廊が設けられている(18)。

このように、平面構成をみると、集中形式の集堂といえども、聖域に向かう方向性が認められる。更に、構造の体系化に関連して、身廊と側廊の分離形式に2つの類型が見いだされる。従って、この類型を内部の立面構成に敷衍することで、造形理念の建築構成に対する表出の実態が明示されることが考えられる。そのため、以下の節で、修理・発掘報告から、創建時の内部の状態を復元できる集堂について、建築の構成を検討する。

## 第2節：サンタ・コスタンザ教会堂

### 第1項：概要

この集堂はコンスタンティヌス帝の娘コスタンザ（コンスタンチナ）によって、殉教者アグネスを奉る教会堂として建てられた聖アグネス教会堂の東側に、この長堂形式の教会堂と壁を接して建てられている。この遺構が教会堂として使用されるようになったのは、1254年に教皇アレキサンダー4世のコスタンザへの献堂による(19)。このように、教会堂としての献堂時期からも明らかなように、創建時の建築の機能は文献的に明かではない(20)。一方、バチカン所蔵資料Liber Pontificalisによると、聖アグネス教会堂には6世紀に洗礼堂のあったことが判っている(21)。サンタ・コスタンザ聖堂には、今日失われているが、後世の記述から、ドームに川を描いたモザイクのあったことが判っており、そのため洗礼堂として使用されたと推測する者もいる(22)。しかし、洗礼堂にとって不可欠である洗礼盤が発見、ないし報告されていない。従って、聖アグネス教会堂の洗礼堂をこの集堂の創建時の機能とする論拠は乏しい。また、残された周歩廊のヴォールトのモザイク、更に記録から追認されるドーム部のモザイクの図柄内容に(23)、バックス神との関連の深いものが多い(24)。従って、キリスト教とは異なった宗教の建築とする考えもあるが、Michelは初期キリスト教におけるカタコンベの図柄との類似性を指摘し、当該の建築をキリスト教関係のものとする(25)。

この建築物の機能は、上記した建築に用いられた図像からではなく、建設の経緯によって明らかにできる。即ち、コスタンザによって建てられた建築は354年に彼女がアンティオキアで死亡すると遺体をローマに運び、この集堂に安置していることから、4世紀中期には既に建造され、機能的にはコスタンザの霊廟として建てられたことが判る(26)。従って、初期キリスト教建築の霊廟として建てられたものであり、集会等の機能ではなく、遺体の安置が建築本来の機

能であったと考えられる。

その後、ルネサンス期に行われた修理で、モザイクの大半が壊された(27)。現在目にし得るモザイクは周歩廊外壁に設けられたニッチの内の3つと、周歩廊のヴォールトに限られている。この2つのモザイクは図の形式が異なっており、年代的に相違を示すと推定されている(28)。この他の内部装飾は失われているが、内部状態はルネサンス期以降、ここを訪れた者のスケッチや記述を通して再現できるとされる(29)。

## 第2項：建築構成

創建時の構造体は3つの単位から構成されていた。円形の身廊と周歩廊からなる中心を構成する部屋、その前室として両側にアプスをもつ部屋、そして、円形の構造体を取り巻く円形の列柱廊とである(30) (図4-10)。外側の周歩廊のような吹き放ちの列柱廊は、前室とも内部の周歩廊ともつながっておらず、建築外部の装飾形式として用いられたと考えられる(31)。即ち、建築の内部と関係せずに、外部の列柱廊が設けられていた。前室は現在失われているが、円形の構造体外壁面に残された痕跡や、一部入口左側の前室壁面が残されており、概形を推定し得る。それによれば、前室は両側に半ドームを架けられたアプスがあり、アプス部を除く4角形の部屋は、上部にヴォールトを架けられた。入口は前室の北側の壁の中央に設けられた。

内部周歩廊は外壁に4つの4角形のニッチと10個の半円形のニッチがある。4角形のニッチの内、南側の棺の置かれる位置の外壁に設けられたもの、半円形のニッチの内、入口から棺に向かう軸線と直行する軸上にある2つのニッチは、他より大きく設けられている。従って、直行する軸線を平面上に認めることができる。事実、身廊と周歩廊を分ける2本一組の柱列で、柱間寸法とアーチの立ち上がりがこの軸上では大きくとられており、平面的ばかりでなく、立面的にも軸線が強調されている(32)。従って、前室の入口から伸びる

軸線の到達点に棺があり、この場所を聖域化していることが判る。この周歩廊の天井はヴォールトが架けられているが、身廊の12組の柱と対応して、12の面に分けられている。このうち、棺上部は周歩廊の屋根より突出して小ドームが架けられており、他の分節化された周歩廊の単位と、構成の相違が現れている。更に、残りの11個のヴォールト面について、図4-11のように、モザイクの図像内容が対称性を示している。また、モザイクに於て、聖域となる棺のベイに近づくとつれ、ヴォールト・モザイクが壮麗になる点が指摘されている(33)。このように、円形平面にもかかわらず、<sup>南北</sup>入口から棺へ向かう軸線に対し、対称になった構成が認められる。

更に、周歩廊のヴォールト基部に17個の細く小さな窓が設けられている(34)。棺を置かれた聖所の小ドームのそれぞれの面に3つ開けられた開口と異なり、11面からなるヴォールト面に17個の窓を割り付けている点、この開口によってモザイク画が一部切り取られている点から、採光用に後世設けられたものではないかと推測される(35)。

身廊部は直径11.33m、ドーム高さ19mからなる。低層部を2本一組の柱とし、それをアーチでつないでいる。その上は、ドラム部の中層を形成し、中層の上部に12個のアーチ型の窓が設けられる。更に、その上に、ドームの上層が形成される。このように、建築の構成単位において、身廊部は3層によって構成される。しかし、15世紀の身廊部のスケッチCodex Esculialensis (図4-12)によると(36)、中層部のドラムは擬似構造部材化された平面的な建築構成において、2層に分節されている。低層部とはアーチ上部にフリーズ面を設け分節し、中層部の上下は平面的なエンタブラチュアによって分節する。ここで用いられるエンタブラチュアに於いては、フリーズ面にアーケード状のものが描かれており、本来のフリーズというよりアーキトレイブとコーニスに挟まれた独立した面としての印象が強い。ドーム面との見切りはコーニスにより行われている。中層の各層は柱型を模したものにより面を分割し、柱・梁式構成を擬装し

ているが、低層からの垂直方向の柱列は各層で異なっており、連続していない。また、ドーム面に於いても12本のリブを示す帯によって面を分割されていたと言われている(37)。このように、ドーム面と低層部は連続しているが中層部で用いられる平面的な柱型で、この連続は打ち壊されている。従って、垂直方向の連続感は得られていない。このように、各層がそれぞれ独立した壁面の分割方式を採用しており、統一的な分節の規範を認めることはできない。

壁の構造は、表面を煉瓦とし内部にコンクリートを詰めたもので形成される。ドームに於いては12本のリブを架構し、その間をコンクリートで固める形式である(38)。この形式はパンテオンのドームが材料の軽量化によって構成されるのと異なり、構造的な発展によって達成されたものと考えられている(38a)。また、入口左側の外壁の中に、周歩廊の屋根に続く階段が設けられている。

以上のことより、創建時の建築の概要は図4-13のように推定し得る。

### 第3項：内部意匠

建築部材や意匠で現在目にし得るのは、身廊低層部の柱・柱頭・ルソート、それに周歩廊のヴォールトに於けるモザイク、また3つのニッチのモザイクに限定される(図4-14)。

身廊部の柱はドラム部の壁厚に匹敵する2本一組の花崗岩の柱で、柱頭としてコンポジット形式が用いられている。その上に、アーチの底盤を構成するルソートがのっている。

この他に建築部材は残されていないが、外壁の見切り材として必ずコーニスが巡っていることから、前室や周歩廊に関しても壁とヴォールトの見切り材として、コーニスが用いられたと推定される(39)。

また、周歩廊のモザイク、更にドーム、小ドーム等のモザイクに於いて、幾何学的な抽象模様と人物や田園風景という具象的な図像とが同一面内に混在していることが判る。この図柄としては以下の

ようになっている。入口の箇所から、幾何学模様、次の左右両面は幾何学模様と海の動物、次の左右両面は鳥・動物・キューピット・直線の絡んだ図、次の左右両面は胸像と葡萄の収穫、次の左右両面は胸像・人物・花・幾何学模様、次の左右両面は花・果物・アンフォラとなっている(40)。このように、図像そのものは異なる宗教の図柄が多用され、キリスト教に關係した図柄は認められない。また、こうした図像構成に於いて、小ドームにキリストと12使徒が描かれていたと推定される点、この棺のある箇所のニッチのヴォールト面にコスタンザのモノグラムが描かれている点から、建築構成における最も重要な部分であることが判る(41)。

一方、壁面は既に記したように、色大理石を貼付け、建築の部材構成を見かけ上で表現している(42)。この構成に於いて、柱・梁式構成が模倣されている。しかし、既にみたように、中層部の色大理石貼付けのエンタブラチュア部で、フリーズ構成に正規の建築部材の構成とは異なり、装飾的な取扱を認め得る。また、周歩廊壁面は現在煉瓦壁のままだが、ドラム部の構成から、同様に大理石の貼り付けと推定される。

床は白黒のモザイクにより具象・抽象の図像が描かれている(43)。ここでも、図柄はバッコス神に關係したものである。

以上のように、建築の意匠・部材構成に於いて、床を除くと図像的な装飾は曲面に用いられ、垂直面については建築の部材構成を模した装飾が用いられている。

また、採光は中層部上部に限定され(一部小ドームにもある)ドームを中層部の光の層によって分節するが、下から上へとの連続感とは各層の独立した壁面分節によって妨げられている。

### 第3節：ローマのステファノ聖堂

#### 第1項：概要

この集堂はローマのカエリアン丘の頂に立つ教会堂である。1958年より、Soprintendenza ai Monumenti del Lazioによって行われた発掘により、古くはセヴェルス帝時代のcastra peregrinorum（庸兵宿舎）の遺跡が発見されている(44)。

教会堂は身廊・側廊・外周部の3つを同心円状に巡らした平面で構成される(図4-9)。外周部の東側には、東端にアプスをもつ礼拝堂が僅かに北へ偏心して設けられている。身廊と側廊とは22本のイオニア式柱頭をもつ柱で分離され、身廊中央部に聖壇が作られている。柱の上部はエンタブラチュアによってシリンダー状の壁が支持され、この壁の上部に22個の窓が開けられている。現在、身廊を横断する壁が2本の柱によって支持され、身廊上部の小屋組を支えている。身廊の天井は平天井である。

側廊は現在、外周部との間を壁で塞がれているが、イオニア式、或はコリント式の柱頭を持ち、その上にインポストをのせる柱によって、アーケードを形成する。この盲壁の上部には円形のオクルスが開けられ採光している。天井は傾斜した屋根裏を直接みせている。また、両側には半円形のアプスがある。

外周部は外周壁と側廊壁の間を占める部分で、現在、そのほとんどが壊れた状態にある。建築として使用されている部分は東側で、教会堂への出入口と東側礼拝堂とがある。礼拝堂には聖壇が置かれ、東端にアプスが設けられている。

発掘の結果、教会堂周囲には付属施設に相当する司教館や洗礼堂も発見されず、独立した一棟の建物として計画されたものであることが判る。また、後世の改修が各所に施されているが、痕跡や発掘結果から創建時の状態を知り得る。

教会堂に関する建築記録はバチカンに所蔵される記録から明らかにすることができる(45)。この記録によれば、教会堂はシンプリシウス1世により468-483年にかけて建てられ、建設後まもなくして外周壁にある出入口の多くが塞がれた(46)。創建時の教会堂の用途は明確でない。記録上、常駐する僧侶がおらず、必要な時に近在のラ

テラン聖堂から僧侶を呼んだ点、また5世紀後半からローマで殉教者ステファノの儀式が普及した点から、聖ステファノに捧げられた殉教者礼拝堂であったのではないかと推定されている(47)。しかし、この教会堂には聖遺物が発見されていない。また、記録上にも聖遺物の安置は触れられていない。しかし、Krautheimerはこのように聖遺物のない殉教者礼拝堂は、5世紀のローマに於いては一般的であったと考えている。7世紀になると、ステファノ聖堂には東側礼拝堂に聖プリムスと聖ファリシアヌスの聖遺物が安置された(48)。

その後、12世紀までに現在に近い状態に改修された(49)。この改修により、東側の礼拝堂を除き、外周部の構成が放棄された。また、側廊と外周部のアーケードが壁で塞がれ、西側にアプスが設けられる。更に、身廊部を横断する壁が設けられ、上部小屋組を支えることになった。

15世紀にはニコラス5世によって修理が行われた(50)。この1452年から1453年にわたる改修によって、北東入口部は玄関として整えられ、東側礼拝堂の北側壁に扉が設けられた。また、屋根も架け替えられた。更に、ゲオルゲ13世によって1580年、側廊の壁にフレスコ画が描かれ、身廊中央部に聖壇が設けられた(51)。記録上、1736年に最後の修理として、東側礼拝堂に聖壇が設けられた(52)。

ステファノ聖堂の建築形式は西欧世界に類例がなく、東方世界に類似した殉教者礼拝堂があることから、東方の影響を受けた建築と考えられている。

## 第2項：建築構成

教会堂は発掘結果から、身廊・側廊・外周部の3つの同心円から平面を構成される。身廊の直径は22.5m、側廊の幅9.40m、外周部の幅10.60mとなっている。外周部は東西南北にほぼ位置する4つの礼拝堂と、その間の部分の8つの区画に分割されている。外周部の礼拝堂間の部分には、外周壁から3.58m離れたところに壁が巡っている(53)。この壁の内側の地下に貯水槽のあることから、内側が中

庭になっていた。即ち、この壁は通廊として外側が用いられ、内側は吹き放ちの中庭となっていた(54)。

身廊は22本の柱で側廊から分離される。柱上部のシリンダー状の壁は床から21mの高さまで、積み方の形式から創建時のものと推定される(55)。このシリンダー状の壁は柱によって支えられるが、シリンダー状の壁が創建時のものであることから、柱の構成も創建時のものとみなし得る。柱の構成は礎盤・柱身・柱頭・エンタブラチュアからなる。柱頭は意匠間に僅かの差を認め得るが、ほぼ均一なイオニア式柱頭である(図4-15)。一方、柱身は灰色の花崗岩で作られているが、フルートはなく、それぞれ太さ長さに差がある(56)。そのため礎盤の高さを調整して、エンタブラチュアまでの高さを揃えている(57)。このことから、柱身は他建築からの転用材と考え得る。エンタブラチュア自体は、アーキトレイブ・フリーズ・コーニスから形成され、正規の構成を示している。上部の壁は厚さ0.85mで床から14mの高さに窓の敷居があり、シリンダー状の壁に沿って22個の窓が開けられている。窓開口のアーチが始まる高さで、壁が帯状に突起している。従って、この箇所がドームの迫元と考えられている(58)。Krautheimerは計画としてはドームが企画されたが、実際にはシリンダーの壁厚が薄いことから、またスパンが広いことから、ドームが架けられなかったものと推定している(59)。一方、Deichmannは後期ローマの建築書にみられるドーム工法として*camerae canniciae* (木造ヴォールト・ドーム架構)により、大スパンと壁厚の問題は解決し得るものと考えている(60)。即ち、ドーム架構として煉瓦・碎石・コンクリートという材料ばかりでなく、穴開き煉瓦や木造も考慮し得る。このうち木造のドームに於いては遺構として残る可能性が少ない。従って、類例をローマに見いだせないとしても、工法自体が普及していた事実から、また身廊部の構成を仮設でやり残すとは考えがたい点から、木造に上塗りをしてドームにみせる、擬似ドームが身廊に架けられていたと考えられる。

側廊と外周部との間は、柱によって分離されている。柱は礎盤・

柱身・柱頭・インポスト・アーキボルトによって構成される。柱身の長さに差があり、礎盤によって高さが調整されている点、また南側礼拝堂を区切る中央2本の柱にフルートをもつものがあるため、柱身には転用材の用いられたことが判る(61)。更に、礼拝堂との境に用いられる柱と、他の部分の柱とでは、長さ太さが礼拝堂の境に用いられる柱の方が長く太い(62)。礼拝堂との仕切りに用いられる柱頭はコリント式であり、インポストの前面と背面に十字形の浮き彫りがある。また、教会堂の他の部分に使用される柱頭はイオニア式であり、インポストに花形の模様のあるものがある(63)。更に、礼拝堂に於いてもアーチの起拱点は東側礼拝堂が一番高い。同時に、アーチ起拱点は東西の礼拝堂が南北の礼拝堂より高く構成されている。従って、教会堂の軸線は東西方向が優位性をもち、とりわけ東側礼拝堂が重要であったと考えられる。側廊・礼拝堂のスパンドレル及びアーケード上部の壁は、中央部のシリンダーと同じ積み方であり、創建時のものと推定できる。この側廊の煉瓦壁に開口部の痕跡が認められないことから、側廊部の採光はアーケード全てが中庭に向かって吹き放ちになっていたと考えられる。側廊部での天井はヴォールトの痕跡が壁面に認められないことから、木造の天井が架けられたと考えられる(図4-15)。

外周部で残されている箇所は、東側に限定されるが、発掘から類似した構成が各面に対して行われていたことが判る。礼拝堂は側廊とアーケードで区切られ、側壁に外周部にある通廊から入る扉、また中庭に開く中央部の高くなった3連アーチがある。外周壁は中庭に面した通廊の壁より上げられており、礼拝堂の屋根がこの通廊の屋根より高い位置に架けられた。壁面にヴォールト等の痕跡が認め得ないことから、通廊・礼拝堂共木造の小屋が架けられたと推定できる。外周壁に残る痕跡から、礼拝堂は教会堂の外部に対し、中央に円形の窓、その両側に十字形の窓を配していたことが判る。

通廊には外からの出入口が2箇所ずつ設けられ、通廊によって礼拝堂へと達する。中庭とこの通廊の間は、壁体の存在を示す以外は

不明であるが、計画上の合理性から、また2つの部分で柱等の断片の発見が報告されていないことから、煉瓦柱によるアーケードが構成され、中庭に向かって開かれていたと推定されている(64)。

このような構成に於いて、教会堂への出入口は東側の一部を除き、初期に塞がれたと推定されており(65)、対称形の形態でありながら、使用に際して東側方位の優位性が形式として現れている。更に、東側礼拝堂の構成から、礼拝堂間にも優位性が現れている。このように、建築の制作者によって行われた設計・計画に於ける優位性の明示として、意図的に東西軸が暗示されるものと、建設後使用に際して行われる制度的な優位性の導入という、2つの側面をこの集堂に認めることができる。

仕上げについては調査によって壁面や床に残る痕跡から、具体的な形式を知ることができる(66)。

床の仕上げは身廊・側廊・礼拝堂で大理石を貼っており、中庭はモザイクで仕上げられている。一方、通廊には床の仕上げが認められない。

壁の仕上げについては15世紀の記録で、以下のように記されている。

tecto...carentum marmoreis columnis et crustatis  
varii coloris marmors parietibus musinoque...con  
musaico et con tavolette et tondi di porfido et  
serpentino et con fogliami di nachere et grappoli  
d'uve et tarsie et altre gentileze(67).

このように、モザイクや大理石が認められる。柱は全て灰色の花崗岩で形成されている。柱頭は意匠的な類似性から、同じ工房で作られたものと考えられている(図4-17)。

身廊上部の壁は窓敷居まで、壁面に付け柱を模した図像によって構成されている(68)。従って、この面には付け柱としてスタッコと壁面には大理石か、或は面全体をオブス・セクティルによって形成していたと考えられる。また、側廊については、側廊のアーチのアー

一キヴォルトに貼られた大理石が、壁面から4～5cm突き出ている。従って、石貼りのための見込みがあり、アーケード上部の壁面はオプス・セクティルによって構成されていたと考えられる。また、この面には一部スタッコの痕跡もあり、大理石・スタッコという2種の仕上げ材料が同一面に用いられたと考え得る。礼拝堂は側壁及び外周壁のアーケード面の高さまで、壁に残された穴の状態から、大理石が張り付けられていたことが判る。更に、アーケード上部にはスタッコのモールディングがアーチに沿って付けられている。このアーケード面から上、即ちスパンドレルを含む壁面には、痕跡から色付きのプラスターで壁を仕上げている。また、側廊の中庭に面した壁には大理石が貼り付けられていた。

このように、装飾や建築部材には、全般として光をよく反射し色彩感に富むものを多用しているが、個別的な彫塑的意匠では劣悪な造作のものが多い。一方、色彩によって装飾性を高めているが、高い位置にはスタッコ等の材料を用い大理石を擬装している。このように、壁面や床が色彩に富んでいることから、擬似ドーム面も、モザイクや大理石を荷重の点から支えられなくとも、色付きのスタッコのような材料によって飾られていたと推測される。

教会堂は身廊部でドームが窓のアーチ起拱点を迫元とするため、窓はドーム層に属すると考えられる。また、内部立面は3層から構成される。ここで中層部は図像によって建築の部材構成が擬装され、建築構造の実体としては壁によって構成される。また、聖域の位置は明かではないが、以上の議論を通して明らかなように、東側の礼拝堂が優位性をもつことから、この場所に設置されたと考えられる。

以上の点から、復元案として、図4-18を示し得る。ここでドーム部は木造の擬似ドームと推定したことから、横力が余り加わらないものと考えられ、ライズの低いものとも考えることもできる。即ち、覆い小屋としての屋根を架ける際、ドームを低くすることが合理的と思われる。

## 第4節：テサロニキのロトンダ

### 第1項：概要

マケドニアの都市テサロニキは紀元前から商業都市として発展し、ビザンティン期には帝国第2の都市であった(69)。この都市でエグナティア街道の北に、ガレリウス帝によって4世紀初期に円形の構造体が建てられた。この構造体は列柱廊でガレリウス帝の記念門につながられていた(図4-19)。更に、この記念門を中心にして付近に戦車競技場、宮廷が建てられており、ロトンダはテサロニキに於ける宮廷施設としての機能を推測させる。今日この構造体はガレリウス帝の霊廟として建てられたものと考えられている(70)。

この円形構造物ロトンダは、その後6世紀までに教会堂への改修が行われた(71)。改修後、教会堂は一般的にΑσωμυρτι(聖天使達)と呼ばれたが、正式の名称に付いては明かではない(72)。現在の通称、聖ゲオルギウス教会堂との名称は16世紀以降のものである(73)。

その後、1591年にトルコ支配下でホルタジ・シュレイマン・エフェンチと呼ばれるモスクに改修された(74)。教会堂に付属するミナレットはこの時に設けられたものである(図4-20)。

現在の遺構でガレリウス帝によって建造された部分はほぼ残されているが、ドームとヴォールト部に施されているモザイクを除き、細部意匠はほとんど失われている(75)。また、周辺の発掘によっても付属施設が見つかっていないことから、ロトンダは独立した教会堂として使用され、テサロニキの宮廷との関係の深い付属礼拝堂的な性格を有していたと推測することができる。

### 第2項：ガレリウス帝時代の建築構成

ガレリウス帝の創建したロトンダは、ガレリウス帝の記念門から北へ伸びた列柱路によって達することができる。構造体は外形が円形で、厚さ6.3mの壁に7つのニッチが設けられている。南側は出入

口の箇所、入口両脇の壁の中に屋根に登る階段が設けられている。壁はドームの迫元まで厚さを変えずに立ち上がり、その上部は厚みを減じ、ドームに架けられる木造の屋根を支持する。ロトンダ外部は聖域の領域を区画する壁によって囲われていた(図4-21)。

内部は3層によって構成されていたと考えられる(76)。低層は南側出入口を除き、7つの4角形のニッチによって構成され、上部はヴォールトが架けられた。この大きなニッチの間にある壁面に、小規模なニッチが設けられている。ニッチのヴォールトはヴォールト頂部の中心から煉瓦を十字型に配列させる形式で構成され、4世紀初期に小アジアから移入された工法と推定されている(77)。

中層部は上部をアーチ型にした大きな窓が低層部のニッチ上に軸を一致して設けられている。この窓は、外部の開口面に対し、内部の開口面が大きくなっている。

上層部はドームによって形成される。ドームの迫元に半円型の開口が8つ、中層部の窓と窓の中間の位置に設けられている。更に、ドーム天頂部にはオクルスが設けられている。ドームの直径は24.5m、床から天頂までの高さ29.8mであり、ほぼ幅と高さと同じと考えることができる(図4-22)。

ロトンダの壁の工法は、煉瓦層と切り石の層を交互に積み上げるものである(78)。また、ヴォールトやドームやアーチは全て煉瓦によって構成されている。

### 第3項：キリスト教・教会堂の建築構成

教会堂へとロトンダを改修した際、いくつかの分節された部分が構造的に付加された。即ち、東側のニッチを改修して東へ延ばし、ベマ・アプスを設けた。また、この他にニッチの外壁を壊し、外側に幅8mの周歩廊を設けている。周歩廊はベマと開口部に通じているが、壁の存在によって、これら2つと分節されている。更に周歩廊の西側に部屋が設けられ、周歩廊と通じている。周歩廊の南側には出入口が設けられ、左右に円形の塔を配している(79)。この南側

の出入口棟は、2層から構成されていた(80)。従って、平面としてロトングは教会堂の一般的構成である身廊・側廊・ベマ・アプス・ナルテックスを備えるものであった(81) (図4-4)。

その他、ドーム天頂にあったオクルスが埋められ、ドームは塞がれる。また、周歩廊の外壁へは身廊部の外壁の窓下端から、片流れの屋根が架けられた(82)。周歩廊は付属する出入口棟の他に、直接外部に通じる扉はベマ両脇と、南側出入口棟の両脇の壁に設けている。教会堂で増築された部分は、煉瓦面をみせたオプス・カエメンティシウムとされる(83) (図4-23)。従って、ローマ的な工法が改修時に用いられている。

その他の構造上の変更は認められない。平面形態として円形であることから殉教者記念会堂とする意見もあるが、記録上該当する殉教者が不明な点、教会堂としての側廊に匹敵する周歩廊をもつ点、また宮廷関係の建築物を含む地域にあることから、更に洗礼堂や司教館のような司教座聖堂に付属する施設が見あたらないことから、宮廷との関係の深い、宮廷付属の礼拝堂との考えが妥当な推定と言えよう(84)。

#### 第4項：内部意匠

内部の装飾はドームとヴォールトに残されたモザイクを除き残されていない(図4-24)。このモザイクは教会堂への改修時に施された(85)。しかし、痕跡からはアプス部の半ドームにもモザイクの施されていたことが判っている(86)。

ヴォールト面のモザイクは格子状に分割された面に花鳥の図が描かれている。

ドーム部のモザイクは4層に分割され、現在最上層の4層目と3層目と2層目はモザイクの一部が残されているだけである(図4-25)。1層目は東・西・南・北・東北・東南・西北・西南と、8つの面に分割され、それぞれに独立した面として扱われている。東側のベマ上部の面では、モザイクの大半が失われている。各面のモザイク

は前景の人物とその名前、また一年の月の名称を除くと、背景の建築を描いた内容は2組一対になっている。即ち、東西(87)・南北・北東と南東・北西と南西とが同じ建築の図柄で占められている。従って、教会堂に於いての構成で、東西軸に対して対称形の図像配置と看做することができる。これらの面に用いられる建築物は吹き放ちの庭園建築に類似し、それを正面から眺めたものとなっている(図4-26)。即ち、建築物として、アプス・エクセドラ・シボリウム等を認めることができる。このように建築物としては同一の形式であるが、その意匠構成に於いて相違が現れている(88)。具体的には各建築物は2層からなり、形式としてスカエナエ・フロンに類似している。西側の面ではカーテンが吹き放ちの柱に架けられており、チャンネルスクリーンとして西側からの入室が暗示されている。従って、身廊への入室に於いては西側が正式の入口であったと推定できる。

2層目はほとんど失われているが、1層目のリングと接する部分にサンダルを履いた足が見えており、使徒が描かれていたと推定される(89)。また、この上層の3層目には4層目との接合部に4人の天使の顔がみえ、現在失われているが、4層目のキリストを描いたリングを支えていたと推定されている(90)。

各層はモザイクによるコーニスによって明確に分節される(91)。ここで、1層目に描かれた人物は俗人であることが判り、記された月も6ヶ月分しか示しておらず、一般的な教会暦とは異なっている(92)。従って、画題内容を検討すると、残されたモザイクでは宗教的な図像がドーム部に限定され、更にドーム部に於いても世俗的な世界からの分離はドーム全面に及ぶものではなく、2層・3層・4層に限られる。1層目はこの神聖な世界との境界を示す領域として扱われている。

一方、1層目に於いて描かれた建築物の意匠に注目すると、エンタブラチュアと柱の柱身には図柄の統一がみられないが(93)、柱頭については質的な差はあるものの、1層目をコリント式、2層目を

イオニア式としている(94)。

現在内壁面の仕上げについては何も残っていないが、壁体に規則的に開けられた穴から、大理石が貼られていたと推定できる(95)。Kleinbauerは、壁面がオプス・セクティルにより構成されていたと推測する(96)。また、中層と低層の見切りについても不明であるが、ドームのモザイク面で見切りとしてコーニスを描いていることから、コーニスかエンタブラチュアに相当する部材が巡っていたと推測できる。

この他、ロトンダで用いられたアンボ(図4-27)が発見されているが、アンボ台座に彫られた柱頭の形式から、5世紀前半の制作と推定されている(97)。このように、司祭による集会を前提とする説教壇のあることから、ロトンダは殉教者記念会堂としてではなく、宮廷付属教会堂として一般的な典礼が行われたと推定し得る。

## 第5節：エウフェミア教会堂

### 第1項：概要

イスタンブールのメイダーニ(戦車競技場)とディバン・ヨル(メーゼ)とピンビレディレク(フィロクセノスの貯水場)の間にある場所に、1939年遺跡が発掘された。この遺跡はビザンティン帝国時代に言及されているエウフェミア教会堂と推定された。その後、1942年より本格的な調査が進められ、集中形式の遺構はエウフェミア教会堂と確定された。

現在の状態は、低層部の壁体が残されているのみである。しかし、遺構内から数々の部材の断片が発見され、初期の聖域の構成を再現し得る。また、壁面の一部にはフレスコ画が残されている(図4-28)。

この六角形の構造体は建てられた位置や碑文から、テオドシウス2世の教育者であった宦官アンティオクスの私邸として建てられた

ものと考えられている(98)。碑文に用いられたアンティオクスの称号から、また用いられている煉瓦の刻印から構造体は416~418年の間に建てられたものであることが判る(99)。アンティオクスの私邸として創建されたことは明らかだが、建築としての用途は不明である。しかし、平面形式から、また外側に設けられた開放的な空間から、構造体は庭園建築の一種として建てられたと推定されている(100)。

一方、殉教者エウフェミアの聖遺体はペルシャ帝国の東方領進出によって、7世紀初頭首都に移送された(101)。7世紀初頭の歴史家シモカッタは6世紀の構造体について、以下のように記している。

*τῆς βαβυλικῆς οἰκίας ... τοῦ Ἀντιόχου  
προβαγορευμένης (102)*

従って、7世紀に於いても、アンティオクスの私邸は相変わらず宮廷内の住居として使用されていることが判る。しかし、考古学的な検討から、教会堂への改修時期は6世紀と推定され(103)、年代については矛盾が生じる。従って、宮廷内の世俗建築は、当該の教会堂を含む建築複合体と考えられ、その一部の庭園建築について教会堂への改修が行われたと考えられる。いずれにせよ、改修当時の教会堂は殉教者エウフェミアを奉ったものではなく、エウフェミア教会堂という名称自体教会堂として成立以後のものである(104)。

教会堂になって以後、766年にイコノクラスムにともない、コンスタンチン・コプロニモス5世の命令により、教会堂は世俗建築に変えられ、聖遺体は取り除かれた。この時代、教会堂は一時的に武器庫や倉庫として使用されている(105)。796/797年にかけて、再び教会堂に改修され、この時フレスコ画が描かれている(106)。13世紀初頭、火災の被害を受け、その後、修理と共に新たなフレスコ画が描かれた。トルコ占領後、宮殿建築の建設に伴い、取り壊されている。

## 第2項：建築構成

歴史的な経緯からも明らかなように、ビザンティン全期を通じ、

この構造体は5つの時期に分けることができる。即ち、アンティオクスの私邸であった時期、教会堂に改修され殉教者エウフェミアの遺体が安置された時期、イコノクラスム期、再び教会堂として使用される時期、火災後復興され教会堂として使用される時期である。このうち初期キリスト教期としては、第1期の住宅と第2期の教会堂の時期とすることができる。本論の目的である宗教建築という条件の元に、この構造体は第2期の教会堂が問題とされる。以下の部分は、Beltingによって行われた調査、及び復元を検討し、教会堂の初期キリスト教期の建築構成を考察する(107)。

配置そのものの変更は周辺建造物との関係が明かでないことから、教会堂の構造体に限定される。教会堂そのものに限定すると、アンティオクスの私邸時代(図4-29)に比べて新たな構造物は付け加えられていない(108)。即ち、円形の構造体と接続している4つの独立構造物は霊廟と考えられており、壁の状態から9-12世紀の建造と考えられている。また、初期の教会堂変更時には、エウフェミアの聖遺体しか記録されておらず、これらの構造体に安置すべき遺体もないことから、当時建てられている必要があったとは考えられない。従って、教会堂の計画として設けられるアトリウム、ナルテックス等をここで認めることはできない。更に、南側に相当する面(この面には半円型のニッチではなく、4角形のニッチとなっている)の扉は保存され、シグマ・ポーティコとの接続形式は保持された。以上の点から、教会堂周辺の状態は変更があったにしても、教会堂の建築に関わるものとして行われたものとは考えがたい。即ち、教会堂は私邸の時期と同じく、他建築から分離・独立して建っていた。

Beltingの発掘調査から、教会堂の平面形式は創建時から異なっていない。即ち、教会堂への変更は聖域部の設置、扉位置の変化、及び外周部に設けられた円形吹き放ちの空間に限定し得る。この内、吹き放ちの空間は壁が設けられ、庭園との接続が断ち切られたと考えられる(図4-30)。また、扉位置として、西側ニッチの壁を壊し、外部から入るための扉が設けられた。この扉は教会堂への変更の際

し、東側に設けられた聖域部に対応するものとして、設けられたと考えられる。しかし、主要出入口として私邸当時にあった南側の出入口は教会堂への変更後も、シグマ・ポーティコとの関係から残されている。更に、外部の円形の空間への通行として、聖域部を作ること東側のニッチにある通路を使用できないためか、北側のニッチに扉が設けられた(109)。このようなことから、身廊に相当する空間を中心に、教会堂を構成する基本的平面は私邸時代と相違していたとは考えがたい(110)。

一方、発掘の結果、床の仕上げ構成や床高さについて、この平面は異なっていたことが判る。床の構成は、試作孔の場所により、異なっている。即ち、床面から基礎に至る深さに相違がみられる。しかし、基本的な構成については類似している。基本的には最下層を碎石で固め、次にその碎石をモルタルで地均しし、その上に砂モルタルの層を設け、モルタル層をその上に構成する。この砂モルタルとモルタルの層を繰り返す場合もある。そして、最上面に床として大理石を敷いている(図4-31)。この構成はヴィトルヴィウスの記す床構成よりも、簡略化されている(111)。また、床の高さは試作孔の数が限られるため、確定することはできない(112)。しかし、部分的に明らかにされた箇所から、ニッチ、東西方向の身廊中央部、ベマに於いて、床に段差が設けられていたことを推定し得る。この床高さの変化が教会堂への変更時期のものか、創建時のものか、ベマのように新たに作られた領域を除き、痕跡から明らかにすることはできない。しかし、ニッチを除くとアンティオクスの私邸当時、床高さが変化していた必然性を認めることはできない。とりわけ、私邸当時の建物の軸線は南北方向であることから、可能性として指摘し得る東西1方向の中央部のみ床が高くなっている点は、教会堂に変更されてからと考えるのが妥当である。また、床高さの変化している領域が、ソレアやベマに相当し、教会堂の空間に於ける意味をもつ領域と照応するため、床高の変化は教会堂への変更と共に行われたと考えられる。

壁は煉瓦と切り石を交互に積む初期ビザンティンの工法であり、壁そのものが残されている部分で連続し、均一な積層となっていることから、アンティオクスの私邸以来、変化していないことが判る。とりわけ、既述した煉瓦の刻印からも、壁は創建時、即ち5世紀のものとして確定できる。しかし、壁の各隅は切り石だけが用いられ、主体構造部分を構成していたと考えられる。壁体は低層部のみ残されており、一部にニッチに架かる煉瓦アーチが残っている。従って、低層部のニッチには半ドームによって天井が構成されていたと考えられる。また、西のニッチにはこのニッチの開口部に架けられたアーチを飾るアーキヴォルトの一部が発見されている(図4-32)。年代を検討すると、このアーキヴォルトは13世紀のものである(113)。このようなアーキヴォルトがアーチの前面を13世紀に飾っている以上、形式として初期にアーキヴォルトが存在しなかったとは考えがたい。即ち、教会堂として使用されている以上、アーキヴォルトの装飾そのものが異なるにしても、アーキヴォルトという形式、アーチの前面を飾る形式は初期に於いても存在したと考えるのは妥当である。残された壁面には規則的に穴が並んでおり、壁は大理石張り付けにより仕上げされていたと考えられる(114)。必然的にアーキヴォルトで面を揃える必要があったと考えられる。この壁が6世紀、教会堂として使用されていたとき、どのようなであったかは明かでない。しかし、フレスコ画等が後世のものであること、またモザイクの痕跡も見つかっていないことから、前代の壁仕上げをそのまま踏襲したものと推測される。このように、教会堂に変更されたとき、内部の壁面は前代の壁の仕上げをそのまま用いていたと考えられる。

一方、聖域に関連した部材を除き、他の部材はほとんど発見されていない。従って、内部の建築部材による装飾が皆無に近い状態であったのか、後世に他の建築物へと流用されたかの2点を考え得る。しかし、ベマ部に用いられた部材の残骸が室内にて発掘の際、発見されていることから、聖域に関わっていないとはいえ、他の建築部材が流用されたとは考えがたい(115)。こうしたことから、内部を建

築部材等で飾った可能性は低いと考えられる。しかし、コーニスに匹敵する断片がいくつかみられることから、壁面を分節する部材は用いられた可能性が高い。

一方、低層部より上は残っておらず、Beltingは類例との比較を通して復元をおこなっている(116)。Beltingによって提案された復元案では、低層・中層・高層という3層によって構成されている。当時の遺構から、また平面形態から、この構成は妥当なものと言えよう(117)。また、1階に周歩廊がみられないことから、2階回廊も存在しなかったと推定される。従って、こうした類例との比較を通して提示されるドームの存在、かつスキンチやペンデンティヴ使用によらない曲面形成というBeltingの指摘は十分に是認し得る。こうした教会堂の比較対象として、Beltingはセルギオス・バックス教会堂を取り上げている(118)。しかし、セルギオス・バックス教会堂は6世紀の建築であることと、平面形態が当該の教会堂に比してはるかに複雑である。むしろ、エウフェミア教会堂の平面形態は、当時単純な正多角形からなる洗礼堂の建築の形態に類似している。こうした洗礼堂に於いて、平面の類型をもとに遺構を検討すると、建築の構成は、高・中・低層という3層からなっている。更に、ローマ帝政期の建築を含め、ドームをのせる建築に於いては窓が中層部に設けられている(119)。

以上のように、断面の構成に於いて、Beltingの復元案は比較対象として適切さを欠くが、十分に納得のゆくものである(図4-33)。こうした構成における概略の推定は妥当なものとしても、発見されている痕跡や断片からでは、内部の壁面の構成、更には分節化を十分に窺うことはできない。また、低層部の大理石貼付けの壁仕上げに対し、中層・高層部がどのようなものであったかも明<sup>ら</sup>かではない。

### 第3項：聖域部の構成

残された部材によって、聖域部は復元が可能となっている(120)(図4-34)。各部材に用いられる意匠の特徴から、6世紀の他の地

域の類例と照合し、聖域部の成立を6世紀と推定することができる(121)。このBeltingによって復元された図によれば(122)、聖域部の構成はテンプロンによって囲まれ、中央と西側面に出入口が設けられる。更に、囲われたベマの中央部に聖壇が置かれ、上部にシボリウム(バルダッキ)が架けられていた。アプスには階段状のシンスロノンが作られ、シンスロノン内にヴォールトで支持される巡路が設けられた(123)。こうした聖域部の構成は当時のコンスタンティノープルに於て類例を見いだすことができ、聖域の構成として、典型例と考えられている(124)。

聖域の構成から、聖域を既存の建築に設ける場合、既存の構造体に手を加えることなく作られていることが判る。即ち、聖域部は建築的な構成に於いて確定された領域としてではなく、調度的な要素の強い構成部材により、空間内の領域として確定されている。こうした構成は視覚的にも聖域部を遮るものとしてではなく、身廊から聖域部の様子を充分窺えるものとして構成されている。

#### 第4項：建築の特徴

エウフェミア教会堂は上部構造が残されていないが、平面・低層部・聖域部にわたり、初期キリスト教期の宗教建築の状態をとどめている。残されていない上部構造についても類例の存在によって、復元が可能と考えられる。それによれば、断面の構成として、低・中・高という3つの領域によって全体が構成され、各部は建築部材により分節されていたと推定し得る。

また、世俗建築から宗教建築への改変についても、構造体への手を加えずに、部分的な変更によって遂げられている。構造体そのものの改変は、主に教会堂の外延部である導人部で行われていることから、教会堂に付随する動線の誘導に関する軸線に対する考え方が世俗建築で必要とされる構成と異なることを推測し得る。教会堂への変更に際し、具体的には扉の位置と聖域部の設置に改変は限定されると言える。即ち、軸線としての東西方向の設定、来堂者に対す

る視線、行為の方向性の設定という点に、世俗建築からの差異が生じている。このように、この集堂で世俗建築と宗教建築との建築構成の差は、建築内に於ける領域の確定方法の差であり、固定化された構造体や建築計画に於ける差とは考えられない。更に、この事実から、教会堂で行われる典礼が形態を決定していることは、エウフミア教会堂に於いては考えることができない。

## 第6節：セルギオス・バックス教会堂

### 第1項：概要

セルギオス・バックス教会堂は、ソフィア聖堂の南西、マルマラ海の海岸沿いに建てられている（図4-35）。現在、モスクとして使用されている。残されている建築から、前身である教会堂として、ナルテックス・周歩廊・身廊・ベマ・アプス・2階回廊を窺うことができる（図4-2,36）。図から明らかのように、東側に突出したアプス、西側に付加されたナルテックスを除くと、教会堂はほぼ正方形の外壁内に納められている。正方形は八角形を、お互いの辺を平行させることなく、内包している。また、八角形自体、各辺の長さが微妙に違っている(125)。一番西端に位置するポーチは壁の状態や柱頭の形式から、トルコ時代に設けられた。

内部は2層から構成され、身廊上部にドームを上げる。身廊は東側でベマを経てアプスへ達し、西側で周歩廊を経てナルテックスへ出る。ベマは壁で周歩廊と仕切られ、1階部はアーチによる開口でつなげられ、2階部はアーチ型の開口によりベマを望めるようになっている。

堂内の調度類は全てモスクのためのものであり、ビザンティン期の調度類は残されていない。ただ、ナルテックス南端に2階へ通じる木製の階段があり、アーチ形の枠にビザンティン期と思われる浮き彫りが施されている（図4-37）。

ドームは身廊八角形の基底を16に細分し、16の面によって分節されて形成されている。八角の各隅部で外部に向かって膨らんだ円弧から立ち上げられるドーム面と、八角形の中央部から立ち上げられる平滑なドーム面とが、交互に接続してドームを形作るため、ドームは平滑な半球面ではなく、稜のある凹凸した面で作られている。このドームは外からみると、八角形の隅部に控え壁があり、内観とことなり、ドラムの上に載せられている。このため、内側のドーム迫元と外側のドーム迫元とは高さが異なっている(図4-38)。

外壁は各面で仕上げが異なっている。東面は煉瓦積みで、突出したアプス部で一部を煉瓦を何段か積み、その上に一列の石の層がある。北面は東側の一部を碎石積みにしているが、全般的に煉瓦によって積まれている。西面は前面にポーチがあること、また漆喰を塗られているため、明かでない。南面は碎石を積んでいる。セルギオス・バッコス教会堂の壁面では、全般にわたり、モルタル目地が厚い(図4-39,40)。

内部の装飾に於いて、漆喰面に描かれた図は、図柄からトルコ時代のもものと推測される。その他の装飾は、浮き彫りや割り形による柱頭・コーニス・エンタブラチュアに限定される(図4-41)。

セルギオス・バッコス教会堂が立てられていた場所は、プロコピウスの『建築』に詳しい(126)。それによれば、教会堂は皇帝になる以前のユスティニアヌス帝の私邸ホルミスダス宮の中庭に立てられていた(127)。更に、以下の記述で、

*πρὸς ἐπὶ ταῦτοις δὲ τὴν Ὀρμίβρα ἐπάνυμιον οὐκίαν  
ἀγχιῖστα οὐραν τῶν βασιλείων... εὐρυτερόν τὲ αὐτὸ καὶ  
πολλῶ ἐπὶ μᾶλλον ἀξιώτερον ταύτῃ ἐξείργαται.*

とあり、この私邸は皇帝の住居に隣接し、前面をアウグステオンにも接していた(128)。こうした位置関係から、セルギオス・バッコス教会堂がホルミスダス宮の南側に建てられていることが判る。また、その周辺については、以下の記述がある。

*πρῶτα μὲν Πέτρῳ καὶ Παύλῳ νεῶν οὐ πρότερον ὄντα  
ἐν Βυζαντίῳ ἐθεύματο παρὰ τὴν βασιλέως αὐλῆς,*

ἢ Ὁρμίσδου τὸ παλαιὸν ἐπάνυμος ἦν... καὶ  
 ἔπειτα καὶ τέμενος ἄλλο ἐκ πλαγίου τούτῳ  
 παρακειμένον. ἄμφω δὲ τούτῳ τὰ νεῶ  
 οὐκ ἀντιπροβάτω, ἀλλ' ἐκ πλαγίας  
 ἀλλήλοισιν ἐστάβι. (129)

これより、この教会堂が建てられた敷地には、既にペテルス・パウロス教会堂が既存のものとして建っていた。また、この2つの教会堂はお互いに接して建てられていた。しかし、プロコピウスの記述から、2棟の教会堂とホルミスダス宮との前後関係については明らかにできない。

プロコピウスの記述は、この教会堂の創建年代について何も触れていない。この創建年代を推測させる記述としては、教会堂内のエンタブラチュアのフリーズ部にくり出された碑文がある(130)。この碑文でユスティニアヌス帝は「σκηπτροῦχος Ἰουστινιανός」(131)と記され、高位の官吏であることが判る。また、彼自信の名は記されていないが、「Ἄλλ' ἐνὶ πᾶσι νεοκοιρανίην βασιλῆος ἀκοιμήτοιο φυλάξοι」(132)とあり、全体の文脈からユスティニアヌス帝を示唆していると考えられる。更に、「θεοστεφέος θεοδώρης」(133)という記述があり、「王冠を戴く」という形容詞から、ティオドラを皇后と見なすことができる。従って、教会堂にある碑文が、ユスティニアヌス帝とティオドラの結婚を示していることから、教会堂は2名の結婚後、即ち527年以降に建てられたものであることが判る(134)。一方、Millingenによると、コンスタンティノーブルで536年に開催された公会議の文書で、この教会堂の名称が見つかるため、この時期までに教会堂が完成していたことを指摘する(135)。こうしたことから、セルギオス・バックス教会堂は527-536年の間に建てられており、コンスタンティノーブルでソフィア聖堂、エイレネ教会堂とほぼ同時期の教会堂である。

10世紀、コンスタンティン・ホルフィロゲーニトスは『儀式集』

で、この教会堂で行われた典礼について記している(136)。宮廷に隣接しているとはいえ、10世紀、宮廷外の教会堂で皇帝が典礼の一翼を担うために訪れたことから、セルギオス・バックス教会堂は特殊な性格をもつものであることが推測される。このことは、創建当初、教会堂を建てた者がユスティニアヌス帝であることや、建てられた場所が皇帝になる以前の私邸内ということから、一般教徒のための教会堂でなかった可能性を示唆している(137)。

この教会堂は帝国の滅亡後、トルコによってモスクに変えられて、今日に至っている。

## 第2項：建築構成

現在の状態で既に記したように、創建時の状態は大きく変化していると推察される。従って、創建時の状態は現在の遺構や記述資料からできる限り、推定するよりほかない。

プロコピウスはこの教会堂の形式について、以下のように記している。

ἐνὶ μέντοι διακλάσσοισι μόνῳ. τὸ μὲν γὰρ  
μήκος αὐτοῦ τῷ μὲν κατ' εὐδὴ διαπεπόνηται,  
τῷ δὲ ὡς κέονες ἐν ἡμικύκλῳ ἐκ τοῦ ἐπι  
πλείστον ἑστῶσιν ... ἔστι δὲ αὐτοῖς μίᾳ μὲν  
ἢ ἐπὶ τῶν προθύρων ἑστῶσιν ἐπὶ τοῦ ναοῦ μήκος  
τῷ περιμήκῃ εἶναι ὀνομαζομένης. (138)

このように、ペテルス・パウロス教会堂は長堂形式であり、セルギオス・バックス教会堂は集中形式であることが判る。従って、現在の形式は創建時より引き継がれていると言える。更に、教会堂は堂の入口前面に長いストア、即ちナルテックスがあった。2つの教会堂は並列して建ち、またストアも「ἢ ἐπὶ τῶν προθύρων στόα」と使用されるように単数であることから、共有されるものであった。教会堂のナルテックスの前面には、中庭(αὐλή)と複数の出入口(μέγαυλοι)とがあった。従っ

て、2つの教会堂には共有するアトリウムがあったと考えられる。この2つの教会堂は、複数の連絡口によってつながられていることが、「καὶ τὰς εἰσόδους ἐπικοινωνοῦμεν οὐκ」(139)という記述から判る。

こうしたプロコピウスのセルギオス・バックス教会堂を表現した記述と現在の教会堂を照合させると、ペテルス・パウロス教会堂はセルギオス・バックス教会堂の南側に建てられていたと推定し得る。即ち、教会堂に於いて、南側の壁が厚くなっている点(140)、1階の周歩廊・2階の回廊に於いて南側に壁際に方立ての痕跡を残す2本の柱がある点(141)から、類推し得る。一方、北壁には上下階の中央部に煉瓦による3連アーチが残されている(142)。プロコピウスの記述からでは、集堂とホルミスダス宮の2つの建物が連絡しあっていたのか明かでない。また、どの程度離れて建てられていたのかも明かではない。しかし、北壁のアーチが後述するように創建時の開口部痕跡とすると、ホルミスダス宮への何らかの連絡方法が上下階にわたり存在したことになり、構造物があるか、直接接続するかしていたと考えられる。従って、教会堂は北側のホルミスダス宮に通じていたと考えられる。

以上のことから、全体の配置を概念的に示したものが図4-42である。

南北面の外壁には、現在煉瓦や碎石による壁と無関係に、煉瓦アーチの跡が残っている。従って、現在の壁は既存のアーチを埋めることで形成されているといえる。こうしたアーチの名残は、形態からだけでは時期を明らかにできないが、ドーム構造を支えるアーチでなく、南北両面にみられるアーチのように外壁面に用いられる場合、開口部の枠となる例が多い(143)。更に、既に記したように、セルギオス・バックス教会堂と他建築との配置関係を考慮すると、南北面に設けられた開口部は、創建時のものであると考えることができる。事実、同時期に立てられたコンスタンティノーブルのエイレネ教会堂についても同様な開口形式を認め得る(144) (図4-43)。

とりわけ、北面の上下階に残っている3連アーチは、3連という装飾性の高いアーチであることから、ホルミスダス宮との連絡に関連した場所に設けられたものであったと言える(145)。相称性という観点から南壁をみると、開口部の名残と推定されるアーチが北面の壁と一致していない。一方、上下階における3つの大アーチは創建時の各ベイに架けられたものと考えられる。事実、内側の周歩廊ベイのアーチとこれらは一致する。こうした事実から、セルギオス・バックス教会堂は南側全面がペテルス・パウロス教会堂に開いていた可能性が強い。

一方、外壁は各面で仕上げが異なっているように、統一した手法で作られていない。更に、同時期のエイレネ教会堂の壁の工法と比較すると(146)、同一の手法をセルギオス・バックス教会堂のどの面にも認めることはできない。従って、外壁面には創建時の開口部跡が残るものの、壁そのものは当時の状態から大きく変わっていると考えられる。こうしたことから、壁の表層面に於いては、異なる時代に修理が行われた言えよう。

ドームの外観は八角形で構成されるドーム迫元からドラムを立ち上げ、その上に背の低いドームを載せている。八角の各隅に2本の控え壁が設けられている。内側でドームの曲面はドーム迫元から始まるため、内側からと外側からとではドームの見掛けが異なる。この様なドーム構成は、ローマ時代、既にバンテオンやテサロニキのロトンダなどで類例を目にすることができる(147)。また、控え壁の設置について、Ebersoltはドーム荷重の外壁への伝達をその理由として指摘する(148)。しかし、外壁の4隅を除き、壁厚が荷重を考慮したものとは考えられない。むしろ、中央部の隅柱と外壁の厚みを比べると、ドームはこの隅柱によって支持されると考えられる。即ち、ドーム部のこの工法をビザンティン建築に於ける構造的解決と捉え得るのか疑問である(149) (図4-44)。

更に、このドーム構成が創建時のものかどうか、現在<sup>ら</sup>明かでない(150)。一方、同時期のソフィア聖堂は、557年の地震によりドーム

が壊れている。度重なる地震に見舞われるコンスタンティノーブルで、セルギオス・バックス教会堂のドームが壊れなかったとは考えられない。

以上から、平面の形状や全体の構成から、ドームが身廊上部に載せられたとしても、ドームの形状や構成については明確にできない(図4-45)。

平面はほぼ正方形の外形の中に、ほぼ正八角形を歪んで組み入れて形成されている。そのため、周歩廊、及び2階回廊の幅が、図4-2に示されるように、均一になっていない。周歩廊の典礼時に於ける一般的使用から、こうした身廊部と周歩廊部の歪みが意図されたものとは考えがたい(151)。むしろ、セルギオス・バックス教会堂が、ペテロス・パウロス教会堂とホルミスダス宮に挟まれた敷地に建てられたため、身廊部の構成と外周部とが歪んだとする考え方に、妥当性がある(152)。更に、身廊部の八角形も実測によると、各辺の寸法が異なっている(153)。しかし、この寸法のうち、アプス側の辺の長さは反対側、ナルテックス側の辺の長さよりも30cm程度長いだけであり、意識されるほどの相違ではない。従って、Underwoodが指摘するように、身廊部の八角形が意図的にアプス側で広げられているという考えは、納得しがたい(154)。以上より、平面の構成にみられる寸法、及び形態の歪みは意図されたものではなかったと考えられる。

周歩廊・2階回廊はベマのベイの南北壁によって仕切られている。1階ではベマへと出入口が設けられ、2階では開口が設けられている。従って、南北両方向から身廊を囲む周歩廊は、聖域に設けられた壁によって途切れている。即ち、聖域が身廊部と結び付くことで、周歩廊と呼ばれながらも、身廊の外側にある廊には方向性、すなわちナルテックスからアプスへの方向性が生じている。

身廊は東西南北に当たる辺に、辺に沿って柱が建てられている。一方、それらの辺に挟まれるベイは、半円形のエクセドラに沿って柱が立てられている(図4-46)。従って、ナルテックスからアプス

へ向かう方向で、八角形の斜辺に当たる半円形の膨らみによって、身廊は広げられた印象を与える。即ち、八角形を身廊の構成における基盤に据えながら、平面は八角形の斜辺部を広げるように構成されている。

また、ナルテックスに現在ある階段は、南側にあったベテルス・パウロス教会堂とナルテックスを共有したという推定から、創建時に通行を阻害する位置に階段を設けるとは考えられない。即ち、階段はベテルス・パウロス教会堂の喪失後、設けられたものと言える(155)。このように、現状からは、階段の位置を推測し得ない。

教会内部は身廊部にドームを架け、周囲の周歩廊・2階回廊・ナルテックス上下階にはヴォールトが架けられている(図4-47)。ベマ・アブス部には2階は設けられず吹抜けになっている。1階・2階は身廊部で水平のエンタブラチュアにより分節される。隅柱に於いては、このエンタブラチュアの下にコーニスが巡っている。このコーニスはベマとアブスへは巡っていない。2階はアブスで半ドームの迫元から同一の高さで身廊の隅柱へとコーニスが巡り、上下の分節となっている。しかし、2階身廊部にあるコーニスの上にも隅柱の柱面は連続しているため、身廊部でドーム迫元と2階コーニスとの間に分節された層が生じている(156)。また、ベマ前部のヴォールトは身廊・ベマ・アブスの空間を一体化してつないでいる。従って、これらの教会堂内の空間と、周歩廊・2階回廊は分節されている(図4-48)。

ドーム部は3つの異なる曲率から構成される(157)。ドーム基底部には窓が設けられている。6世紀の改修後のソフィア聖堂に於いても、ドーム部に42個の窓が設けられていたことから、ドーム部の窓は創建時にもあったと考えられる(158)。現在、堂内への採光はこれらドーム部の窓とアブス部の窓から直接採光になり、周歩廊・2階回廊を通して外壁から間接採光となっている。しかし、創建時の南北面に於ける他の建築との繋がりを考えると、外壁からの採光は限定されたものと推測し得る。即ち、低層部、1・2階の身廊部への

採光は、ドームとアプスから主としてとりいれられた。

### 第3項：内部意匠

教会堂に使用されている建築部材として、柱・柱頭・エンタブラチュア・コーニスが残されている。

柱は身廊と周歩廊・2階回廊を仕切る箇所、南面壁際の中央のベイ、2階回廊と2階ナルテックスを仕切る西側とに用いられている。これらの柱のうち、南面壁際に用いられる柱が楕円形断面であることを除くと、他の柱は円形断面であり、色大理石を使用している。用いられる場所が教会堂の領域の中で同じ時、柱は形態・大きさが同一のものを使用されている(159)。即ち、身廊部を仕切る柱は半円形のエクセドラに沿って立てられたものと、八角形の辺に沿って立てられたものとは、それぞれの階で同じものを使用している。南面壁際の柱には、柱身・柱頭の側面に突起があり、かつて建具を取り付けていたと推察される(160)。

柱頭は4種類使用されている(161)。A)1階身廊部で使用される柱頭で、8個の凸部からなる花籠飾りの浮き彫りのあるもの(図4-49)、B)2階の西側と身廊に面した柱に用いられるイオニア式の渦巻を含むもの(図4-50)、C)2階南面壁際の楕円柱に用いられる杯状のもの(図4-51)、D)南面壁際のうち1本が、台形状の単純な形態

によるものに分類される。最後の柱頭は、他に対し装飾性に於いて著しく劣ることから、後世に取り替えられたものと考えられる。このように柱頭には、階と領域の区別によって、異なった意匠をもつものが用いられている。全般として、柱頭は彫塑的な割り出しによるものではなく、平面的な浮き彫りによる鈍重なものである。しかし、ここでは柱頭の上にインポストを設ける、ビザンティン建築の中期以降一般的となる柱頭形式とは異なっている。柱頭面に彫られた装飾の形象は異なるが、この柱頭とインポストとを一体化したとみえる形式は、ソフィア聖堂と柱頭と同一である。

身廊部の隅柱にあるコーニスは、1・2階で柱の背面に一部巡っ

ている。また、周歩廊・2階回廊に於いても、同一高さでコーニスの残っている箇所がある。残っているコーニスの端部は不自然に切られていることから、かつて室内全体にわたり、現在の高さ、即ちヴォールトの迫元の見切りとして巡っていたと考えられる。また、コーニスの下端見込みは壁面から突出しており、壁面に大理石の貼付けを可能にする幅を確保している(162)。ここでは、コーニスによりヴォールト面と壁面の壁仕上げの見切りを推測できる。

1階身廊部の隅柱で、コーニスの上にエンタブラチュアがのる(図4-53)。このエンタブラチュアはアーキトレイブ・フリーズ・コーニスから構成され、フリーズ面に碑文がある。エンタブラチュアは各層により凹凸がはっきりしているが、それぞれの層では平面的な浮き彫りにより構成され、装飾としては、コンスタンティノーブルのヨハネ聖堂に類似が認められる(163)。一方、同時期のソフィア聖堂、エイレネ教会堂には、室内にエンタブラチュアが認められない(図4-54)。

これら柱・柱頭・エンタブラチュアという構成は、先述のヨハネ聖堂を初めとして、バシリカ式の教会堂に於いて身廊部の柱頭上部に多用されている。ここではエンタブラチュアと2階部の柱が建てられる箇所との間に、壁が設けられている。従って、1階の柱から2階の柱へと続く連続感は、この壁によって切られている。これらの各意匠は室内全般にわたり統一的に用いられていることから、後補的な修理によるものとは考えがたい。また、後補的に挿入することも、工法上難があると考えられる。こうしたことから、各意匠は創建時の状態で留め置かれているものと推定し得る。

エンタブラチュア下端は、壁・隅柱のコーニス上端に当たる。そのため、隅柱ではコーニスの上にエンタブラチュアがのる構成となっている。また、柱列にのせられたエンタブラチュアは周歩廊側に現われておらず、周歩廊側で柱頭上部がヴォールトの迫元となっている。従って、エンタブラチュアは身廊側に対してのみ、構成の意味を持っている。即ち、このエンタブラチュアは身廊側に視覚的に

整合性を与えるのみで、構造的に機能しているとは考えられない。  
また、隅柱に於いて、コーニスとの関係から構成に於ける矛盾を生じている。

更に、この部材構成は1階に限られ、2階では柱間にアーケードを形成することで、エンタブラチュアは用いられていない。このように、セルギオス・バックス教会堂では、建築の構成に関して1・2階で明らかに考え方の相違が現われており、かつ、1階に於いて古典的な形式を遵守しようと意図しながら、上記したように、失敗が現われている。

教会堂の内部壁面やヴォールトを飾った装飾は、現在全く残っていないし、また表面に塗られている漆喰の下にあるのかどうか明かでない。しかし、Fergusonが建物を調査した際、ナルテックスでモザイクかフレスコの痕跡を認めたと報告している(164)。

一方、プロコピウスは「 $\delta\mu\omicron\acute{\omicron}\omega\nu\ \delta\acute{\epsilon}\ \chi\rho\nu\sigma\omicron\upsilon\ \pi\epsilon\rho\iota\omicron\upsilon\sigma\acute{\iota}\alpha\ \pi\alpha\nu\tau\alpha\chi\acute{\omicron}\theta\iota\ \kappa\alpha\tau\alpha\kappa\omicron\rho\eta\varsigma\ \acute{\epsilon}\sigma\tau\iota$ 」と記していることから(165)、教会堂にモザイクが使用されていたと考えられる。また、現在コーニスが壁から突き出していることによって、壁面には大理石の貼付けが行なわれていたとも考えられる。

このように、セルギオス・バックス教会堂の装飾は当時の趨勢として金色のモザイクがドーム部やアプス部上部を占めていたと考えられる。

#### 第4項：建築の特徴

セルギオス・バックス教会堂の創建時に於ける周辺との関係から、この教会堂は複合的な建築物の一角を形成していた。即ち、北はホルミスダス宮、南はペテルス・パウロス教会堂、西はアトリウムというような建築物があり、単体として教会堂の機能が完結されるものではなかった。しかし、建築としての教会堂の構成はアトリウム・ナルテックス・周歩廊・身廊・ベマ・アプスと、連続した領域の

つながりによって構成された。

この教会堂で示される2つの会堂が並び建つ形式は、他にも見受けられ、必ずしも特殊なものとは考えられない(166)。初期キリスト教期に於ける典礼資料の不備から、現在こうした教会堂の使われ方は不明である。また、室内での調度類の損失により、2つの集堂の建築的な性格の差についても明らかにできない。しかし、後世の修道院付属の会堂と礼拝堂について、この2棟並列の形式を認め得ることから、セルギオス・バッコス教会堂も修道院と関連したものであったのかもしれない(167)。

一方、教会堂と他建築との連絡を初め、外壁面に設けられる扉によって、Mathewsは教会堂の機能面からの要請による開放性を指摘する(168)。こうした教会堂の平面計画について、Krautheimerは教会堂で典礼を行なうという機能の面から、集中形式を教会堂の計画に於ける失敗と断ずる(169)。しかし、コンスタンティン・ポルフィロゲニトスの『儀礼集』からも判るように、セルギオス・バッコス教会堂は10世紀でも使用されている(170)。また、この教会堂では周歩廊や2階回廊が不整形のため広さに違いが生じている。初期キリスト教期、周歩廊は典礼に於いて使用される場所であった(171)。このように、機能的な長堂形式が早期に失われ、使いにくい集中形式が残された点に注目すると、建築の歪みが施工に帰せられるとしても、教会堂で典礼に於ける機能性は優先的な事柄ではなかったと言える。即ち、不整形な平面計画でも、教会堂は十分に機能し得るものであった。

教会堂の内部構成はビザンティンの建築制作者達の建築に対する理念を知る上で、重要である。この構成で各部意匠の連合を検討するには、創建時の状態をよくとどめている身廊部が適切である。ここでは1階でエンタブラチュアが使用され、古典的な建築の形式を用いている。しかし、柱頭にはビザンティン建築の特徴である、彫刻的な形態であるより鈍重な量塊を引き立たせることになる浅い浮き彫りの文様が用いられている。隅柱でこのエンタブラチュアはコ

ーニスの上へのり、古典的形式のビザンティン集中形式の建築への失敗を露呈させている。更に、身廊部ではコーニス等による壁面の見切りが用いられているが、1階エンタブラチュアと2階床の間、またドーム迫元と2階コーニスとの間に壁が表われており、見切りのための部材がそのまま壁面の分節化に用いられていないとも考えられる(172)。こうしたことから、セルギオス・バックス教会堂では、各部意匠による建築構成の分節と連合とにより、空間の統合をなしていない。即ち、この教会堂では各層を順に積み上げてゆくことにより、建築空間が形成される。その接合部の連続がセルギオス・バックス教会堂では達成されていないと言える。

一方、集中形式という形式にもかかわらず、この教会堂にはナルテックスからアプスへと向かう軸線が明らかに意図されている。即ち、ベマの身廊に面するベイだけ、2層吹抜けになり、他より大きなアーチを架けられている。更に、一般的な教会堂への進入形式を考えると(173)、ナルテックスから周歩廊に入り、アプスを望むことになる。その際、八角形平面の身廊部の各隅はエクセドラで半円形平面で後退しているため、アプスを望む者にとって、身廊は厳格な幾何学的八角形を認知するのではなく、隅の辺が膨らんでゆく形を認知する。即ち、身廊の八角形という形態は身廊内で知覚されるもので、アプスへ向かう軸線の上で、空間(形態)認知として強いものではない。従って、既述した構成の原則と共に、この教会堂は軸線に於いて長堂形式から得られる知覚から、大きく逸脱していないと考えられる(174)。

このように、セルギオス・バックス教会堂に於いて、長堂形式に認められる建築的特徴を見いだせる一方、長堂形式と異なる特徴も認められる。即ち、柱配置に見いだせるリズムである。図4-36aの様には、アプスへの軸線に沿って、北面・南面を対比すると、身廊部の構成は対称になる。身廊の八角形の3辺のうち、2辺はエクセドラで引っ込んでいる。従って、ベマまでの身廊部の構成は図4-36aの様にはBABというリズムになっている。更に、各ベイには円柱が2本

つつ立つ。従って、ここでは隅柱と円柱との2種類の柱を用いて、ベマへ向かう身廊部の強弱のあるリズムが形成されている。

更に、教会堂内は採光がアプスとドーム迫元でおもに行なわれる。従って、長堂形式のようにアプスへ向かう平面的な計画による軸線ばかりでなく、この教会堂では光による明暗によって方向性が与えられる(175)。即ち、暗から明へという方向が、水平方向・垂直方向にわたり存在している。特に、採光がドーム迫元で行なわれるため、光によってドームは分節され、浮上感を与えることになっている(176)。

## 第7節：身廊の内部建築構成

### 第1項：内部の立面構成

内部の立面構成については遺構の保存状態に依拠され、その創建時の実態を窺うことのできる集堂は限られたものである(177)。これら集中形式の集堂のうち、前章までの検討から、内部空間の架構方式について判断できる遺構を示したものが表4-3である(178)。表4-3から、全体の傾向としては、側廊部に木造が認められるものの、ドームやヴォールトによる架構を原則とすると考えることができよう。この表4-3における項目のうち、身廊上部には例外なくドームが架けられている。しかし、ドームの構成材料については相違が現れている。表4-3の集堂では、煉瓦・コンクリート・穴開き煉瓦・木造がドームの構成材として用いられている(179)。この内、サン・ヴィターレ聖堂では、ドーム材料として穴開き煉瓦を2列にして積み上げることにより、ドームの軽量化を計っている(180)。また、軽量化という問題に関し、ステファノ聖堂では、*camerae canniciae*による工法で(181)、木造のドームの架けられた可能性が高い。このように、身廊上部の架構形式としては、集中形式の洗礼堂と異なり、創建時よりドームが企画されたと言えよう。

身廊部の構成では、1階を柱で構成し、上部にドームを架けている。この中間部を中層部と規定すると、平面構成で現れた2類型により、中層部の構成に相違が認められる。

同一の柱により身廊と側廊を分離する集堂では、この中層部がドームを支持するドラムとしての壁体に相当する。ステファノ聖堂の中層部は、上部で柱間の位置に対応して22個の窓が設けられ、窓のアーチ起拱点が、ドームの迫元となっている(182)。この中層部の構成は、後世の集堂内部を描いたスケッチから、推測することができた(183)。このスケッチで中層部の構成は、1階のエンタブラチュアの上に1階の柱と同位置で付け柱が窓の下端にまで達し、この付け柱の上にコーニスに類した部材を設け、中層部を分節している。従って、中層部は2つの層に分節される。一方、サンタ・コスタンザ教会堂においても、15世紀のスケッチから創建時の構成を復元的に想起することができる。即ち、身廊中層部は、1階柱上部のスバンドレルが達するエンタブラチュアの上の層と、その上の窓の層の2層から構成される。中層部の上・下層は、エンタブラチュアによって分節される。中層部下層はオブス・セクティルかスタッコと推測される材料で平滑な柱が一定間隔で並び、上層では窓の両脇に付け柱風の柱が立てられていた。しかし、これらの柱は壁面に嵌め込まれているように見え、更に柱の立つ位置が1階と一致していない。このように、これらの1階身廊部を同一の柱で構成する集堂では、独立した層を順に積み上げて内部立面を構成し、中層部の上部に採光層としての窓が設けられる。また、中層部には表面の構成として柱・梁を適用している。従って、中層部の構成として、現実には壁構造が用いられているにもかかわらず、表面の構成に柱・梁を用いることで擬装された構造の形式を視覚化している。このように、1階の同一の柱による身廊と側廊の分離は、側廊の設置によってドームを支えるドラムとしての壁を柱に置き換えたものと考えられる。従って、身廊のドームを支える構造形式に着目すると、1階に柱・梁が用いられ、その上の表面の構成に柱・梁がみられても、この形

式は壁式構成と言える。即ち、視覚的には柱や梁が現れているが、前章で言及した壁式構成の類型と看做せる。

この形式に類似したものとして、テサロニキのロトンダやヘレナ霊廟がある。これらの集堂では、創建時における側廊の不在から、1階・中層部が、ドームのドラムとなって、基本的に壁がドームを支持している。この2棟についても、内部の構成として、中層部における擬装的な柱・梁による層の分節を推測することができ、表面の構成に柱・梁構成が用いられていたと考えられる(184)。

これに対し、2種類の柱を身廊と側廊の分離に用いている集堂では、各隅に設けられる積層柱が、ドームの荷重を支持すると考えられている(185)。これらの集堂では、概ね2階回廊が設けられ、第1層の1階、第2層の2階、第3層のドームから構成される。サン・ヴィターレ聖堂の復元案をみると、エクセドラの柱頭の高さで隅柱にもコーニスが回っている(186)。従って、コーニスは2階の床面で見切り部材として使用されるよりも、下の位置につけられることとなっている。このように、エクセドラと隅柱とで、層の見切り位置の異なる可能性が生じている。即ち、2種類の柱によって身廊の内部の立面構成が一致していない可能性がある。このエクセドラと隅柱とで層の分節の乖離現象は、セルギオス・バックス教会堂にも現れている。身廊部の内部立面は3層から構成され、第3層がドームに相当する。ここでは、第1層と第2層をエンタブラチュアで、第2層と第3層をコーニスで分節した。エンタブラチュアはエクセドラの第1層柱頭上部にのり、身廊を回るが、ベマへ回り込んでいない。このエンタブラチュアの下端に、隅柱ではコーニスが施されていた。このコーニスは側廊側でヴォールトの迫元に位置していた。一方、第2層のコーニスは、エクセドラの柱頭上部の高さで、ベマ・アプスも含み室内を回っている。従って、第1層エクセドラにおいて、エンタブラチュアと2階床の間、第2層においてコーニスとドーム迫元の間、それぞれ分節された壁面が現れていた。このように、第1層・第2層と繋がるエクセドラの構成と、隅柱を含む堂

内の構成との間で、層の分節の形式が一致しているとは言えない。従って、これらの集堂においては独立した層を積み上げるのではなく、身廊部の構造を統御する形式としての隅柱と、補強的な形式であるエクセドラとの2つの実体的な構成の形式が体系的に組み合わされていると考えられる。この組み合わせの破綻が、層の見切り部材の構成に現れたものと考えられる。このように、こうした主と従の2つの構造形式が、身廊立面の構成に現れている。この点について、構造という建築の実体的な側面ばかりからでなく、構成という視覚的な側面から捉えれば、これらの集堂を前章で言及した柱・梁式構成の類型と看做することができる。

こうした壁式構成と柱・梁式構成による集堂内部の構成を効果的に伝える方法として、採光の導入法を指摘することができる。柱・梁式構成の集堂においては、各層の外壁に窓が設けられている。しかし、身廊部への採光は、アブス外壁に設けられた窓と、ドーム基底部に設けられた窓で直接採られている。従って、身廊部においては、ドームと第2層との接合面、そしてアブスが最も明るい面であったと考えられる。一方、壁式構成では、側廊外壁と身廊中層から採光される。また、サンタ・コスタンザ教会堂では、棺の置かれる側廊上部に小ドームが架けられ、採光用の窓が3つ設けられている。このような採光形式から、集中形式の集堂においては、聖域と考えられる箇所への直接採光、それに集堂を構成する空間の単位にそれぞれ直接採光が行われていたと推定される。また、身廊部の採光方法をみると、壁式構成と柱・梁式構成において、採光面が異なっている。

このように、平面構成における類型は、内部立面の構成で、造形理念として明確な相違を示していると考えられる。即ち、中層部で視覚化された柱・梁による擬装的とも言える構成と、構造的な有効性を持つ実体的な構成とがある。更に、構成の明示化の手法としての採光は、内部の装飾に関する表面の構成を介して、建築構成の実態を具体化すると考えられる。

## 第2項：内部立面に於ける表面の構成

初期キリスト教期の建築における装飾された部材は使用される箇所を限定され、そこに規範を見いだすことは難しいとされる(187)。事実、第1層部での部材構成についても、多様性が現れている。即ち、セルギオス・バッコス教会堂では、柱・柱頭・エンタブラチュアという古典的な部材構成がみられるが、サンタ・コスタンザ聖堂では、柱・柱頭・ルソートという簡略化されたエンタブラチュアの使用が認められる(188)。また、サン・ヴィターレ聖堂では柱・柱頭・インポスト・アーキボルトという構成になっている。このように、遺構間相互で部材の組合せ方における構成の規範は認められない。しかし、柱頭の意匠に注目すると、セルギオス・バッコス教会堂とサン・ステファアーノ聖堂で、集堂の中で同一の領域に属する柱頭には、同一の意匠が用いられている。

一方、推定も含め、創建時の内部表面の仕上げ材料を示したものが、表4-4である。表より、垂直な壁面においては、ほぼ大理石のような多様な色彩をもつ石材を貼り廻らしていたと推定される。また、サン・ステファアーノ聖堂の壁面の高い位置では、石材の代用品として廉価なスタッコを使用しており、石を擬装させたと推測される(189)。また、Gerolaは、サン・ヴィターレ聖堂に於いても、創建時に第1層が大理石貼り、第2層がスタッコによる仕上げ、第3層がモザイクで表面が仕上げられていたと推定する(190)。更に、彼はサン・ヴィターレ聖堂の側廊も大理石が貼られていたと推定している。これに対し、曲面にはモザイクの使用が一般的であったと推測できる。

こうした仕上げ材がどのような効果をもたらしたか、いくつかの記述から窺うことができる(191)。ユスティニアヌス帝により、6世紀中期に再建されたエデッサのソフィア教会堂の聖歌から、この教会堂の装飾構成を窺うことができる(192)。即ち、その聖歌には以下のように記されている。

And it is also decorated with golden mosaic, as the  
firmament (is) with shining stars./6. And its lofty  
dome-behold, it resembles the highest heaven...9.  
Its marble resembles an image not (made) by hands,  
and its walls are suitably overlaid (with marble l./  
And from its brightness, polished and white, light  
gathers in its like the sun...One light shines forth  
also in its sanctuary by three open windows/ and  
announce to us the mystery of the Trinity, of the  
Father and the Son and the Holy Sprit.

(tran. by McVey)(193)

この記述から、天井面に当たる面はモザイクで、壁に当たる面は大  
理石貼付けになっている。更に、アプスには3つの窓が設けられて  
いた。このように、当時の教会堂の内部装飾は記述史料から幾らか  
を知ることができる(194)。その結果、ビザンティン初期での教会堂  
の内部装飾は2つの内容に分類できる。この分類でモザイクかフレ  
スコかの材料の別を除外すると、一つは画題が具象的な内容のもの  
で、他は抽象的な内容である。これらの資料のうち、5世紀前半に  
記されたシナイ半島の聖ニルスの手紙で、教会堂の聖域には十字架  
のみを壁に描くべきこと、つまり具体的な図像を描くべきでない旨  
が述べられている。逆に、側廊の壁面に、新・旧約聖書にある事柄  
を字の読めない者のために描くべきである旨、記されている(195)。  
また、6世紀前半にエフェソのヒパティウスも手紙の中で、他の僧  
侶に対し同様の注意を与えている。そこで、彼は聖域内に於けるイ  
コンの使用を禁じ、十字架のような抽象性の高いものを壁面装飾と  
して用いるべき旨を伝えている。全般的に、彼は装飾に於ける図像  
の使用に懐疑的態度をとっている(196)。この様な書簡の存在自体、  
聖域や教会堂内での図像的装飾が頻繁に行なわれたことを示してい  
る。事実、Mangoによって編集された資料中、図像が使用された例を  
認めることができる。しかし、書簡からも判るように、原則として

図像の使用は限定されるものであったと考え得る(197)。時代は下がるが、パウロス・シレンティアリウスはコンスタンティノーブルのソフィア聖堂で、ドーム部に十字架しか認められないと述べている(198)。更に、8・9世紀にコンスタンティノーブルのソフィア聖堂について、各部が金色のモザイクで飾られていたことを記す資料でも、具体的な図像の存否については触れていない(199)。このように全般的な傾向をみると、集堂の表層部は仕上げ材料で被覆され、限られた採光を効果的に利用するため、光をよく反射する材料が用いられていた。一方、視覚上充分捕捉できない箇所には、スタッコのような大理石の擬装的な材料も用いられていたと考えられる。また、曲面と垂直面で使用する材料が変えられていた。

この曲面に用いられるモザイクについて、初期キリスト教期の原則は、上記したように、抽象的な図柄が推奨されたようだが、集堂のうち2つの遺構で具象的な図柄が用いられている。即ち、テサロニキのロトンダのドームとヴォールト部、サンタ・コスタンザ聖堂の側廊ヴォールト部では、具体的な図像を知ることができる。ロトンダのドーム面のモザイクは、現状から4層に分割されている。また、各層はモザイクで描かれたコーニスによって分節されていた。このように、各層は独立した画題であり、個々の図柄が上方向へ連続するのではなく、層として上方向へ積み上げられている。これに対し、側廊部のヴォールトにモザイクが残るサンタ・コスタンザ聖堂では、身廊の12組の柱間に対応して、面が分割されている。この内、棺の置かれる上部は小ドームで、キリストと12使徒が描かれていたと推定されている。残りの11面で、棺の置かれる反対側、即ち入口の面に当たるヴォールト面を除くと、入口から棺へと向かう南北軸に対し、図像内容が対称形に配置される。このように、左右対称形の配置をみせる残されたモザイクの図像から、集中形式集堂において、聖域へ向かう軸線が内部の装飾の構成についても遵守されていたと推定される。

## 第8節：宗教建築としての用途

こうした 集堂の内部の建築構成をこれまで検討したが、宗教建築としての内部空間がどの様に機能したかが問題となる。即ち、ここでは建設の経緯や歴史的な背景を概観することで、これらの遺構の宗教建築として要求された機能的な相違を類型化し、またその全体としての特質を知り得る。

エウフェミア教会堂とテサロニキのロトンダと呼ばれる遺構は、創建時に世俗建築、或は異教神殿という機能的に全く異なる建築物を、キリスト教建築に改めたものである。即ち、5世紀初期に宮廷内にあった宦官アンティオクスの私邸の一部を、6世紀にキリスト教の建築に改修したものがエウフェミア教会堂と呼ばれる遺構である。また、ハギオス・ゲオルギオス聖堂と呼ばれるテサロニキのロトンダは、4世紀初期のガレリウス帝の霊廟ないしローマ神殿を、6世紀までの期間にキリスト教の建築に改修したものである(200)。この2棟は後世の名称をもって呼ばれることから、キリスト教の建築への改修時における主たる用途は不明である。しかし、遺構の周辺で、洗礼堂や司教座等の世俗教会堂に関連して設けられる附属施設がないことから、また、その建設された地域の状況から、宮廷との関係の深い宮廷付の附属礼拝堂として用いられたと考えられる(201)。

サンタ・コスタンザ教会堂やヘレナ霊廟は、遺体を安置する建築物として建てられた(202)。この2棟の遺構においては、長堂形式の教会堂の一端に接続しており、キリスト教との関係を示すものの、教会堂の用途でなかったのは明かである。こうした長堂形式の建築に集中形式の建築が接続された遺構は、バレスチナにおける降誕教会堂と聖墳墓教会堂においても認められる(203)。これらの遺構は、いずれもコンスタンティン帝との関係がみられ、宮廷との関連の深い建築物であったことが判る。

これに対し、残りの遺構は室内において何らかの集会が行われた可能性を窺える。サン・ヴィターレ聖堂は、かつて聖人ナザリウス

とセルスス、聖人ゲルバスとプロタンウス、聖人ヴィタリスに捧げられた3つの教会堂が立つ場所に、6世紀中期に新たに建てられた(204)。建設の経緯やバマ部のモザイク、また附属施設が見当たらないことから、ラヴェンナの宮廷における礼拝堂的な性格を持つ遺構であると考えられている(205)。また、セルギオス・バックス教会堂は、6世紀初期にユスティニアヌス帝の私邸ホルミスダス宮内に建てられ、その後彼の皇帝就任以降も宮廷内にあることから、宮廷附属の礼拝堂と考えられる(206)。一方、殉教者ステファノに捧げられたといわれるステファノ聖堂は、周囲に附属する宗教施設を持たず、典礼に際して近傍のラテラン聖堂から僧侶を呼び寄せている(207)。従って、一般の信徒の用に供されたものかどうか、疑問が残る。これに対し、表4-5の残りの遺構は、一般の信徒のための世俗教会堂であった可能性が高い。

このように用途という観点からみると、全般的な傾向として、キリスト教宗教建築の集中形式の遺構は一般の信徒のために供される世俗教会堂とは異なり、宮廷や当時の上層階級と関係の深い礼拝堂的な性格を持つものが多い(208)。即ち、集中形式の遺構は用途として特殊な建築であったと言えよう。

一方、こうした建築の主目的である儀式に付いて(209)、初期キリスト教期のシリアで、ユーカリストの典礼儀式と殉教者の儀式とが儀式としての主流であったと、Lassusは述べている(210)。このユーカリスト典礼は、奉納・祈り・聖体分割・聖体拝領の4つの部分から構成される(211)。しかし、この4つの部分からなる式次第が室内でどの様に展開されたかについては、地域的な差と共に、未だ判然としない(212)。また、霊廟についても、執り行われた儀式の一部は判るにしても、全体として明らかにされているとは言えない(213)。このように、遺構が包摂する建築空間で執り行われた儀式は、建築構成の合目的性の検証という点で無視できない重要な意味を持つが、現状において典礼の多様性に関する包括的な論考が認められず、言及するには時期早尚である(214)。しかし、用途の相違にもかかわらず

ず、対象となる建築は類似した平面構成を持つことも現象として認められる(215)。事実、用途としての相違を推定し得るにもかかわらず、既に検討したように建築の構成に類似した規範を認めることができる。従って、儀式という問題を建築の形態を考える際に、留保事項とすることができると考えられる。また、初期キリスト教期の宗教建築の制作者の知識体系が科学・技術によって専ら構成され、宗教的な知見の含まれていない事実から、建築の形態における構成を自律的なものとして検証することは、妥当であると考えられる(216)。

### 第9節：小結

以上、初期キリスト教ローマ帝国におけるキリスト教宗教建築のうち、集中形式の集堂について堂内の建築構成の一端を検討した。これらの集堂は、用途からみると、当時の宮廷と関連の深い建築であった傾向を窺える。この点は、前章で集中形式の洗礼堂が一般的に司教座教会において採用されていた事実と比較すると、顕著な相違を示している。規模の異なる集中形式のこの2つの建築については、この他に架構形式に対する造形理念としての相違がみられる。即ち、洗礼堂で必ずしもドーム架構が企画されなかったことに比較して、集堂においては創建時からドーム架構が企画されており、造形理念の表現形式としてドームが不可欠なものであったと考えられる。このドームへと繋がる構造形式として、集堂では壁か柱による支持方式が認められた。この内、柱による支持方式では、ドームを支持する柱に積層柱が用いられており、柱という建築の構成部材に、本章で述べたように2種類のものが使用されていた。こうした柱による構成は、洗礼堂においては認められていない。

一方、上記したような実体的な架構・構造の形式とは別に、堂内における表面での構成をみると、集堂に共通した特徴も現われている。即ち、構造の形式が壁であろうと柱であろうと、構造材料を被

覆して、表面で柱・梁による構成を視覚化している。この視覚化される表面の構成という点では、既に論考した洗礼堂の構成にも共通して認められた。また、この表面の装飾構成とそれを具体化する採光、更に平面の分割という問題を検討すると、集中形式の集堂は、形態的には有心的な平面であるにもかかわらず、聖域へと方向づけられた軸線を認めることができた。

このように、堂内の表面の構成において、集中形式のキリスト教宗教建築は類似した構成を示しており、共通した造形理念を規範的に構成に適用していたと考えられる。本章と前章においてこのことは、集中形式のキリスト教宗教建築が一つの形式性を持ち得ていたとの仮設の妥当性を得るものと考えられ、類として従来取り上げられる他の建築と、機能的な問題とは別に、建築の技術や構成について比較対照させることができると考えられる。

註：4章

1. 本論においては、初期キリスト教における集中形式の宗教建築として、従来指摘されることの多いサン・ロレンツォ聖堂(Milan)とボスラ大聖堂(Bosra, Syria)を除外した。これらは、身廊部を正方形平面とし、4面にエクセドラを附した4葉形である (cf. A. Calderini & G. Chierici, La basilica di S. Lorenzo Maggiore in Milan, Milan, 1951: G. Chierici, "Di alcuni risultati sui recenti lavori intorno alla basilica di San Lorenzo a Milano e alle basiliche paoliniane di cimitile", RAC, vol.16, 1935, pp.51-72: H.C. Butler, Early Churches in Syria, vol.1, Princeton, 1929, pp.215-295: G. Gualandi, "La cattedrale di Bosra", CCARB, vol.23, 1976, pp.257-313: J. Lassus, Sanctuaries Chrétiens de Syrie, Paris, 1947, p.244)。また、Gazaの司教座教会堂の再建に際し、長堂形式か集中形式かが議論されたとき、皇后エウドクシアが十字形の平面にすべきであると述べ、十字形平面を異なる形式と考えていることが判る (C. Mango, op.cit., pp.30-32)。更に、W.E. Kleinbauer ("The Origin and Function of the Aisled Tetraconch Church in Syria and Northern Mesopotamia", DOP, vol.27, 1973, pp.91-114)は、4葉形を独自のものとして論考している。即ち、4葉形を含む十字形の平面は、長堂形式とも集中形式とも異なる範疇で形式として捉えられていたことが判る。
2. この語は Liddell & Scott ed., Greek-English Lexiconで "an assembly of the citizen, the church"とされ、Sophocles ed., Greek Lexiconで "the church, a particular church, local church, heretical church, the lord's house"とされる。
3. 遺構の選定には、初期キリスト教・ビザンティン建築の以下に示す概説書を使用した。BA: ECBA: D. Talbot-Rice, Byzantine Art, Pelican Book, 1968(1935): A. Effenberger, Frühchristliche Kunst und Kulture, München, 1986.
4. 教会堂Dは市街地の密集した地域に建てられ、周辺に洗礼堂等も設けられている (cf. S. Pelekanidis, "Kultprobleme in Apostel-Paulus-Oktogon von Philippi in Zusammenhang mit einem älteren Heroenkult", ACIAC, 1978, pp.393-397: D. Pallas, op.cit.)。一方、サンタ・コスタンザ教会堂、ヘレナ霊廟、聖墳墓教会堂、降誕教会堂においては、集中形式の集堂は長堂形式の集堂の一部を占める建物となっており、全体としての複合建築の主導的部分ではないため、本論では独立した構造体と看做している。
5. R. Krautheimer, "Success and Failure in Late Antique Church Planning", Age of Spirituality, New York, 1980, pp.121-139.
6. 長堂形式の教会堂において、儀礼用のホールと聖域とが長軸方向で明

確に分離されるため、G.Stanzl (Längsbau und Zentralbau als Grundthemen der Frühchristlichen Architecture, Wien, 1979, p.29) は、長堂形式を教会堂の構成において合目的であると看做す。

7. ガリチン山のテオトコス教会堂については、資料的補充が適わなかった。
8. Belting (op.cit., pp.54-71 & 93-102) の報告によれば、聖域は既存の構造体を変更することなく、身廊の床高を一部変え、テンプロンで囲むことにより構成されている。
9. A.P. Frutaz, Il monumentale di Sant'Agnese e di S.Costanza, Vatican, 1960, 75ff.
10. こうしたベマの梁間の拡張や強調は、幾つかの遺構に認められる。cf. S. Bottari, Ravenna: basilica di S.Vitale, Bologna, 1966, pp.113-140; P.A. Underwood, "Some Principles of Measure in the Architecture of the Period of Justinian", CA, vol.3, 1948, pp.64-74。また、礼拝室と考えられるが、ステファノ聖堂では、東側の礼拝室の柱間が、他の2つの礼拝室より広くとられている (R.Krauthheimer, op.cit.)。
11. Belting, op.cit., p.45.
12. エウフェミア教会堂、ヘレナ霊廟、ベツレヘムの降誕教会堂は身廊のみから構成される。また、テサロニキのロトングは、側廊が改修後設けられ、改修前の外壁が身廊と側廊とを分離する。
13. Butler (op.cit., p.97) は、遺構に柱を発見できないものの、集堂の南側に散らばる柱身や柱頭から、堂内にドームを支えた柱が用いられたと推定する。また、彼は2階回廊もあったと推定するが、それを裏付ける痕跡は記述中にみられない (idem)。
14. コンジューとエルサレムの集堂においては、形を除けば、2種類の柱に大差はないものと思量される。
15. G. Bovini, Saint Vital de Ravenna, Milan, 1956.
16. J. Ebersolt et.al., op.cit., 21ff.
17. W.S. George, The Church of Saint Eirene at Constantinople, London, 1913; U. Peschlow, Die Irenen Kirche in Istanbul, IMB, 1977)。
18. 教会堂において、2階回廊は基本的に教会堂の儀式空間から除外されるものであり、典礼儀式において必要不可欠な空間であったとは考えられない (T.F. Mathews, op.cit., 127ff.)。
19. R. Beny & P. Gunn, The Church of Rome, London, 1981, p.46.
20. R. Krauthheimer (ECBA, 66f.) は、広大な長堂形式の聖アグネス教会堂がキリスト教における集会施設で、当該の遺構サンタ・コスタンザ教会堂はキリスト教の世界感を示す建築と考えている。
21. A.P. Frutaz, Il monumentale di Sant' Agnese e di S.Costanza,

- Vatican, 1960, p.31.:G. Giovannoni, "La cupola di S.Costanza e le volte Romane a struttura leggera", Roma, vol.14, 1936, pp.37-42.
22. R.Michel(Die Mosaiken von Santa Costanza, Leipzig, 1911,p.48.)は、こうした洗礼堂説を否定する。
  23. Frutaz, op.cit., 76ff.Frutazによると、15世紀以降のスケッチや堂内を記述した資料から、堂内の装飾内容の全容を窺うことができる。
  24. Michel, op.cit.
  25. Ibid., p.46.
  26. Frutaz, op.cit., p.72. 現在周歩廊の南部に安置されている聖棺がこれに当たる。
  27. R. Benny et.al., op.cit., p.46.
  28. ヴォールト部のモザイクは他のモザイク等との図柄の類似性から、創建時の4世紀中期とされる。一方、ニッチのモザイクは4世紀中期のモザイク等と同じ図柄が見あたらず、後の4世紀後期から5世紀初期にかけて現れる図柄と同じ形式である。cf. Michel, op.cit., p.37.
  29. Vid., 註 23.
  30. M. Stettler, "Zur Rekonstruktion von S. Costanza", Rom.Mitt., vol.58, 1943, pp.76-86.
  31. Ibid., p.81. 後世にこの周歩廊と内側の周歩廊をつなぐ扉が設けられた。
  32. Frutaz, op.cit., p.75.
  33. Ibid., p.77.
  34. Stettler(op.cit., p.83.)は窓の大きさを110×24~30cmの間口と計測している。
  35. Stettlerはこの窓を創建時のものと考えている。
  36. Frutaz, op.cit., fig. 37.
  37. Frutaz, op.cit., p.76. また、Michel, op.cit., pp.22-46.Michelはドーム面のモザイクは周歩廊のヴォールトで用いられた画題が繰り返し用いられていたと推定している。
  38. Frutaz, op.cit., p.75.
  - 38a. Loc.cit.
  39. Stettler(op.cit.)の外壁面の検討で、見切り材として大理石のコーニスの用いられたことが判っている。
  40. Frutaz, op.cit., 77f.
  41. Ibid., 78f.
  42. 15世紀以降の堂内のスケッチや記述から再現される。Vid., 註 23.
  43. Frutaz, op.cit., p.77.
  44. R. Krautheimer et al, Corpus Basilicarum Christianarum Romae, vol.4, 1970, p.209.

45. Ibid., pp.109-203.
46. Krautheimer(op.cit., p.236)は外周部に残る装飾が創建時のものとみなせるため、出入口を塞いでいることについて、内部装飾が施された523-530年にかけて行われたとする。
47. Ibid., 236f.
48. Loc.cit.
49. Loc.cit. この改修時期はイノチェント2世(1130-1143)によって行われた。
50. Ibid., p.238.
51. Loc.cit.
52. Loc.cit.
53. Krautheimer(op.cit., p.233)はこの壁が内側に向かって角柱のアーケードを形成することで開いていたと推定する。
54. Krautheimer(op.cit., p.234)は外側が通路で内側が中庭であると計画上の構成から合理的なものとしている。
55. Ibid., 209ff. 煉瓦壁は煉瓦4~4 1/2層で1ローマ尺にあたる。
56. Ibid. 柱の長さは5.75mから、6.19mまで異なっている。
57. Ibid. 台座の高さの違いは16~37cmとなっている。
58. Ibid., p.232.
59. Ibid. 一方、KrautheimerはECBA(p.95)に於いてドームが架けられていたはずだと推定している。
60. F.W.Deichmann,"Die Eindeckung von S. Stefano Rotonda", RRKNO,. ここで、DeichmannはVitruvius, Faventius, Palladiusの3人のローマ建築書を検討し、後期ローマの建築書に現れる木造によるドームを"Scheingewölbe"とし、広くローマ世界で用いられたとする。事実、Vitruviusで僅かに触れられたに過ぎない木造ヴォールトはFaventiusの建築書では記述が増えている。
61. Krautheimer et al, op.cit., pp.213-215.
62. Loc.cit.
63. Ibid., pp.215-232.
64. Ibid., p.233.
65. Ibid., p.232.
66. Ibid., p.235.
67. Ibid., Biondo, Roma risaristaurata, 1527 & 1543. 「孤立して立つ大理石の柱とドーム(?)によって支えられ、様々に色彩のある音楽のように、調和の効果を与える大理石により・・・モザイクと大理石の板と丸い斑岩と蛇紋岩からなるオブス・セクティル、ナケーレ(?)の葉と葡萄の房と象眼細工と、その他の優雅な(装飾)」【筆者訳】
68. Ibid., p.235. この様子は15世紀の教会堂の内部を描いた絵画からも判る。R. Krautheimer, "Success and Failure in Late Antique

- Church Planning”, op.cit., fig.5.
69. cf. A.E. Vacalopoulos, A History of Thessaloniki, Thessaloniki, 1972. 535年にユスティニアヌス帝の時代、イリリウム県の首府となっている。
  70. 霊廟との考えに対し、ローマ神に捧げられた神殿との考え方もある (Th. Pazara, H POTONTA TOY AGIOY GEWPGIOY STH THESSALONIKH, Thessaloniki, 1974, p.13)。また、Krautheimer(ECBA)は宮廷に於ける玉座の間としての可能性を指摘している。
  71. A.E. Vacalopoulos(op.cit.)はこの改修時期を4世紀末から6世紀初期までの間とし、Krautheimer(ECBA)は400年から450年の間とする。本論ではテサロニキに建つ他の大規模な教会堂の建設時期が5世紀中期であることから、ほぼ同時期と考えた。
  72. Vacalopoulos, op.cit., p.19.
  73. Loc.cit.
  74. Pazara, op.cit., p.15.
  75. モザイクの年代は判然としないが、キリスト教会堂への改修時期とされる。cf. W.E. Kleinbauer, "The Orants in the Mosaic Decoration of the Rotunda at Thessaloniki", Cah.Arch., vol.30, 1982, pp.25-45.
  76. 内壁面を分節する建築部材は失われている。しかし、壁面の構成に於いて、層によって差がみられることから、3層に分節されたと推定できる。
  77. ECBA, p.237.
  78. Pazara(op.cit., p.16)によれば、この工法はイタリアで汎用されたオブス・カエメンティシウムと異なり、東地中海で汎用された工法であることから、東方の影響をロトングダに認める。
  79. O. Tafrafi(Topographie de Tessalonique, Paris, 1913, p.158)によれば、この塔は10世紀まで残っていたとされる。
  80. Krautheimer(ECBA)やHoddinott(op.cit.)も、この出入口棟を2層からなるとするが、その根拠となる外壁の痕跡については触れていない。
  81. Krautheimer(op.cit.)やHoddinott(op.cit.)はこの南側の出入口を教会堂のナルテックスに相当するものと考えているが、Pazara(op.cit.)は西側の部屋をナルテックスとする。ここでは、教会堂への導入路が南側にあることから、身廊部への入室を西側からとしても、南側の出入口をナルテックスとする案が妥当と考えられる。
  82. Pazara(op.cit.)はこの屋根の根拠と考えられる外壁面の痕跡について触れていない。
  83. ECBA, p.82.
  84. Krautheimer(op.cit.)やPazara(op.cit.)も、殉教者記念会堂に平面形態は似ているが、宮廷付きの礼拝堂と推定している。

85. Hoddinott, op.cit., p.109.
86. Loc.cit.
87. 東側の面のモザイクは失われているが、他の面の相似性から、Hoddinott(op.cit.)もKleinbauer(op.cit.)も西側の面と同一であったと推定している。
88. Hoddinott, op.cit., pp.114-116.
89. Ibid., p.111.
90. Loc.cit.
91. 2層目と3層目の間はモザイクが失われ不明であるが、他の層の見切りの形式から、同様にコーニスが描かれていたと推定される。
92. Kleinbauer(op.cit.)を除くと、他の研究者は1層目の人物を聖人と看做すが、初期ビザンティン期に於いて記された名称に匹敵する聖人が該当しない点、また身につけている衣服が聖人の身につけるものと異なる点、更に各人物に光輪がつけられていない点から、Kleinbauerはこれらの人物が教会堂への改修の際の寄進者や工事協力者を示すと推定する。本論ではこの推定を妥当とした。
93. エンタブラチュアはアーキトレイブ・フリーズ・コーニスと3層からなるが、中央のフリーズ部に面による図柄の相違を認め得る。また、柱については模様として螺旋形・無地・フルートのあるものなどがある。cf. Hoddinott, op.cit.
94. 1層部の柱頭にはコンボジット式も用いられているが、これはコリント式の変形と考えた。
95. Kleinbauer, op.cit., p.38.
96. Loc.cit.
97. Hoddinott, op.cit., p.121.
98. 発見された碑文にANTIOXOY ΠΡΕΠΟ-(σικροβ)とあり、アンティオクスが高位の官吏の時代に建てられたものであることが判る。R. Naumannは当時の、また後世の文献から、発見された位置に私邸があったと推定する。cf. R. Naumann & H. Belting, Die Euphemia-Kirche am Hippodrom zu Istanbul und ihre Fresken, Berlin, 1966, 15f.
99. 煉瓦に用いられた刻印は3種類あり、そのうち416~418年か431~433年のどちらかに相当する年代のものが一番多い。また、アンティオクスがpraepositusの職にあった時期が416~418年と推定されることから、Naumannは創建年代を416~418年とする。Idem., p.20.
100. cf. J.W. Perkins, "Nero's Golden House", Antiquity, vol.30, 1956, pp.209-219; I. Lavin, "The House of the Lord", Art Bulletin, vol.44, 1962, pp.1-27; K. Lehmann, "The Dome of Heaven", Art Bulletin, vol.27, 1945, pp.1-27.
101. Bildlexikon zur Topographie Istanbul, Tübingen, 1977,

- pp.122-125.
102. Naumann et.al., op.cit., p.22.
103. Ibid., p.23.
104. Grabar(Martyrium, Paris, 1946)はこの教会堂を殉教者教会堂とする。
105. Bildlexikon, op.cit.
106. アンティオクスの私邸の復元として、Naumann et.al.(op.cit., pp.34-44 & 45-111)を使用した。
107. Ibid., pp.49-53. 教会堂の外側に設けられている霊廟等は、壁の状態から9-12世紀に建てられたものである。
108. Naumann et.al., op.cit.
109. Ibid., p.37. 北側のニッチには水を引いている設備があり、この建物、あるいは北のニッチに於いては泉水と関連したる機能を創建時に有していたと考えられる。
110. Ibid., fig.4.
111. 森田慶一訳、『ウィトルヴィウス建築書』、東海大学出版会、昭和51(44)、7-1。ここで、ウィトルヴィウスは紀元前後にローマ建築に於ける床構成として、碎石、モルタル、瓦の層にて構成される床を記している。床の下地を幾層かにわたり構成するという点では同じであるが、ビザンティン初期の当該教会堂で用いられている床構成では、基本的に碎石の上はモルタルを基本とする層であり、簡略化されていると看做すことができる。
112. Naumann et.al., op.cit., 36f.
113. Naumann et.al., op.cit., pp.83-85.
114. Ibid., p.41. この大理石貼付けはシンスロノンの内側の壁にも並んでいることから、教会堂へ変更後ではなく、それ以前、即ち5世紀の創建時に行われたものと言える。
115. Ibid., p.93. 聖域部の残骸は発見されているが、ソレアとアンボに関するものはまったく見いだされていない。従って、他の建築部材も流用された可能性を、一概に否定し得ない。
116. Ibid., pp.39-44. Beltingはここでアンティオクスの私邸を復元しているが、教会堂に変更されてからも、聖域部や一部を除き、構成は同じものと考えている。
117. 主にローマ帝政期の集中形式にこうした構成がみられる。
118. Ibid., p.41.
119. Ibid., pp.39-44. Beltingも中層部に窓を設定している。しかし、セルギオス・バックス教会堂がBeltingの指摘するように、比較対象とするなら、窓の位置はドーム迫元が順当な構成である。
120. Ibid., pp.93-102 & 54-71.
121. Ibid. テンプロンに用いられている柱や隔壁の意匠を他地域、即ちマケドニアやラヴェンナの同時期の類例に認めることができる。

122. *Ibid.*, fig.32.
123. *Ibid.*, 93f. シンスロノン(シンスロノス)は0.29mの幅しかなく、人が座るためのものとは考えられず、むしろ象徴的なものとして設けられたと言える。
124. T.F. Mathews, *The Early Churches of Constantinople*, op.cit., pp.61-67. Mathews及びBeltingも痕跡を発見していないが、アンボとアンボへの通路であるソレアが設けられていたはずだと推定する。
125. 8角形の各辺のうち、ベマを仕切る辺が一番長い。cf. J. Ebersolt & A. Thiers, *Les eglises de Constantinople*, Paris, 1913, pl.5-11.
126. Procopius, *Building*, Loeb Class.Lib., I.
127. *Ibid.*, I, iv.
128. *Ibid.*, I, x. 「彼(ユスティニアヌス)は、ホルミスダス宮として知られる建物を修復した。このホルミスダス宮は宮廷に近い場所にある。・・・この宮廷の前には、列柱廊で囲まれた市場がある」【筆者訳】
129. *Ibid.*, I, iv. 「まず第一にペトルス・パウロス教会堂は新しく建てられ、以前ビザンティウムにはなかった。ここは、古くはホルミスダスと呼ばれた王宮の中庭に建てられていた。・・・そして、(これらの場所に建つ)建物は並んで建っていた。しかし、相互に向き合うのではなく、並んで建っていた。」【筆者訳】
130. 碑文は、Ebersolt et.al.(op.cit., p.24)の調査したものを検討した。
131. 「スケプトゥホスであるユスティニアヌス」【筆者訳】
132. 「全てに於て眠ることのない王の支配が永続せんことを」【筆者訳】
133. 「ティオドラの神に授けられし冠」【筆者訳】
134. 碑文は記された面の状態から、後世につけられたものとは考えられない。後世につけられたとすると、エンタブラチュア全体の変更を余儀なくさせる。従って、碑文は柱・柱頭・エンタブラチュアの構成がなされたのと同時期と考えられる。また、T.F. Mathews(op.cit., p.43)はこの創建年代について、ユスティニアヌス帝に皇帝の称号がつけられていないことから、527年よりも早い時期も考えられると示唆している。
135. Millingen(*Byzantine Churches in Constantinople*, London, 1974 (1912), 62f)はこの記述を*Sacrocum Conciliorum Collectio*に見いだしている。
136. Constantine VII Porphyrogenitusは*De ceremoniis aulae byzantinae*( Paris, 1976, 78ff.)で、皇帝がセルギオス・バックス教会堂の典礼に列席していることを述べている。
137. C. Mango("The Church of Saint Sergius and Bacchus at Constantinople and the Alleged Tradition Octagonal Church", *Jahrbuch der osterreichischen Byzantinistik*, vol.21, 1972, pp.189-193)はホルミスダス宮が536年までに修道院にされ、セルギオス・バックス教

- 会堂がティオドラによって建てられたとする。従って、教会堂は彼によれば、単性派の修道院の付属教会堂であり、2名の殉教者に捧げられた殉教者礼拝堂であるとしている。今日の史料的背景からは、宮廷付属の教会堂か修道院付属の教会堂か、確定することはできない。
138. Procopius, op.cit.,「確かに、(両者は)決定的に違っている。一方は、それ自体の長さが真素ぐになっているものであり、他方は柱が半円に沿って立っているものである。・・・それらにとって正面の扉があるところには、ストアが1つある。それは非常に長いもので、ナルテックスと呼ばれる」【筆者訳】
139. Ibid.「互いに通行するために、出入口(複数)がある」【筆者訳】
140. Ebersoltの図版を検討すると、南側の壁厚が2~3mほどであるのに対し、他の3面では1~1.5mほどしかない。従って、南側は、先に建っていたペトルス・パウロス教会堂の北側外壁部を含んでいると考えられる。
141. Mathews, The Byzantine Churches of Istanbul, London, 1976, fig.29.
142. Ebersolt, op.cit., pl.7.
143. コンスタンティノーブルに残されるビザンティン期の教会堂では、こうした煉瓦アーチは開口部となっている。vid., The Byzantine Churches of Istanbul.
144. cf.W.S.George, The Church of Saint Eirene at a Constantinople, London, 1913.
145. Mathews(op.cit., pp.48-50)はこの北側の開口をホルミスダス宮との連絡のためと推定している。
146. エイレネ教会堂の壁面は初期ビザンティン建築で広く用いられた煉瓦と切り石の層を交互に積む工法である。vid., The Byzantine Churches of Istanbul.
147. 両者の構造的な意味は異なるとしても、内観と外観に於けるドームの見え方の違いという建築の構成法について、ここでは「類例」とした。
148. Ebersolt et.al, op.cit., p.50.
149. P. Sanpaolesi("La chiesa dei Ss.Sergio e Baccho a Constantinopoli", RINASA, vol.10, 1961, pp.116-180)は、構造体がほぼ当時のままであると推定し、ドーム構成について検討している。彼はラヴェンナのサン・ヴィターレ教会堂とセルギオス・バックス教会堂とを比較して、前者が材料の軽量化によりドーム構造を完成させているのに対し、後者が構造的な発展によりドームが架けられたと結論している。
150. EbersoltやMillingenのようにこの教会堂を実地調査した者も、修理の手が加えられているにしても、ドーム部が創建時の実態を伝えるものと考えているように思われる。

151. 典礼の形式から、周歩廊は会衆者によって占められる場所である場合が多い。
152. Krautheimer(ECBA, pp.233-237)はホルミスダス宮の不整形な場所に作られたことと、施工の粗悪さを指摘する。Mango(BA, pp.101-107)によれば、基本的なデザインは正確になされたが、施工に於ける職人の技術が劣っていたとする。しかし、セルギオス・バッコス教会堂の身廊部と外周部との歪みは、職人の技術的欠陥の程度を越えていると推測される。
153. Ebersolt et.al., op.cit., pl.5-11.
154. Paul A. Underwood, op.cit.
155. Mathews(op.cit.)は階段に使用されているアーチの装飾形式から、階段をビザンティン中期に設けられたものと考えている。
156. S. Bettini(op.cit., pp.93-96)は、セルギオス・バッコス教会堂の空間を検討し、ビザンティン建築をローマ的な建築に比べ水平性を強調した建築と看做す。しかし、Deichmann ("Studien zur Architektur Konstantinopols", op.cit., pp.493-619.)はこの考え方が、ビザンティン全般にわたり適用できるものではないとする。
157. Millingen, op.cit.
158. cf. BA, 107ff.
159. Ebersolt et.al.(op.cit.)の図版、及びThe Byzantine Churches of Istanbul(op.cit.)の写真から類推した。
160. The Byzantine churches of Istanbul, op.cit., p.259, pl.29-29.
161. Ebersolt et.al., op.cit., pp.42-46.
162. The Byzantine Churches of Istanbul, op.cit., pp.251-257.
163. Ebersolt et.al.の図版を使用。
164. Millingen, op.cit., p.76.
165. Procopius, op.cit.,「それぞれは黄金で飾られ」【筆者訳】
166. 教会堂ではないが、洗礼堂を礼拝堂の一つと看做すことができる。この洗礼堂に於いて、いくつかの形式が異なる会堂が並び建つものとして、シリアに於いてゲラサやカルアト・シムアンの洗礼堂を指摘し得る。
167. 類例としてコンスタンティノーブルでテオトコス・ヨハネス教会堂(フェナリ・イサ・ジャーミ)や、ギリシャでオシオス・ルーカス修道院の教会堂等を挙げるができる。
168. Mathews, op.cit., pp.105-176.
169. Krautheimer, "Success and Failure in Late Antique Church Planning", op.cit. この論に於いて、彼はローマのステファノ教会堂とローマ帝政期の集中形式の建築を比較して、典礼として衆徒が堂内に集うことが平面計画上から不向きであるとし、集中形式が教会堂建築と

しては成功していないと指摘する。彼にとって、ステファノ教会堂は完璧なデザインをもちながら、機能的に失敗した「美しい奇形」と形容される。

170. Mathews(op.cit., p.47)はベテルス・パウロス教会堂が早期に失われたと推定する。従って、10世紀にはセルギオス・バッコス教会堂のみが残っていたと考えられる。
171. 周歩廊を男、2階回廊を女の集う場とする考え方と、周歩廊の左右で男女を分け、2階回廊を聖域としない説がある。初期ビザンティンに於いて、典礼の具体がはっきりしないことから、教会堂をどの様に使用したのか、必ずしも明かでない。vid., C. Mango, *Byzantium*, New York, 1980.
172. 現在壁の仕上げが失われているので、この点を確定的に論ずることはできない。ソフィア聖堂やエイレネ教会堂では、2階コーニスの上をペンデンティヴによって構成し、構造的な方法により壁面とペンデンティヴ面とを分節する。セルギオス・バッコス教会堂では、コーニスが用いられているが、壁面そのものは連続している。
173. 教会堂には多くの扉が設けられ、典礼の必要性により、僧侶らはこうした扉から入ったといわれる。しかし、これらの扉は典礼を導く側の出入口に当たり、一般的に教会堂へ参拝するものの進入経路として、ナルテックスから身廊部を想定し得る。vid., Mathews, op.cit.
174. H. Buchwald, "The First Byzantine Architectural Style: Evolution or Revolution?", *Oster.Byz.*, vol.32/5, 1982, pp.33-45. ここで、Buchwaldは長堂形式と集中形式に於けるビザンティン建築の解法に於ける、主な相違を集中形式が「the dynamic directional impact of the basilica」を欠如していることにあるとする。そして、集中形式は「static space concentrated upon its own center」であるとする。しかし、この観点は集中形式を平面図を通して検討したもので、知覚を通して検討したものとは言えない。
175. 長堂形式では、アプス部での採光と身廊部の高窓からの採光で、室内全般にわたる採光が行われている。これに対し、集中形式のセルギオス・バッコス教会堂ではドーム部の窓は身廊部でしかみることができない。
176. Bettini(op.cit., p.96)はビザンティンの集中形式の好例として、セルギオス・バッコス教会堂をとりあげ、ビザンティンの教会堂が水平性を強調した重い印象を与えるものと論じている。
177. S.Vitaleは、初期キリスト教建築を考究する際の試金石の一つであるが、一般的な概説資料や個別的な問題の検討は別としても、修理報告などの建築構成の全般に関する資料を補充することが適わなかった。従って、一般的事項の検討や一部の個別的问题を除き、詳細については後の課題としたい。

178. ステファノ聖堂で表中、アプスと分類した箇所は、4つの礼拝室に相当する。
179. セルギオス・バッコス教会堂とエウフェミア教会堂では、厚く塗られた仕上げ材やドームの崩落のため、コンスタンティノーブルの同時代の他の遺構から煉瓦と推定した。また、G. Giovannoni ("La cupola di S. Costanza e le volte Romane a struttura leggera", Roma, vol.14, 1936, pp.37-42) は、サンタ・コスタンザ教会堂のドームが構造的な配慮によって煉瓦リブを用いていると指摘する。
180. C. Cecchelli, op.cit.: L. Crema, "L'architettura di S. Vitale", Arte Cristiana, 1947-5/6, pp.47-50.
181. F.W. Deichmann, op.cit., pp.416-429. こうした木造ドームは当時の東方世界で普及していた (cf. B. Smith, op.cit.) 。
182. Krautheimer et al., op.cit., p.232.
183. Krautheimer (Ibid.) は、この絵と記述 (Biondo, Roma restaurata, 1527&1543) から、内部の状態を窺うことができるとする。
184. W.E. Kleinbauer, op.cit.: F.W. Deichmann & A. Tschira, "Das Mausoleum der Kaiserin Helena und die Basilika der Heiligen Marcellinus und Petrus an der Via Labicana vor Rom", op.cit., pp.305-374, fig.20.
185. P. Sanpaolesi, op.cit.
186. M. Bencivenni & O. Mazzeti, "La classe memoria di una città d'arte e d'invenzione", 中のC. Ricciによる復元図参照。現状においては、ベマとアプスに創建時の構成が残されているだけで、他の部分にはバロック期の改修が施されている (S. Bottari, op.cit., p.113) 。特に、隅柱でコーニス上部には仕上げが現在失われている。
187. F.W. Deichmann, "Säule und Ordnung in der frühchristlichen Architektur", op.cit., pp.159-186.
188. Deichmann (Ibid) が指摘するように、初期キリスト教期のこれらの集堂においては、転用材の柱が多い。
189. Krautheimer et al., op.cit., 235f.
190. Idem., "Il rivestimento marmoreo dei piloni di S. Vitale", Felix Ravenna, vol.21, 1916, pp.879-891.
191. C. Mango ed., op.cit.
192. K.E. McVey, "The Domed Church as Microcosm: Literary Roots of an Architectural Symbol", DOP, vol.37, 1983, pp.91-121.
193. Ibid., p.95.
194. 本論では当時の教会堂の装飾を検討する資料として、C. Mango ed., op.cit., pp.1-119.に所収されている記述を検討した。
195. Ibid., p.33. ここでは「両側の壁面」という言葉を側廊の壁と理解した。

196. Ibid., 116f.
197. Mangoの編纂した資料中、図像を使用に関する地域的な特性を認めることはできない。
198. Ibid., pp.80-87.
199. Ibid., pp.96-101.
200. キリスト教建築への改修以前の用途として、Th. Pazara (Η ΠΟΤΟΝΤΑ ΤΟΥ ΑΓΙΟΥ ΓΕΩΡΓΙΟΥ ΣΤΗ ΘΕΣΣΑΛΟΝΙΚΗ, Thessaloniki, 1974, p.13) はローマ神殿と考えKrautheimer(op.cit. p.82)は、宮廷の玉座の可能性を指摘する。しかし、当該の建築物は創建時にガレリウスの記念門と駢げられていた点、また宮廷の一部とされる八角形の広間が記念門を挟んで反対側にある点(J.M.Spieser, Thessalonique, École Française d'Athènes, 1984, pp.110-123) から、本論では玉座の間である可能性を薄いと考えている。
201. A. Grabar(Martyrium, vol.1, 149ff.)は、このエウフェミア教会堂の用途として殉教者教会堂を指摘するが、既述したように殉教者エウフェミアの聖遺体は、7世紀にもたらされたものである。
202. サンタ・コスタンツァ聖堂はコンスタンティン帝の娘コスタンツァの遺体を安置しており、教会堂としては1254年以降に使用された(R.Benny & P.Gunn, op.cit., p.41)。また、ヘレナ霊廟は、コンスタンティン帝の母ヘレナの遺体を安置する(F.W.Deichmann, op.cit.)。
203. この2棟は、コンスタンティン帝によって、計画が進められたと考えられ、初期の重要な施設の一つであるが、概説的な資料を除き、資料的な補充が適わなかった(cf. A. Effenberger, op.cit., 134ff.)。
204. C. Cecchelli, "Restaurierungen in San Vitale in Ravenna", Illustrazione Vatic., vol.3, 1932, pp.524-530; G. Gerola, "Il sacello primitivo di S.Vitale", Felix Ravenna, vol.11, pp.459-470.
205. Krautheimer, op.cit., 244ff.。一方、K.Wessel("San Vitale in Ravenna: ein Bau Theoderiches des Gross-en?", Zeitsch.f.Kunst., vol.22, 1959, pp.201-251)は、サン・ヴィターレ聖堂をカトリックの教会堂と考えている。
206. C. Mango (op.cit.) は、この集堂を単性派の修道院附属礼拝堂と推定する。
207. Loc.cit.
208. ヨルダンのガリチン山の教会堂もゼノ帝によって建てられている(Krautheimer, op.cit., 166f.)。
209. T.F.Mathews, op.cit., 177ff.
210. J. Lassus, op.cit., Paris, 1947, preface.。一方、H.J. Schulz (Die byzantinische Liturgy, Trier, 1980, 15ff.) は、東方教会において中心的な儀式はユーカリスト典礼であると指摘する。

211. D.G. Dix, The Shape of the Liturgy, London, 1978 (1945), p.103.
212. cf. J. Lassus, op.cit.: T.F. Mathews, op.cit.:A.M.Schneider, "Liturgie und Kirchenbau in Syrien", Nachrichten der Akademie der Wissen. in Göttingen, vol.3, 1947, pp.45-68. Mathews博士は、私信によれば、Liturgyが集堂の平面構成において主導的役割を果たしたとの考えに、否定的な見解を示されておられる。
213. P.A.Février ("Le culte de morts dans les communau-tés chrétié-nnes durant le IIIe siecle", ACIAC, vol.9-1, 1978, pp.211-274 ) は、mausoleumで聖餐の採られたことを指摘する。
214. Mathews (op.cit.) は、東方教会において現在の典礼は古い形式を保持しているが、これは中期以降の形式であり、初期から中期にかけて、典礼形式が大きく変化したと指摘する。
215. C.Mango, op.cit., 9f.
216. vid., 本論第2章。

## 第5章：集中形式宗教建築における構成の発展と系譜

前章までの検討に於いて、初期キリスト教期集中形式宗教建築として、制作者達の実態、また洗礼堂・集堂について、これらの建築の主空間の内部立面構成の特徴を検討した。しかし、こうした特徴が初期キリスト教期の建築構成として独自のものであるかどうかについては、明かでない。即ち、これらの宗教建築が形式として自律性を獲得しているのかについては、明かでない。この形式に於ける自律性を明らかにするため、本章では前代の建築の構成と当該の建築とを比較する。この理由として、前代の建築に於ける造形理念やその表出としての建築構成の規範から、当該の建築構成である特徴に離脱がみられるならば、それを建築の構成における造形理念の展開としての発展と見なすことができるからである。本論では、こうした離脱ないし差異をみせる初期キリスト教期の当該の建築に於ける構成を、形式に於ける自律的なものとし、建築構成の特質という概念で捉える。従って、本章に於いては、ローマ時代、とりわけ初期キリスト教期に先行するローマ帝政期の集中形式の建築との比較対照を通して、建築構成の特質について検討する。

### 第1節：ローマ時代『建築書』にみられる建築構成

初期キリスト教ローマ帝国の建築を制作した者については既に明らかにした。しかし彼らが制作に携わる際に拠り所としたと考えられる建築の技術書については、今だに発見されていない(1)。こうした建築書が一般的に流布していた可能性の高さは、ローマ時代帝政期初期のヴィトルヴィウスの建築書の記述から類推される(2)。そのため、集中形式のキリスト教宗教建築において遺構を通して明らかにした構成の実態が、具体的にどの様な指導、あるいは技術的な裏付けのもとに実現されたのか、直接知ることはできない。このように、現実の建築の背後に潜む形態を成立させている規範・理念について直接言明している史料は、初期キリスト教ローマ帝国の問題と

した集中形式について見いだすことができない。

一方、前代のローマ時代には、周知のように建築に関する「教本」として、3冊の著作が知られている。即ち、ヴィトルヴィウス、ファヴェンティウス、パラディウスによる建築書である。このうちパラディウス(PALLADIUS RUTILIUS TAURUS AEMILIANUS, 4世紀)の著作は荘園経営に関連して建築についてふれており、この執筆の動機から建築書として限定的な用途に供された特殊なものと考えられる(3)。前記したヴィトルヴィウスとファヴェンティウスの建築書はそれぞれ前1世紀と4世紀初期に書かれており、帝政期初期と帝政期末期の建築技術の水準と実態を包含していると考えられる。これらの技術書の中で、建築制作に於ける指導を窺うことから、執筆の時代の技術の範囲や構成の規範、更にはそれらの言説が包み込む建築の理念を窺うことができる。従って、ファヴェンティウスの後に続く時代である初期キリスト教期の建築における系譜を検討するうえで、これらの建築書の言説は重要である。この節ではそのため、前章において検討した集中形式の遺構の実態と関連する建築構成の内容について検討し、集中形式のキリスト教宗教建築との関係を明らかにする。尚、パラディウスの著作は先に記したように建築書というより、むしろ農業指導書としての性格が強いため、この章ではヴィトルヴィウスとファヴェンティウスの2書について検討する(4)。

#### 第1項：両書における構成の概要

集中形式のキリスト教宗教建築との関係を検討する前に、2つの建築書における内容の概要について検討する。

ヴィトルヴィウスの建築書は10巻よりなり、建築全般に関する百科全書としての性格をもっている。そのため記載内容も多岐にわたり、今日的意味で建築という範囲を逸脱した内容も議論されている。成立年代は紀元前1世紀後半に相当し(5)、ローマ帝政期の始まりに書かれた建築書である。従って、帝政期に於けるローマ建築の革新

的な展開については触れられておらず、全般として帝政期以前の建築に議論の集中する嫌いは否めない。一方、ファヴェンティウス（M. Ceti Faventius, 4世紀）のDe Diversis Fabricis Architectonicaeは4世紀初期に記され、量的にみてヴィトルヴィウスの建築書より手ごろであり、実用書としての体裁が整えられたものと推測される(6)。この建築書はPlommerによれば、全般としてヴィトルヴィウスの建築書の梗概になっているが、一部に記述内容の更新がみられるという(7)。従って、ローマ時代後期の建築における発展を、記述の中に部分的にしろ取り込んで成立したものと考えることができる。

この2つの建築書の記載内容の順序をみると、それぞれの編集方針の相違が明らかになる。表5-1はヴィトルヴィウスとファヴェンティウスの各章ごとに記述された内容を、両書で対応させて示したものである。両書とも、概括的な問題から個別的な問題へと議論の移行して行くのが判る。ヴィトルヴィウスでは建築に関わる主題が網羅的に取り扱われている。そのためか、ファヴェンティウスの扱う主題はすべて既出のものとなっており、ヴィトルヴィウスの時代にはみられなかった新たな主題の紹介は認められない。しかし、ヴィトルヴィウスからファヴェンティウスが選択した建築の主題から、ファヴェンティウスの建築書による主眼を理解することができる。即ち、表5-1で明らかのように、彼の論理構造は以下のように分類できる：建築の理念（1章）、建築物（住宅）を建てる際の外的環境条件（2, 3, 4章）、上水の供給に関する技術指導（5, 6, 7章）、用いられる建築材料（8, 9, 10章）とその加工法（11, 12章）、都市と農村の住宅（13, 14章）、住宅の機能面からの室構成（15, 16章）、住宅の各部についての個別的技術指導（17～27章）、測量方法（28章）、時計の制作（29章）。更に、17章から27章にかけては、浴室の天井構成（17章）、床仕上げ（18, 19章）、仕上げ材料（20, 22, 23章）、簡易ヴォールト工法（21章）、気候条件により制約を受

ける部屋や建築各部の構成（24, 25, 26章）、表面の彩色（27章）について議論されている。これらの記載内容にしても、多岐にわたる議論を尽くすというより、ヴィトルヴィウスの梗概となっている。とりわけ、ヴィトルヴィウスは各巻の緒言となるところで原理的な解説を試みているが、ファヴェンティウスにはこうした記述はみられない。これはファヴェンティウスでは実施における指導に主眼がおかれたためと考えられる。それに、ヴィトルヴィウスにみられる大建築に相当するものがファヴェンティウスで一切みられず、公共事業としての建築ではなく、私的な比較的規模の小さな建築、主として住宅に限定された技術指導と理解することができる。即ち、ファヴェンティウスの建築書では汎用できる技術の説明がなされているが、主として個人の住宅に供される建築技術の範囲に限定されると言えよう。

両書の論理構造の流れの違いに着目すると、上記した点がより鮮明になる。即ち、ヴィトルヴィウスの8巻で建築にとって補足的なものとして記された水に関する問題は、ファヴェンティウスで3章から7章にわたり記されている。記述の絶対量としてより、ファヴェンティウスに於いて全部で29章の中で4章分を当てていることで、水の問題は住宅にとって必要欠くべからざるものであったことが判る。また、ファヴェンティウスの内容はヴィトルヴィウスに対して多くの主題を欠落させているが、ヴィトルヴィウスの7巻については5章を除き、全て共通する主題に触れている。この7巻は建築物の仕上げについて記している章である。従って、ファヴェンティウスの建築観にとって、仕上げの指導、すなわち建築物の表面をどのように見せるかは、ヴィトルヴィウスの網羅的な内容に追随するほど重要な指導箇所と捉えられていたと考えられる。この理由として2つの可能性を推測できる。

1. 個人的な住宅の建設の実用書ということで、専門的な技術者よりも、その住宅の所有者の便宜を考えた。そのため、一般の者が作業できる仕上げ工事について記述を充実させた。

2. 建築の他分野に対し仕上げの記述が充実しているため、帝政期後期のローマ建築は、表面の仕上がり具合、すなわち視覚に関わる建築表面の効果が重要であった。

一方、両書で建築が内包する理念については最初に触れられている。ヴィトルヴィウスは建築の理念を6つの観念から構成されると捉えている：ordinatio, dispositio, symmetria, decor, distributio, eurythmia (8)。これに対し、ファヴェンティウスは8つの観念を指摘している：ordinatio, dispositio, venustas, mensura, distributio, aedificatio, conlocatio, machinatio (9)。この内、ヴィトルヴィウスのsymmetriaはファヴェンティウスのmensuraに対応し、ヴィトルヴィウスのdecorとeurythmiaはファヴェンティウスのvenustasに対応する。ファヴェンティウスのaedificatio (the process of building)、conlocatio (an arrangement, collocation)、machinatio (a contrivance, mechanical artifice) の3つについては、ヴィトルヴィウスで取り上げられていない。また、この3つの観念は本文の中で具体的に概念が説明されていない。しかし、ラテン語の意味から類推すると、ファヴェンティウスでは5つの観念が建築の原理として理論に関わるもので、説明のない3つは施工に関わるものと推測される。この建築の理念に関し両書を対応させたものが表5-2である。このように、基本的な建築理念は両書で類似したものだが、ファヴェンティウスの建築書ではより実施に向けた実用書としての性格が強調されたものと考えられる。従って、ローマ時代を通じて、建築の理念は継承されていたと考えられる。

## 第2項：『建築書』に於ける集中形式に類似した建築形態

両書において扱われている建築の種類のうち、集中形式のキリスト教宗教建築との類似と類えるものとして、次の2種類の建築を考察することができる。宗教建築としての用途に関連して、ヴィトルヴィウスの建築書では神殿を指摘できる(10)。更に、形態として一部類似を示すものとして、浴室を考察することができる。ここではこの

2点について、集中形式のキリスト教宗教建築との形態面での関係を検討する。

ヴィトルヴィウスは神殿の説明で、あらゆる神殿にとって最重要課題として、*symmetria*をあげている(11)。この*symmetria*を遂行するうえでオーダーの概念が適用され、基本となる比例体系として *modulus*が使用される(12)。*modulus*は建築全体に適用されるが、ここで建築全体とは柱・梁式構成、すなわち礎盤からエンタブラチュア上部までを意味している(13)。しかし、ヴィトルヴィウスの説明する神殿ではケツラ内部に柱の建つ例がみられず、*symmetria*の適用される建築の範囲は外観部に限定され、内部は外部で適用された *symmetria*の結果として構成されたと考えられる。この外観を優先する考え方は、神殿の分類に如実に現われている。即ち、彼は神殿を平面構成と外観の2点から分類している。平面構成では外回りに立つ柱の配置形式から7種類に分類し(14)、外観からは、外回りに立つ柱の間隔を基準に、神殿を5種類に分類している(15)。このように、ヴィトルヴィウスにとって神殿の美観及び分類の基準は外回り、すなわち外部に用いられる柱におかれていることが判る。これは神殿の建築における構成の規範が柱・梁式構成に依拠していることを示している。更に、小屋組として木造を原則とすることが記されている(16)。このようにヴィトルヴィウスは宗教建築としての神殿全般にわたり、木造の架構形式を規範として受け入れていた。

この神殿のうち平面形態が円形のものとして、2種類の形式があげられている(17)。ここではケツラのあるものとなないものとで分類されている。円形のこうした神殿についても*symmetria*による建築の比例が論じられているが、その範囲は屋根を架ける高さまでに限られ、天井や小屋の構成については触れられていない。従って、天井や小屋については、既に記したように、自明のこととして木造を規範として構成に適用したと考えられる。

このように、*symmetria*という神殿の美観に関連した構成に於いて、ヴィトルヴィウスではエンタブラチュアより上と下で、構成に対す

る意識が異なっていた。即ち、ローマの神殿建築の構成として配慮すべき部分は、陸梁よりも下に位置し、外部に面した部分に限定されていた。しかし、ドームを多用して建築の構成が天井面やエンタブラチュア上部までを含んでいる初期キリスト教期の集中形式宗教建築でみられる内部構成は、ローマ帝政期以前のヴィトルヴィウスの宗教建築に対する考え方に認められない。

この建築の用途とは異なり、ヴィトルヴィウスの建築書には、形態という観点から集中形式と一部類似を浴場ないし浴室に見いだすことができる(18)。この浴場の内、*laconicum*と*sudatio*の2つの部屋のみを円形の平面形態をとるべきであると記している(19)。この2部屋は蒸気による浴室と考えられる(20)。この蒸気の調整のため天井にはドーム (*hemisphaera*) が設けられ、天頂には換気のためにオクルスが開けられるようにと指導されている(21)。一方、他の浴室については部屋の形状の解説がされておらず、天井の形態についても「円筒天井」 (*testudines alveolorum, concamerationes, camerae*) とのみ記されている(22)。これらの用語は全てヴォールトを示しており、また全て複数形で用いられている。従って、部屋を覆う天井はいくつかのヴォールトから構成される交差ヴォールトを指示するものと考えられ、部屋の平面形態は矩形であったと推定される。*laconicum*と*sudatio*では、ドームであれば熱気(蒸気)が球面に沿って巡り、天頂のオクルスから逃れると指摘している(23)。従って、湿気を多量に出す部屋の形状としてドームが勧められており、ドームは特定の物理的環境への適正な形態として選択されていることが判る。このことは、ヴィトルヴィウスにおいて集中形式の部屋が環境への配慮から使用されたことを示している(24)。しかし、ドームのある集中形式が浴室で一般的に推奨されたとは言えない。

ファヴェンティウスでもヴィトルヴィウス同様、浴室に関する解説が記されている。しかし、その浴室はヴィトルヴィウスに比べより個人的な使用に供されるものであった(25)。ここで浴室としては主として*caldarium*と*frigidarium*が記されているが、平面形態につ

いては1:2/3の比例関係を示す矩形にすべきとのみ記されている(26)。これらの部屋の天井についてcameraという用語が使用されており、ヴォールトによる架構であることが判る(27)。ヴィトルヴィウスにおいてドームによる架構が勧められたsudatioで、ファヴェンティウスは2重ヴォールトで天井を構成すべきとしており、ドームへの配慮はみられない。このように、ファヴェンティウスの意図した一般的な住宅建築においては、集中形式の平面もドームも建築形式として既に多用された時代であるにもかかわらず、住宅にとって特殊なものであり、形態として意識されることはなかった。

このように、形態についてみる限り、両者とも集中形式を建築形式の一つとしてみなす意識はなかったことが判る。すなわち、両書の成立時期と記述内容から、ローマ帝政期以前の建築並びにローマ帝政期後期の一般的住宅において、集中形式という建築の形式は、現実に存在しながらも、形式として説明を要すると認識されるまでではなかった。

### 第3項：技術面における集中形式との関係

ヴィトルヴィウスとファヴェンティウスの建築書では、当時の施工にかかわる建築技術についても説明されている。ここで、集中形式のキリスト教宗教建築の内部構成に関係した両書の技術として、壁の構成、ヴォールトの工法、仕上げの材料の3点を指摘できる。

ヴィトルヴィウスは構造材料として煉瓦・石・セメントを議論している(28)。これらの材料は壁を構成するものとして捉えることができ、その積み上げ方により5つに分類される：網目積み (opus reticulatum)、乱石積み (opus incertum)、整層積み (opus isodomum)、擬整層積み (opus pseudisodomum)、エムプレクトンによる壁積み (ローマコンクリート、opus caementicium) (29)。この内、網目積みは内部を充填された煉瓦壁と考えられ、乱石積みは割石の壁と考えられる。整層積みと擬整層積みは切り石と煉瓦の層を交互に積み上げたものであることが判る(30)。エムプレクトン (

εμπλεκτον) と呼ばれる壁は、内部を充填された壁であると考えられることから、ローマのコンクリート壁である opus caementicium であることが判る(31)。このように、ヴィトルヴィウスの示す構造壁には煉瓦のみから構成される壁が含まれていない。しかし、壁への煉瓦使用が認められることから、ヴィトルヴィウスは煉瓦のみで構造体としての壁を造ることを疑問視していたと言えよう。

これに対し、ファヴェンティウスの構造壁への考え方は局限されたものになっている(32)。材料としては砂と石灰と煉瓦について紹介されているが、その内で壁材料としては煉瓦の記述のみに限定されている。更に、煉瓦の大きさについては Lydia, tetradoron, pentadoron の3種を紹介していることから、ヴィトルヴィウスの煉瓦種類を踏襲している。しかし、実施で用いられる煉瓦としては日干し煉瓦のみに限定して説明している(33)。また、壁としてローマではオプス・カエメンティシウムが使用されると記すものの、工法の説明として、構造壁に使用する日干し煉瓦の施工時の注意事項を説明するにとどまっている(34)。このように、ファヴェンティウスの意図した建築(住宅)においては、構造壁として日干し煉瓦で充分であったと考えられる。しかし、煉瓦の壁が一般的に用いられたことが判り、ローマ帝政期後期までに煉瓦による構造壁は汎用性を持つ壁として、建築において認識されるようになったと考えられる。

こうした建築書の記述に対し、集中形式のキリスト教宗教建築の前章で検討した遺構の壁の形式は、両書で紹介された形式の中にすべて含まれている。遺構の壁の形式をみると、洗礼堂・集堂において外壁の形式としては、煉瓦による壁と opus isodomum による壁でほぼ構成されている(表3-2,4-3)。洗礼堂ではリバ・サン・ヴィターレの洗礼堂が碎石による壁、カルアト・シムアンの洗礼堂で切り石による壁のみが、異なっている。一方、集堂においては、テサロニキのロトンダで表面を煉瓦とし内部にコンクリートを充填する壁、ガリチン山のテオトコス教会堂で切り石の壁が用いられるのみであ

る。このように、建築の規模の大小にかかわらず、壁の形式はほぼ共通しており、煉瓦の汎用を認めることができる(35)。従って、ヴィトルヴィウスの時代に比べ煉瓦が耐力上の問題を解決し、汎用される建築材料となった傾向を窺うことができる。

天井の構成としては両書とも基本的に木造を主とすることが記されたが、ヴォールトに関連して一部曲面の天井についても触れられている。ヴィトルヴィウスでは浴場(V-10)に関連してヴォールトの説明がされる。ヴォールトの基本的材料としては、石か煉瓦が勧められているが、同時に木造の場合についても記されている。即ち、木造のヴォールトを構成する場合、湿気で材が腐らないように2重にするよう指導している。更に、この木造ヴォールトについては仕上げ材料に関連して記述されている(VII-3)。これに対し、ドームの構法についての記述はない。この木造のヴォールトはファヴェンティウスの記述中にあらわれる*camerae canniciae*に相当するものと考えられる(36)。こうした木造ヴォールトについては内側の面をモルタルで固め、スタッコのような材料で塗り上げることで平滑な曲面を作り出している。従って、工法として木造のドームにも応用できるものであることが判る。このように、天井の構成については、曲面であることも含め、両書とも木造を念頭に置いていた可能性を推測できる。

検討した集中形式の遺構では、両書に現われない天井構成として、サン・ヴィターレ聖堂、オーソドックス洗礼堂、サンタ・コスタンザ教会堂の3つを指摘できる。即ち、前2者のドームでは軽量化のために煉瓦チューブが用いられ、後者ではリブを有するコンクリートドームが架けられている。一方、ステファノ聖堂では木造のドームの架けられた可能性が高い。しかし、全体としてみるならば、集中形式のキリスト教宗教建築においては、天井の構成として基本的に煉瓦のドームが架けられ、前代のローマ時代の架構技術が継承されていたと考えられる。

このドームの天井における仕上げとして、ヴィトルヴィウスはス

タッコの使用法を説明している。ここでは、スタッコが単なる上塗りだけでなく、彫形を作り出す材料としても解説されている(37)。このことについてファヴェンティウスも同様に説明している(38)。このように集中形式の遺構でスタッコは中層部や彫形で多用されるが、これはヴィトルヴィウスの時代からの用法を継承したものであることが判る。しかし、集中形式の低層部で用いられた大理石を仕上げ材として貼りつける手法は、両書の仕上げ技術には記されていない。即ち、ヴィトルヴィウスは大理石の用法で、大理石を粉にしてスタッコとして使用する方法に限定して述べている(39)。従って、集中形式で垂直面の低層部壁仕上げとして汎用される大理石貼付けは、後代に普及した仕上げ技術であることが判る。また、色彩に関連してヴィトルヴィウスは壁画の解説をしているが、ここではフレスコに相当する技法で具象的な絵画を世俗建築に用いるよう勧めている(40)。従って、集中形式の遺構にみられたモザイクによる曲面の仕上げ形式は、キリスト教の宗教建築に於いて独自に発展したものと推測される。このように、内部の壁面を仕上げる方法について集中形式で用いられる大理石貼合わせやモザイクの使用は、2つの建築書の中にはみられない。このことは、両建築書に代表される時代、すなわちローマ帝政期以前の建築、並びに帝政期後期の住宅建築と集中形式のキリスト教宗教建築とが、仕上げに関する技術的規範で大きく異なっていたことを示している。 建築を構成する際、ローマ時代の建築書に示されるものと、集中形式のキリスト教宗教建築とで、建築内部の表面に於いて相違がみられることは、両建築に於ける表現形式の違いを示している。即ち、両者の間では、造形理念の相違が表現形式の違いとして表われていると考えられる。

## 第2節：ローマ帝政期における集中形式

前節での検討から、紀元前期のローマ建築において集中形式の空

間が存在していた可能性は高いが、ヴィトルヴィウスの記述内容から、それを一つの独立した建築とみなす視点は不在であったと言えよう。しかし同時に、2つの建築書において集中形式がつくり出す空間の採用を、神殿・住宅・浴場に予測できる。事実、ヴィトルヴィウス以後のローマ建築の発展期とされる帝政期においては(41)、遺構から集中形式の空間を神殿・浴場・皇帝の住宅に見いだすことができる。こうした建築の遺構は発掘によって明らかにされることが多いため、壁体の一部を残すだけで建築の構成について知り得るものは少ない。従って、それらの建築構成の概要を窺うには、断片化した資料を検討するしかない。この節では、初期キリスト教ローマ帝国の集中形式の宗教建築において内部構成に着目したことから、これらの帝政期の代表的な集中形式の空間の内部構成について主として検討する。

また、一般的にローマ帝政期は紀元前27年から235年までを指すが(42)、建築の発展は紀元前1世紀より始まっている。従って、本論では、紀元前1世紀のアウグストゥス帝以前でも、集中形式の空間の見られるものについては検討の対象と考えている。更に、4世紀初期のコンスタンティヌス大帝の時代は初期キリスト教期となるが、本論ではキリスト教宗教建築に分類されない建築について、ローマ帝政期の建築の系統として理解している。従って、本論で用いているローマ帝政期とは、紀元前1世紀から4世紀初期までを対象とする期間としている。

#### 第1項：神殿・霊廟・皇帝の住宅における集中形式

ローマ帝政期の神殿・霊廟・皇帝の住宅は、当時の権力の中心と直結した建築と考えられる。即ち、前2者においては権力の記念碑としての性格を、後者においては権力の私的部分としての性格を認めることができよう。このことは古代国家における権力の祭司性を考えるとき、これらの建築は権力の中枢部における公と私を示すものとみなすことができる。この権力の機構形態はキリスト教が公認

されると共に、教会内部の機構として援用される(43)。従って、両者（皇帝と教会）が建築に向ける姿勢には、類似を推測し得る。

ローマ皇帝の住宅で集中形式の空間が使用された最も早い例としては、皇帝ネロのドムス・アウレアを指摘できる(44)（図5-1）。この住宅はネロ帝のそれまでの住宅（*Domus Transitoria*）が64年に火災で焼失後、その住宅の敷地を更に拡大して64～68年にかけて建てられたものである(45)。しかし、その多くはネロの死後破壊され、現在概要を知り得る区画はトラヤヌス帝の浴場に一部組み込まれた住居区域に限定されている。計画全体から *rus in urbe* と呼び得る都市内のヴィラとしての性格が強い(46)。住宅としての性格は、紀元前の軍事的な要塞としてのヴィラと異なり、紀元後の解放的な田園生活の模倣を旨とするヴィラに属している(47)。この点についてスエトニウスは(48)、ドムス・アウレアを

*machinationes tectorum supra tecta surgentium et  
urbium urbes prementium*

と記しており(49)、自足的な生活を送れる住区と捉えている。

ドムス・アウレアの残された住居部は3つの部分から構成される。即ち、西翼と東翼、それにその両者を繋ぐ連絡部である。西翼には中庭が、連結部には南へ開かれた庭が設けられている（図5-2）。8角形からなる集中形式の部屋は、東翼の中央部に設けられている。この部屋は北側の5つの辺が食堂ないし個室（*cubicula*）に接続し、南側の1辺が庭に設けられた人工池に面していた。この人工池の水は8角形の部屋の方へと流れる仕掛になっていた。従って、部屋の性格としてはニンファエウムに近いものであったと考えられる。この部屋から接続する部屋へは柱・梁式構成による開口で繋がられているため、各隅に残る壁は不整形な柱に見える。この上を煉瓦による梁で繋ぎ、稜のあるドームをのせている。ドーム上部にはオクルスが設けられる。ここで、ドーム直径が13.48mであるのに対し、オクルスの直径が5.99mもあることから(50)、内部の密閉性は低く、形態としては室内というより住宅のアトリウムとしての性格の強いも

のと考えられる(図5-3)(51)。周辺の接続する部屋へは、ドームのエクストラドスの上に立ち上がる壁にアーチ型の窓を設け採光していた(図5-4)。このような採光形式を見ると、集中形式を含む区画において、多様な建築面が採光に用いられており、形式としての統一感は見られない。

構造材料としては、オブス・カエメンティシウムが用いられ、オクルス周辺のリングと梁に煉瓦が用いられている(52)。また、壁は表面を煉瓦とし、内部にオブス・カエメンティシウムを充填している(53)。

仕上げについては残されていないが、ネロの家庭教師であったセネカの手紙からその幾らかを知り得る(54)。即ち、「*versatila caenationum laquearia*」と記されており、ドームの天井面は回転していたことが判る(55)。また、ここで食堂(*caenationum*)がラテン語の複数形で表現されており、こうした動く天井の部屋は一つでなかったことが判る。更に、スエトニウスはこの部屋を「*praecipitua caenationum rotunda*」(56)と呼び、円形と八角形の形態上の相違を意識していない。こうした回転する天井は、「*quae perpetuo diebus ac noctibus vice mundi circumageretur*」と表現され(57)、世界そのものを象徴し、部屋の空間における求心性を意味している。また、スエトニウスの次の記述から、室内の様子を窺うことができる。

*caenationes laqueatae tabulis eburreis versatilibus,  
ut flores, fistulatis, ut unguenta desuper sparger-  
entur*(58)

このように、天井面は穴のある象牙で仕上げられ、この穴から花や香水が部屋に散布されたと言われる。このように、ドームの回転がどのような機構で行なわれたかは不明だが、記述を信じる限りで、ドームは2重で構成されていた。この事実は構造としての躯体と仕上げとしての表面が、建築を構成する際に、意識の上で分離して捉えられていたことを示すものと考えられる。この構成から必然的に、

ドームでの仕上げはイントラドス側に張り出し、この張り出した面と下部の壁面の取り合わせを調整するために、下部の仕上げ面は現在よりも前面に張り出していたと考えられる。即ち、開口部を支持する梁にはコーニスが、壁柱には仕上げが施されていたと考えられる。このように、ドムス・アウレアの内部空間の構成では、ヴィトルヴィウスが建築に於ける原則とした柱・梁による構成と異なり、面となる壁とドームを仕上げで繋ぎ合わせてゆく手法が用いられていると考えられる(59)。

集中形式の部屋が複合建築の中に取り込まれたドムス・アウレアのようなヴィラとして、ハドリアヌス帝のチボリのヴィラを挙げることができる(図5-5)。ここでは多様な集中形式が各種の建築に用いられた(60)。ヴィラ・アドリアーナではハドリアヌス帝の生涯にわたり増築されるが、ピアッツァ・ドーロを初めとし、各種の建築で曲面の周に沿って柱が並べられている。これらの曲面部は吹き放ちと考えられているが(61)、曲面を囲う形式として柱・梁の構成が用いられた。

ピアッツァ・ドーロの玄関の間は外形4角形で内部8角形により構成されている(図5-6)。屋根は煉瓦リブによるドームがかけられ、中央にオクルスが設けられている。また、アカデミアの通称アポロ神殿は(図5-7)、円形の平面にドームが架けられていたと推定されている(62)。この神殿の内壁面はコーニス(エンタブラチュア)によって分節され3層から構成されている。低層部の壁面は煉瓦の付け柱で分節され、中層部ではこの柱間に呼応して窓が設けられている(63)。従って、ヴィラ・アドリアーナでは、採光方式として2種類の集中形式が使用されている。また、壁が構造としての実体を示すにもかかわらず、視覚上の構成として柱・梁が内部の表面に用いられている。

ヴィラ・アドリアーナにおいても皇帝の浴場に集中形式の部屋が見られるが、この浴場の一部屋で独立した構造体の集中形式がピアッツァ・アルメリーナに認められる(図5-8)。これはマクシミアヌ

ス帝による3世紀末から4世紀にかけて建てられた、シシリー島のヴィラである。集中形式の8角形の部屋はfrigidariumとして使用され、caldariumへ向かう軸線の経過点に浴場の中で位置している(64)。8角の各辺には半円のschola labriが設けられ、北側と南側でこのエクセドラのschola labriのリズムが崩れている。即ち、北側はアプス付きの長堂形式からなる更衣室、南側は3葉形のschola labriに繋げられている。従って、caldariumへ向かう機能面の軸線に対し、形態の上での南北軸が直交する。このfrigidariumでは独立した構造体であることから、平面の制約が少なく、外に向かい花片のように広がるアプス状のエクセドラを形成する平面形態のとりえたことが判る。即ち、このヴィラの浴場においては、それぞれの機能に対応する部屋が複合化されて一体化されるのではなく、相互に独立して繋げられている。また、上部にはドームが架けられたと推定されるが、上部の構造形式は失われている。更に、室内には隅部の壁面線より前面に独立した柱が建てられている。従って、壁式構成と柱・梁式構成とが同一立面に用いられている。

このような皇帝の住宅における独立した集中形式として、ローマのミネルヴァ・メディカがある(図5-9)。この集中形式はガリエヌス帝の庭園に4世紀初期に建てられたオプス・カエメンティシウムによる庭園建築である(65)。平面は10角形からなり、9個のエクセドラが外部に張り出している。入口の反対側にあるエクセドラは他のものより大きくとられており、南北の主軸線の計画されていたことが判る。この主軸線にほぼ直交する軸上にある東西それぞれ2つのエクセドラは、3連アーチで庭に向かって開かれている。従って、東西南北の軸が計画の上で意図されていたと言える。上部の構造はこの低層部の10角形の辺に対応してドラムに窓が設けられた。このドラムの上に、煉瓦リブによるドームが架けられていた。また、内壁面に残る穴の状態から、創建時の壁仕上げとして大理石が貼られていたと考えられる。このミネルヴァ・メディカとピアッツァ・アルメリーナの浴室にみられるように、集中形式として独立した構造

体の場合、外に広がるエクセドラを各面に付設し、副次的な空間を主空間の周囲に巡らしていることが判る。

これらの形式に於ける多様性のみられる住宅に対し、帝国の公的建築政策として立てられる神殿や霊廟では、全般としてドームが架けられ、基壇の上のり、前面に風破を上げ、吹き放ちになったプロナオスを設ける例が多い(66)。ここでは、こうした集中形式の建築の中で、創建時の建築構成について全体にわたり知り得るパンテオンについて検討する。ローマ帝政期の集中形式の完成した建築として、ローマのパンテオンが指摘される(67)。このパンテオンの祖型としてベルガモンのゼウス・アスクレピオス神殿が指摘されることから、パンテオンは集中形式の神殿としての発展の系列に含まれる建築と看做すことができよう。現在のパンテオンは三角形の風破を上げたギリシャ神殿風のプロナオスと、円形の平面にドームを架けたナオスとから成る(図5-10)。古代の創建時にはプロナオスの前面にアトリウムに匹敵する列柱廊が設けられていた(68)。現在の形態はハドリアヌス帝により作られた(69)。構造形式は壁を煉瓦コンクリートで、ドームをオブス・カエメンティシウムで形成している。上にゆくほど材料が軽量化され、構造への配慮が払われている(70)。建設は3期からなる。第1期はアグリッパ帝の紀元前後で、第2期が紀元80年の火災後のドミティアヌス帝による修復、第3期がハドリアヌス帝により現在の形態に改められた(71)。ハドリアヌス帝以前のパンテオンは、一般的なローマ神殿と同じ長堂形式の建築であったと推定されている(72)。プロナオス部に伝統的三角風破を有することから、この部分をハドリアヌス帝以前とする考え方もあるが、煉瓦の封印からハドリアヌス帝の時代であることが判る(73)。従って、建築全体をハドリアヌス帝に帰することができる。

集中形式のナオス内部は3層から構成される(図5-11)。低層・中層がドラム部に当り、上層がドームに相当する。各層はエンタブラチュアによって分節されている。一方、プロナオスから回り込んだエンタブラチュアと外壁面に設けられたコーニスと、内部のエン

タブラチュアの高さは異なっている。このことから、ナオス内部の構成は、建築の外部から独立して計画されたものと推定される（図5-11a）。

低層部の壁面は入口の面も含め16に分割されている。これらの壁面には入口を除き、半円のニッチが3つ、矩形のニッチが4つ、それに壁面から張り出したエディキュラが8つ、交互に設けられている。この半円と矩形のニッチでは、内部壁面の円周に沿って2本柱が建てられ、両脇に浅い矩形の付け柱が設けられている。この柱は低層部と中層部を分節するエンタブラチュアに達している。このように、実体的な柱・梁による構成と、付け柱による装飾的な柱・梁の構成とが同一面で混在している。これらのニッチの内、入口の反対側にあるものは、ニッチ前面に柱が建てられ、エンタブラチュアがこの面で折れ曲がっている。即ち、この部分のエンタブラチュアは、壁と柱の間に渡され、ルソートに近い部材となっている。このように、入口の反対側のニッチが構成において強調され、入口からこのニッチへ向かう主軸線が形成されている。エンタブラチュアは壁に埋め込まれているが、コンクリート壁が構造体となっているため、構成の形式として用いられたと考えられる。事実、このエンタブラチュアは入口の反対側にあるニッチ内部にまで回り、壁付き柱と接続するが、半ドームの迫元として見切り部材に使用されている（図5-11a）。見切り部材としてはエンタブラチュアでなく、コーニスで部材として十分なはずである。従って、柱・梁の構成を遵守するため、構造的な役割のない本来の構造部材が用いられたと考えられる。

ニッチの間の壁面にはエディキュラが設けられ、小規模な柱がエディキュラの風破を支えている。こうしたエディキュラやニッチ内には、創建時にローマの神像が建てられていたと推測されている（74）。また、壁面の仕上げとして、オブス・セクティルが貼りめぐらされた。

中層部は低層部のエンタブラチュアの上に腰壁を回し、その上に

付け柱が建てられて上層のドームと中層部を分節するエンタブラチュアに達している。入口と入口の反対側にある半ドームが低層部のエンタブラチュア上にある面を除き、中層部の14に分割された面の中央に位置する場所に窓が設けられた。この窓は壁面を彫り込んでいるが外部に達しておらず、採光の役割はない。従って、窓よりもエディキュラに類似したものと言える。また、中層部の付け柱は全て同じ幅であるが、低層部の柱に比して細すぎ、上下の釣合が悪くなっている。このように、中層部においても柱・梁の構成が実体的な構造形式としてではなく、装飾の形式として用いられたと考えられる。

このようにドラム部に当たる内部壁面の構成が、半ドーム前面の2本の柱を除くと、壁面の面内で柱・梁の構成が装飾としての仕上げ形式として用いられていることが判る。

一方、上層のドーム内面は、1930年の調査で現在の形式がハドリアヌス帝の時代と同じであると推定されている (75)。しかし、当時のドーム面は仕上げとしてブロンズのオーナメントと色付きのスタッコで、青地に金色の星を散りばめていたと推測されている(76)。ドームは5つの水平リングで分けられ、リブによって各層28個の面に分割されている(77)。従って、中層部の柱とリブとは垂直方向で連続していない。

このように、パンテオンの内部空間の構成をみると、柱・梁による線的な構成が壁面内で全般にわたり用いられ、装飾の形式に匹敵するものとなっている。この壁面は3つに分節され、各層を積み重ねながらも、上下方向へのベイの統一という概念で、相互の連続感は計られていない。即ち、低層部の独立柱と中層部の図像による柱とは連続していない。ドラム部の壁仕上げとしては大理石の貼合わせが使用され、構造体を被覆している。この大理石の色彩はドラム部で7色使用され(78)、ドーム部を含めると、内部は色彩の豊かな空間であった。即ち、パンテオンにおいてはヘレニズム以来の神殿の建築構成部材を構造的な要求を取り去り、視覚的な建築構成とし

て援用したものと考えられる。その援用において、集中形式への適用の際、ニッチ内の入り隅の付け柱にみられるように、部材の取り付け箇所での構成の破綻が結果として現れたものと言える。

皇帝の住宅・神殿などのローマ帝政期の宮廷と直接関係した集中形式の建築においては、壁のドラムにドームが全般的傾向として架けられた。しかし、壁表面の装飾形式として、柱・梁の構成を用いる傾向を認めることができる。また、ドームを天空の象徴とみなす観点は認められるが、Smithの主張するように、キャノピー(バルダッキノ)の調度からの発展を補足する根拠は認められない(79)。特に、オクルスを設けるドームでは、ドーム中央部が面として欠落するため、キャノピーにみられるドーム面の一体化は認め難い。また、ニッチには神像を置いたり、浴槽を置いたりして、機能的に明確にされた副次的空間として使用された。

## 第2項：浴場建築における集中形式

浴場はローマ帝政期に世俗における快適さの追求のために建てられた都市施設である(80)。入浴そのものの習慣はギリシャ時代から行なわれ、紀元前3世紀のゴルティスで円形平面の浴場が発見されている(81)。しかし、ギリシャ古典期・ヘレニズム期を通じ、入浴はアスクレピオンの供儀と一方で結びつき、治癒行為の一過程としても成立していた(82)。ローマ浴場にこうした宗教性は認められない(83)。ローマ浴場は記録上紀元前1世紀に170棟、2世紀に800棟を建設され(84)、帝国全土に建設されていたことが判る。事実、4世紀末にローマ市内で大規模な浴場は11棟、小規模な浴場は800棟も作られた(85)。この状態は初期キリスト教期にも継承され、425年のコンスタンティノーブルで大規模な浴場は9棟、小規模な浴場は153棟あったと言われている(86)。このように浴場建築はローマ帝政期・初期キリスト教期を通して、都市内の建築として一般的なものであった。大規模な浴場は帝国によって直接管理・運営され、小規模な浴場は個人所有であり、施設のにも不備を伴うものであった(8

7)。従って、建築の構成の上でも大きな格差が存在したと考えられる。しかし、名称としては *thermae*, *balaneion*, *lutron* と呼ばれ、規模の差を反映した名称上の区別はない(88)。このように、名称は浴場そのものを指し、形態を指定するものではない(89)。これらの浴場で小規模な個人浴場について、帝政期の状態は明らかにされていない(90)。一方、大規模な浴場は上部構造を失っているものの、遺構や発掘の状態からその概要を知り得る。

こうした大規模な浴場では、帝政期初期から機能上の複合化が推し進められた(91)。このため浴場は小規模な都市に匹敵するという見解もあるが、主として建築の構造体に限定すると、3つの領域から構成される。即ち、熱を供給する領域、作業の領域、利用者の領域である。この内、利用者の領域は以下のような機能を持つ部屋から一般的に構成される：*frigidarium* (水浴室)、*tepidarium* (温浴室)、*caldarium* (熱浴室)、*laconicum* 或は *sudatorium* (サウナ)、*palaestra* (中庭)、*peristyl* (中庭)、*natatio* (プール)、*aleptorium* (オイルを塗る部屋)、*destrictarium* (毛を剃る部屋)、*apodyterium* (更衣室)、*schola labri* (水槽の置かれるニッチ)。これらの部屋で *frigidarium*, *tepidarium*, *caldarium*, *laconicum* が浴室を形成し、浴場の中心となる浴室は *caldarium* であった(92)。こうした多数の部屋を持つ浴場では、各部屋を近接して設け、列柱廊や通路などの連絡路をできる限り減らし、動線の合理的な運用が計画された(93)。従って、こうした浴場では集中形式の部屋が使用されても、外形からその存在を識別しにくい。表5-3は主として帝政期の主要な浴場について、集中形式の部屋の形態と機能について表示したものである。この表から明らかのように、集中形式の部屋は外形の矩形であるものが多い。このことは、全体として矩形の平面形態を示す浴場への適合性として、外形が矩形にされたものと考えられる。事実、部屋の外形も集中形式を示す遺構では、当該の部屋は建物の外周部に位置し、複合建築である浴場に組み入れられるか、独立した構造体となっている。また、外形が矩形のものも、部屋の各

隅の壁が厚くなる箇所にニッチを設け、そこをschola labriとして使用している。一方、集中形式の部屋の機能はlaconicum, tepidarium, caldariumが多く、熱を持つ部屋に使用されている。この事実は、ヴィトルヴィウスが記しているように(94)、集中形式の部屋の形態が室内環境への適合性から採用されたことを示している。

表面の仕上げ等の内部の建築構成については、多くが躯体や基礎を残すだけで、不明のことが多い。しかし、個別的に以下に示す浴場については、概要を知り得る。

ボンベイの3つの浴場については、4角形に内接する円形平面の部屋はlaconicumとして使用され、各隅にニッチが作られていた。フォルムの浴場では、この円形の部屋はapodyteriumへ通じ、更にapodyteriumからtepidariumへ、tepidariumからcaldariumへと線形に繋がられている(図5-14)。従って、laconicumは動線の一方の終点となっている。このcaldariumは南側のアプス内に水盤を置く長堂形式の部屋で、天井にはヴォールトが架けられた。壁・ヴォールトには色付きのスタッコで浮き彫り状の表面仕上げがなされた(95)。このスタッコは壁面で浅い付け柱を模して塗られている。また、他の部屋においてはフレスコ画が壁面を飾っている(96)。こうした、内部壁面の仕上げの全般的傾向から、集中形式の部屋についても同様に表面を塗って建築の部材構成を表現することが行なわれたと考えられる。

ボンベイの浴場は帝政期の初期の比較的規模の小さな浴場であるが、大規模な左右対称形の浴場であるアントニヌスの浴場では、集中形式の平面をした5室が北側の外壁面に沿って並べられている(図5-15)。最も大きな部屋はcaldariumとして使用され、浴場の計画の上で主軸線の終点に当たり、浴場全体の中心を成す部屋である。この部屋の内部は床がモザイクで、壁が大理石で貼り上げられていた(97)。これらの集中形式の部屋には、かつてドームが架けられていたと推定されている。こうした左右対称の大浴場はローマでカラカラ帝の浴場において初めて現れる(図5-16)。ここでも集中形式

の部屋は南側外周部に位置し、外形として円形の構造体の半分を現わしている。部屋はcaldariumとして使用され、動線の終点に当たる。この部屋では壁面を8つに分け、一つを出入口とし、他の7つの面にschola labriを設けている。上部は直径35mのドームが架けられ、ドラム部に窓が巡らされた(98)。従って、ヴィトルヴィウスの記述のように(99)、採光面の下部に浴槽が設けられている。このように、ドームにオクルスを設けるのではなく、ドラム部に窓を設ける例としてコンスタンティヌス帝の浴場がある(図5-17)。ここでも円形平面のcaldariumは建物の南端に位置し、動線の終点にある(100)。また、集中形式の他の4つの部屋は矩形に内接し、建物の東西の外周部に配置されている。このように大規模な浴場で集中形式の部屋は、ディオクレティアヌス帝の浴場も含め、建物の外周部に設けられたと言える(図5-18)。また、採光や換気として、天頂のオクルスばかりでなく、ドラム壁面に窓を設けることも成された。このドラム部への窓の設置について、Raschは2世紀前半からドームを架けられる建築で用いられるようになったとする(101)。内部の仕上げについては断片的にしか判らないが、全般的な傾向として大浴場では大理石が貼り付けられたとされる(102)。また、同時に壁の見切りとしてエンタブラチュアやコーニスが用いられたが、規範とするプロポーションの統一は見られないとされる(103)。

以上、浴場に見られる集中形式の部屋の建築構成から、以下のように全般的傾向を捉えることができる。即ち、集中形式の部屋は壁体の構造で、上部にドームが架けられた。この構造体を被覆する形式で仕上げが成され、柱を模した装飾形式も用いられている。これは、柱・梁の構成を視覚化して用いたものと考えられる。こうした構成の特徴を指して、MacDonaldはローマ浴場を「highly mnemonic」と定義している(104)。即ち、建築の構造部材の構成を形骸化し、構造的な実体性を失った視覚的な装飾性へと組替えて内部空間を構成している。また、屋根架構としてのドームもfrigidariumにも使用されることから、室内環境の制御ばかりでなく、集中形式の平面形態

に規範的に使用されるようになったと考えられる。

### 第3節：ローマ帝政期と初期キリスト教期の集中形式に於ける建築構成

前2節を通し初期キリスト教期以前、すなわちローマ時代の集中形式を検討した。この検討から、形態としての集中形式はヴィトルヴィウスの時代以前に知られていたが、建築形式としてはローマ帝政期に認識されるようになったことが判った。こうしたローマ帝政期及び初期キリスト教期の集中形式の遺構を見ると、其の建築構成からいくつかの類型を識別できる。すなわち、初期キリスト教期とローマ帝政期の集中形式の遺構について、それらの内部建築構成を比較することで、初期キリスト教期の集中形式の系統と、前代の構成からの差異を明確にすることができる。ここで、両者の差異によって示される初期キリスト教期の集中形式に於ける建築構成は、本論で検討した初期キリスト教期の集中形式の建築構成としての特徴を示すものと考えられる。

従って、本節においては、両者の遺構を平面と内部立面との構成について比較検討する。

#### 第1項：集中形式に於ける平面構成

ローマ帝政期の集中形式の空間を持つ建築に於いては、集中形式として独立した構造体であるものと、複合建築の一部を成すものと2種類に分けることができた。Deichmannはこうした独立した集中形式の建築形式としての確立を、バンテオン以後のこととしている(105)。即ち、2・3世紀からの傾向として捉えている。この2種類の建築については、前節で検討したように、立てられる場所や用途に相違がみられた。複合化された建築の一室を占める集中形式については、都市の居住性にかかわる実利的な建築の一つである浴場で

ある傾向が認められた。一方、独立した集中形式は神殿や皇帝の住宅内に立つ庭園建築として、実利的な機能よりも権力の象徴としての建築物とみなすことができる(106)。

このように、ローマ帝政期の集中形式には、其の配置形式から2つの系統をみることができ、集中形式の平面構成に注目すると、一般的に共通する特徴として、以下に示す点を指摘できる。

- A. 独立した構造体に於いては、集中形式である主室と、それに付随する前室の2室から構成される。
- B. 主室内部は一般的にニッチの設けられる傾向にあるが、主室の平面そのものは分割されない。
- C. 入口の反対側にあるニッチが強調され、入口からこのニッチへ向かう主軸線が形成される。
- D. 一般的にニッチの機能は定められている。即ち、浴室に於いては浴槽が置かれ、神殿では神像が安置される。

このようなローマ帝政期の集中形式について一般的に認められる特徴に対し、初期キリスト教の集中形式の構成に於ける特徴では、主軸線の問題を除くと見いだすことができない。

初期キリスト教期の集中形式では、前室・主室にみられるような単純な空間の繋がりによって構成されていない。洗礼堂については46棟中の16棟は主室に相当する洗礼室の周囲に周歩廊を巡らしている(表3-1)。従って、洗礼堂において前室・主室という構成は、平面の構成において主流となっていない。また、周歩廊の巡る例では、前室部に相当する空間が拡充化を計られたものと捉えることができる。検討した洗礼堂の中で、カルアト・シムアンの洗礼堂においては、周歩廊がさらに4つの区画に分割され、主室の接続する部屋が多様化したと考えることができる。また、ヨハネ聖堂の洗礼堂においては、周歩廊を通してアプスを持つ部屋や、隅に設けられた3角形の部屋への通行が可能となっている。このように、周歩廊を持つ洗礼堂においては、主室を含む単位空間の組合せが複雑になっている。即ち、洗礼堂そのものを単位として分節し、その単位を用途に

適合させて組織したことを推測させる。一方、集堂においては平面構成がローマ帝政期の集中形式に比べ、より複雑になっている。集堂では一般的に前室に当たるナルテックスと集中形式の主体構造である主室から構成される。しかし、主室部の平面は一般的に身廊・側廊・聖域部によって構成される。このように集堂では主体構造部の平面分化が進んでいる。従って、LavinやGrabarが集中形式集堂の建築の起源を庭園建築や異教葬祭殿に求めているが、こうした単純な主空間を構成する建築と違って、集堂の平面構成では、内部の構成の組織的な分割が認められる(107)。

こうした初期キリスト教期の集中形式において、聖域部の構成において特に分化が押し進められている。ローマ帝政期の集中形式では、入口の反対側にあるニッチを強調することで主軸線が獲得されていた(108)。この主軸線は初期キリスト教期の集中形式で、一般的に入口から聖域であるアプスへ向かう方向に認められる。洗礼堂では一般的に東側にアプスが設けられ、主軸線を認めることができる。また、アプスをもたない洗礼堂においても、オーソドックス洗礼堂で東南のニッチに聖壇が据えられたように、調度によってニッチの序列がつけられ、主軸線が計画される例もあり、洗礼堂における主軸線の導入は一般的な構成手法であったと看做すことができる。しかし、洗礼堂の主要機能である洗礼盤は洗礼室の中央に据えられる傾向にあることから、儀式における中心と構成における軸線の向かう方向とは一致していない。従って、洗礼堂の主室内において、ローマ帝政期の集中形式よりも、平面構成がより分化していたと推測される。一方、集堂においては、東側が一般的にアプスとベマによって構成されている。教会堂ではこのアプスへ向かい、一般的にアンボ・ソレア・テンプロン・聖壇・シンスロノンと並べられる。従って、アプスへ向かう軸線が強調されることになる。このことは、集中形式においても長堂形式の教会堂同様、儀式の場と聖域とによって構成される建築であることが判る(109)。従って、平面構成に伴う室内の序列を見る限り、長堂形式と集中形式に相違はみられない。

更に、この集中形式の集堂をローマ帝政期の集中形式と比較すると、集堂では主軸線に沿って平面が分化していると言える。

このように、平面構成をみると初期キリスト教期の集中形式では、主空間である洗礼室や身廊が東側にある聖域に向かって分化、ないし組織化されていることが判る。このことは、計画の指針として、平面を聖域に向かって序列化することを示すものと考えられる。これは初期キリスト教期の集中形式が、平面構成における位階制を手法として内包したことを示すものと考えられる。初期の集堂においては、平面の聖域部の組織化は緩いもので、ローマ帝政期の集中形式の平面構成と大差を示していない。しかし、時代が下がるに従い、この平面構成の序列化が集堂において明確に認められる。

こうした平面の分化は主空間において顕著に現れていた。これらの相違が内部立面の構成にどの様に反映したかが問題となる。ローマ帝政期とそれ以前の建築を分ける美的問題として、前2節において壁式構成と柱・梁式構成が問題とされた。即ち、ヴィトルヴィウスによって主張された建築の規範は柱・梁による構成であり、ローマ帝政期の遺構での規範は壁による構成であった。この2つは構造形式の違いを指示するばかりでなく、内部立面の構成において、視覚上の相違へと繋がってゆく。本論においては、ローマ帝政期の主室の内部立面に対応する初期キリスト教期の集中形式の内部立面として、洗礼室と身廊の構成を対応させた。

## 第2項：壁式構成と柱・梁式構成

集中形式の主室の境界を定める方法には、柱を立てて並べるものと壁によって囲うものとの2種類が平面の構成において認められた。これら2種類の構成は内部立面の構成において、視覚上立面構成を面として捉えるか、線として捉えるかにおいて、大きな相違を示している。また、この2種類の構成はヴィトルヴィウス以前と以後におけるローマ建築の造形理念の峻別も同時に示すものである。従って、それぞれの構成は視覚上、異なった美の規範から作られた立面

として捉えることができる。このローマ時代に生み出された規範が、初期キリスト教期でどの様に用いられたかをみることで、初期キリスト教の内部立面構成の系統が明らかにされる。本論では、平面構成において主室が壁によって囲われるものを壁式構成、柱によって囲まれる遺構を柱・梁式構成と捉え検討する。

ローマ帝政期の集中形式においては、ピアッツァ・アルメリーナの浴室とドムス・アウレアを除き、内部立面は壁式構成によって形成される。前節で検討したように、これらの遺構では上部の構造を失っているものが多く、内部立面の構成について知り得るものは限られていた。また、ドムス・アウレアには中層部がない。浴場の全般的な傾向としては、紀元後2世紀から内部壁面の仕上げに大理石が張り巡らされたと推定されている(110)。更に、湿気があるにもかかわらず、フレスコ画のような絵画が壁面に描かれたことも報告されている(111)。ポンペイのフォルムの浴場では、内壁面をスタッコでレリーフ状にし、色がつけられていた(112)。こうした事実から、内部立面は仕上げによる装飾を施す面として捉えられていたことが判る。バンテオンでも独立した柱は一部でしか用いられておらず、内部立面を視覚上で面として捉えることが構成の基本となっている。しかし、バンテオンでは上下に分節されたドラム内壁面で、付け柱によるリズムによって壁面がベイに分割されていた。しかし、この付け柱は矩形として壁面から突出しているため、独立した柱として壁面から分離されず、壁の陰影としてのみレリーフ状に壁を分節している(113)。特に、これらの付け柱は上下層で連続していないことから、構造形式の視覚化とは関係していない。この付け柱による内部立面の構成は、初期キリスト教期の集中形式宗教建築で、コンスタンティヌス帝によるラテラン洗礼堂に認められる。この他、初期キリスト教期の洗礼堂では、壁式構成を示す遺構として、リバ・サン・ヴィターレの洗礼堂、ソフィア聖堂・洗礼堂、カルアト・シムアンの洗礼堂がある。このカルアトシムアンの洗礼堂においては中層部に独立した柱が各隅に立てられている。従って、バンテオン同

様、この洗礼堂では低層と中層の分節を行い、各層は独立した構成の形式を示しており、上下方向の連続はみられない。また、これらの洗礼堂の全般にわたり、復元的な考察から、各層に分節されて内部立面は構成されたものと考えられる。これらの洗礼堂においては内部立面の装飾が現在失われているが、大理石・スタッコ等が用いられていたと推測できる。

この壁式構成による集堂は、ヘレナ霊廟、降誕教会堂、エウフェミア教会堂、テサロニキのロトンダにみられる。これらの集堂は、エウフェミア教会堂を除けば、4世紀初頭に創建されたもので、ローマ宮廷との関係が深い建築であった(114)。特に、エウフェミア教会堂とテサロニキのロトンダは、創建後にキリスト教の集堂に改築されたことから判るように、庭園建築や霊廟として建設されており、ミネルバ・メディカやバンテオンの構成との共通性を示している。これらの内部の装飾は大理石を貼り付けられたものと推定される。特に、ヘレナ霊廟については大理石の張り合わせの形式が復元されている(115)。この貼合わせにおいて、水平・垂直の線によって、ドラム部は3層に分節される。しかし、上下の線は連続しておらず、各層は独立した面としてそれぞれ構成されたものと考えられる。

このように壁式構成で、ローマ帝政期・初期キリスト教期の集中形式に類似した構成の規範を内部立面に適用している。即ち、浅いレリーフ状の凹凸や色彩によって壁面にリズムを生み出しているが、分節された層を個別的に視覚の整合性をもたせて仕上げる傾向にあり、その層を上下に積み重ねて内部立面は構成される。

こうした壁式構成に対し、内部立面に壁と柱の両方の認められる遺構がある。ローマ帝政期の遺構ではピアッツァ・アルメリーナの浴室で用いられている。この遺構では上部の構造が失われているため、詳細は不明であるが、八角形の各隅で台座の上に独立した柱がのせられている。従って、構成としては初期キリスト教期のオーソドックス洗礼堂やヨハネ聖堂・洗礼堂に類似したものと考えられる。これら洗礼堂は低層部と中層部から内部のドラム面が構成され、層

の見切り部材としてエンタブラチュア・コーニス・ルソートが用いられている。平面の各隅に壁から離れて立つ柱は、低層部と中層部で連続し、ドーム面へと達している。従って、ドーム面へ達する柱によって囲われるベイによって、内部立面は構成される。また、この柱・梁式構成はドームへと連続することで、主室の架構形式を視覚上明確に表現している。一方、その背景となる壁は主室の空間としての境界を確定している。この壁面には低層部で大理石、中層部でスタッコを使用する傾向を窺うことができ、ローマ帝政期の壁面の装飾形式を援用したものと考えることができる。従って、こうした内部立面の構成について、視覚上の構成はヴィトルヴィウスによって主導された柱・梁式構成が受持ち、壁面そのものの構成にはローマ帝政期の壁式構成がそのまま用いられている。このことは、内部立面において2つの構成の規範が適用されたものと看做すことができる。

一方、こうした壁と柱・梁の2重化した構成は、ローマ帝政期のいくつかの建築に認められる(116)。こうしたローマ帝政期の遺構としてローマ劇場のスカエナエ・フロンや凱旋門を指摘することができる。即ち、柱・梁式構成が壁の前面に現れ、構造上の機能を失い、形式として立面構成を形作っている(図5-19,20)。また、壁面そのものがさらにレリーフ状に柱・梁式構成を含むことになっている。しかし、これらの柱・梁においては2層を突き抜ける柱・梁が用いられることもあり、大・小のオーダーが立面に用いられている。従って、初期キリスト教期の洗礼堂にみられた連続したベイを積み上げて構成し、壁を平滑な背景となる面として扱う構成とは異なっている。むしろ、こうした柱・梁式構成のベイによる単位は、長堂形式の教会堂に認めることができる。即ち、初期キリスト教期の長堂形式の教会堂に認められる天井面に達する1階と2階の構成において、上下に連続する柱・梁式構成によるベイは、集中形式のこうした洗礼堂のベイと対応している(図5-21)。

この主室の境界面に柱を立てる構成は、集堂において2種類のも

のが認められた。即ち、教会堂D、サンタ・コスタンザ教会堂、ファルールの教会堂、ステファノ聖堂に見られるように、身廊と側廊の境界に同種の柱を立て並べるものと、ガリチン山のテオトコス教会堂、サン・ヴィターレ聖堂、セルギオス・バッコス教会堂、コンジューの教会堂に見られるように、隅柱とその隅柱間の内側に用いられる柱の種類が異なるものとの2種類が認められる。

身廊と側廊の境界に同一の柱を並べる遺構のうち、内部立面の構成を窺えるものとして、サンタ・コスタンザ教会堂とステファノ聖堂がある。両者とも低層部の柱列の上は壁によって構成され、それぞれ2層に分節されている。また、この壁面にはそれぞれ付け柱と推定される部材によって分節されている。この付け柱間は大理石が壁に貼付けられている。従って、視覚的な柱・梁式構成がドーム面に達するまで用いられているが、中層部では柱の独立性は低く、構成の形式としてはローマ帝政期の壁式構成と同じものと看做すことができる。即ち、側廊と身廊の接合のため、柱によって低層部を開放しているが、基本的な構成として壁式構成の発展した形式として捉えることができる。言い換えるなら、低層部のみ彫塑的な構成となっているが、中層部は図像的な構成を示している。このような構成の考え方は、テサロニキのロトングを教会堂へ改修する際、低層部のニッチを開放したのと同種のものである。従って、この初期キリスト教期の集堂は、ローマ帝政期の壁式構成の系統に属する建築である。また、この構成においては聖域部が身廊の外に位置するため、身廊の中層部に壁が生じる内部立面の構成によって、視線を空間内で誘導する際、聖域部への方向性は強調されない。そのため、聖域部の身廊バイを広げたり高くするなどして、軸線を強調しようとする意図が見受けられる。

これに対し、2種類の柱を用いる遺構では2階回廊が設けられている。従って、身廊の周囲は2層によって構成される。身廊の各隅に設けられる柱は独立した積層柱が使用され、この柱は2層分にわたり連続し、ドームに達している。これに対し、単一材料である大

大理石の柱はこの隅柱によるベイの間に立てられ、それぞれ低層・中層に用いられている。このように、身廊の構成を規定する積層柱と、エクセドラ・アルコーブにもちいられ側廊・2階回廊へのスクリーンとなる単一材料の2種類の柱が身廊の境界を確定している。こうした内部立面においても、コーニスやエンタブラチュアが用いられているが、すでに前節で記したように、積層柱がドーム面に至るまでの空間の境面を一体化する傾向にあり、分節は意図されながらも、低層・中層・高層の3層を明確にしていない。また、この積層柱には大理石が貼り付けられていた。即ち、積層柱によって包まれる身廊は、壁を穿つことで作られる架構に匹敵する。従って、ここでは壁を変形させた積層柱が身廊の骨組みを形成し、身廊の区域を規定する箇所に独立柱が用いられている。このような立面構成は、柱・梁式構成が壁式構成の前面に設けられた、先に記した構成を逆転させたものと考えることができる。即ち、壁の前面に立っていた柱が積層柱となり、境界面となる壁面である面が独立柱で構成されている。また、この構成においてはベマ・アプスへ通じるベイにはエクセドラが設けられておらず、2層吹抜けとなるため、東側へ向かう軸線は内部立面構成においても妨げられていない。このように、2種類の柱を身廊に用いる構成においては、ローマ帝政期とヴィトルヴィウスによって示された建築の美に対する構成の規範が逆転されて用いられたものと考えられる。即ち、主室の内部立面の構成に対し、新たな建築に関する造形理念が適用されたものと考えられる。表5-4は、本論で検討した集中形式の遺構について、2つの構成形式による展開を年代的に示したものである。表5-4は、ヴィトルヴィウスによる柱・梁式構成の美意識がローマ帝政期の壁式構成に適用される過程で、構成における部材の意味を逆転されて用いられるようになった点を示していると考えられる。

このように集中形式のドーム迫元に至るまでの内部立面の構成をみると、ローマ帝政期・初期キリスト教期を通して、建築の構成に付いての系統化された論理的な展開を認めることができる。即ち、

壁によるドラム部の構成が、平面形態の分化にともない低層部で柱に置き換えられる構成への展開、またローマ帝政期の建築美としての規範である柱・梁式構成を壁の前部に独立して設ける構成へと展開されることを示している。この2つの構成の展開を統合化する構成として、同時に宗教建築としての聖域への視線の誘導の合目的化として、内部立面への壁と柱の関係が逆転している構成が作り出されたと推定される。さらに、全般的な傾向として、ローマ帝政期に比べ初期キリスト教期の集中形式のドーム迫元までの内部立面においては、上下の層を連続させて単位とする上方向への組織化が認められた。

### 第3項：ドームの構成

ローマ帝政期のドーム表面の構成に付いては、パンテオンやネロのドムス・アウレアを除くと、現在失われている。しかし、平天井やヴォールト面に円形の図像を配置する構成が、スタッコ・フレスコ・モザイク等によって行われたことが判り、ドーム面に同様な構成が展開されたものと考えられる(117)。こうした図像において、中央の円形の図柄はその周辺の図像によって支持される形式として描かれている(118)。この図像構成は天空を象徴するものと捉えられるが(119)、ドームにおいてはドーム面そのものが天空を象徴した(120)。従って、パンテオンやドムス・アウレアのドーム面の構成から、それらにおいては天空が即物的に表現されたものと考えられる(121)。こうしたローマ帝政期のドーム面の構成は、天空を支える図柄があったにしろ、天空そのものの序列化が計られているとは言えない。

これに対して、初期キリスト教期のドーム構成においては、その図柄の判明しているもので、天空の序列化が認められた。即ち、テサロニキのロトンダやオーソックス洗礼堂、アリアン洗礼堂、ソフィア洗礼堂に残されたモザイクのドーム面の図像構成をみると、頂部にキリスト像が描かれ、それを使徒が支え、その下に建築的な図像が配されている。従って、ドーム面の分節された輪の上へ向か

うほど、キリスト教における序列が高くなることになる。この図像構成はサン・アポリナーレ・ヌオーボ教会堂の身廊壁面で西から東へ向かう図像構成に対応している。このことは、初期キリスト教の図像配置において、一般的な規範が存在したことを示唆している。集中形式においては、こうした聖域に向かって序列化された図像を上方向に配置させたものと考えられる。また、ドーム面の低層のリングにおいて、分節された面は下の壁面のベイに対応しており、単位としての壁面がドーム下部にまで及んでいることが判る。

このように、ローマ帝政期のドーム面の構成は僅かにしか判らないことから即断できないが、こうした図像の象徴性に付いて、ローマ帝政期の図像がキリスト教に変換されたにしろ(122)、ドーム面の序列化による分節は、初期キリスト教期の集中形式において、より徹底されたものと看做することができる。

一方、ドームの構造材料に付いて、ローマ帝政期の遺構ではオブス・カエメンティシウムが使用されている。これに対して、初期キリスト教期のドームでは木造、煉瓦、穴開き煉瓦、オブス・カエメンティシウムと多様な材料が用いられている。こうした材料の多くは、ヴィトルヴィウスによって触れられていることから(123)、既にローマ帝政期に知られていたものと考えることができる。しかし、遺構をみる限り、ローマ帝政期のドームは材料にオブス・カエメンティシウムを規範として受け入れていたと考えられる(124)。このローマ帝政期の材料の均一化に対し、初期キリスト教期のドームでは仕上げの均一化が傾向として認められる。即ち、検討した遺構において、テサロニキのロトンダ、セルギオス・バックス教会堂、サン・ヴィターレ聖堂、サンタ・コスタンザ教会堂、オーソドックス洗礼堂、ソフィア聖堂・洗礼堂、ヨハネ聖堂・洗礼堂、ラテラン洗礼堂において、モザイクが仕上げ材料として使用されたと言えよう。従って、材料や架構よりもドーム表面の質感、すなわち視覚上の受容に対する均質化が、初期キリスト教期のドームでは、優先されたものと考えられる。

このように、オクルスを設けないが、初期キリスト教期の集中形式のドームは、形態としてローマ帝政期のものを踏襲したが、視覚上の序列化を押し進めた点に、前代の構成からの離反を認めることができよう。

#### 第4節：小結

ローマ時代の建築書を見る限り、建築構成が内包している造形理念はローマ帝政期以前から末期に至るまで、建築の中に通底していると看做すことができる。この建築書にみられる建築の工法や材料を検討すると、これらは初期キリスト教期の集中形式宗教建築でも同じように用いられていたことが判る。この事実は、初期キリスト教期の当該の建築が、少なくとも、前代のローマ帝政期に使用された技術を背景に成立していたことを示している。このように、初期キリスト教期の集中形式に於いては、技術的な課題は既に解決の与えられていたことが判る。

こうした技術を含めた建築の実体的な面とは別に、建築の構成を視覚上の表現と捉えて両時代を比較すると、両集中形式の間で顕著な相違が認められる。本論では、建築の内部立面の構成として、前2章の検討から、壁式構成と柱・梁式構成の対立する2形式を指摘した。ローマ帝政期の集中形式は概ね壁式構成によって内部立面が構成されている。こうした遺構に於いて、内部の構成が具体的に判明しているものでは、上下方向の構成に関する連続性は計画されているとは言えない。また、集中形式という観点を離れるなら、美の基本は柱・梁式構成にあったことが判る。この相反する2点の総合として、内部立面で壁付き柱を設け、視覚上の整合性を計ったと考えられる。即ち、バンテオンに於いて、この構成が用いられている。初期キリスト教に於いても、この壁式構成が内部立面の構成として認められる。しかし、初期キリスト教の遺構では、壁式構成と柱・梁式構成を同一内部立面に用いる傾向が認められ、ヴィトルヴィウ

スによって主張された美の規範を、集中形式という制限の中でより厳密に遂行しようとした意図を窺える。

一方、空間の構成に於いて、初期キリスト教期の集中形式では、平面や内部立面に分節された領域や面が導入された。この分節は、空間の最も重要な場所へと、視線を誘導する。従って、内部空間は序列化によって組織されていると言える。ローマ帝政期の集中形式に於いても主軸線を平面の構成に認めることはできたが、それは単純に聖所への方向性に留まっている。このようなローマ帝政期の比較的単純な内部空間に対し、初期キリスト教の集中形式は平面に於いて複雑な構成をみせている。平面構成による領域の明確な分割に加えて、調度類による分節が行なわれた。本研究で問題とした集中形式でこの序列化は、空間の位階制を内部構成にもたらしたと言える。即ち、聖所であるアプス方向と、天上の最高点であるドーム頂部へと、視線を段階的に誘導する構成を展開させた。この様に、内部の建築構成に於いて、2方向への視線誘導を潤滑に行なうため、新たな構成の規範が生み出されたと考えられる。即ち、ドームとアプスとへ、連動し得る視線の移動を可能にする内部構成が必要とされた。この結果、初期キリスト教期の末期に立てられたいくつかの集中形式の建築で、従来の内部の境界である壁と、建築美の規範として視覚に於いてコード化された柱の関係は、内部立面の構成で逆転させられ用いられたと考えられる。

このように、初期キリスト教期の集中形式に於いては、ローマ帝政期の集中形式の建築構成を基本的に援用しながらも、新しい内部の構成を発展させたことが判る。このように、視覚上の問題としてみると、初期キリスト教期の集中形式宗教建築は構成の特質を表わすことから、これらの建築に内包された自律的な造形理念は建築の表面に深く関係している観念と考えられる。特に、この表面の仕上げについては、共通する規範が認められた。従って、こうした特質が建築を制作する者にとって、表現として適切なものか、または合目的なものか、或は真に計画されたものかは、これらの建築に内包

されている造形理念（観念）そのものを検討し、それを明らかにすることにより、検証されると考えられる。

註：第5章

1. vid., 本論第2章。
2. ヴィトルヴィウス自身が建築書を作成するために数多くの建築書、ないし技術教本を参照したと記している。この事実から、『建築書』に相当する技術指導書が特殊なものではなく、社会的に一般的に用いられていたものと推定できる。cf. 森田慶一訳、『ウィトルヴィウス建築書』、東海大学出版会、S.51(S.44)、VII-prae.。
3. cf. Macmillan Encyclopedia of Architects. Palladiusの著作については、J.G. Schneider ed., Scriptorum rei rusticae veterum Latinorum, 1794-1797, Leipzig.がある。
4. ファヴェンティウスの建築書については、H. Plommer ed., Vitruvius and Later Roman Building Manuals, Cambridge Univ.Pr., 1973を参照。
5. 森田慶一訳, op.cit., praef., p.ix.
6. cf. H. Plommer ed., op.cit., praef.
7. Loc.cit.
8. Vitruvius, op.cit., I-2.
9. Faventius, op.cit., Chap. , pp. 40 .
10. ファヴェンティウスにおいては記述が住宅に関連する建築に限られ、宗教建築に関する解説はない。
11. Vitruvius, op.cit., III-1, p.130.
12. Ibid., IV-2.
13. Ibid.
14. Ibid., III-2. ヴィトルヴィウスは神殿の種類として、イン・アンティス式、前柱式、両前柱式、周翼式、擬二重周翼式、二重周翼式、露天式の7種類に分ける。
15. Ibid., III-3. 外観からの種類として、密柱式、集柱式、隔柱式、疎柱式、正柱式の5種類があげられている。
16. Ibid., IV-2. 「どんな建物でもその上方にはいろいろの名で呼ばれる木造部が置かれる」(森田訳、p.177)
17. Ibid., IV-8. ヴィトルヴィウスは円形の神殿を単翼式と周翼式に分類する。
18. Ibid., V. ヴィトルヴィウスは「浴場」の用語として、*balineae*を使用している。この用語はギリシャ語のβαλανειονを語源とし、紀元前5世紀(Aristophanes, *Nubes*)に初出する。「浴場」「浴室」の両方に用いられる用語であるが、*thermae*のように帝政期に発展を見せる組織的に拡充した複合建築としての浴場とは異なるものと考えられる。
19. Ibid., V-10.
20. C.T. Lewis ed., Latin Dictionary(Oxford)によれば、*laconicum*

(a sweating room, sweating-bath), sudatio(sweating room)とあり、森田は「熱気の部屋」と訳しているが、蒸気風呂を意味するものと考えられる。

21. Vitruvius, op.cit.
22. Ibid.
23. Ibid.
24. 現存する最古のドームとして、紀元前1世紀のスタビアヌスの浴場 (Pompeii) があり、ここではfrigidariumにドームが使用されている。こうした浴場でのドームの使用はヴィトルヴィウスが指摘するより遙かに多く、浴室全般に使用されるものであったと考えられる。cf. F. Sear, Roman Architecture, London, 1982, 38f.
25. ヴィトルヴィウスは入浴時間として正午から夕方迄を指定しているが、ファヴェンティウスでは夕方から夜を指示しており、より個人的な使用の時間と考えられる。
26. Faventius, op.cit., Ch. 16.
27. Ibid., Ch. 17.
28. Vitruvius, op.cit., 11-2.
29. Ibid., 11-8.
30. Ibid.
31. Ibid.
32. Faventius, op.cit., Ch. 8-11.
33. Ibid., Ch.10, p.56.
34. Ibid., Ch. 11, pp.56-58.
35. カルアト・シムアン洗礼堂とガリチン山のテオトコス教会堂はシリア地域にあり、伝統的に石を用いる地域であった。(ECBA, p.145ff.)
36. Faventius, op.cit., Ch.21.
37. Vitruvius, op.cit., VII-3.
38. Faventius, op.cit., Ch.23.
39. Vitruvius, op.cit., VII-6.
40. Ibid., VII-5.
41. W.L. MacDonald, The Architecture of the Roman Empire, vol.2, New Haven & London, 1986, p.223.
42. P. Garnsey & R. Saller, The Roman Empire, Univ.Calf. Press, 1987, p.1.
43. The Cambridge Medieval History, op.cit., 17f.
44. J.B. Ward-Perkins, "The Italian Element in Late Roman and Early Medieval Architecture", Proceeding of British Academy, vol.33, 1947, pp.163-194.
45. RIA, pp.55-61: E. Nash ed., Pictorial Dictionary of Ancient Rome, vol.1, New York, 1981, pp.339-348.

46. H. Mielsch, Die römische Villa, München, 1987, 64ff.
47. *Ibid.*, 41ff.
48. C. Suetonius Tranquillus, AD.75-c.140、修辞学者、cf.J.C. Rolfe ed., Suetonius, Loeb Class.Lib., vol.2.
49. Suetonius, *op.cit.*「技術者達の考案したものは、住居の上に立ち上がり、都市の中に都市を表現した。【筆者訳】」
50. J.J. Rasch, "Die Kuppel in der römischen Architektur", Architectura, vol.15, 1985, p.136.
51. H.Mielsch (*op.cit.*, p.66) は、ドーム採光が上部からされているが、閉じられていたものと考えている。
52. R.J. Mainstone, 『構造とその形態』 (Developments in Structural Form), 山本学治・三上祐三、彰国社、S59、p.116.
53. J.B. Ward-Perkins, *op.cit.*, p.168. Ward-Perkinsはドムス・アウレアがローマ宮廷建築における煉瓦枠によるコンクリート建築として、最初のものとする。
54. Luis Annaeus Seneca(4BC.-65AD.)
55. cf. Ward-Perkins, "Nero's Golden House", Antiquity, vol.30, 1956, pp.209-219.「食堂の動き回るパネル状の天井」【筆者訳】
56. Suetonius, *op.cit.*, VI, xxxi.「食堂の内特別なものは円形のものである【筆者訳】」
57. *Ibid.*「それは夜も昼も継続的に世界として回転するとされている【筆者訳】」
58. *Ibid.*,「象牙からなる天井のある食堂は、その天井面から花が降り注ぎ、香水が発散させられた【筆者訳】。」
59. H.P. L'Orange (Art Forms and Civic Life in the Late Roman Empire, Princeton Univ. Press, 1965) は、こうした連続する面による構成が後期ローマ建築の特徴と考えている。
60. ヴィラ・アドリアーナの集中形式は形態がバロック化されており、単純な整形の集中形式は少ない。
61. Ward-Perkins, *op.cit.*, p.109.
62. 青柳正規、『ハドリアヌスの別荘』、六輝社、1981、pp.129-1788.
63. Mielsch(*op.cit.*, p.83)はローマ建築において、この神殿を円形平面でドームが架けられる形式として初めてドラム部の壁面から採光された例とする。
64. E. Brödner, Die Römischen Thermen und da Antike Badewesen, Darmstadt, 1983, 190f.
65. RIA., 433f.
66. こうした集中形式の神殿や霊廟としては、以下のものがある。Diocletianus Mausoleum(Spalato, 4世紀初期), Tor de'Schiavi(Rome, c.300), Tor Pignattara(Helena Mausoleum, Rome, 4世紀初期), Aug

- ustus Mausoleum(Rome, BC.28), Gollienus Mausoleum(Rome, 3世紀), Zeus-Asklepios Tempel(Pergamon, 2世紀), Venus Tempel(Baiae, 2世紀), Diana Temple(Baiae, 2世紀), Apollo Temple(Avernus, 2世紀).
67. RIA., 133ff.
68. K. de F. Licht, The Rotunda in Rome, Copenhagen, 1968, p.29.
69. RIA., p.111-117.
70. Licht, op.cit., pp.133-141.
71. Ibid., p.185.
72. Ibid., pp.172-179.
73. Licht, op.cit., p.186. Lichtはnaosとpronaosの接合部の煉瓦の封印がハドリアヌス帝の時代のものであることを確認し、pronaosそのものはハドリアヌス帝の時代と推定している。
74. Licht, op.cit., p.200.
75. Ibid., p.140.
76. Ibid., p.145.
77. この28という数字はEuclidによるとIdeal Numberに相当し、また古代の天空において月は28の段階から形成されると考えられていた。Ibid., p.200.
78. Ibid., 114ff.
79. cf. E.B. Smith, Architectural Symbolism of Imperial Rome, New York, 1978.
80. MacDonald, op.cit., vol.2, p.219.
81. E. Brödner, op.cit., 6ff.
82. cf. C.A.マツ、『夢の治癒力』、筑摩書房、1986。
83. 初期キリスト教期には、アスケレピオンの供儀における入浴と類似して、病氣治癒を目的とする浴室が修道院内に建てられている。cf. A. Berger, Das Bad in der byzantinischen Zeit, München, 1982.
84. Brödner, op.cit., p.37.
85. MacDonald, op.cit., vol.2, p.115.
85. Berger, op.cit., p.28.
86. Ibid., p.29.
88. W. Heiz, Römische Thermen, München, 1983, p.26.
89. 初期キリスト教期には、個人浴場について *δολοι, ἐνδοτερος δολος* と呼ばれることもあり、形態を指示する場合もある。cf. Berger, op.cit., p.86.
90. 中規模な浴場として、Lepcis Magnaに「狩りの浴場」と名付けられた浴場がある。vid., RIA, 382ff.
91. Brodner, op.cit., 37ff.
92. Ibid., p.99.

93. MacDonald, op.cit., p.216.
94. Vitruvius, op.cit., V.
95. Ward-Perkins, op.cit., Pelican, p.119.
96. 初期キリスト教期の *balneae privatae* では、湿気で傷むにもかかわらず、内部の仕上げにフレスコ画を用いている例がある。従って、フレスコ画で浴室の壁を装飾する手法は初期キリスト教期までに一般的となっていたと考えられる。cf. A. Berger, op.cit., p.109.
97. RIA, p.398.
98. Ibid., p.131.
99. Vitruvius, op.cit., V.
100. Ward-Perkins, op.cit., Pelican, p.431, fig.292.
101. J.J. Rasch, op.cit., p.118. このドラム部からの採光のため、集中形式の部屋が外側に寄せられたとも考えられる。
102. cf. Brodner, op.cit., 130ff.
103. MacDonald, op.cit., 217f.
104. Ibid., p.219.
105. F.W. Deichmann, "Romische Zentralbauten: vom Zentralraum zum Zentralbau, ein Versuch", op.cit., pp.47-55.
106. Krautheimer("Success and Failure in Late Antique Church Planning", op.cit.)は、初期キリスト教の集中形式集堂をローマ帝政期の上層階級の庭園建築を起源とすると考えている。
107. I.Lavin, "The House of the Lord", op.cit.:A. Grabar, op.cit., p.145.
108. W.L. MacDonald, op.cit., 1986, p.237.
109. Stanzl, op.cit., p.29.
110. vid., 註102.
112. W. Heinz, Romische Thermen, München, 1983, pp.52-90.
113. MacDonald, op.cit., 167.
114. Deichmann & A. Tschira, "Das Mausoleum der Kaiserrin Helena und die Basilika der Heiligen Marcellinus und Petrus an der Via Labicana vor Rom", Jb.Arch.Ins., vol.72, 1957, pp.44-110, fig.20.
116. MacDonald(op.cit., 197ff.)はこうした建築として、スカエナエ・フロム、泉水の神殿、機能のないコロネードの存在を指摘する。
117. K.Lehmann, "The Dome of Heaven", Art Bulletin, vol.27, 1945, pp.1-27.
118. Ibid.
119. Ibid., p.9.
120. E.B. Smith, Architectural Symbolism of Imperial Rome, New York, 1978, 188ff.

121. cf. Licht. *op. cit.*, 133ff. & MacDonald, *op. cit.*, 170ff.
122. A. Grabar, Christian Iconography, Princ.Univ.Press, 1980(1968), p.121.
123. Vitruvius, *op. cit.*, V.
124. J.J. Rasch( *op. cit.*)はドームが煉瓦になることでオプス・カエメンティシウムが放棄されてゆくと記している。

## 第6章：初期キリスト教期の集中形式宗教建築における造形理念

前章に於いて、ヴィトルヴィウスが美の規範とした柱・梁式構成、更にローマ帝政期の集中形式にみられた壁式構成から、初期キリスト教期の集中形式宗教建築の建築構成が造形に対する考え方を発展させていることが判った。即ち、空間の骨格を構成する手法として壁式構成と柱・梁式構成を融合し、それを手法に於て逆転させて用いていることが判った。このように、初期キリスト教期の集中形式の宗教建築の中で幾つかは、建築の要素である柱、梁、壁が、従来の分析的な認識に於ける範疇で分類できなくなる。ここでは概念に於いて、線として意識されてきた従来の柱が、面として意識される。これは、表面の仕上げ状態が、建築の空間にとって大きな課題として浮上したことを示すものと考えられる。事実、前章で検討したように、初期キリスト教期の集中形式の遺構では、内部の仕上げの規範が構成の特質として現れていた。こうした特質が当該の建築全般にわたり認められる以上、そこには共通した初期キリスト教期の建築を造形する際の美意識の建築への適用、すなわち造形理念が包含されていると考えることができる。逆に言えば、造形理念の所在によって、仕上げに於いて認められる規範は、当時の建築を制作する者と使用する者にとって、合目的な構成であったとすることができる。このことは、建築で美を意識化することにより、制作に於いてアブリオリにあるべき形態の表出が組織されることを示している。従って、これらの建築の構成を顕在化させる観念である造形理念を明らかにするために、初期キリスト教期の美の理論を明らかにしなければならない。

本章は以下のように構成される。第1に、初期キリスト教期の社会において、思想と教会との関係を問題とする。即ち、宗教建築が所属する教会という組織において、どの様な思想が優勢であったかが問題とされる。第2に、この思想の代表的な哲学者の思想のうち、特に美学に関係のある点を考察し、当時の美意識の実態を検討する。

第3に、この美意識が建築の造形理念として機能する上で、すなわち柱が面として現れることで、実際の集中形式の建築の特質が、その理論によってどの様に対応するものかを検討する。

### 第1節：初期キリスト教期の宗教思想

初期キリスト教期においてキリスト教はその宗教思想の社会への布教と宗教上の自律性を確立するため、神学を整備した。即ち、パレスチナの一地方に生じた宗教が、当時のローマ帝国の国家宗教として受け容れられるには、信仰の思想的な基盤を整備しなければならなかった。とりわけキリスト教が勢力を伸張する上で、当時のローマ社会において優勢であった異教やグノーシス派と対抗し得る論理的な思想構造を保有する必要性があった(1)。一方、当時のローマ社会において広く普及していた思想は、プラトンの思想を源泉とするネオプラトニズムであった(2)。事実、ヴィトルヴィウスの著作中にも、ネオプラトニズムに関連した考え方は見受けられる。即ち、ヴィトルヴィウスは建築材料が気元素・地元素・水元素・火元素の4元素の調合割合によって決定されるとするが(3)、こうした形態に対して基礎をなす材料としての元素に付いての思考は、後述するネオプラトニズムの主導的思想家プロティノスの『素材論』との関連を窺わせる。このように、建築制作の技術書に於いても、ネオプラトニズムの思想は意識的にせよ、暗黙裡にせよ、深くかかわっていた可能性が高い。また、多くの教父が思想的な基礎訓練を受けた当時の教育組織においても、教授陣は全て異教徒であり、教育内容も従来のギリシャ哲学や修辞学が教えられた(4)。こうした環境にあって、キリスト教が教父達による宗教思想の整備にネオプラトニズムの論理構造を積極的に活用するのは、当然のことと言えよう(5)。こうした思想環境から、キリスト教神学思想の形成期である初期キリスト教期において、宗教思想は2つの普遍的な体系であるギリシャ文化と、帝国の政治組織体を模倣した教会組織との融合によって生じたものと看做することができる(6)。教会の建築活動においてこのこ

とは、前章で記したように、技術的な体系をローマに依拠し、作り出された建築を支える思想的な基盤をギリシャに依拠したことを示している。このように、宗教建築に対する美意識は、ギリシャ以来展開され、当時社会を席卷していた思想ネオプラトニズムの中に源泉を持つものと考えることができる。即ち、建築の制作をつき動かした根本的な造形理念は、ネオプラトニズムの美の概念の中に含まれるものと考えられる。

このネオプラトニズムのキリスト教思想への融合と確立は、5世紀の擬ディオニシウスによって完成されると考えられている(7)。当時の教父たちに読まれたネオプラトニズムの著作は、この派の主導的な役割を果たしたプロティノスであった(8)。しかし、プロティノス自身は著作を残していない。帝国各地の図書館に納められた彼の著作は、口承の講義録という体裁で、弟子のボルフィリーによって301年頃に編纂された『エネアデス』である(9)。当時、修辞学は学問を修める者にとっての基礎的教養科目であることから、建築制作に於ける主導的な役割を果たしたメハニコス達も、その教育の一環としてプロティノスの著作に触れずに過ごすことは不可能であったと考えられる。即ち、宗教建築に関して科学技術者としての制作者と思想家としての教父とに対し是認できるものとして、両者を結びつける造形理念は、プロティノスの思想にあったと考えることができる。

このプロティノスに代表されるネオプラトニズムの思想は、前代のヘレニズムに於ける多神主義と異なり、一神主義を提唱している(10)。ここでプロティノスは宇宙を物理的な世界としながらも、神の出現する聖なる世界(空間)として捉えている(11)。一方、キリスト教も一神主義である点について類似を示すが、神の肉体化としてキリストの誕生を定義する点に於て相違が表われている(12)。この相違は、両者の思想で根本的な問題に於ける対立点となって表われてくる。即ち、物理的な世界と捉える限り、分節することが可能となるため、プロティノスの宇宙観では神聖であることに位階制が

持ち込まれるが、キリスト教に於いてはキリストが絶対的な分割されない存在であるため、神聖であることに位階制は存在しない(13)。従って、プロティノスの思想とキリスト教思想とでは、神聖な世界へいたる過程に於いて、相違があったと考えられる。このように、プロティノスに於いては自己を高め神的なものと一体化するのが最終目標であり、思想の中核は人間の存在のあり方である存在論によって占められる(14)。ここで聖なるものは、人間が思弁的な鍛錬を経て獲得すべきものとして定立されている。これに対し、キリスト教では聖なるものが認識の対象とならないので、知的営みが初めから放棄され、信仰による人間の救済と解放が達成する目標であった(15)。ここでは、人間という主体と神聖なるものは峻別され同化することはない。このように目標に於いて決定的な相違を示しながらも、「神聖なるもの」を初めとする多くの概念について、キリスト教思想とプロティノスの思想は共通性をみせている(16)。特に、プロティノスに於ける善-醜、魂-肉体等に見るような二元論的な世界構造は、キリスト教で絶対的な神(聖)と相対的な人間(俗)という構図の中に、援用し易いものであったと考えられる。このように、キリスト教思想はプロティノスの論理構造を引用しながら、その中核を成す思想を換骨奪胎していったものと看做すことができる。従って、宗教的な空間に於いて、ネオプラトニズムの美意識は論理構造として排除されるものではなかったと考えられる。即ち、メハニコスがアプリアリに保有したと考えられる造形理念がプロティノスから援用されたとしても、神聖なものに向かう知的営みを放棄した宗教思想は技術を分析的に扱うことができないため、建築に於ける技術と宗教空間としての実体との間で軋轢をひきおこすことはなかったと考えられる。

このように初期キリスト教期に於いて、神学の体系をプロティノスに代表されるネオプラトニズムから援用した以上、当時確固とした美に対する思想を持ったネオプラトニズムを宗教建築の造形理念として用いることは、当然の帰結であったと考えられる。

## 第2節：プロティノスに於ける美の構造

プロティノスは『エネアデス』で、ある一つの主題を集中的に一篇において論考するという形式をとっていない。むしろ個々の主題は相互に関連して、著作全般に及ぶ傾向にある。美についても、類似した言説でその論考の全般に於いて触れている(17)。本論では、この美を主として論じている以下の篇について、美の概念について検討している(18)。即ち、『エネアデス』の内、「美について」(1-6)、「素材について」(2-4)、「視覚について」(2-8)、「魂の諸問題について、あるいは視覚について」(4-5)、「感覚と記憶について」(4-6)、「直知される美について」(5-8)を主として検討した。

初期キリスト教期に於いて、美は視覚的な美と非視覚的な美に分割され、これに物質界と精神界をそれぞれ対応させている(19)。これと同様の考え方がプロティノスの美学についても見いだされる。即ち、プロティノスは美それ自体を無形とし(6-7-33)、感覚界と観知界(20)の両者に存在しているとする(1-6-2)。この感覚界とは部分の集合した世界で、これらの対象は視覚によって捉えられる(3-8-11, 5-8-4)。従って、感覚界の知覚対象は一定の場所を占有することができる。これに対し、観知界は部分のない世界で、そこに存在するものは部分であると共に統一体を形成することになる(2-4-4, 5-8-4)。従って、この世界の対象は、場所を占有せず、逆にあらゆる場所に遍在している。この2つの世界の関係に於いて、感覚界で対象となるものが観知界の影像ないし似像であることから(5-8-7)、感覚界は観知界を人間の意識にとって補完するものであることが判る。即ち、感覚界の美は観知界の美の影像に過ぎず、下位の美として理解することができる。こうした2つの世界の構図から、人間の知覚にかかわる世界は感覚界に限定される。ここで、プロティノスによれば、感覚界と観知界を仲介するのが魂ということになる(21)。

この魂というものをプロティノスは具体的に、徳・知識・英知・技術などを内在させた「もの」として捉えていると考えられる(5-9

-3)。美と魂との関係に於いては、魂の知性的部分と考えられる英知や知識が美を認識し、技術が美を創造するという構造を示している(22)(5-9-6)。先に示したように、感覚界の美は叡知界の美の影像であるから、叡知界(上位)の美は魂の仲介によって感覚界(下位)の美と繋げられている。従って、美そのものは上位の世界から下位の世界へ反映されたものだが、人間の営為としては下位の世界の創造を介して上位の世界へと繋げられる。このように彼の美学にとっては、美の観照と創造の両面にわたり、人為的な営みが是認されている。このことは、唯一者(神聖なる存在、神等)による絶対的な美が叡知界にあるにしろ、その美に達するためには、いわゆる人間としての魂の分析的活動が必要となる。このことは、美に於いて感覚界で部分への分節がみられ、上位の世界への移行として、美の位階制があり、魂による世界の変換を通して美の変容の遂げられることを、プロティノス美学が意図していたことを示している。また、彼はこの魂を一面に於いてイデアと同等に看做していたと考えられる(5-9-8,5-9-14)(22a)。

こうした美を含む世界の関係が明らかにされた次に問題となるのは、美が具体的にどのような現象を示すかということである。プロティノスにとって、叡知界の美には部分がないことから形として成立せず、色彩として第一義に成立していた(5-8-10)。この色彩に付いても内部の色彩と外部の色彩があり、それぞれ2つの世界に割り当てられる(4-5-7)。ここで、色彩が現象するためには光が必要とされる。この光は物体の内部に含まれており、別の光(太陽光等)によって色彩が現れる(6-7-21)。従って、光には2つの活動のあることが判る。一方は、輝く(色彩を有する)物体の内部にある活動で、これは叡知界に属する。他方は、輝く(色彩を有する)物体の境界や外側にある活動で、内部の活動の影像であり、感覚界に属するものである。このように、物体とは対象として認識される限り、光そのものを内包したものであり、この影像としての色彩を感覚が捉えると言える。従って、ここでも美の現象は、内部である叡知界から

感覚界へと、外部に向かう方向性が認められる。

色彩は光の活動を視覚が捉えることで成立するが、視覚は感覚界で色の他に形も捉えている。従って、感覚界に於いて、美を内包する物体はどの様に捉えられているかが問題となる。プロティノスは物体を素材と形相の合成によって成立するものとして捉えた(2-5-2)。この2者とも叡知界と感覚界に存在する。叡知界の形相が感覚界にもたらされ形態として現れることになる(5-9-10)。また、感覚界で捉えられる形相(形態)は、感覚界の構造から分節を可能にするものであることを示している。このように形態とは形のないものの痕跡であり、多くの部分からなる統一体として理解されている(1-6-2, 6-7-33)。一方、素材は(量的に)限界がなく醜いものとされ、叡知界と感覚界の両方に存在する(1-6-2, 2-4-15)。叡知界の素材は原型であり、この原型の影像が感覚界の素材である(2-4-15)。また、素材は推論によって捉えられるものであることから(2-4-12)、視覚が捉えるものではない。形相と素材からなる物体が減びるとは、プロティノスにとって、形相と素材の複合物から形相が失われて素材に還元されることを意味していた(2-4-6)。従って、素材には多くの形相が取り付くことで、物体が作られることになる。このことから、物体の変化はある形相から別の形相への変化として捉えられる(2-4-6)。この素材と形相を結び付けるものが英知である(2-4-5)。この英知は先に記したように、魂に含まれ、更に英知は原理として技術や光も含んでいる(2-4-5, 5-9-3)。従って、感覚界のものを作り出すには、原理を必要としている。この英知はプロティノスにおいて、アイデアを内在させている(5-9-8)。このことから、アイデアは人間の内にあり、ものを作り出す原動力として理解できる。即ち、魂の現象としてアイデアを定義できる。このように、プロティノスの考えでは、感覚界における美の創造は、人間による主体性が確保されることとなっている。

これまでのプロティノスの美学を通して、その目標とするところは叡知界の美を達成することにあることが判る。一方、認識できる

ものは感覚界にあり、技術や知識を通し、美を享受することができ  
る。この享受に際し、原理としての光を必要とし、魂がこの原理に  
よってイデアとして現象する。この魂は2つの世界を繋ぎ合わせ、  
認識を感覚界から叡知界へと導くものである。従って、対象として  
は光の当たる面が美の留意すべき部分として現れる。また、感覚界  
において現実の物体は素材に形相が付加されることで、視覚によっ  
て捉えられることが判る。このことは、感覚界が人間の知識・技術  
によって表現し得る世界であることを示している。こうした美学の  
構造において、感覚が捉える美は、対象そのものが自律的にもって  
いる美そのものの影像に過ぎないという点である。(表6-1は、プロ  
ティノスの美学に関する言説を整理したものである。)

### 第3節：初期キリスト教期集中形式宗教建築における内部建築表面 とプロティノスの美学

上記したプロティノスの美学が当時の集中形式の建築構成におい  
て、どの様に対応するかが問題とされねばならない。  
初期キリスト教において主導的な役割を果たした神学思想は、既  
に記したように、擬ディオニュシオスによる否定神学と呼ばれるも  
のである(23)。この神学においては、神は対象としては現れてこず、  
認識でなく一致に至る方法こそが問題となる。この方法は、無知に  
よって認識しうる対象全てを越えたものを知ることが意図している。  
即ち、この神学思想の根本には知識を否定することを通して、存在  
の下層から上層へ上昇することが意味されている。こうした神学思  
想において、技術・知識体系によって形態や空間を構成する建築の  
問題は現れようがない。即ち、建築を制作する者にとっては、建築  
は分析的に捉えられねばならない。こうしたことは、聖空間の構成  
に於いて最も重要課題である神との関係で、キリスト教の神学思想  
は根本に於いて空間の認識を宗教理論から排除して成立しているこ  
とを意味するものと考えられる。従って、建築を制作する立場から、

当時の神学理論を建築の構成に援用することはできないと考えられる。

これに対し、プロティノスに代表されるネオプラトニズムにおいては、神に相当する唯一者は完全な高い自己を意味し、思弁的に達成されるものとなっている。そのため神聖であることに位階制が持ち込まれている(24)。即ち、前項で検討したように、プロティノスにおいては、建築を感覚界(下位世界)の現象として捉え、建築にみられる形態や空間を、形相と素材の合成として分析的に捉える視点が存在している。この視点では、建築を技術や知識によって制作されるものと考えている。また、外部の空気を素材的に捉える視点から、空間というものが定性的に概念化されている。このように、神聖である世界を観知界とし、認識される世界を感覚界とする二元論と、その2つの世界を結び付ける仲介者としての魂から構成された理論は、建築の表現を感覚界とし、その感覚界を通して観知界への変容を、建築を使用する人間の課題としている。このことは、ネオプラトニズムの二元論をもとに、辻博士の主張する教会堂の身廊と聖域が「感覚的世界」と「観知的世界」に対応するのではなく(25)、教会堂全体が感覚界に属することになると考えられる。即ち、教会堂内を二元論的に分節する主張は、視覚が捉える世界の問題ではなく、ネオプラトニズムにみられる認識に於いて下位世界の分節による位階性の問題として理解すべきである。このように、プロティノスの観点に立てば、宗教建築は形態や空間を含め「現実的なもの」によって作られた統一体として理解される。従って、形相によって多様な分節が可能になり、建築の構成という問題が意識化される。

こうした観念的な議論の中で、プロティノスは具体的な事例をひいて感覚界に付いて述べている。即ち、「建築術は感覚される技術品を制作する技術」である(5-9-11)。この建築について、本論で問題とした建築の共通する構成の特質は、以下に示したようになっていた。

- a : 表面仕上げ材が組織的な使用のされ方を示し、採光層以外の面では、光をよく反射する材料が用いられた。
- b : 建築の構成は層に分節され、この層を上方へ向かう単位となるベイが存在する。
- c : 実体的な構造形式の明示化が退行し、視覚的な構成形式が現れる。
- d : ローマ帝政期にみられる構成が各部に認められるが、その組合せ方に新たな展開が指向されている。
- e : 図像による装飾は曲面に限定される傾向にある。

こうした点を総合すると、表面の被覆に於いて、観照者の視覚をどのように具体的に組織化するかが、構成の特質として表われていると考えられる。特に、セルギオス・バックス教会堂やサン・ヴィターレ聖堂に於いては、第4章・5章で検討したように、内部立面の構成で、分節された単位の面という概念が多様化していた。逆に、建築の部材等の組合せ方、即ち、オーダーについての規範はみられない。このことは、プロティノスが問題とする様に、「現実的なものは分節を可能にする一方で統一体として捉えられるべき」という観点に照らすと、これらの遺構で全体の印象が優位性を示すように計画されたと考えられる。従って、個々の要素への分節は可能としても、それ自体が美として自律性を持ち得るものではなかったと考えられる。このことは、古典期の建築に於いてみられる部分から全体に至るまでの組織された調和と統一が、検討した遺構で認められないことを示していると考えられる。例えば、検討した遺構で認められた転用材の使用は、新たに建設された建築としての構成の自律性を弱めるものであったが、プロティノスの美学が保有した造形理念に於いて許容し得るものであったと推定される。即ち、建築の部分が制作者の意識から消え、構成の全体によって明示される統一体が強く問題にされるようになったと考えられる。

一方、プロティノスは人が衣装を着け飾られた状態にあることを、素材と形相に対応させていると考えられる(3-6-11)。即ち、人が素

材に相当し、衣装が形相に相当する。ここで認識されるのは、もはや単に人でなく、美しく飾られた人の状態を示している。従って、感覚界において 統一体として「もの」を識別させるのは、被覆されたものであることが判る。このことは、技術品として理解される建築について、表面と内部が認識、或は構成の論理として乖離されることを意味している。検討した遺構において、構造材料と仕上げ材料は相違する傾向が認められた。特にこの点は、ヴィトルヴィウスの聖空間である神殿建築の構成の規範から、基本的に相違していると考えられる。この構造体が被覆され、実体的な構造が視覚的な構成に優位性を与える点は、プロティノスの「もの」に対する認識と深く関わっていると考えられる。このことは、素材そのものを認識対象としなかったように、建築の基体（素材）である構造材料や構造体そのものは建築を作る上で重要な要素でありながら、感覚界において、制作者が自律的なものとして呈示し得るものでなかったことを示している。即ち、プロティノスの美学的観点から由来する造形理念では、建築の美は表面の構成によって決定的に左右されるものであった。

この建築の表面が問題とされることにより、色彩の重要性が演繹される。検討した遺構に共通する構成の特徴に、光をよく反射する材料と、光の内部空間への導入についての工夫が認められた。即ち、天頂部の宗教的構成の中心と観照者（低層部）との間に、光を取り入れる層が存在した。洗礼堂では中層部で、集堂では中層とドーム迫元に光の層が設けられた。しかし、ローマ帝政期にみられたオクルスのようなドーム天頂部の採光は用いられていない。即ち、建築内の光は、観照に於ける主体と客体との中間に、敷衍して語るならば、2つの間を繋ぐ仲介として構成に取り入れられていた。また、このことは、仲介としての外的な光による形相と、暗闇としての素材が合成されて生じる「空間」が建築の構成に於いて設定されることになり、プロティノスの美の認識形式との類似性を認めることができる。更に、プロティノスの美学思想にとっても、美の第一義的

な点は色彩におかれていた。特に、プロティノスは美を均衡以上のものと考えていることから、美にとって色彩を形態よりも優位なものと捉えていたと考えられる。この色彩は光によって認識可能なものとなる。即ち、視覚が捉える色彩は、内部の輝きとしての光を、外部の光が影像としてもたらしことを意味している。この目に届けられるのは、輝く「もの」の形相であるため、人間の内部に入る。また、暗闇を色にとっての素材とすることで、建築表面の形相と暗闇の素材とは原理としての光によって合成され、人間の視覚が捉えるという論理も成立する。即ち、表面に達するまでの空虚な空間も、「もの」を構成する一部として捉えられている。従って、プロティノスの美学では、感覚界の建築において、表面の構成ばかりでなく、その構成が包み込む空間も、建築の構成要素として考えられている。即ち、ここで第一義的に建築表面で問題となるのは色彩であり、第二義的に輝きの問題が表われる。初期キリスト教期の集中形式宗教建築に於いて、材質として劣るスタッコ等の代替材料の使用は、第一義的な意味で空間としての質を落とすことにならなかつたと考えられる。即ち、仕上げ材料で内在的な質よりも、外在的な形相が構成に於いて重要視されたと考えられる。このように、初期キリスト教期の集中形式宗教建築に於いて、表面の被覆で表れる色彩と輝きという2つの特質は、建築の構成で最も留意して解決すべき技術的な課題であったと言える。また、このことは、建築各部の彫塑性よりも、面の質感の方が重要視されたことを意味していると考えられる。初期キリスト教期の検討した遺構で、構成部材を図像として用いる手法に、こうした美意識による造形理念が反映されていたと考えられる。

事実、初期キリスト教期の集中形式の内部立面構成においては、構造的な明示手法が退行し、表面の意匠上の工夫が認められた。これらは、内部構成を構造として認識するよりも、絵画的に捉える視点を提供する。この観点こそ、プロティノスの美学の建築への援用に於いて、根本的な造形理念として捉えることができると考えられ

る。即ち、宗教的な意味の神は、ものに内在する本質であり、その本質の影像として表面に現れるものが技術の取り扱えるものであった。これは神聖な空間の創出が技術面で行われたにしろ、その変容として上位の世界への道を用意することができたことを意味している。

#### 第4節：小結

初期キリスト教期の建設を主導した建築技術書が発見されていない現状に於いて、本研究で検討した建築の造形理念は、建築制作者や神学思想家が共通の知識とした思想から、美に対する認識論によって類推せざるを得ない。この思想として初期キリスト教期には、プロティノスに代表されるネオプラトニズムを指摘することができる。ここで美は観知界と感覚界との二元論によって構成され、建築は感覚界の現象として捉えられた。このため、建築の制作は分析的に構成することが可能となった。

具体的には、美が感覚界で色彩として第一義的に捉えられた。これを視覚が捉えるために、原理としての光を必要とした。究極の美は観知界にあり、観知界の概念から、この美は分節されず、部分も持たないものとして定義されている。そのため、プロティノスに於いては、形態の均衡による美を、余り重大に捉えていなかったと推測される(1-6-1)。また、感覚界の美は観知界の美の影像として理解されている。こうしたことから、プロティノスの美学に於いては、形態よりも色彩が美の優位性を示すものであったと考えられる。検討した遺構にみられた特質として指摘した仕上げ材料による表面の被覆という構成は、こうした美の認識の建築構成に対する応用と看做すことができる。更に、当時国家宗教の威信を誇示したはずの建築への転用材の多用、また細部意匠の正規の構成からの逸脱という事実は、形態が色彩に対して二次的な課題であったことを示すものと考えられる。こうした美の認識形式は、ヴィトルヴィウスの主張

する彫塑的な美に対し、初期キリスト教期の検討した遺構に於ける  
図像的な色彩による美への変質によって、例証される。即ち、造形  
理念という建築制作に於ける原理的な考えは、当時の建築で、視覚  
の受容面である建築構成と受容体である人間との間の空間のあり方  
として捉えられた。この原理は知識・技術・光などの多様な内容を  
含むが、人間と物との間をつなぐ仲介者として機能した。従って、  
厳密にはここで言う造形理念は、建築面でなく、建築の空間に現象  
することになる。これは、架構によって自動的に決定される定量的  
な空間を、建築を制作する者と観照する者とが、定性的に概念化し  
たことを意味している。

このように、これまでに明らかにした特質である図像による視覚  
的な建築構成は、<sup>意図的な</sup>建築制作で結果として表れたのでなく、  
当時の美に対する規範から、意図的に応用された。このことは問題  
とした内部構成が、造形理念にとって合目的な表現であったことを  
示している。即ち、当時の人々にとってこうした宗教建築は、色彩  
が面に限定されるのでなく、空間に溢れるものとして、認識された  
と考えられる。

註：第6章

1. The Cambridge Medieval History, vol.2-2, p.243.
2. Ibid.
3. Vitruvius, op.cit., 2-2 & 2-5
4. C. Mango, Byzantium, New York, 1981, pp.125-137.
5. H.J. Magoulias, Byzantine Christianity, Wayne Univ.Press,1982, p.69.
6. W. Jaeger, Early Christian and Greek Paideia, London, 1961, pp.45-74.
7. The Cambridge Medieval History, op.cit., 209f.
8. J.M. Rist, "Basil's 'Neoplatonism': its Background and Nature", Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1981, pp.137-220.
9. Ibid., p.139.
10. A.H. Armstrong, "Man in the Cosmos: A Study of Some Differences between Pagan Neoplatonism and Christianity", Romanitas et Christianitas, Amsterdam/London, 1973, p.6.
11. Ibid., p.7.
12. Loc.cit.
13. Ibid., p.5.
14. A.H. Armstrong, "St. Augustine and Christian Platonism", The St. Augustine Lecture 1966, Villanova Univ.Press, 1967, p.27.
15. Ibid. & Magoulias, op.cit.
16. A.H. Armstrong, "Plotinus's Doctrine of the Infinite and Christian Thought", Downside Review, vol.73, 1954/5, 54ff.
17. A.H. Armstrong, "Beauty and Discovery of Divinity in the Thought of Plotinus", Kephalion, 1975, p.155.
18. プロティノスの著述については、『プロティノス全集』、1～4巻、田中美知太郎監修、中央公論、昭和61～62、を参照した。
19. G. Mathew, Byzantine Aesthetics, London, 1971(1964), pp.12-47.
20. 『プロティノス全集』では、翻訳者による用語の違いがみられ、感覚界に対するものとして、知性界、直知界などの用語が使用されているが、本論ではこれらを叡知界とした。また、本文中括弧内は、篇、章、節を示す。
21. A.H. Armstrong, "'Emanation' in Plotinus", Mind, vol.46, 1937, pp.61-66.
22. Idem., "Beauty and Discovery of Divinity in the Thought of Plotinus", op.cit., 156ff.
- 22a. E. Panofsky, Idea: a Concept in Art Theory, London, 1968(1924), pp.25-32.

23. V. ロースキ、『キリスト教東方の神秘思想』、宮本久雄訳、勁草書房、1986、pp.53-73.
24. A.H. Armstrong, "St. Augustine and Christianity", p.27 & Idem., "Man in the Cosmos", p.9.
25. 辻佐保子、『古典世界からキリスト教世界へ』、岩波書店、1982、71ff.

## 第7章：結論

本論を通して、初期キリスト教ローマ帝国の集中形式宗教建築に於ける、建築構成を検討した。こうした建築構成は、メハニコスと呼ばれる建築制作者が分業と拡充化の計られた建築分野で、彼らの応用科学と純粹科学にわたる広範な科学的知識を分析的に用いることで達成された。こうして作り出された集中形式宗教建築として、本論に於いては洗礼堂と集堂を指摘し、それらの遺構に表れた、主として内部立面構成を検討した。これらの遺構は地域や時代の相違にもかかわらず、内部表面の構成に規範が認められた。即ち、仕上げ材に大理石・スタッコ・モザイクを使用する箇所を限定しながら用いることで、構造体や構造材を被覆している。また、建築構成に於いて分節化された面に位階制が導入されている。この位階性に於いて、最上位を占めると考えられる構成面と、それを望む観照者の間に、採光層としての光の面が設けられた。

一方、こうした遺構に表れた構成とローマ時代の集中形式の建築とを比較すると、技術上の課題は既にローマ時代に解決の与えられていたことが判る。しかし、建築の技術を構成に於ける実体的な側面と捉えると、本論で検討した遺構では構成が視覚的な表現へと移行している。この表現への表れとして、従来のローマ建築の規範である壁式構成と柱・梁式構成が融合され、新たな展開を示している現象を捉えることができた。また、建築内部に於ける分節による位階制が更に押し進められ、ドーム頂部とアプス（聖域）への視線誘導による軸線が、構成のうえで組織されていた。

こうした集中形式宗教建築に於ける視覚の優位性という特質は、当時の美学思想との対応をみせている。即ち、建築は感覚界に属し、分析的に構成することが可能であった。また、美の第一義は色彩にあり、原理としての光が色彩を現象させる。従って、建築に於ける観照という点で、主体と客体の中間に光が活動する「空間」が現れることになる。このように、初期キリスト教期の美学では、「空間」

が原理の現象としてのアイデアの領域として、定性的に捉えられた。  
また、この美学思想に於いては、構造や材料を素材として、更には  
形態すらも、美の決定要素から退行させている。こうした美学から、  
検討した遺構の内部構成は合目的なものとして現れてくる。即ち、  
造形理念としてギリシャ以来の彫塑的な美から、図像的な美への移  
行が表出された。

これら初期キリスト教ローマ帝国の集中形式宗教建築に現れた構  
成の規範は、後のビザンティン建築の内部構成に大きく影響したと  
考えられる。この問題は本論の範囲を越え、今後詳しく検討される  
べき課題であるが、本論で明らかにした事実は、これまでビザンテ  
ィン建築の構成の傾向として語られる事実を補完するものである。  
即ち、中期以降顕著になるビザンティン建築の内部壁面への過剰な  
装飾の展開は、初期キリスト教期の建築構成における造形理念に既  
に内包されていたものと言えよう。このことは西欧建築の流れに於  
いて、建築を彫塑的に、或は図像的に捉える2つの造形理念が、初  
期キリスト教期に出現していたことを示唆するものである。

表1-1：集中形式の用語概念

著者	用語として使用されている建築形式	集中形式の概念規定
D.Talbot-Rice	basilica, centralised building, domed basilica, cruciform	ドームのあること
J.Strzygowski	1. many-domed type, 2. one-domed type (1. niche-buttressed squares with buttresses on the apse only, 2. domed-church on square plan with axial and diagonal buttresses, 3. dome over square bays with axial niche-buttresses and central supports)	ドームが分類の基礎的概念となる
C.Mango	centralized building (square, circular, polygonal, cruciform), basilica, cross-in-square, tetraconch	ドームの存否は問題とせず、basilicaに對應する形態とする
R.Krautheimer	basilica, domed basilica, quincunx (ambulatory church, greek cross domed octagon church, cross domed church, greek cross church)	概念規定無し
J.Hirscher	basilican type, greek cross plan, centrally planned type (square, circular, polygonal, multifoil, cruciform)	平面形態によって規定
W.Koch	Basilika, Zentralbau, Kreuzkuppelkirche, Kuppelbasilika	中央の空間が runden, elliptischen, quadratischen, polygonalen, kreuzformigen の平面形態であること

	Liddell & Scott ed.	Sophocles ed.
ἀρχιτέκτων	chief-architect, master builder, director of works: Herodotus(5BC.), Plato(5-4BC.)	
μηχανοποιός	an engineer: Plato(5-4BC.), Xenophon(5-4BC.)	
μηχανητής		a mechanist
τεχνίτης	an artificer, artist, workman: Aristoteles(4BC.), Xenophon(5-4BC.)	an artificer, artist, theatical artist: Polybius(2BC.), Strab(1BC.), Dionysius Areopagites(5AD.)
οἰκοδόμος	a builder, architect: Aristophanes(5-4BC.), Plato, Herodotus	
λιθοξόος	a marble mason: Lucianus(2AD.), Maximus(1BC.)	a sculptor: Plutarchus(2AD.)
λαοξόος	a sculptor: Ptolemaeus(2AD.)	a stone cutter: Ptolemaeus(2AD.)
λαοτύπος	a stone cutter	
λατόμος		a stone cutter: Septuaginta Interpretes(2AD.)
πλινθουλκός	a brickmaker: Plato	
πλινθάριος		a brick-maker: Dorotheus(7AD.)
ξύλοργος	a joiner, carver of images: Pollux(2AD.)	
ξύλοκόπος		a wood-cutter: Septuaginta Interpretes, Strabo(1AD.), Josephus(1AD.)
ζωγραφός	one who paints from life or from nature: Herodotus, Plato	
μουσώτης		a worker in mosaic: Eustratius(6AD.)

表2-1: 建築に関連した職業名称

	architectus(Vitruvius)	μηχανικός(Pappus)
知識体系	ratiocinatio+fabrica	λογικός, χειρουργικός
要求される 知識	litteratura, graphido, geometria, historia, philosophia, musica, medicina, iuris, astrologia	<p>λογικός:</p> <p>γεωμετρία ἀριθμητική ἀστρονομία φυσικός</p> <p>χειρουργικός:</p> <p>κατασκευαστική οικοδομική χωρογραφική τεκτονική ἐν τούτοις, κατὰ χεῖρα ἀσκήσεις</p>
要求される 仕事 (その職業名)	gnomonice, aedificatio, machinatio	<p>μηχανικός</p> <p>οργανοποιός</p> <p>μηχανικός*</p> <p>δυομηδελουργός</p> <p>μηχανικός ἀπὸ πλάκας ποιεῖν</p>

\* ἐκ βλάβος γὰρ πολλοῦ ὕδατος εὐκολώτερον ἀνοίγεται διὰ τῶν ἀντιληπτικῶν ὀργάνων ἢ διὰ τῶν ἀπὸ τοῦ χεῖρος κατασκευαζομένων

表2-2: μηχανικός と architectus の対照

名称/地名	地域	年代	分離	位置	形式	接続室	外形	内形	構成要素	扉(方位)
Grado(Eu)	Italy	16	○	NE	A	×	8	8	IA	11(W)
Grado(Pi.Vi.)	Italy	15-6	○	W	A	×	8	8	IA	11(ES)
RivaSanVitale	Swiss	16	○	NE	A	A	4	8	IA(*),N(4)	13(N,S,W)
Dere Ahsy	AsiaMinor	17-8	○	S	A	×	8	CIR	IA,	13(N,S,W)
SanPieroSorna	Istria	1E.CHR.	○	W	A	×	8	8	IA,	11(W)
Moudjeleia	N.Syria	16	○	?	?	A	F8	F8	IA,C	12(N,S)
Nocero	Italy	16	○	?	?	A	CIR	CIR	IA,C(*)	17
Abu Mina	Libye	15B	○	W	A	A,N	4	8	IA,C(C),N(4)	14(N,S,W,E)
Ravenna(Ortho)	Italy	15M	○	N	B	×	8	8	IA,C(W),N(4)	12(SE,SW)
Salone(Orth)	Dalmatie	16	?	N	A	N	F8	CIR	IA,C,	13(S,NE,SW)
Ezra	N.Syria	16B	○	?	?	A	4	8	IA,C,N(4)	13(W)
Cos(J)	Greece	16	○	?	?	×	4	CIR	IA,C,N(4)	11(W)
Hilet	Turky	17	○	?	?	A	4	CIR	IA,C,N(4)	13(W,N)
Ravenna(Arian)	Italy	15E-6B	○	?	?	A	8	8	IA,N(4)	14(?)
Cos(M)	Greece	15-6	○	NE	A	A,N	4	8	IA,N(4)	11(W)
Conspie(S)	Turky	16	○	SW	A	N	4	8	IA,N(4)	12(N,W)
Qal'at Sem'an	Syria	15E-6B	○	S	C	A	4	8	IA,N(4)	13(N,S,W)
Parento	Istria	16M	○	W	A	N	8	8	IA,N(6)	11(E)
Deir Seta	N.Syria	15-6	○	?	?	×	6	6	IC	12
Santa Severina	Italy	17	○	N	A	A	CIR	CIR	IC	17
Hemmaberge	Italy	15	○	W	A	×	8	8	IC(C),	11(E)
Albenga	Italy	15E-6B	○	?	?	×	8	8	IC(C),N(8)	12(SE,SW)
Djemila	Algerie	14	?	W	A	A	CIR	CIR	IC(W),	12(E,W)
Carthago	Tunisie	15	○	W	B	×	CIR	CIR	IC(W),	12(E,W)
Cos(Capama)	Greece	15-6	?	SW	?	N	4	8	IC(W),N(4)	14(N,S,W,E)
Tabarka	Tunisie	17	○	N	A	×	F8	8	IC(W),N(7)	12(S)
Ephesos(J)	Turky	15	○	N	A	A	8	8	IC(W),N(8)	14(N,S,W,E)
Novara	Italy	15	○	W	A	×	8	8	IC(W),N(8)	17
Como	Italy	15	○	W	A	×	8	8	IC(W),N(8)	12(?)
Torcello	Italy	17	○	W	A	A	CIR	CIR	IC,N(2)	12(E,ES)
Rome(Lateran)	Italy	15	○	NE	C	N	8	8	IC,P,	11(ES)
Ephesos(H)	Turky	14E-5B	○	NE	A	A	F12	CIR	IN(4)	14(W,S,W,E)
Aquileia	Italy	16E	○	W	A	N	4	8	IN(4)	14(N,S,W,E)
Chersonese	Crimee	15-6	○	S	A/C	×	F	CIR	IN(4)	11(W)
Zara	Dalmatie	14	×	S	×	×	F6	CIR	IN(6)	11(N)
Frejus	France	15B	○	?	?	A	4	8	IN(8)	3(E)
Hilan(Gregoir)	Italy	13-4	○	?	?	×	8	8	IN(8)	11(?)
Ventimiglia	Italy	15	○	?	?	×	8	8	IN(8)	12(N,E)
Hilan(Jean)	Italy	14-5	○	E	A	×	8	8	IN(8)	17
Nar Gabriel	Mesopota.	16-7	○	N	A	×	4	8	IN(8)	11(W)
Milan(Aquilin)	Italy	15B	○	S	A	N	8	8	IN(8)	12(N,S)
Lomello	Italy	1E.CHR.	○	S	A	×	8	8	IN(8)	11(N)
Canosa	Italy	15	○	?	?	N	8	12	×	17
Egara	Catalogne	15E	○	?	?	×	8	8	×	?
Tell Houm	Palestina	12	○	?	?	A	8	8	×	13(N,NW,NE)
Salone(Arian)	Dalmatie	15	?	N	A	×	8	CIR	×	11(NW)

Cos(Capama)=Cos(Capamaの教会堂)、Cos(J)=Cos(St.Jean)、Cos(M)=Cos(Maslikhariの教会堂)、

Milan(Gregorio)=Milan(St.Gregorius)、Milan(Aquilin)=Milan(St.Aquilino)、Milan(Jean)=

Milan(St.John)、Ephesos(M)=Ephesos(St.Mary)、Ephesos(J)=Ephesos(St.John)、Conspie(S)=Constantinople(St.Sophia)、Ravenna(Ortho)=Ravenna(Orthodox Baptistery)、Grado(Eu)=Grado(St.Euphemia)、

Grado(PiVi)=Grado(Piazza Vittoriaの教会堂)、Salona(Arian)=Salone(Arian教会堂)

年代:数字=世紀、B=初期、E=末期、M=中期、E.CHR=4~6世紀

分離:○=教会堂から分離して建つ、×=教会堂と複合化されている、?=判断不可

位置・扉(方位):N=北、S=南、E=東、W=西、数字=扉数、?=判断不可

形式:A=教会堂に近接して建つ、B=教会堂から離れて建つが、接続の施設がある、C=教会堂から離れて建ち、接続の施設がない、?=判断不可

接続室:A=周歩廊、N=前室、×=接続室無し

内形・外形:CIR=円形、4=4角形、8=8角形、12=12角形、F=不整形

構成要素:A=アブス、N=壁龕(( )内は数)、C=柱((W)=壁際、(C)=中央)、P=壁付柱

(\*)=増築・改修により設けられる

扉:数字は扉の数(( )内は方位)

表3-1:洗礼堂の平面構成の比較対照

洗礼堂名 (時代)	配置 対教会堂	洗礼室の構成									
		構造 材料	平面 形態	層数	第1層 (シアケ)	第2層 (シアケ)	第3層 (シアケ)	第4層 (シアケ)	ニッ 数	アプ ス	窓の層 (数)
ラファエラ洗礼堂 4C初期	北西部	煉瓦	円	3s	PILA (?)	PILA (?)	DOVE (?)	×	×	×	2 (?)
ラファエラ洗礼堂 5C初期	北西部	煉瓦	8角	4	COC (MA)s	WALL (MA)	WALLS (?)	DOVE (MOS)	×	×	3 (8)
トマス洗礼堂 4C末or5C初期	北部	煉瓦 木材	8角	2	COW (?)	COW (?)	×	×	4	×	2 (8)
トマス洗礼堂 5C中期	北部	煉瓦 tube	8角	3	COW (MA)	COW (SM)	DOVE (MOS)	×	4	× *2	2 (8)
カトリック洗礼堂 5C末or6C初期	北東側	砕石 切石	8角	3	? (SM)	? (?)	DOVE (?) *1	×	4	○ *3	1+2 (?)(?)
カトリック洗礼堂 6C初期	南西側	煉瓦 切石	8角	3	? (?)	? (?)	DOVE (MOS)	×	4	○	1+2 (8)(8)
マリア洗礼堂 5C初期	北西側	煉瓦 切石	円	3s	WALL (MA)	WALL (SM)s	DOVEs (?)	×	8	×	2 (8)
ヨハニス洗礼堂 5c	北側	煉瓦 切石	8角	3s	COW (MA)	COW s (SM)s	DOVE (MOS)	×	8	×	2 (8)
カトリック洗礼堂 5C末期	南部	切石 木材	8角	2	WALL (X)	COW (X)	×	×	4	○	1+2 (4)(8)

s=推測から判断されている：?=不明：X=無し：PILA=壁付き柱：COW=壁際に立つ柱：COC=中央に立つ柱：M  
A=大理石：SM=スタッコ等の塗り壁：MOS=モザイク

構造材料：tube=ドーム材料として穴開き煉瓦が使用されている。 第3層：\*1=改修時に木造天井からドーム  
となった。 アプス：\*2=東南の壁龕にALTAR TABLEが置かれている。 \*3=改修時にアプスが付けられた。

表3-2：洗礼室内部構成の対照

名称	地域・地名	創建年代
降誕教会堂	Bethlehem	4世紀初期
聖墳墓教会堂	Jerusalem	4世紀初期
Helena Mausoleum	Rome	4世紀初期
S. Stefano	Rome	4世紀初期
H. Georgius	Thessaloniki	4世紀初期
S. Costanza	Rome	4世紀初期～中期
教会堂D	Philippi	4世紀
H. Euphemia	Constantinople	5世紀初期
Mt. Garizimの教会堂	Jordan	5世紀末期
Ss. Sergius & Bacchus	Constantinople	6世紀初期
Falulの教会堂	Syria	6世紀初期
S. Vitale	Ravenna	6世紀中期
Konjuhの教会堂	Yougoslavia	6世紀

表4-1：集中形式の遺構の概要  
(?):可能性の高い用途

名称	外形	内形	身廊	側廊	2階回廊	アプス	アム	ナルテックス	アトリウム
降誕教会堂	8	8	○	×	×	×	×	○	○
聖墳墓教会堂	円	円	○	○	×(?)	×	×	×	○
HELENA MAUSOLEUM	円	円	○	○	×	○	○(?)	○	×
S. STEFANO	円	円	○	○	×	○	×	×	×
H. GEORGIUS	円	円	○	○	×	○	○	○	×
S. COSTANZA	円	円	○	○	×	×	○	○	×
教会堂D	?	8	○	○	○(?)	○	○	○	○
H. EUPHEMIA	6	6	○	×	×	○	○	×	×
MT. GARIZIMの教会堂	8	8	○	○	○	○	○	○	○
Ss. SERGIUS & BACCHUS	4	8	○	○	○	○	○	○	○
FALULの教会堂	円IR	円	○	○	?	○	×	○	×
S. VITALE	8	8	○	○	○	○	○	○	○
KONJUHの教会堂	台形	円	○	○	○	○	○	○	?

表4-2：長堂形式に対応する集中形式遺構の平面構成  
○:有 ×:無 (?) :可能性が高い IR:不整形 内形:身廊の形態 アプス:礼拝室を含む ナルテックス:前室を含む アム:聖域を含む ? :不明

名称	外壁材料	身廊	ドーム材料	側廊	2階回廊	アプス	ペマ	ナルテックス
Helena Mausoleum	BRICK	DOME	BRICK	×	×	×	×	×
H. Georgius	BRICK+CONCRETE	DOME	BRICK	WOODEN	×	HALF DOME	VAULT	?
Ss.Sergius & Bacchus	STONE+BRICK	DOME	BRICK	VAULT	VAULT	HALF DOME	VAULT	VAULT
H. Euphemia	STONE+BRICK	DOME	BRICK	×	×	HALF DOME	×	×
S. Vitale	BRICK	DOME	BRICK TUBE	WOODEN	WOODEN	HALF DOME	VAULT	VAULT
S. Costanza	BRICK	DOME	BRICK+CONCRETE	VAULT	×	×	×	VAULT/HALF DOME
S. Stefano	BRICK	DOME	WOODEN	WOODEN	×	WOODEN	×	×
Mt. Garizimの教会堂	STONE	DOME	WOODEN	WOODEN(?)	WOODEN(?)	?	?	×

表4-3 : 堂内の架構形式・構成材料

×:無 (?) :可能性が高い ? :不明

名称	モザイクorフレスコ	大理石等の石貼orスタッコ
S. Costanza	側廊ウォール, 小ドーム, 身廊床	身廊壁
H. Georgius	ドーム, ニッチ, ウォール, 77° x 半ドーム	身廊壁
H. Euphemia		身廊壁, 身廊床
Ss.Sergius & Bacchus	ドーム, ナルテックス	側廊壁, 隅柱1階
S. Stefano	中庭床	身廊床と壁, 側廊上壁部, 礼拝室アーケード面迄の壁, 中庭側外壁 礼拝室アーケード上部(スタッコ)

表4-4 : 堂内の仕上げ材料

名称	地域・地名	創建・改修時の用途
降誕教会堂	Bethlehem	記念的集堂
聖墳墓教会堂	Jerusalem	記念的集堂
Helena Mausoleum	Rome	霊廟
S. Stefano	Rome	殉教者礼拝堂
H. Georgius	Thessaloniki	宮廷附属礼拝堂
S. Costanza	Rome	霊廟
教会堂D	Philippi	司教座教会堂
H. Euphemia	Constantinople	宮廷附属礼拝堂
Mt. Garizimの教会堂	Jordan	司教座教会堂(?)
Ss.Sergius & Bacchus	Constantinople	宮廷附属礼拝堂
Falulの教会堂	Syria	世俗教会堂(?)
S. Vitale	Ravenna	宮廷附属礼拝堂
Konjuhの教会堂	Yougoslavia	世俗教会堂(?)

表4-5 : 集中形式の遺構の用途 (?) :可能性の高い用途

Vitruvius 巻・章	Vitruviusの著作内容	Faventius 巻	Faventiusの著作内容
I.0 序			
I.1 建築家の教育について			
I.3 建築術の部門について			
I.4 建築物の身体構造と土地の地形性について			
I.5 建築の基礎及び当の造り方について			
I.7 公共建築物の計画について			
II.0 序			
II.1 瓦葺の起源			
II.2 万物の元素について			
II.6 煉瓦造りについて			
II.7 石造りについて			
II.10 石造りについて			
III.0 序			
III.1 柱段のシユンメトリアについて			
III.2 各種の神殿形式			
III.3 柱間形式の種類とそれによる柱のシユンメトリア			
III.4 柱段の基礎の造り方			
III.5 イオニア式のシユンメトリア			
IV.0 序			
IV.1 三つの柱形式の起源、コリントウス式柱頭の比例			
IV.2 柱上部の裝飾について			
IV.3 ドーリス式柱段のシユンメトリア			

Vitruvius 卷・章	Vitruviusの著作内容	Faventius 巻	Faventiusの著作内容
IV.4	ケツラとプロナオスの割合		
IV.5	柱間の面すべき方角について		
IV.6	柱間の出入口		
IV.7	トラスキア神殿について		
IV.8	円堂及びその他の形式の殿堂		
IV.9	祭壇について		
V.0	序		
V.1	フォルム及びバシリカ		
V.2	庭園、監獄、元老院議場		
V.3	劇場について、その敷地、基礎、音響		
V.4	ハルモニクニについて		
V.5	劇場の基礎の構成		
V.6	テリシヤ劇場の構成		
V.7	テリシヤ劇場の構成		
V.8	敷地の音響的仕度について		
V.9	劇場付属の柱廊について	0	
V.11	トラエスタの造り方		
V.12	築造工事について		
VI.0	序		
VI.1	気候の人体への影響について		
VI.2	住家のシモンメトリア		
VI.3	住家の主要部の構成		
VI.5	住家のテコロについて		
VI.7	テリシヤの住家について		
VII.0	序		
VII.5	壁面について		
VIII.0	序		
VIII.2	雨水について		
VIII.3	各種の水の性質について		
VIII.4	水質検査法		
IX.1	天窓の造り方及び柱について		
IX.2	月の窓の造り方		
IX.3	甬道および黄道十二星座について		
IX.4	北天の星座		
IX.5	南天の星座		
IX.6	占星術について		
IX.7	アナムナについて		
X.0	序		
X.1	メカニクスとオルガン		
X.2	荷揚げ装置の造り方		
X.3	運動の二要素について		
X.4	水揚上げ装置の造り方		
X.5	水車について		
X.6	螺旋式水揚上げ装置の造り方		
X.7	テリシヤの水揚上げ装置		
X.8	水力オルガンの造り方		
X.9	行理計の造り方		
X.10	堅きゆうのシモンメトリア		
X.11	堅きゆうのシモンメトリア		
X.12	堅きゆうの造り方		

X.9	小刀の造り方
X.10	堅まゆらぎのシユンメトリア
X.11	堅まゆらぎのシユンメトリア
X.12	堅まゆらぎの造り方について

Vitruvius 巻・章	Vitruviusの著作内容	Faventius 章	Faventiusの著作内容
I, 2	建築は何から成立するか	1	PREFACE
I, 6	城内における建築の計画、風気流を建ける配置	2	De ventis
VIII, 1	水経探査法	3	De aquae inventione
VIII, 6	水運、井戸、水橋について	4	De puteorum fossionibus et structuris
VIII, 5	水準器について	5	De utilitate aquae probanda
VIII, 6		6	De aquae inductione
VIII, 6		7	De mensuris et pondere fistularum
II, 4	段について	8	De harenae natura probanda
II, 5	石灰について	9	De calcis utilitate probanda
II, 3	煉瓦について	10	De late ribus faciendis
II, 8	壁体の種類とその構造法	11	De parietibus la tericiis tectoria operi parandis
II, 9	木材について	12	De generibus arborum et utilitate caesionis
VI, 8	住家の基礎の造り方	13	De fabrica villae rusticae disponenda
VI, 6	団圓住家の構成	14	De dispositione operis urbani
VI, 4	団圓住宅の配置	15	De mensuris aedificiorum
V, 10	浴場の造り方	16	De fabrica balnearum
V, 10		17	De cameris balnearum
VII, 1	結床の造り方	18	De expolitionibus pavimentorum
VII, 1		19	De pavimentis supra contignationem faciendis
VII, 2	渾石灰について	20	De calce probanda operi albario
VII, 3	木造円筒天井の造り方、木造屋根みへの仕上げ塗り	21	De cameris cannicilis
VII, 3		22	De politionibus parietum caementiciorum
VII, 3		23	De opere coronaria
VII, 4	湿気のある室の壁の造り方、壁面の装飾、食堂床の仕上げ	24	De parietibus caementiciis umidis locis solidandis
VII, 4		25	Friclinia hiberna minoribus
VII, 4		26	Pavimenta ut in hieme tebeant
VII, 9	漆について	27	De generibus colorum
VII, 14	代用色母について	27	De generibus colorum
VII, 10	人工色料について - 黒色	27	De generibus colorum
VII, 7	天然色料について	27	De generibus colorum
VII, 11	藍色及び赤褐色	27	De generibus colorum
VII, 13	藍色	27	De generibus colorum
VII, 8	赤及び水銀について	27	De generibus colorum
VII, 6	スッコ用の大理石粉について	27	De generibus colorum
VII, 12	鉛白、緑膏、鉛丹	27	De generibus colorum
IX, 0	時計	28	De normae inventione
IX, 8	日時計及び水時計の造り方	29	De horologii institutione

表 5-1: Faventiusと Vitruviusの「建築書」の対照表

用語の意味	VITRUVIUSの用語		FAVENTIUSの用語	
	ラテン語	ギリシャ語	ラテン語	ギリシャ語
秩序・比例	ORDINATIO	TAXIS	ORDINATIO	TAXIS
配置	DISPOSITIO	DIATHESIS	DISPOSITIO	DIATHESIS
有機的比例	SYMMETRIA	SYMMETRIA	MENSURA	SYMMETRIA
装飾の適正	DECOR	THEMATISMWI	VENUSTAS	EYRYTHMIA
材料・工費	DISTRIBUTIO	OIKONOMIA	DISTRIBUTIO	OIKONOMIA
美	EURYTHMIA		VENUSTAS	EYRYTHMIA
			AEDIFICATIO	
			CONLOCATIO	
			MACHINATIO	

表5-2: 建築理念に関する VITRUVIUSと FAVENTIUSの対照表

名称	場所	年代	形態	部屋数	ニッチ数	機能
Stabian Bath	Pompeii	BC80	CIS	1	4	laconicum
Herode's Bath	Jericho	BC37-34	CIS	1	4	laconicum
Agrippa Bath	Rome	BC1C.	C	1	?	?
Thelmal Rotonda	Balae	BC1C.	C	1	4	?
Central Bath	Pompeii	AD1C.	CIS	1	4	?
Forum Bath	Pompeii	AD1C.	CIS	1	4	laconicum
Caracalla Bath	Rome	AD3C.B.	C	1	7	caldarium
Agora's Bath	Side	BC1C-AD2C.B.	CIS	1	4	laconicum
Antonine Bath	Carthage	AD2C.M.	O	2	0	(destictum)
Antonine Bath	Carthage	AD2C.M.	H	2	2	laconicum
Antonine Bath	Carthage	AD2C.M.	O	2	0	?
Antonine Bath	Carthage	AD2C.M.	O	1	2	caldarium
Diocletian Bath	Rome	AD3C.E.	C	1	2	tepidarium
Diocletian Bath	Rome	AD3C.E.	OIS	2	?	?
Piazza Armerina	Sicily	AD3C.-4C.	O	1	7	frigidarium
Constantine Bath	Rome	AD4C.B.	CIS	2	4	frigidarium
Constantine Bath	Rome	AD4C.B.	C	1	3	caldarium
Constantine Bath	Rome	AD4C.B.	OIS	2	4	notatio
Forum Bath	Khamissa		C	1	0	?
Forum Bath	Khamissa		C	1	0	?

形態（集中形式の部屋）：CIS=4角形内接円、C=円形、O=8角形、H=6角形、  
OIS=4角形内接8角形

部屋数：浴場に於ける同じ大きさの部屋の数

年代：C.=世紀、B.=初期、M.=中期、E.=後期

表5-3：浴場に於ける集中形式の部屋の機能





表6-1：プロティノスに於ける美に関する概念と言説

巻章節 概念内容

- \*\* タイトル 可能なもの  
2-5-2 現実的なものは可能の  
2-5-2 可能なものは可能の  
2-5-5 素材は現実的  
2-5-5 素材は現実的
- \*\* タイトル 実体について  
2-6-1 性質には2種あり  
2-6-2 性質には移りやすいもの
- \*\* タイトル 通全融合  
2-7-1 2つの物体が押し退け合うこと無く、同一の場所を占有する
- \*\* タイトル 視覚について  
2-8-1 第一次的に観られる対象は色、大きさは付随的に見られる
- \*\* タイトル 自然観照  
3-8-11 知性はある種の視覚、現に見ている視覚  
3-8-11 知性には素材（知性、界の素材）と形相の2つの面がある  
3-8-11 単なる視覚は感覚対象に依って充足／知性という視覚は善に依って充足  
3-8-11 我々の住むこの美しい世界も、この知性の影であり似像である  
3-8-2 自然の制作の活動は、必要な素材だけ／素材に自然は働きかけることで形を与える
- \*\* タイトル 非物体的なもの  
3-6-0 魂=真実在=形相=非受動  
3-6-10 素材は素材である限り、変容を受けることはできずあるがままの状態を保つ  
3-6-11 飾り付けられると素材は[素材であること]を止める／人（素材）に衣装（形相）を着せ、形相の与える衝撃は素材に向けるのではなく、形相相互に向けられる  
3-6-7 物体は素材と形相が合成されたもの  
3-6-7 素材は非物体的で静止しており、それ自体では見えない
- \*\* タイトル 視覚について  
4-5-1 魂は肉体（物体）を伴う知性界にあり、感覚作用を行なう  
4-5-1 感性的な諸対象に対する知識は、肉体的な道具である／諸感覚器官を通じて可能  
4-5-2 感覚知の対象が見えるためには、中間者（空気など）が照らされる必要がある  
4-5-4 視覚に接触している光が魂のあるものを捉える／中間者（空気など）は視覚の移動の場で、光による影響を受けない  
4-5-7 2つの活動／輝く物体の内部にある活動／輝く物体の縁の外側にある活動=内側の活動の映像
- \*\* タイトル 直知される美について  
5-8-1 芸術が美しい形を生み出すのは、芸術が物体に内在させた形相のため  
5-8-1 素材は芸術の美を所有していたのではなく、芸術の美は制作者や観照する人の内に存在していた

表6-1：プロティノスに於ける美に関する概念と言説

巻章節	概念内容
5-8-1	形態の美は、芸術の美が劣った形で物
5-8-10	性に取界は、れ表、界ではむしろ全体が色
5-8-12	知覚が存は知性、統美、通部、のゆあ、像数のあ、実れ、近
5-8-2	芸術が、そぞれ、そぞれ、全感、知素、和知、感、を全
5-8-4	5-8-4
5-8-5	5-8-5
5-8-7	5-8-7
5-8-7	5-8-7
5-8-8	5-8-8
5-8-9	5-8-9
** タイトル	又一のスとイデアと
5-9-10	5-9-10
5-9-11	5-9-11
5-9-11	5-9-11
5-9-11	5-9-11
5-9-12	5-9-12
5-9-13	5-9-13
5-9-13	5-9-13
5-9-14	5-9-14
5-9-14	5-9-14
5-9-2	5-9-2
5-9-2	5-9-2
5-9-3	5-9-3
5-9-3	5-9-3
5-9-3	5-9-3
5-9-3	5-9-3
5-9-3	5-9-3
** タイトル	又一のスとイデアと
5-9-3	5-9-3



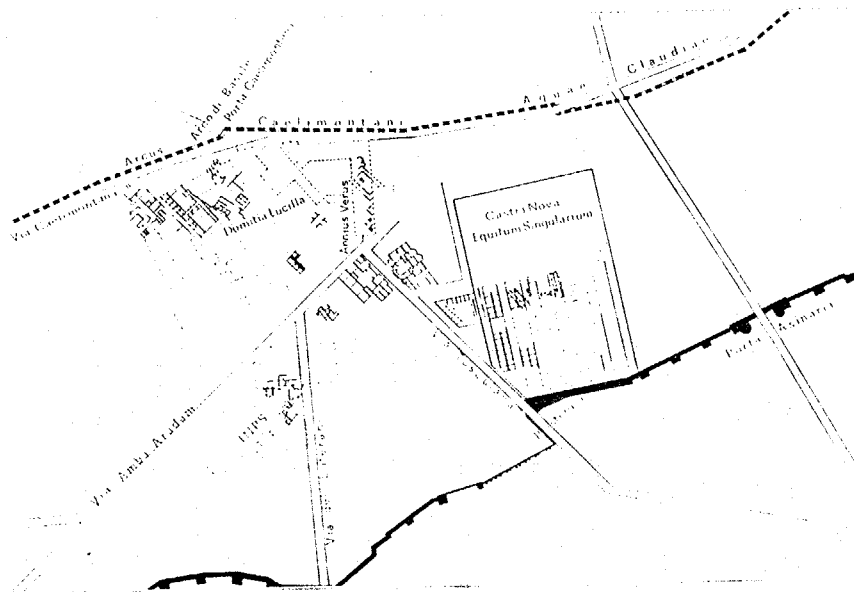


図3-1： ローマ時代のラテラン聖堂周辺 (after G.B. Giovenale)



図3-1： ルネサンス期のラテラン聖堂周辺 (after R. Krautheimer et.al.)

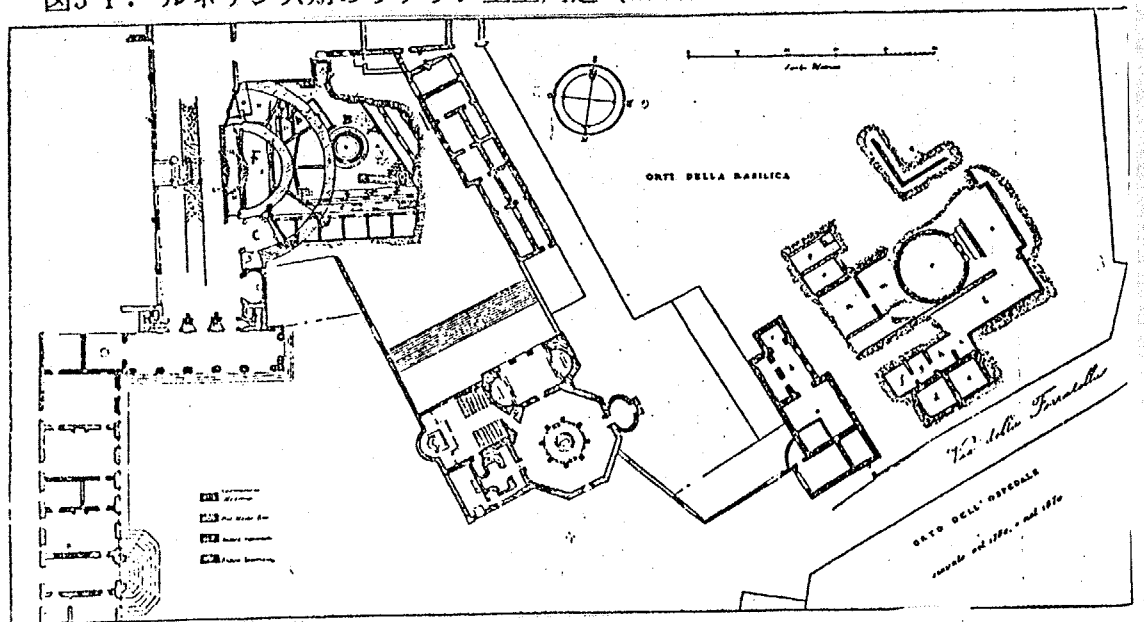


図3-2： ラテラン聖堂・洗礼堂平面図 (after R. Krautheimer et.al.)



図3-3： ラテラン聖堂・洗礼堂推定復元図 (after Giovenale)

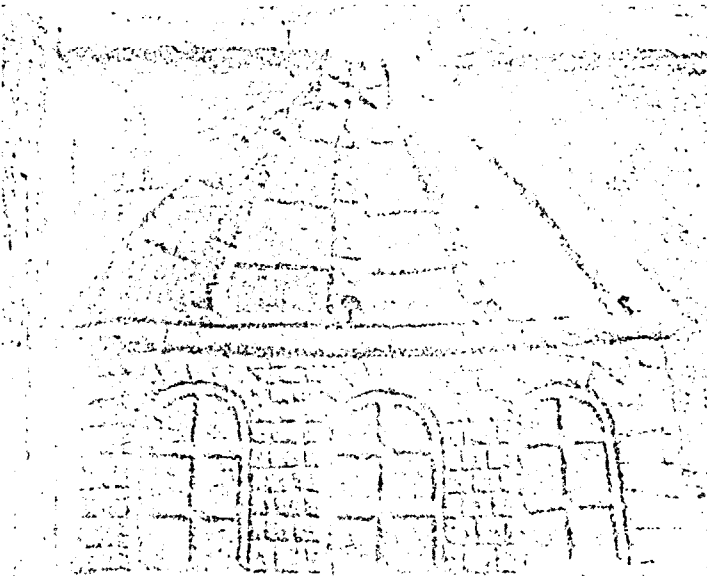


図3-4： ラテラン聖堂・石棺浮き彫り (after Giovenale)

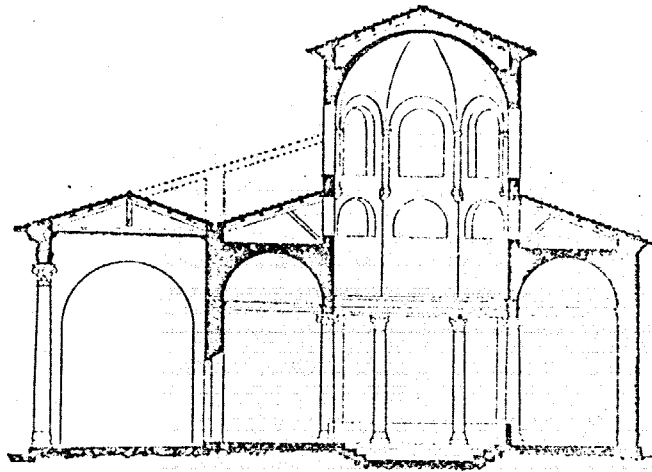


図3-5： ラテラン聖堂・シスト3世時代の洗礼堂推定断面図  
(after Giovenale)

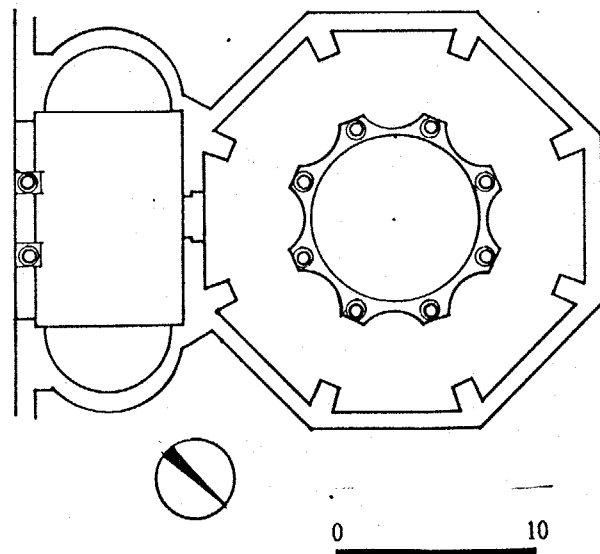
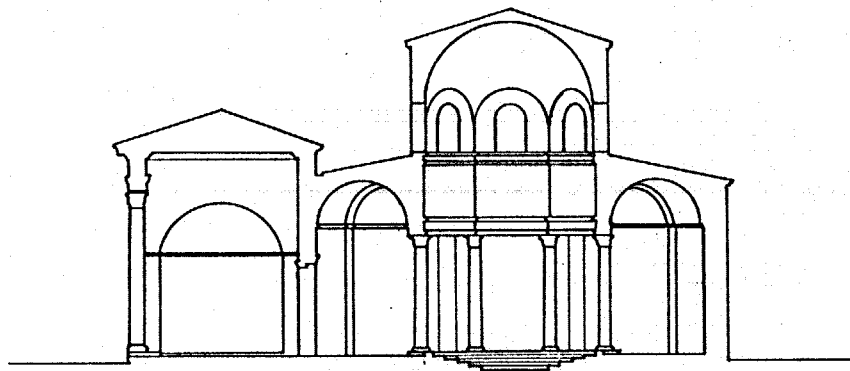


図3-6： ラテラン聖堂・シスト3世時代の洗礼堂推定復元図 (by Giovenale)

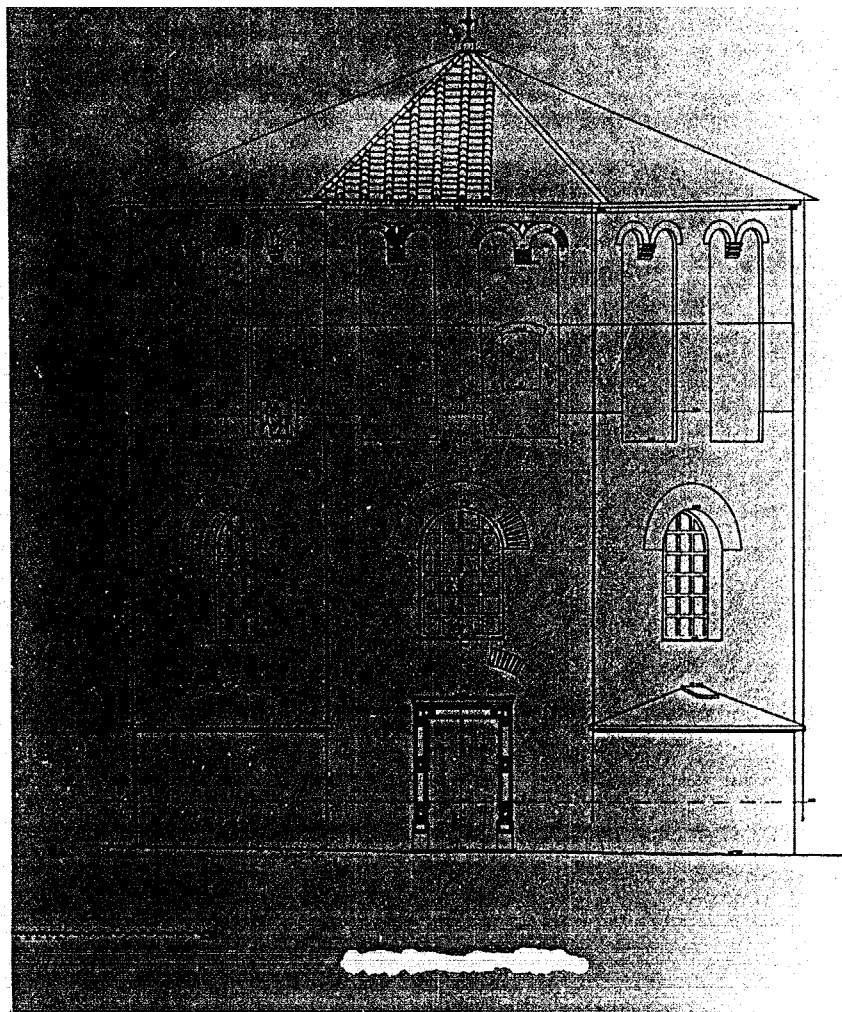


図3-7： オーソドックス洗礼堂・現状立面図 (by Kostof)

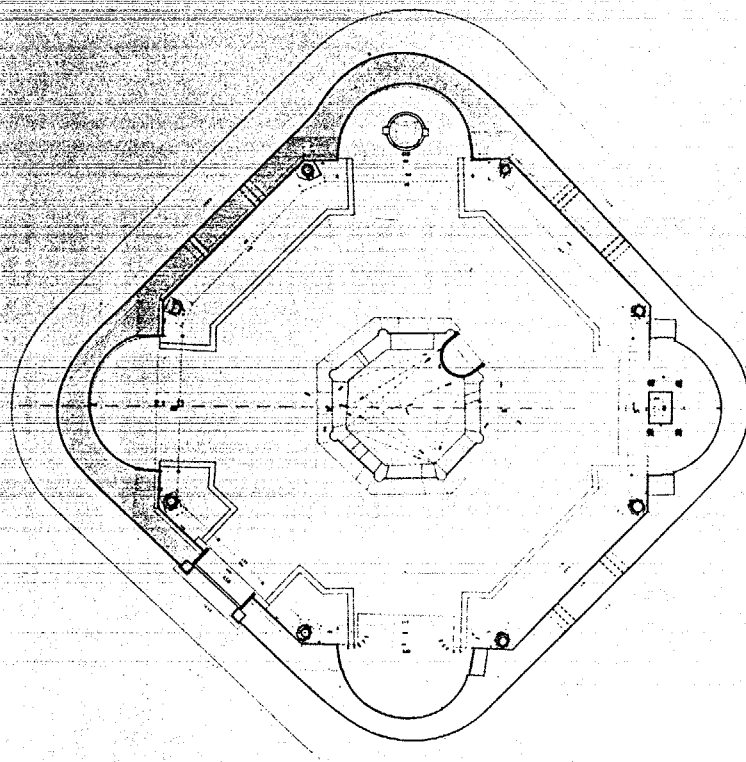


図3-8： オーソドックス洗礼堂・現状平面図 (by Kostof)

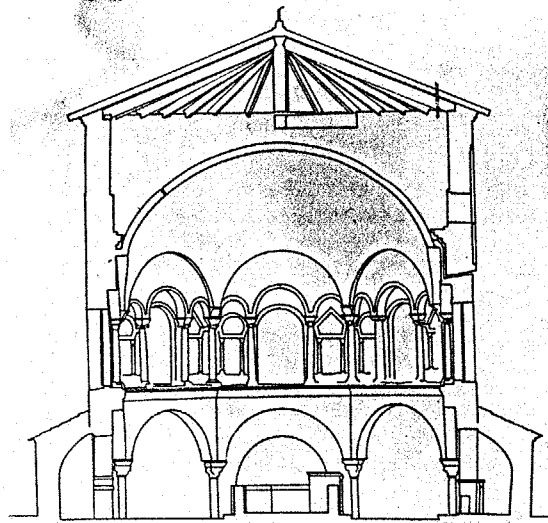


図3-9： オーソドックス洗礼堂・現状断面図 (by Kostof)

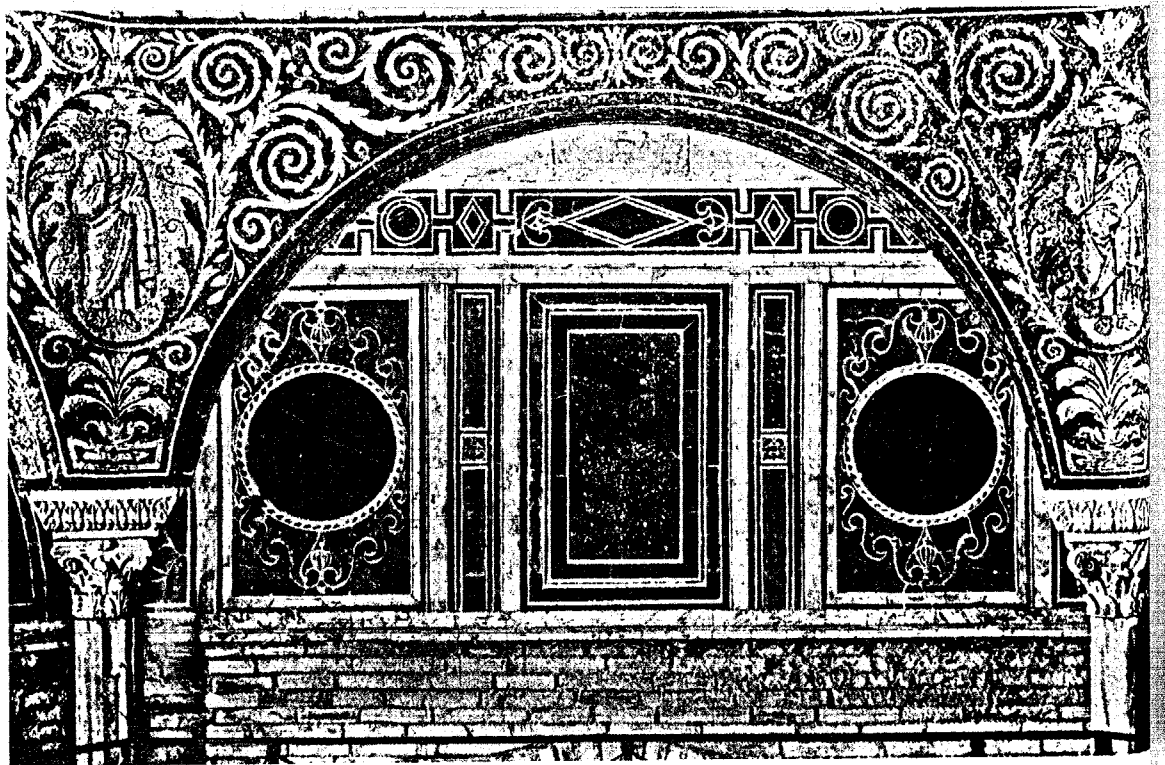


図3-9a： オーソドックス洗礼堂・低層部オブス・セクティル (by Kostof)

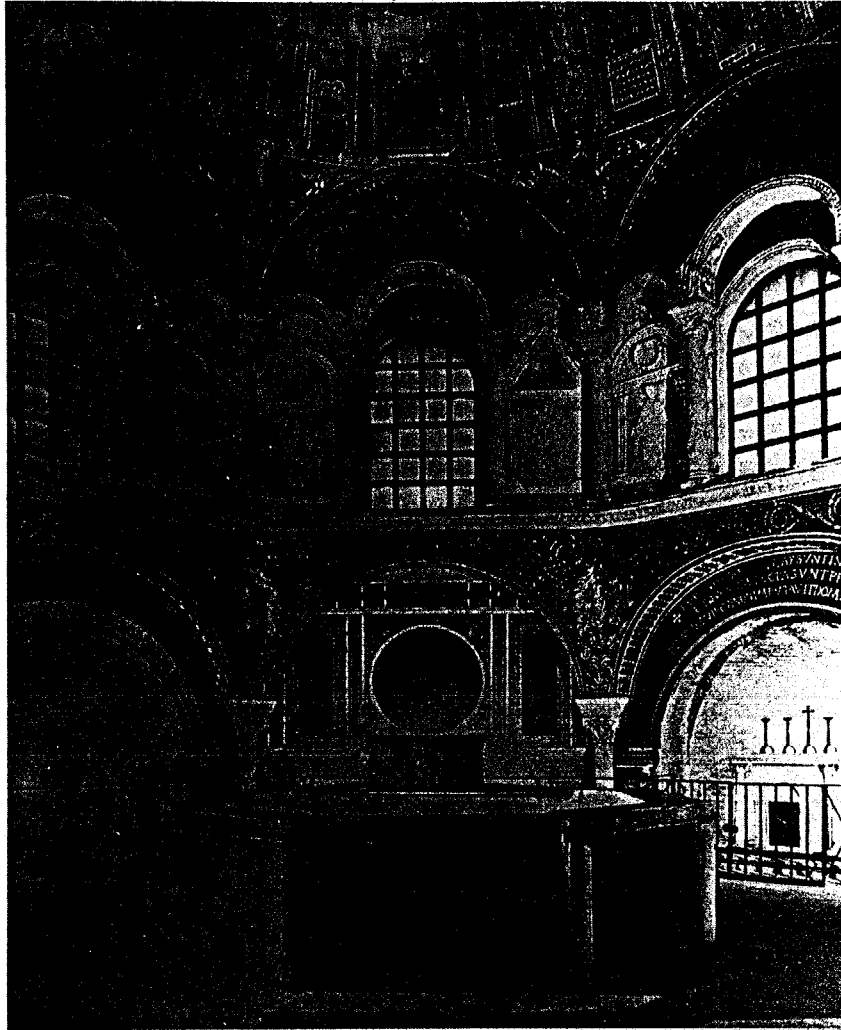
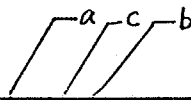


図3-10：オーソドックス洗礼堂内部（by Kostof）

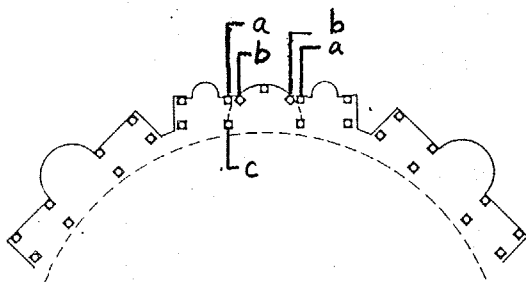
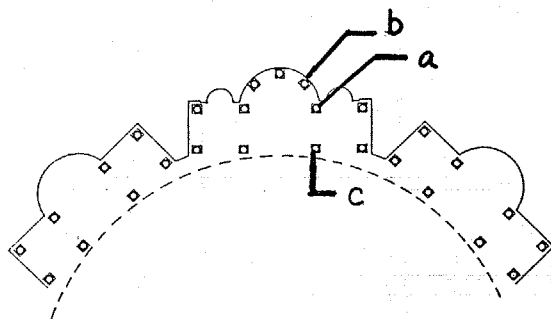


図3-11：オーソドックス洗礼堂・低層リングの図柄の建築概念平面図

上：Kostof案、下：筆者案

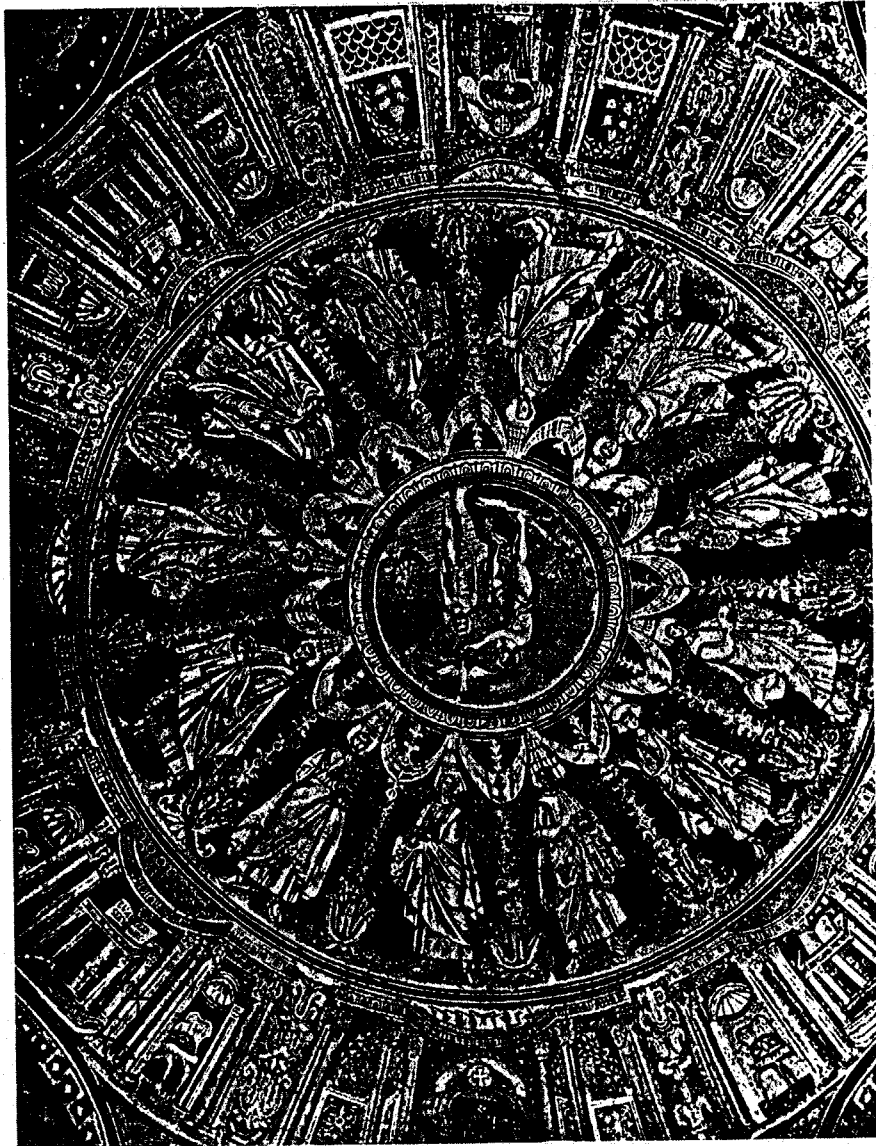


図3-12：オーソドックス洗礼堂・ドームモザイク (after Kostof)

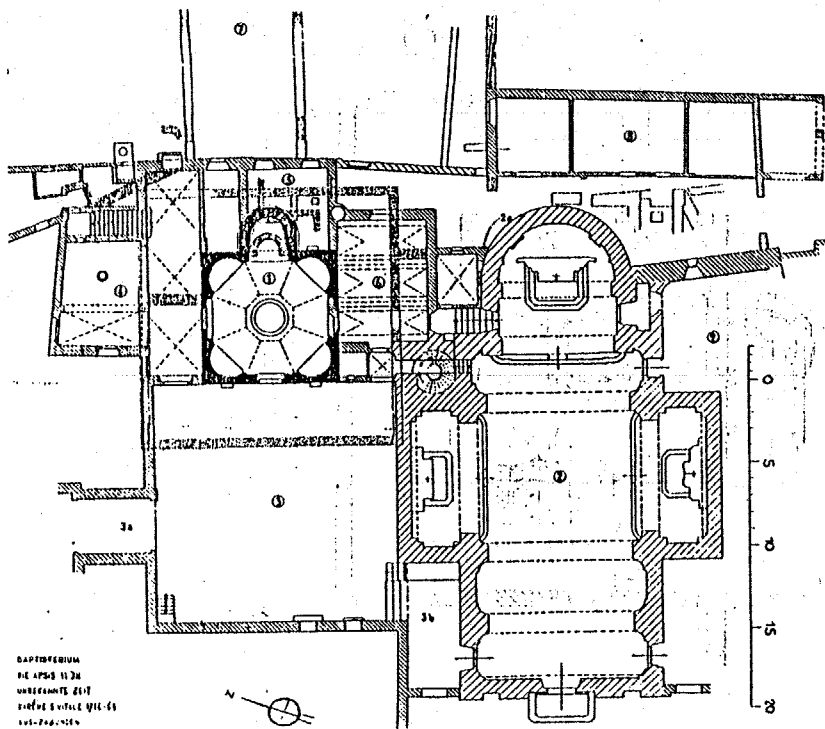


図3-13：リヴァ・サン・ウァーレの洗礼堂・発掘平面図 (by Steinmann-Brodbeck)

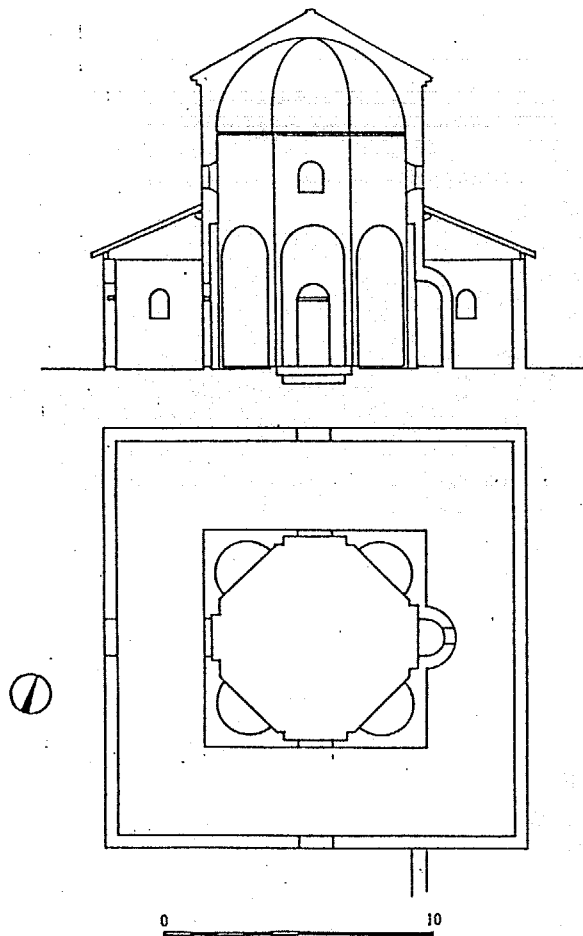


図3-14：ラヴァ・サン・ガータールの洗礼堂・  
復元平面図、断面図  
(after Steinmann-Brodbeck)

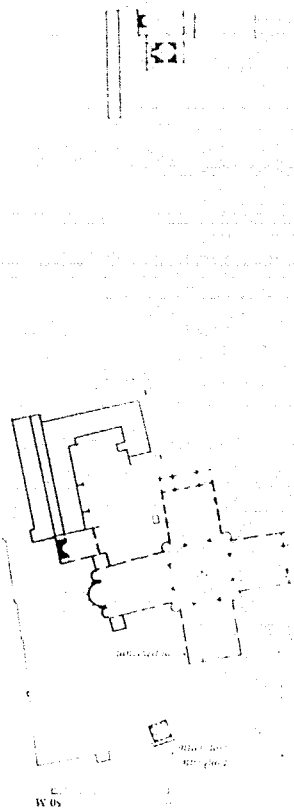


図3-15：カルアト・シムアンの全体図  
(after Tchalenko)

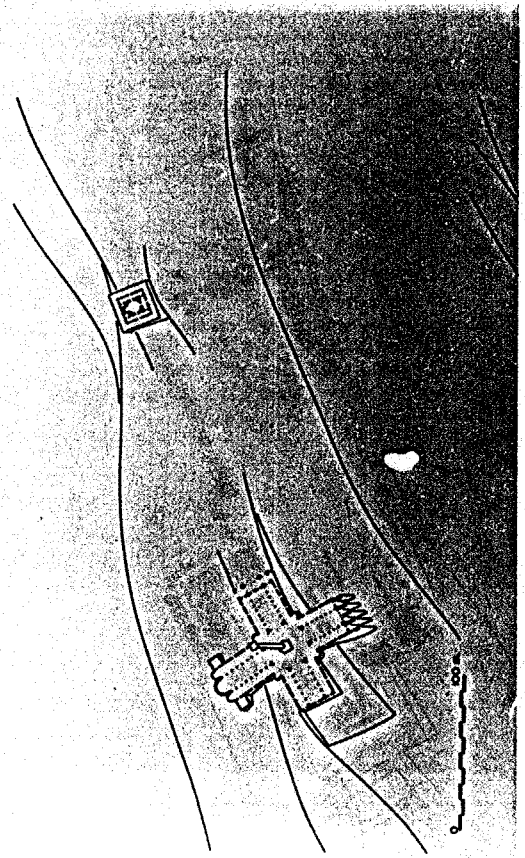


図3-16：カルアト・シムアンの建設第1期  
(after Tchalenko)

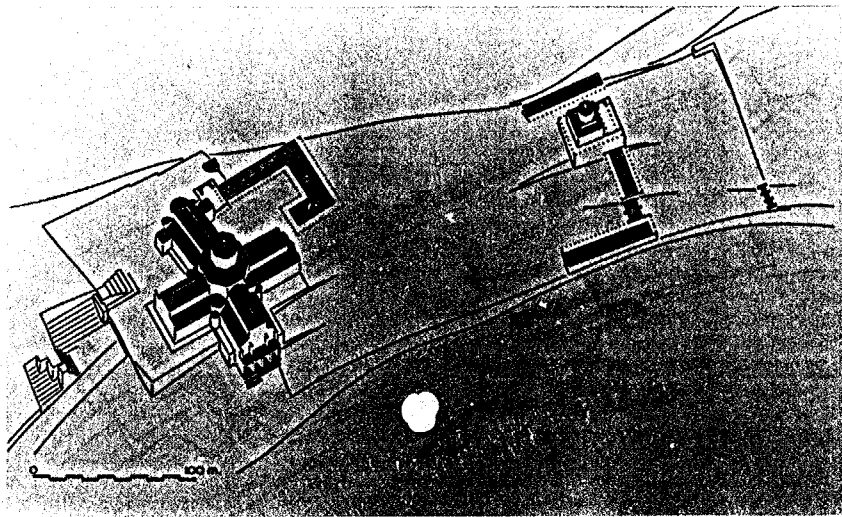


図3-17：カルアト・シムアンの建設第2期 (after Tchalenko)

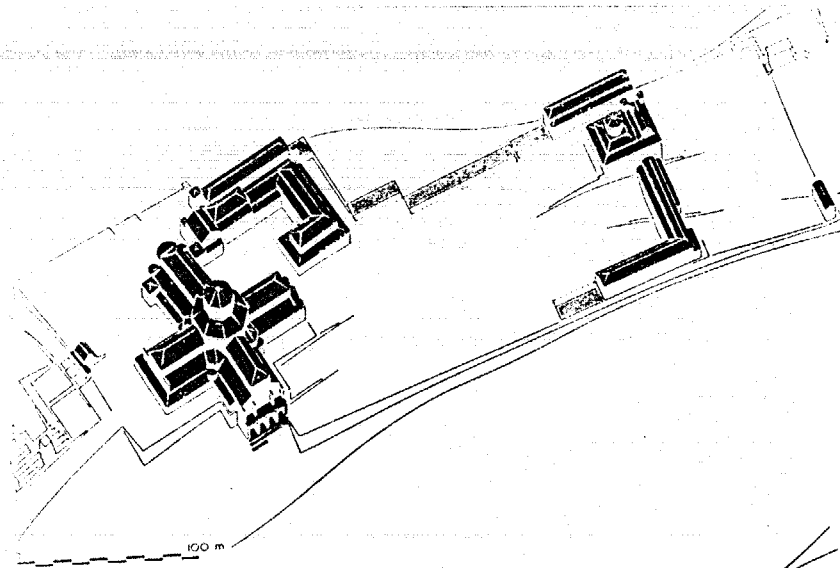


図3-18：カルアト・シムアンの建設第3期 (after Tchalenko)

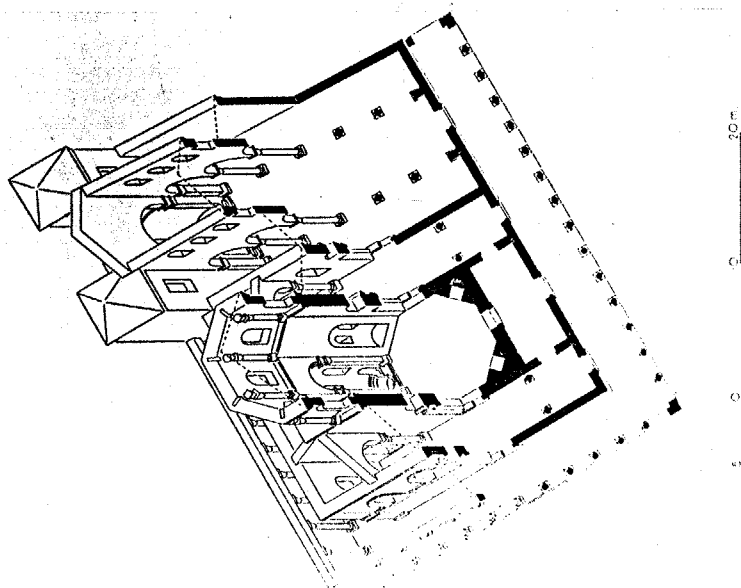
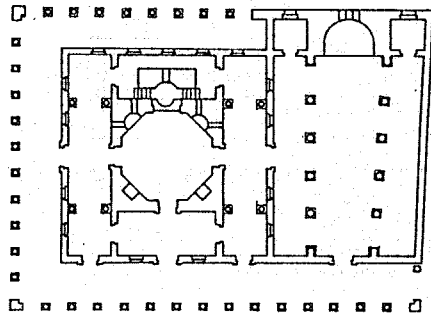
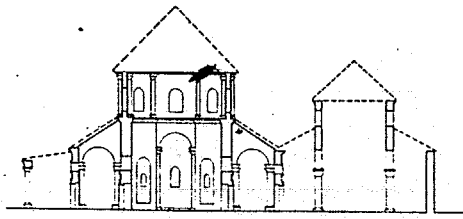


図3-19：カルアト・シムアンの洗礼堂 (after Tchalenko)



0 5 10

図3-21：カルアト・シムアンの洗礼堂・復元断面図  
(after J.H. Emminghaus)

図3-20：カルアト・シムアンの洗礼堂・復元平面図  
(after J.H. Emminghaus)

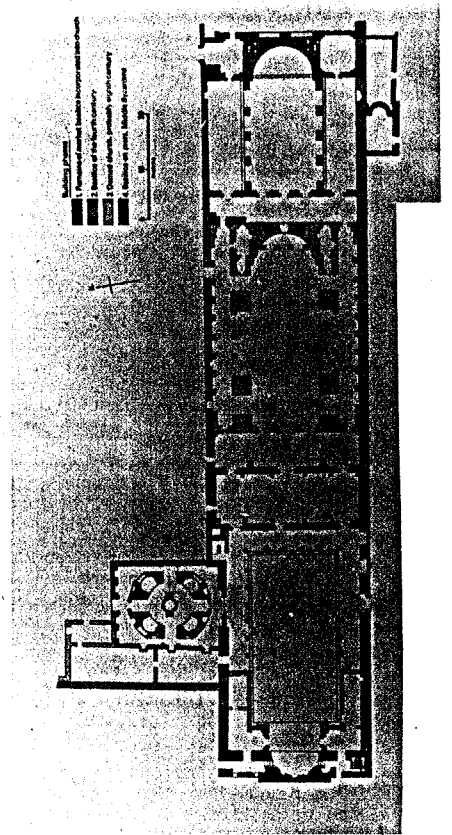


図3-22：エフェソのマリア聖堂・  
平面図 (after C. Foss)

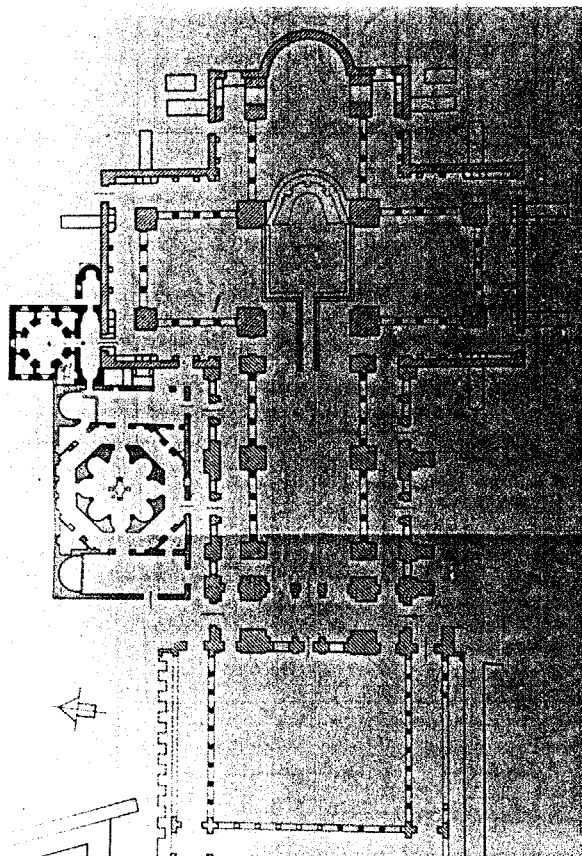


図3-23：エフェソのヨハネ聖堂・平面図  
(M. Buyukkolanci)

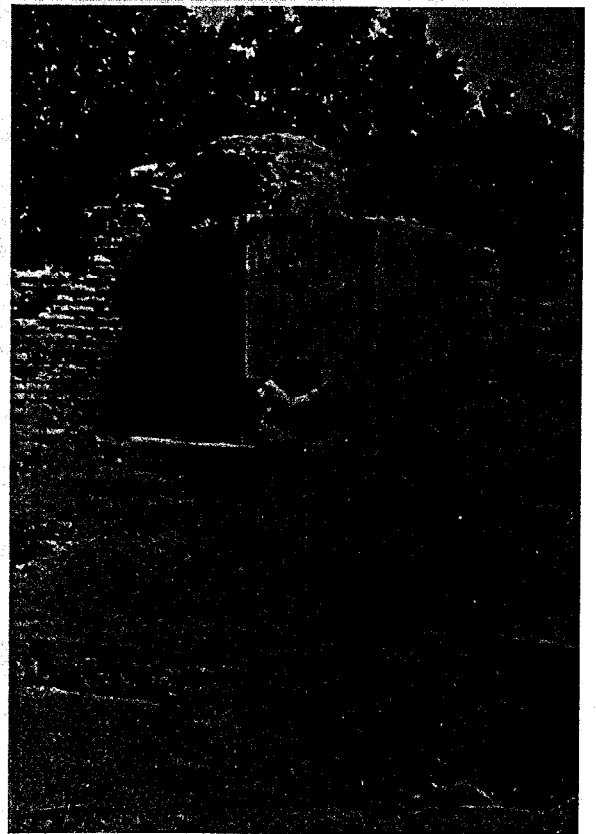


図3-24：エフェソのマリア聖堂・洗礼堂隅柱  
(M. Buyukkolanci)

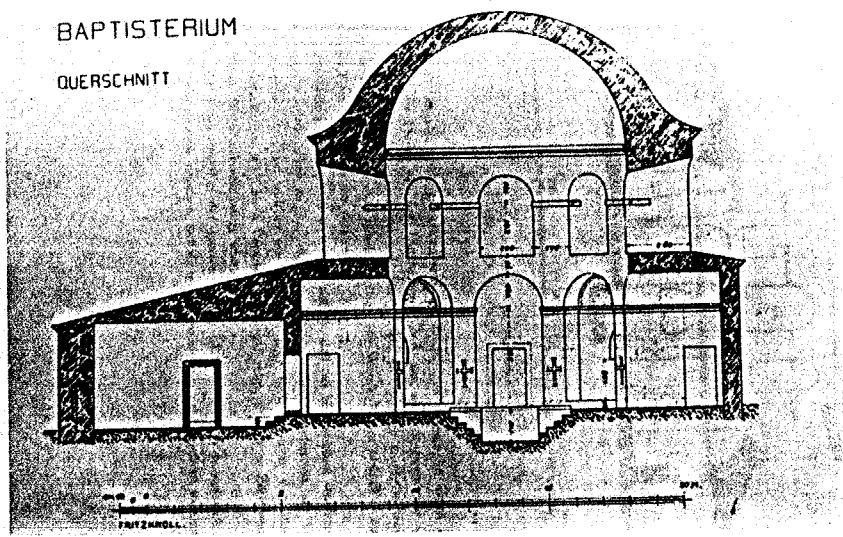


図3-25：エフェソのマリア聖堂・洗礼堂復元断面図（東西）（by F. Knoll）

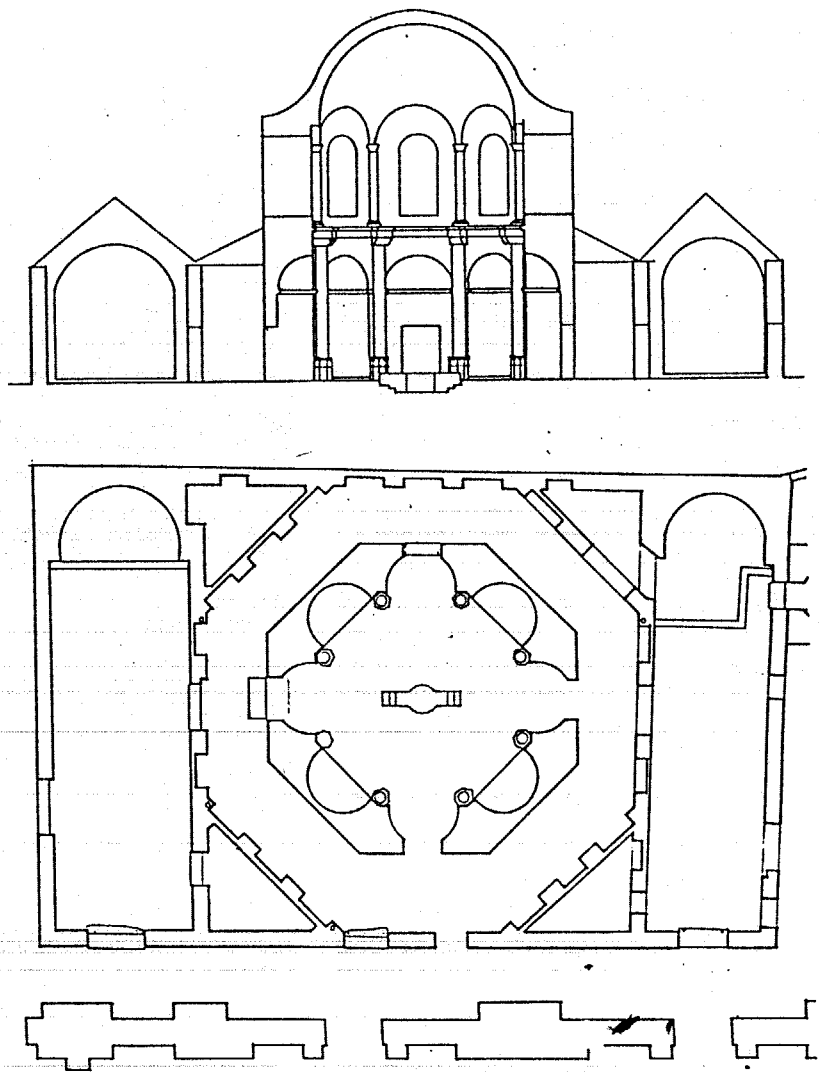


図3-26：エフェソのヨハネ聖堂・洗礼堂復元平面図、断面図  
（after Buyukkolanci）

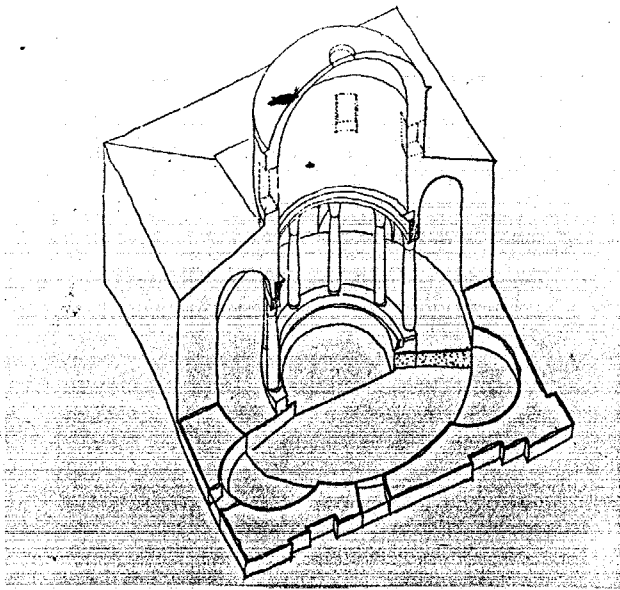


図3-27：エフェソの浴場・復元図 (by F. Fasolo)

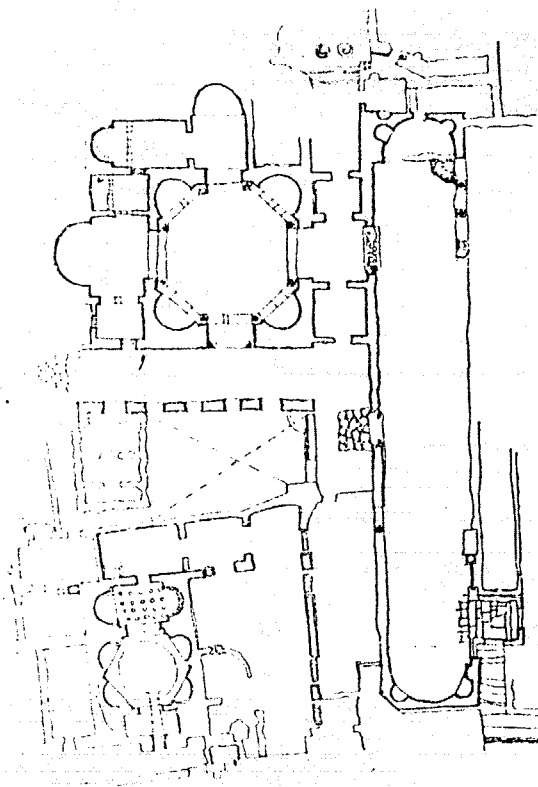


図3-28：エフェソのビザンティン浴場 (by Knoll)

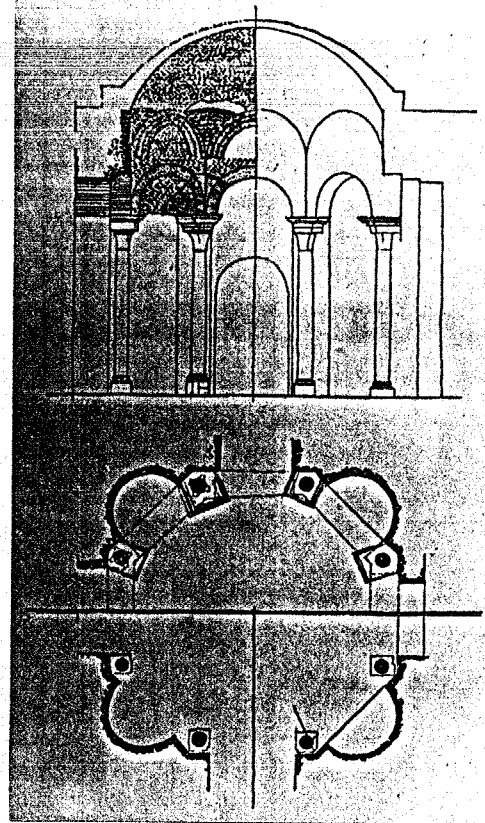


図3-29：エフェソのビザンティン浴場・  
カルダリウム復元図 (by Fasolo)

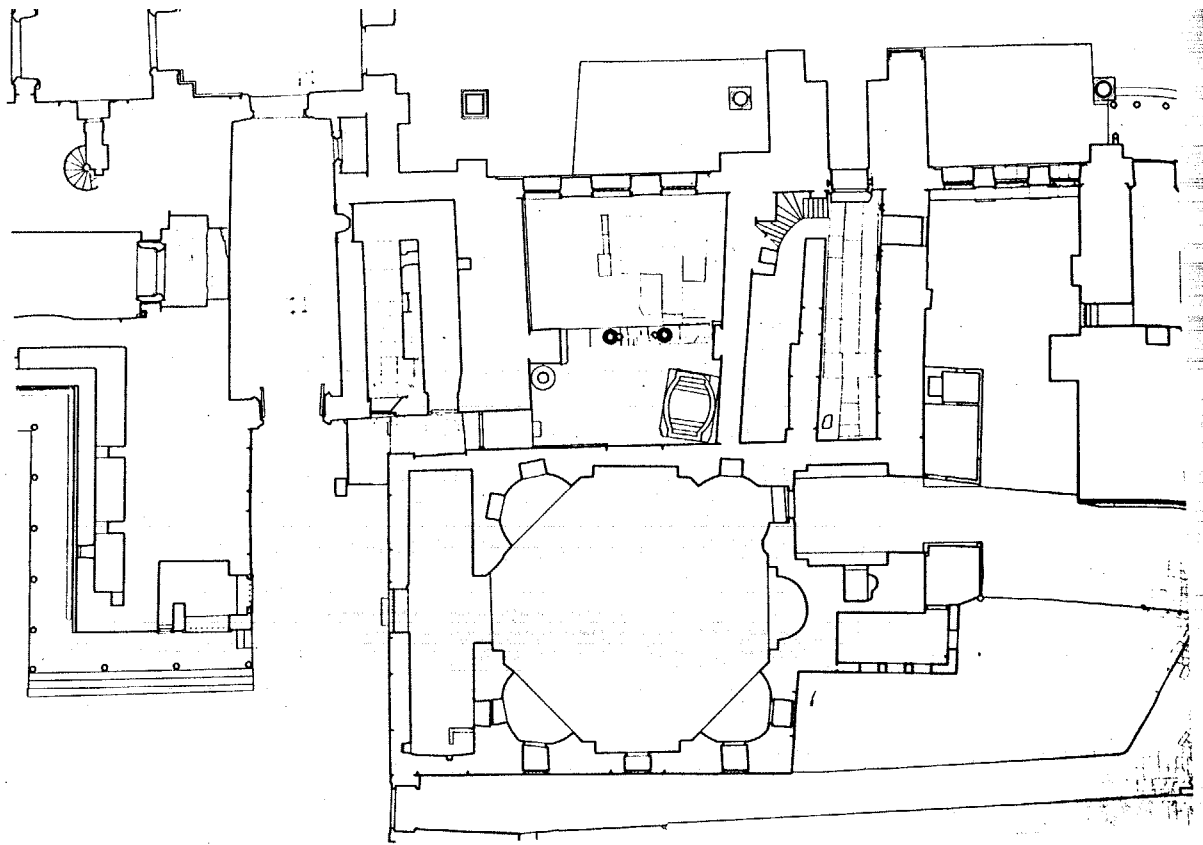


図3-30：ソフィア聖堂・洗礼堂現状平面図 (by Van Nice)

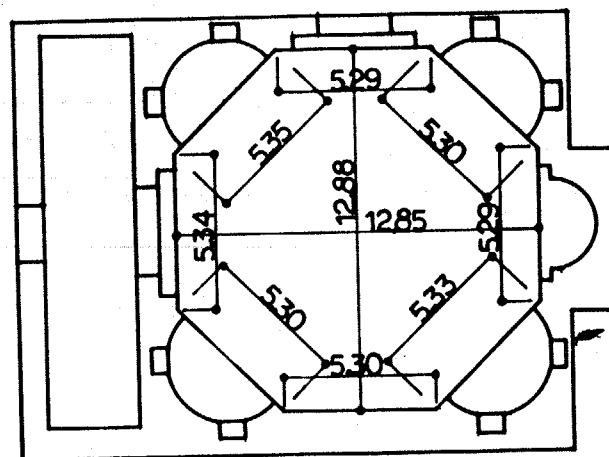
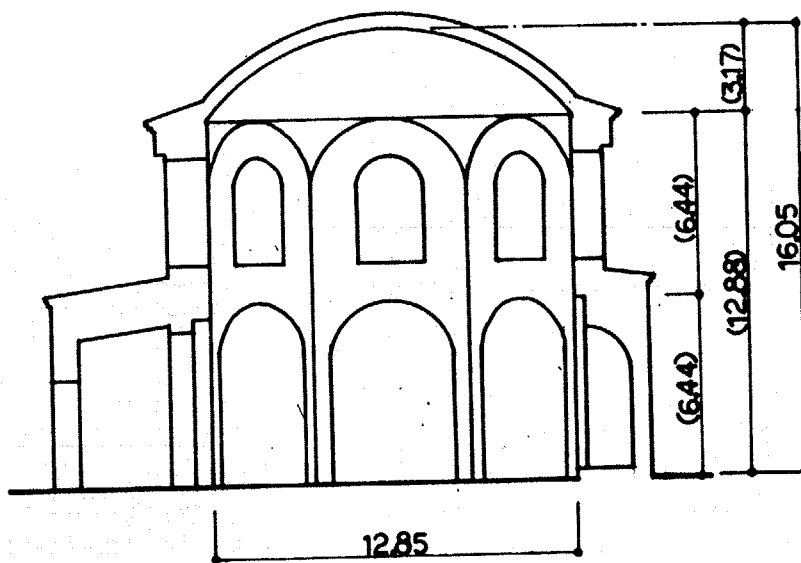


図3-31.32：ソフィア聖堂・洗礼堂復元平面図、断面図 (after Dirimtekin)

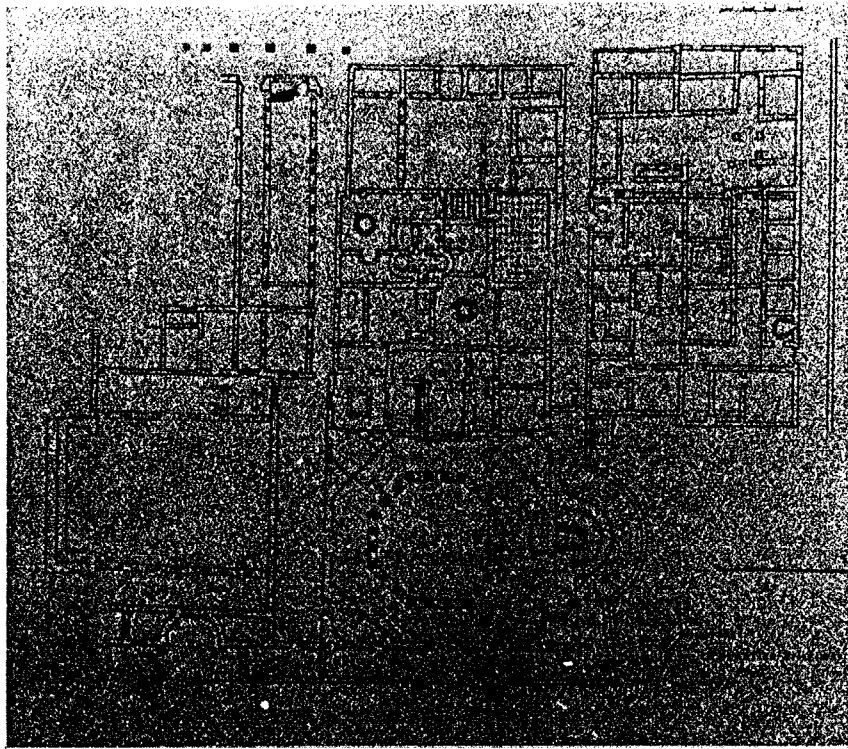


図4-1： フィリピの教会堂D (by D. Pallas)

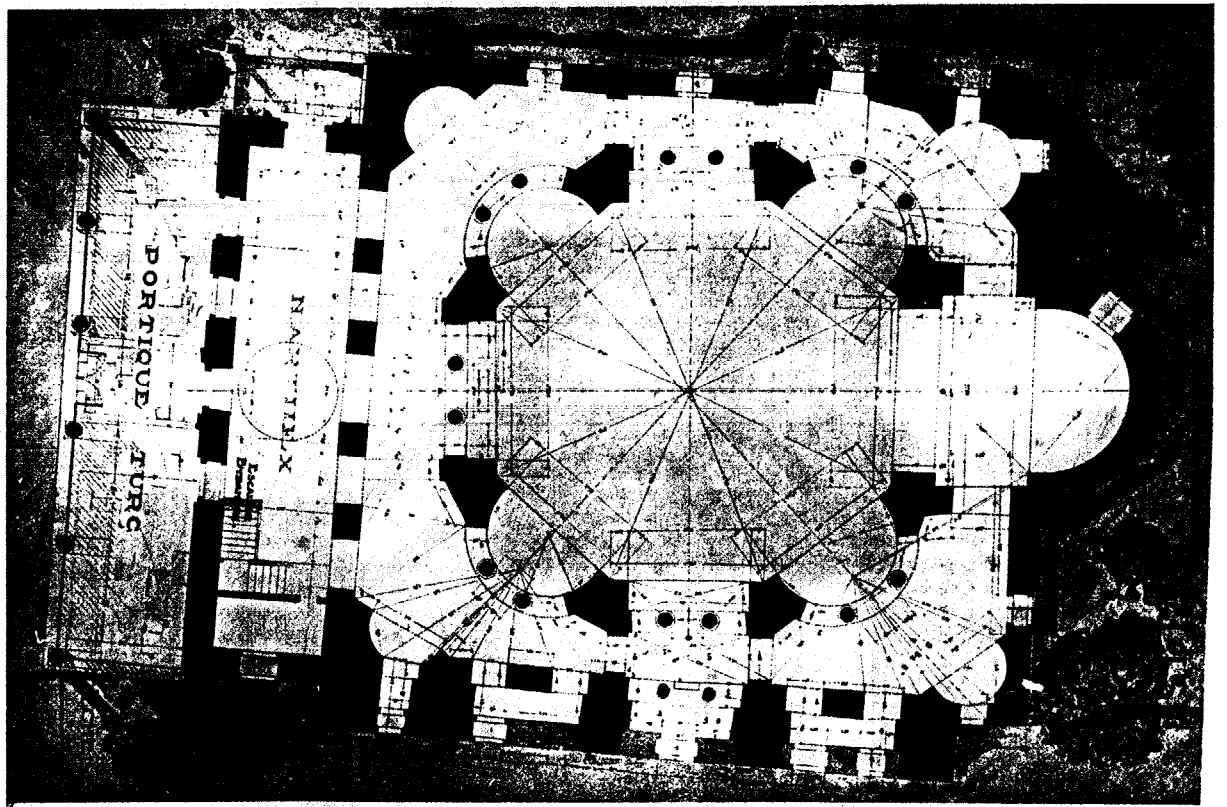


図4-2： セルギオス・バックス教会堂1階平面図 (by Ebersolt)

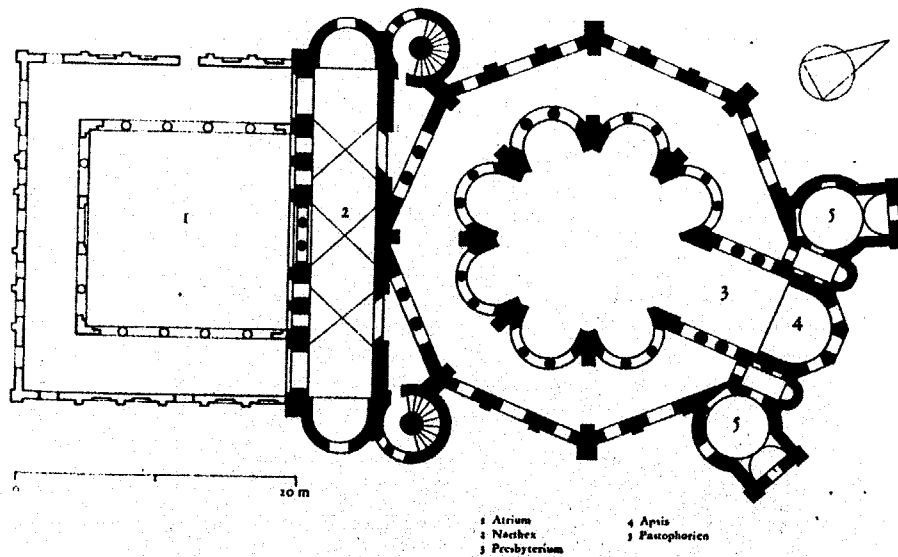


図4-3： サン・ヴィターレ聖堂1階平面図 (after C. Mango)

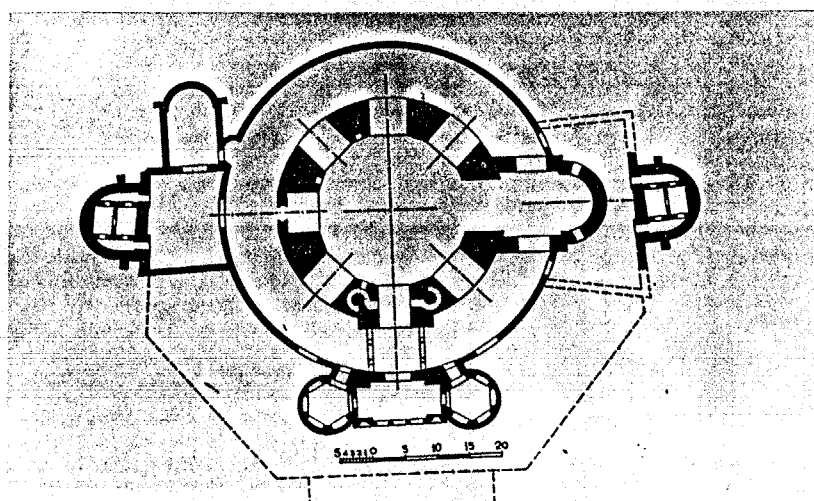


図4-4： テサロニキのロトンダ・教会堂時期平面図 (after Pazara)

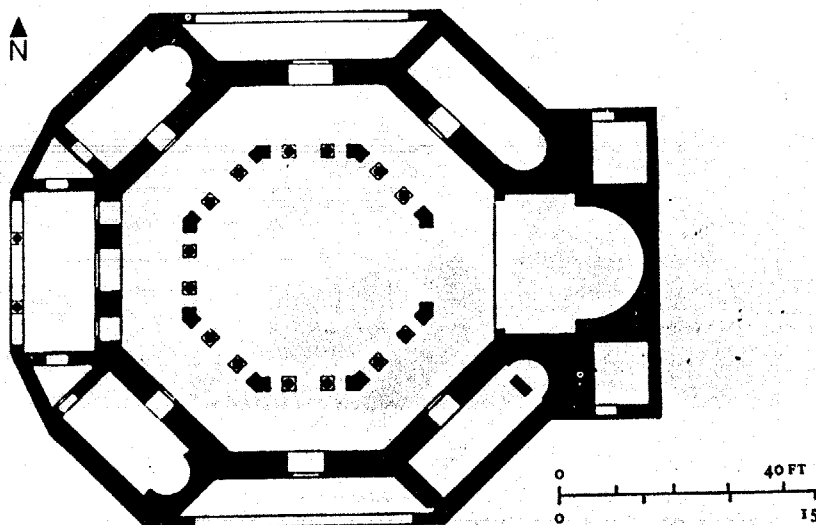


図4-5： ガリチン山のテオトコス教会堂1階平面図 (after Krautheimer)

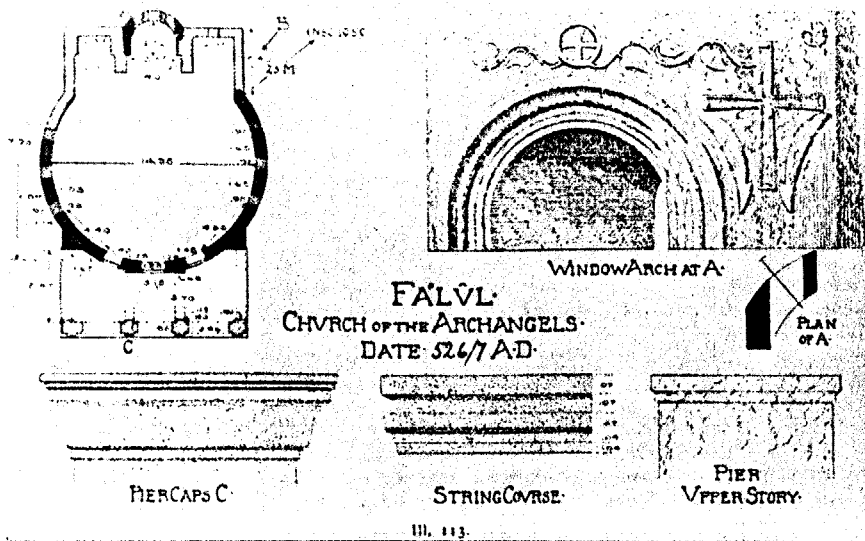


図4-6：ファルールの集堂1階平面図 (by Butler)

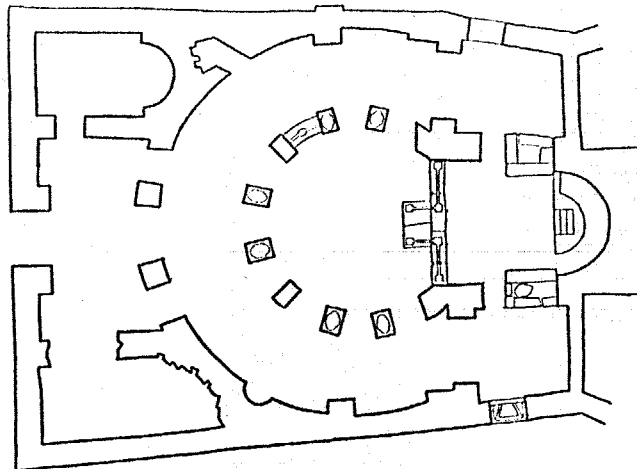


図4-7：コンジューの教会堂1階平面図 (by Hoddinott)

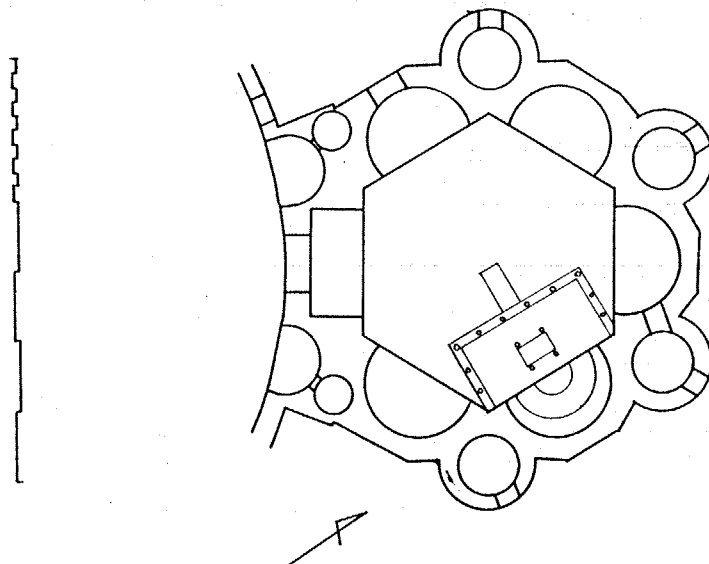


図4-8：エウフェミア教会堂平面図 (by Belting)

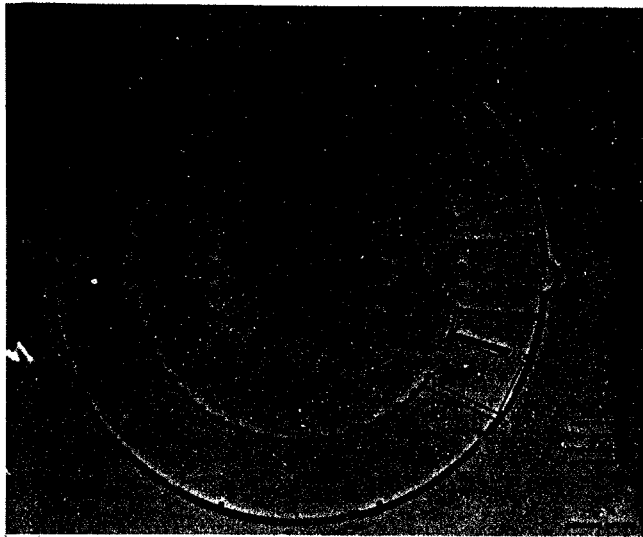


図4-9：ステファノ聖堂現状平面図 (after Krautheimer)

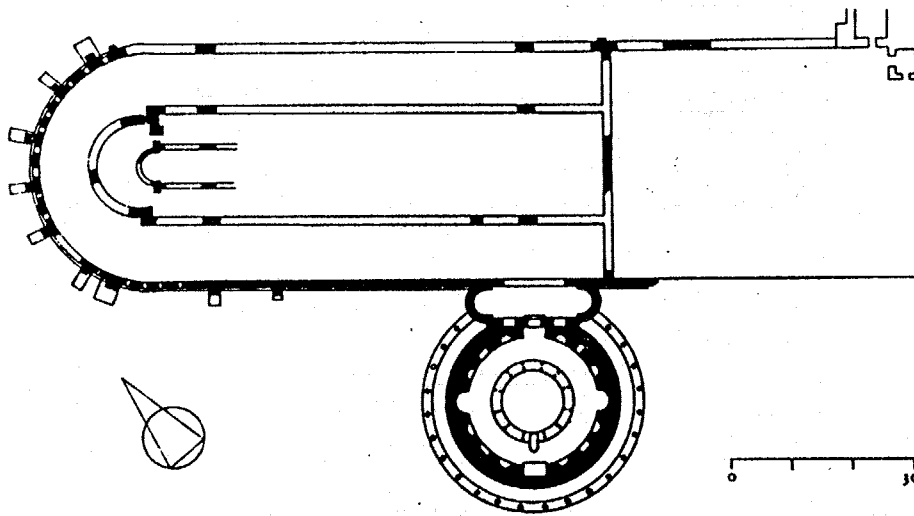


図4-10：サンタ・コスタンザ聖堂全体平面図 (after Effenberger)

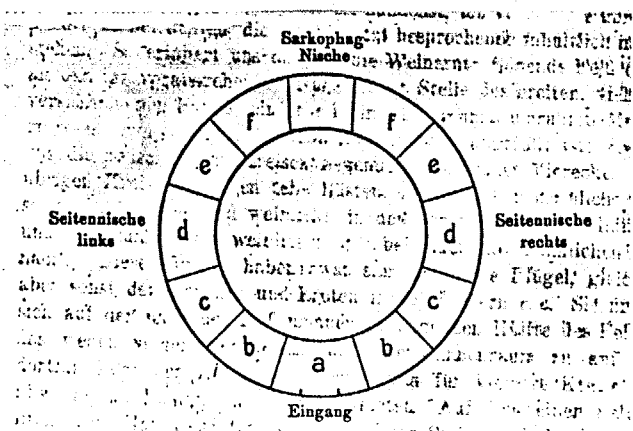


図4-11：サンタ・コスタンザ聖堂ヴォールトモザイクの図柄対応概念図

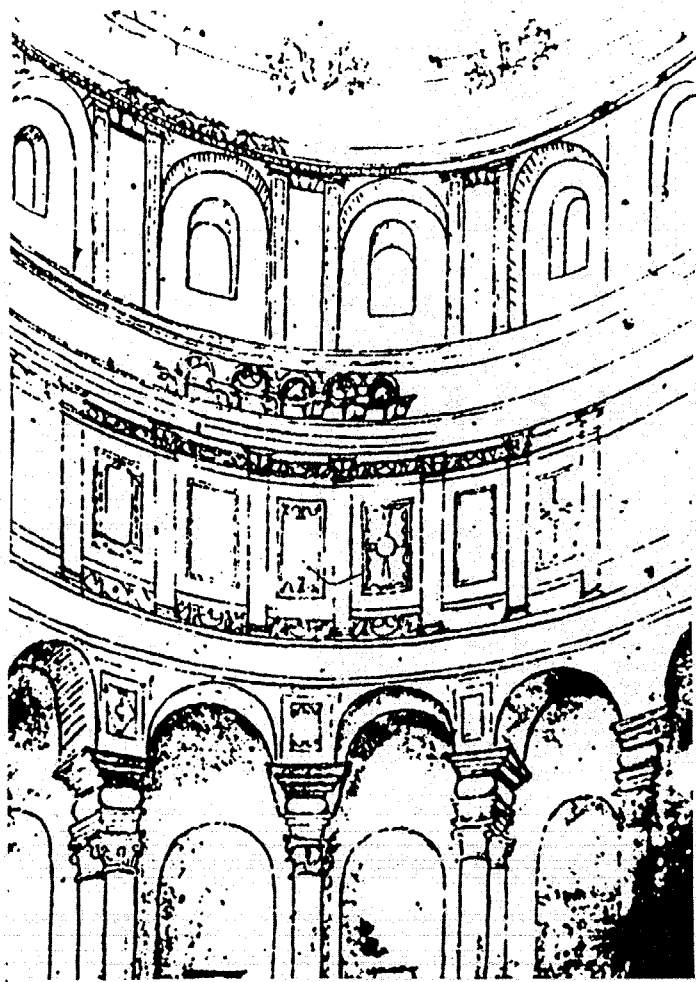
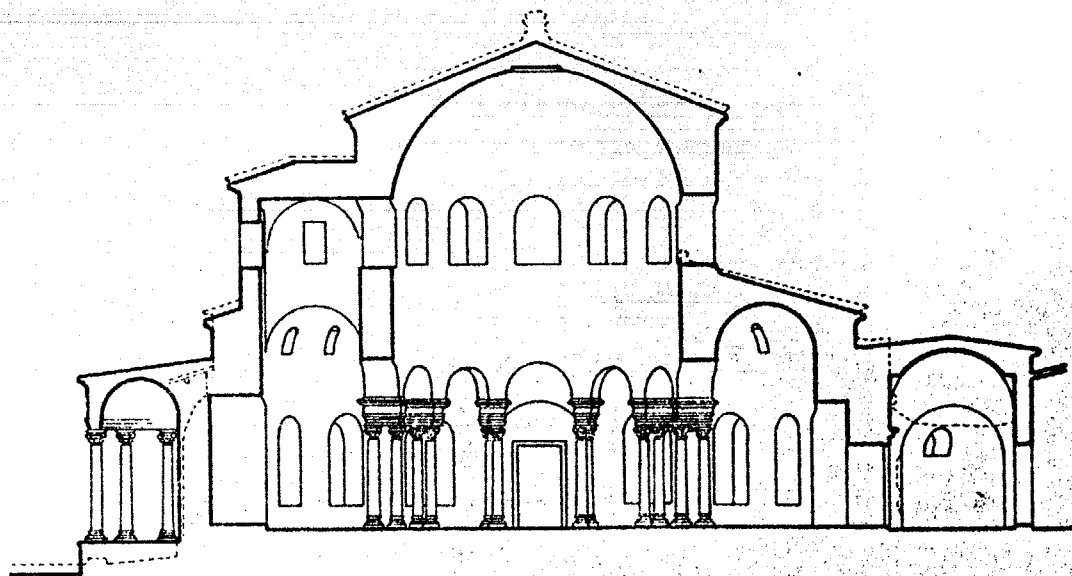


図4-12：サンタ・コスタンザ聖堂・15世紀の内部スケッチ (after Frutaz)



Rom. Mausoleum der Constantina (S. Costanza). Vor 314

130

図4-13：サンタ・コスタンザ聖堂・断面図 (after Effenberger)



図4-14：サンタ・コスタンザ聖堂・内部  
(by Effenberger)

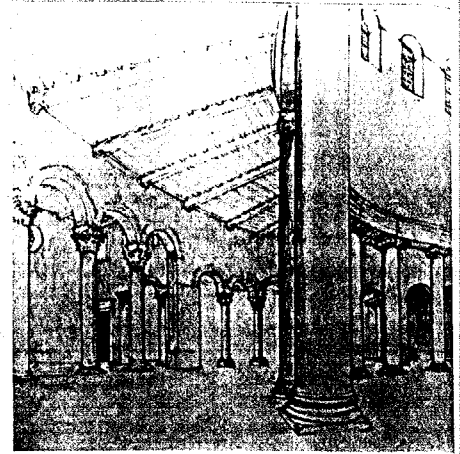


図4-15：ステファノ聖堂・  
内部推定復元スケッチ  
(after Krautheimer)

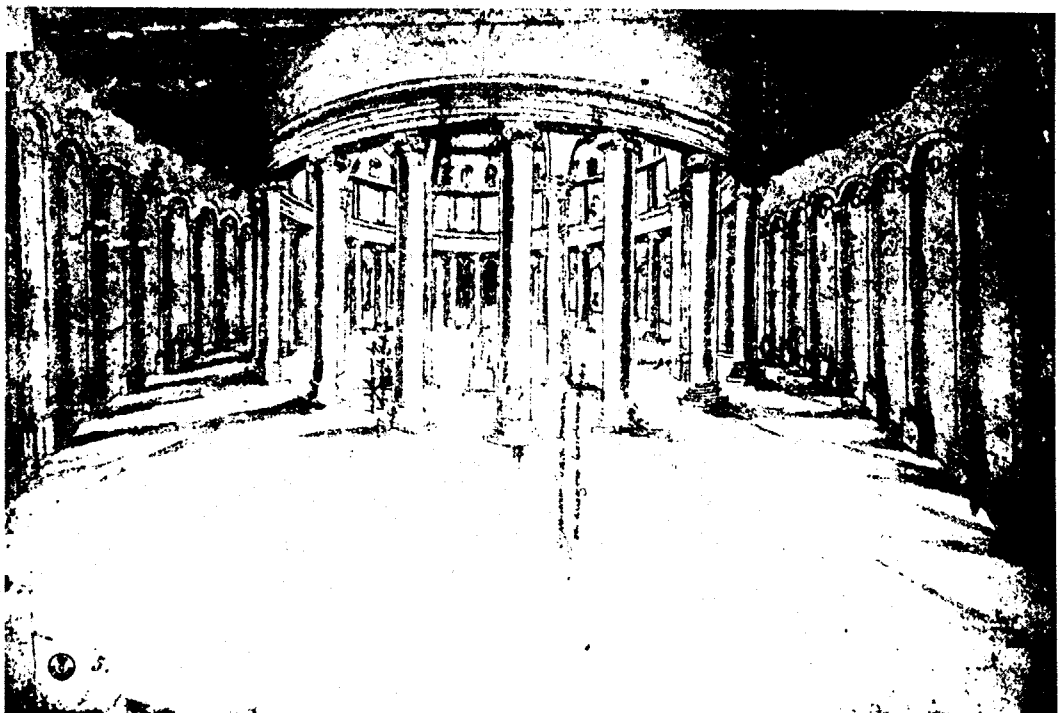


図4-17：ステファノ聖堂・15世紀の内部スケッチ (after Krautheimer)

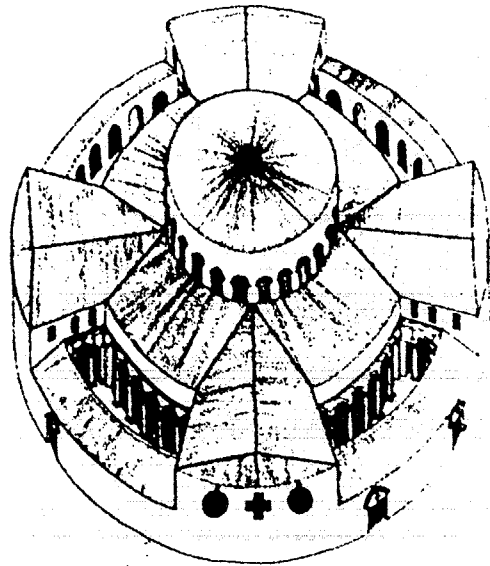


図4-18：ステファノ聖堂・復元案 (after Krautheimer)

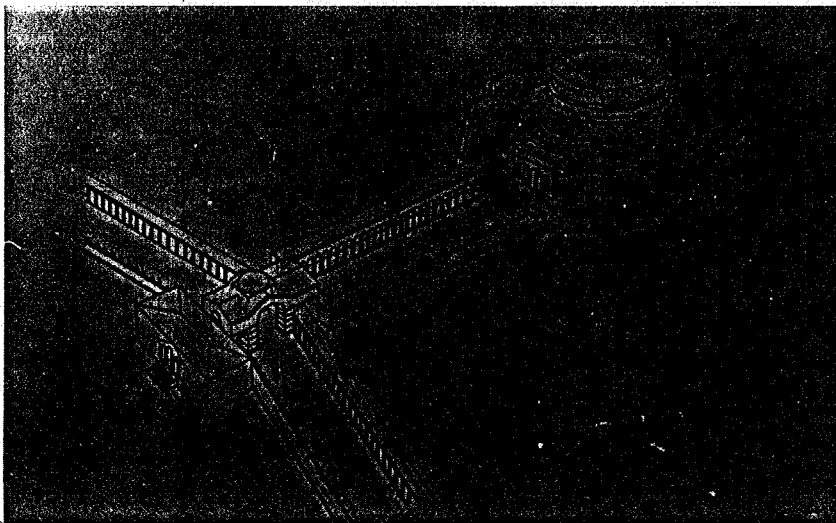


図4-19：テサロニキのロトンダの初期キリスト教期概要 (after Pazara)

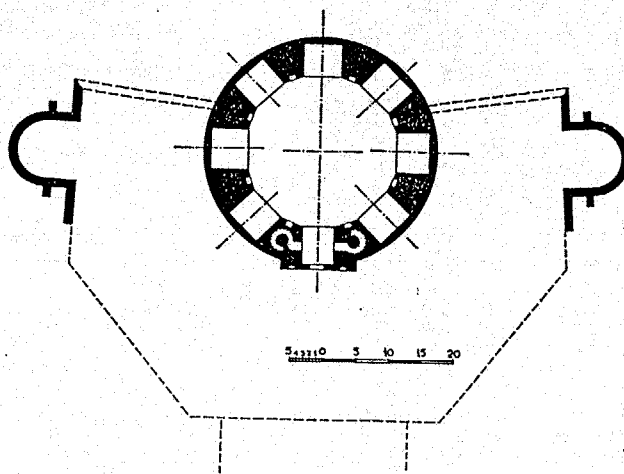


図4-21：ロトンダ・ガレリウス帝時代の平面図 (after Pazara)

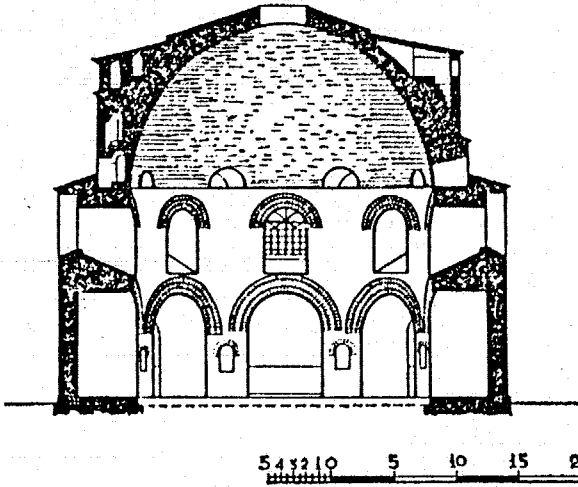


図4-22：ロトンダ・ガレリウス帝時代の断面図 (after Pazara)

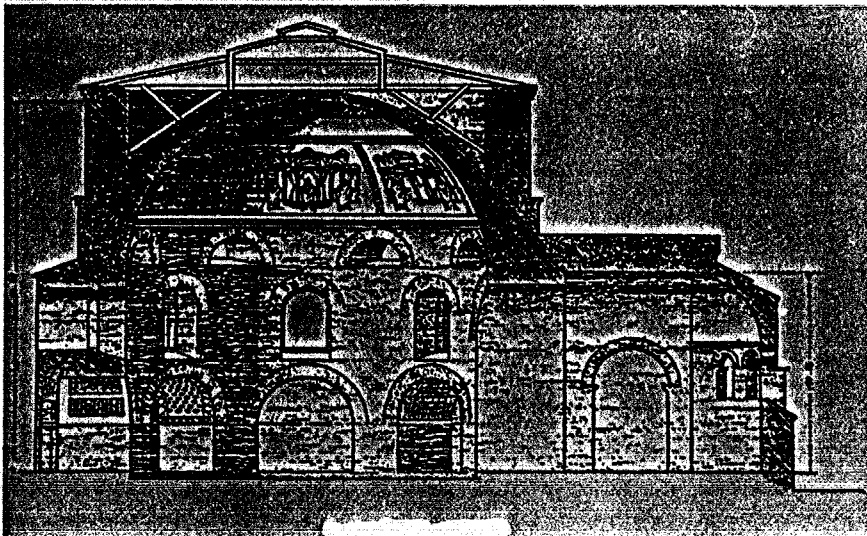


図4-23：ロトンダ・教会堂時代の断面図 (after Pazara)

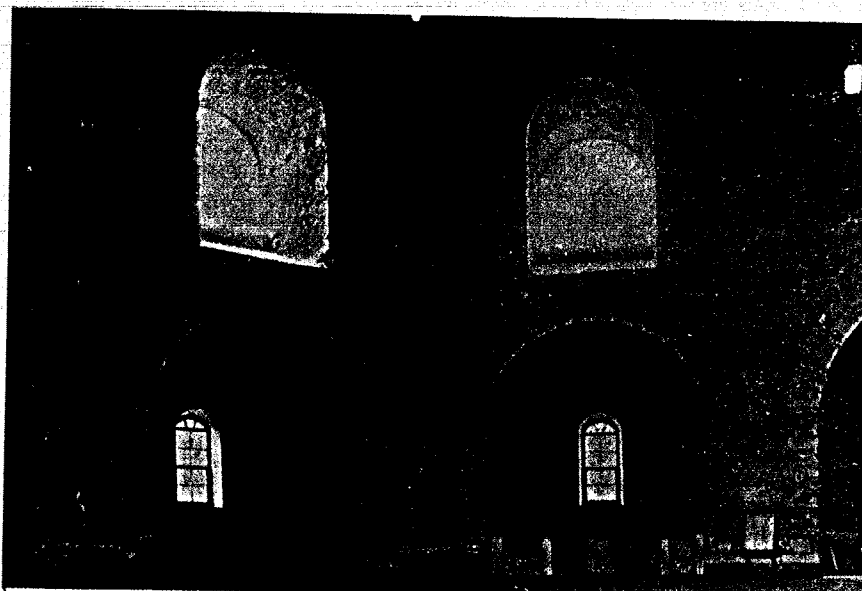


図4-24：ロトンダ・内部 (by C. Mango)

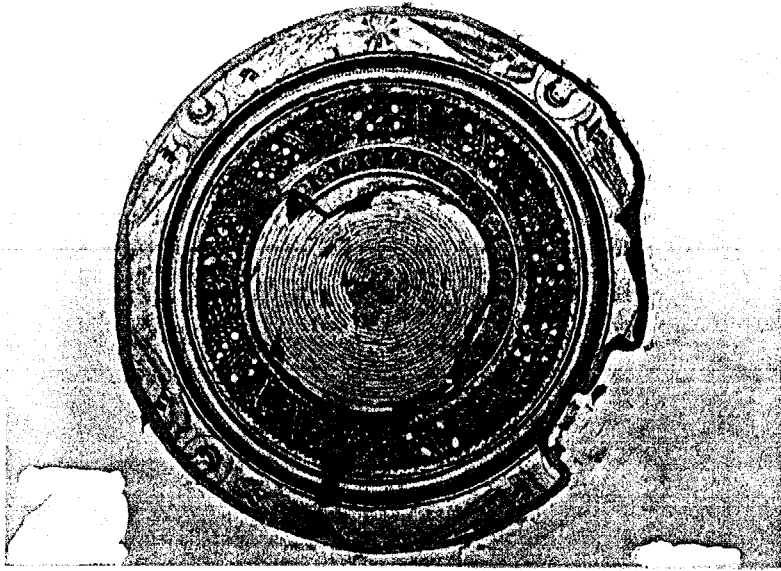


図4-25：ロンドンダ・ドーム概要 (by E. Kitznger)

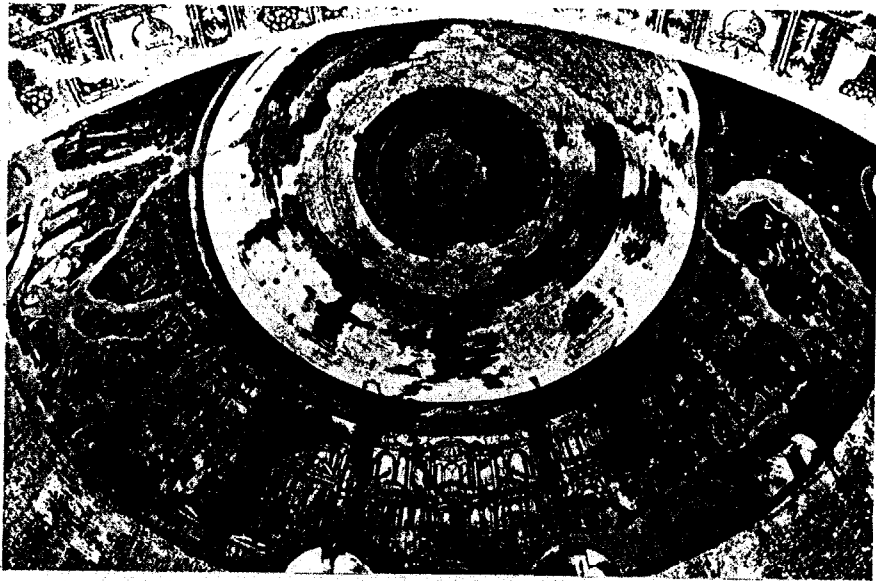


図4-25：ロンドンダ・ドーム概要 (by E. Kitznger)

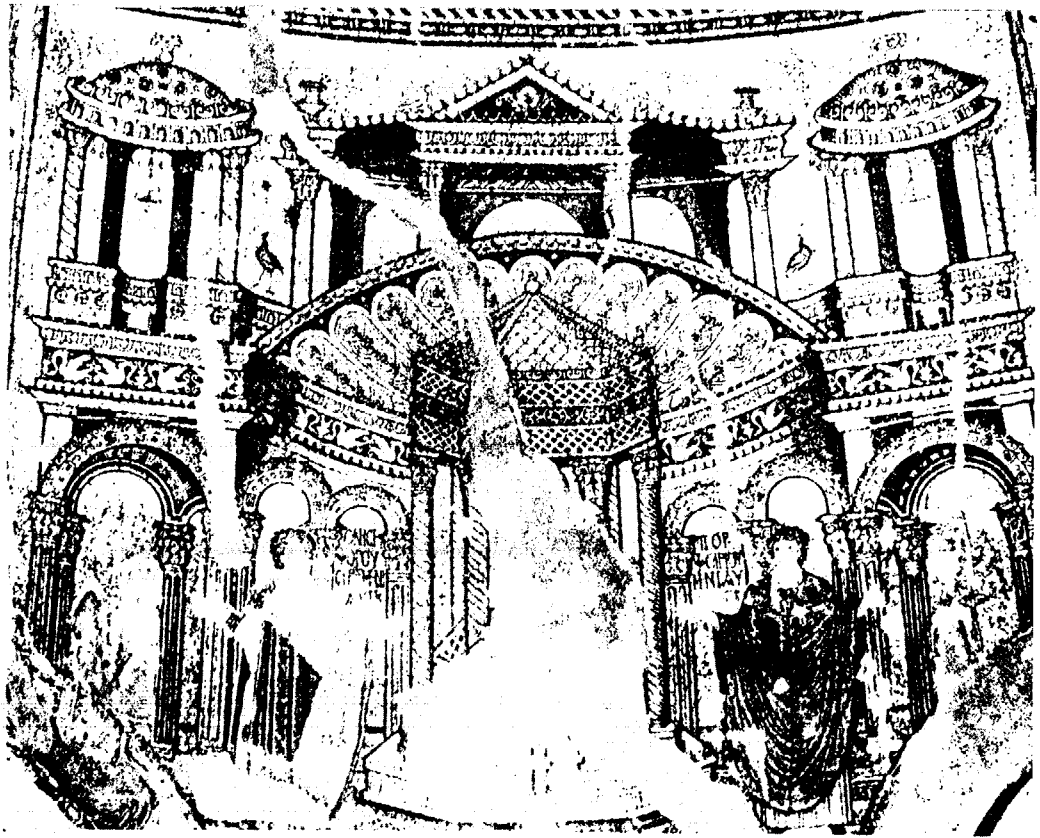


図4-26：ロトンダ・ドーム低層部モザイク詳細 (by E. Kitznger)

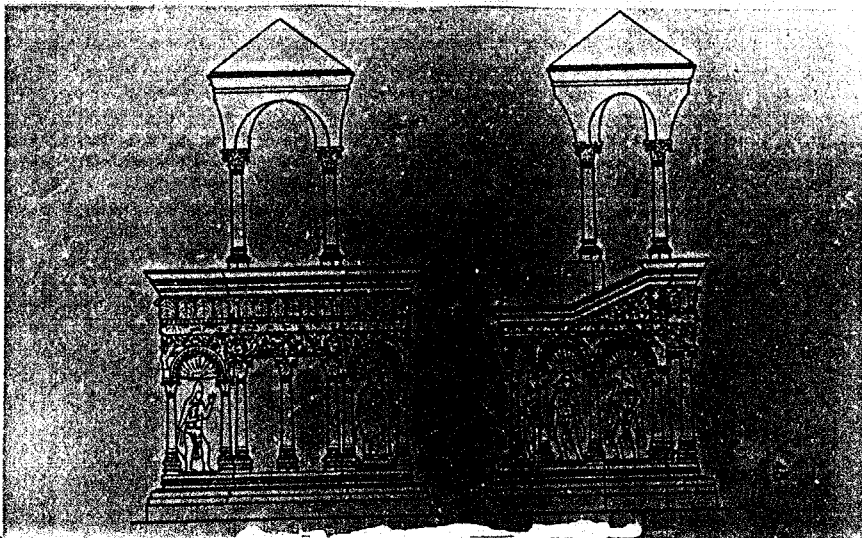


図4-27：ロトンダ・アンボ詳細 (by Hoddinott)

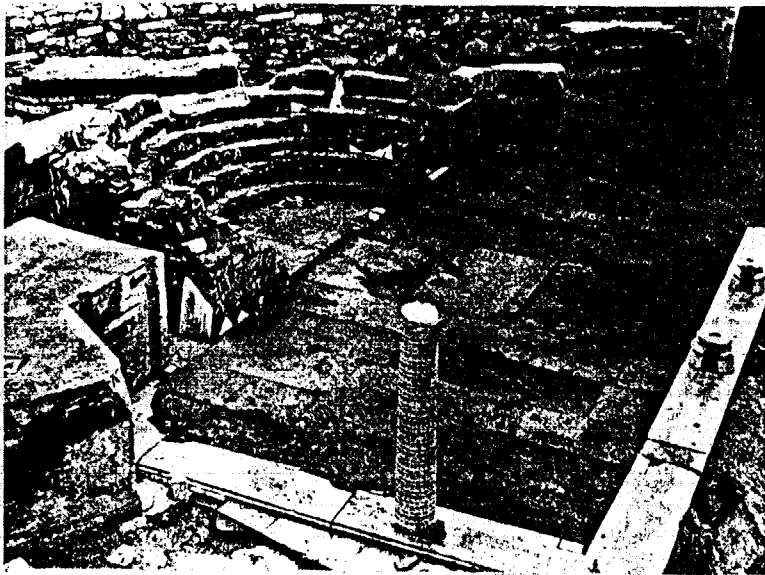


図4-28：エウフェミア教会堂・聖域部全景 (by Belting)

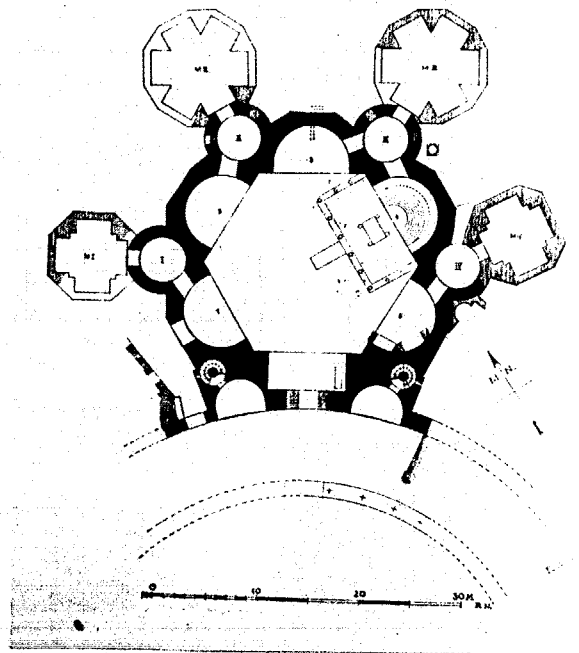


図4-30：エウフェミア教会堂・平面図  
(by Belting)

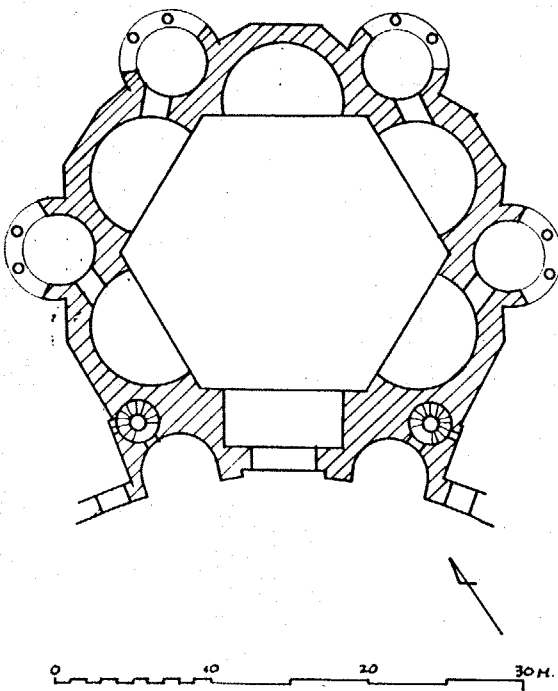


図4-29：アンティオクスの私邸平面図  
(by Belting)

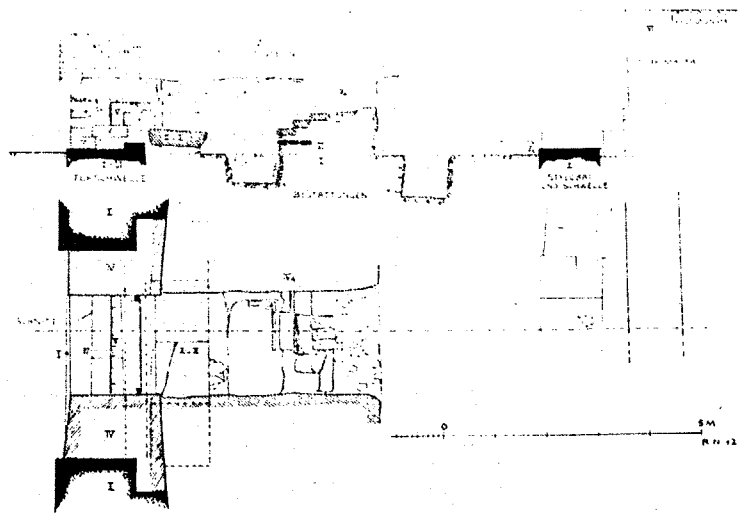


図4-31：エウフェミア教会堂・入口部分発掘詳細  
(by Belting)

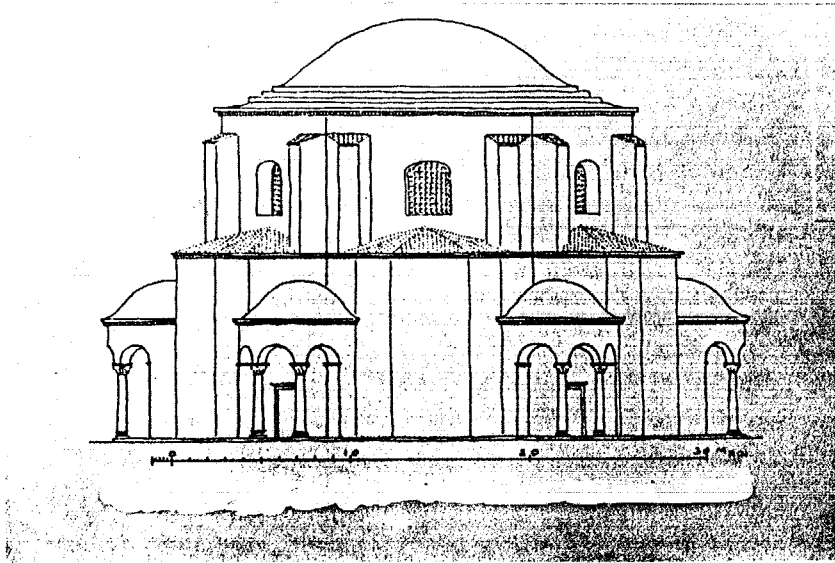


図4-32：アンティオクス私邸・外部復元図 (by Belting)

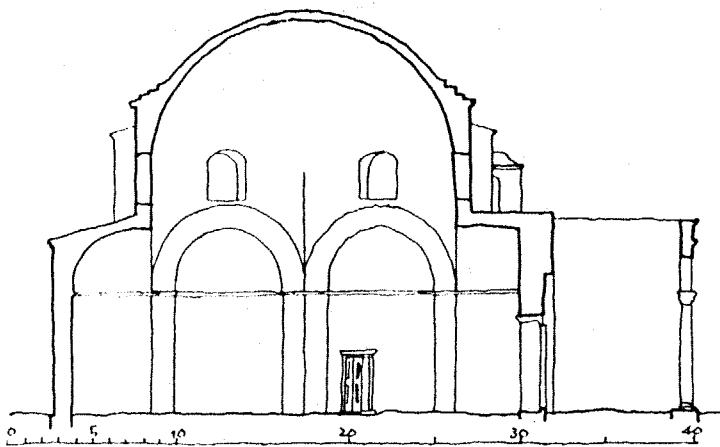


図4-33：エウフェミア教会堂・復元断面図 (by Belting)

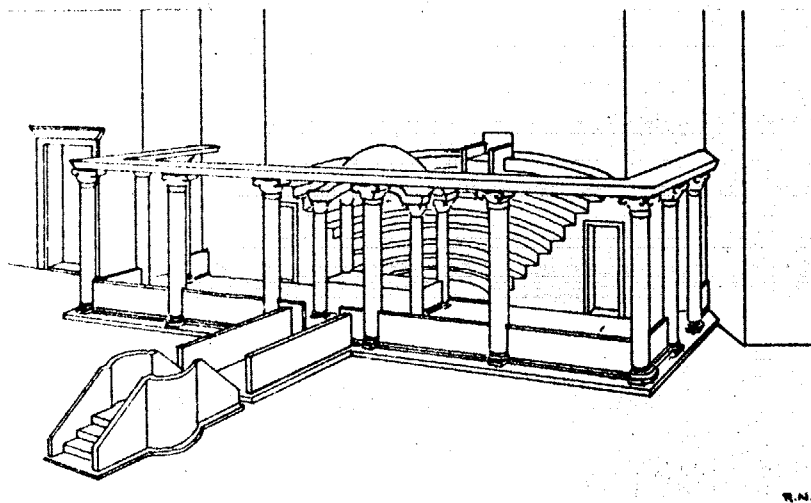


図4-34：エウフェミア教会堂・テンプロン復元図 (by Belting)

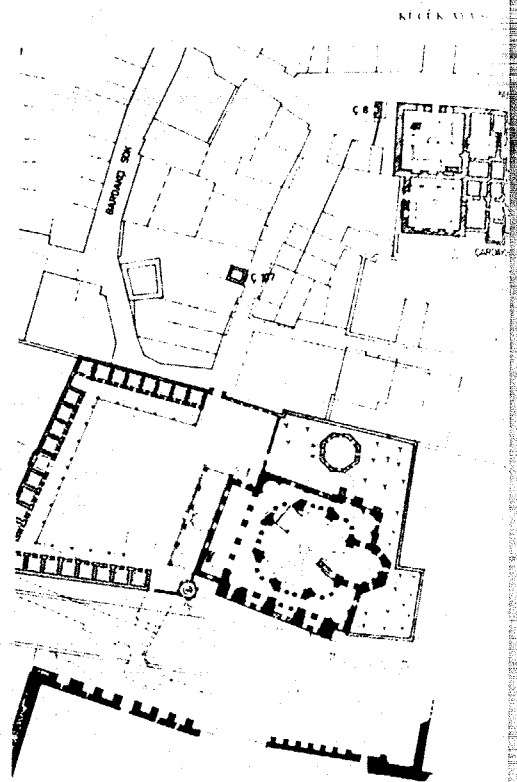


図4-35：セルギオス・バッコス教会堂  
現状周辺 (by Bildlexikon)

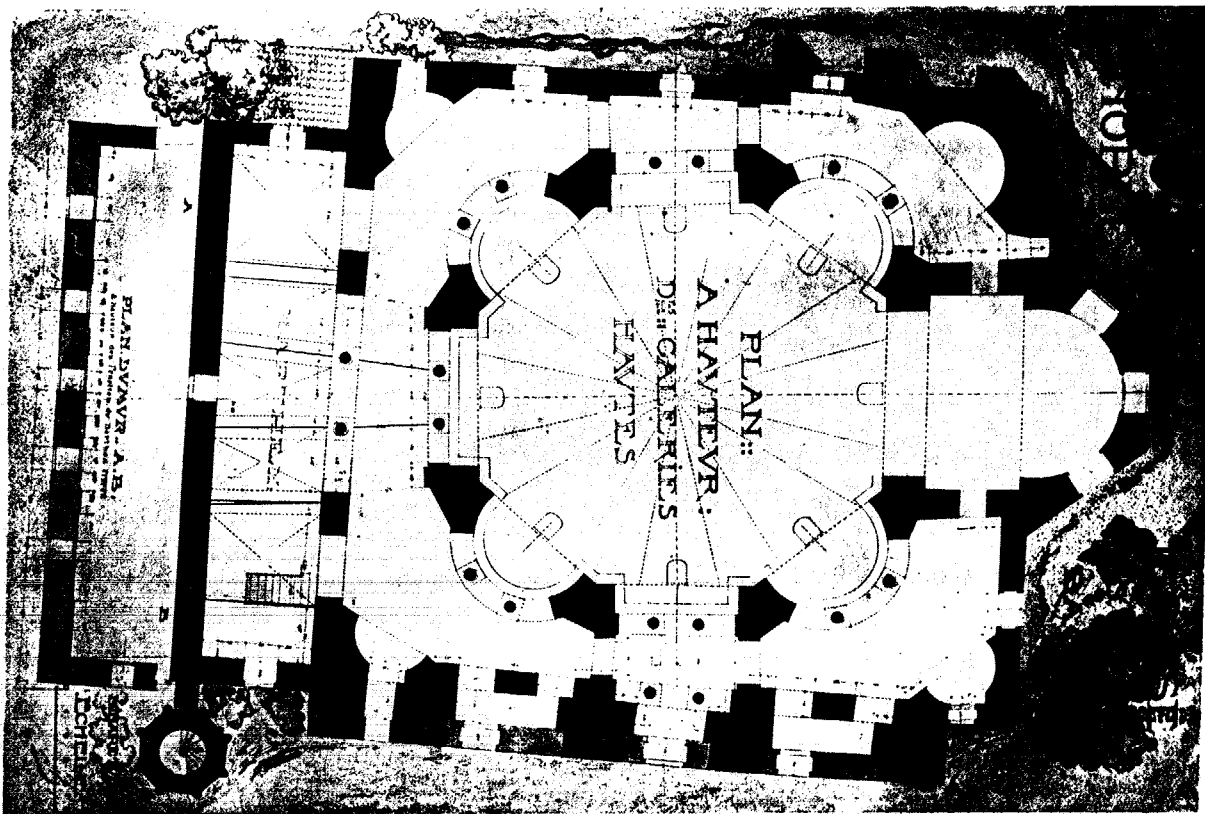


図4-36：セルギオス・バックス教会堂・2階平面図 (by Ebersolt)

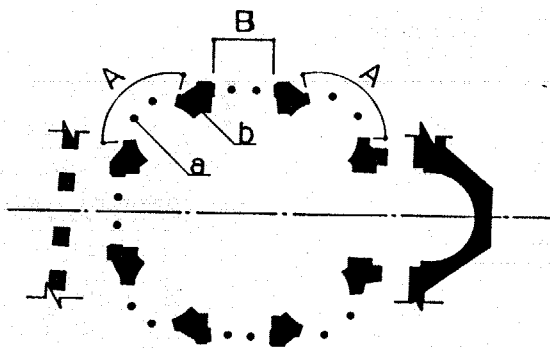


図4-36a：セルギオス・バックス教会堂の  
柱列のリズム

A	B	A	bema	A	B	A													
b	a	b	a	a	b	a	a	b	bema	b	a	a	b	a	a	b	a	a	b

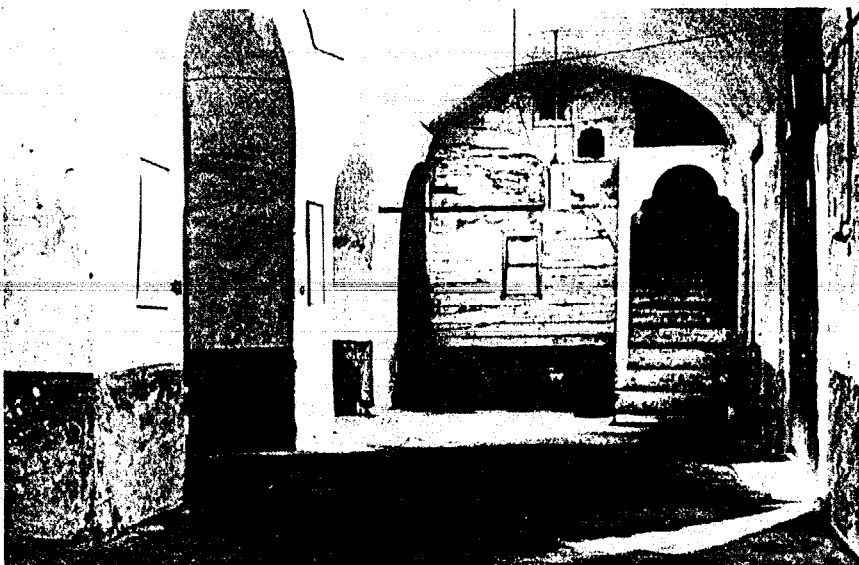


図4-37：セルギオス・バックス教会堂  
ナルテックス木製階段  
(by Mathews)

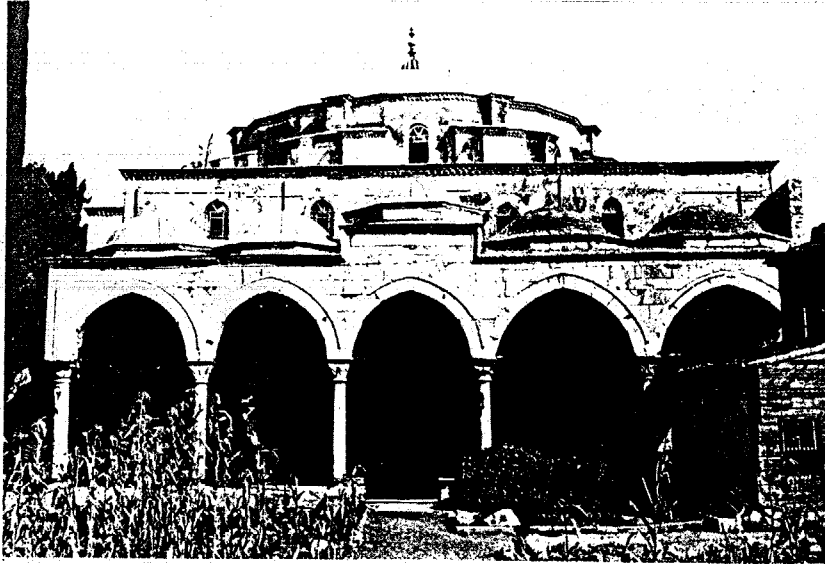
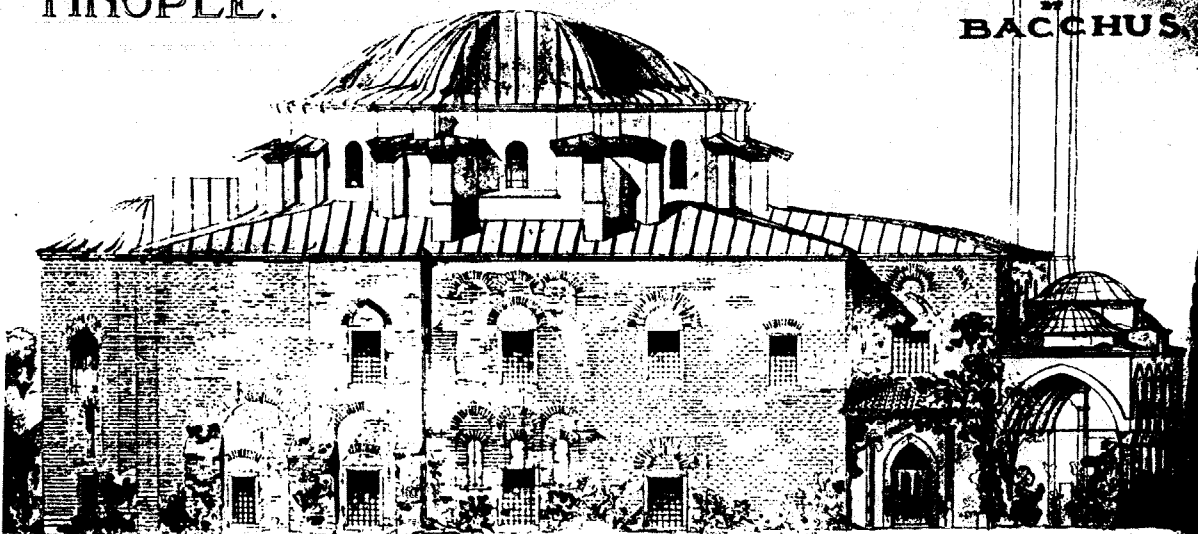


図4-38：セルギオス・バックス教会堂・外観 (by Mathews)

CONSTAN  
TINOPLE.

ECLISE  
S.S. SERGE  
BACCHUS.



0 1 2 3 4 5  
ECHELLE.  
002

FAÇADE .. LATÉRALE ..

図4-39：セルギオス・バックス教会堂・北面 (by Ebersolt)

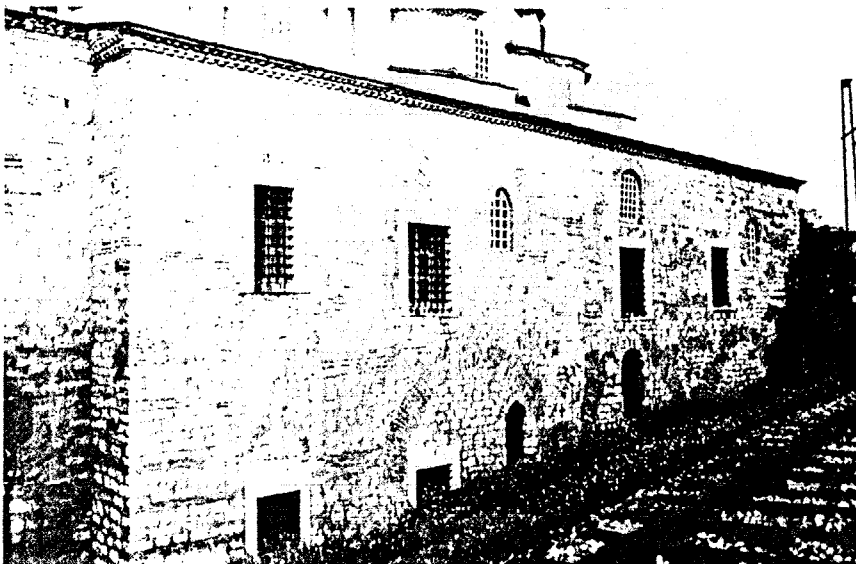


図4-40：セルギオス・バックス教会堂  
・南面 (by Mathews)



図4-41：セルギオス・バッコス教会堂・  
内部 (by Mathews)

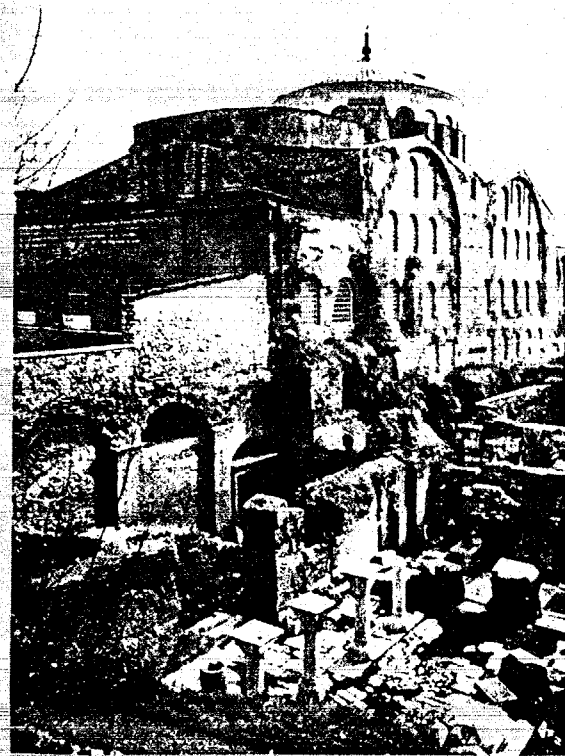


図4-43：エイレネ教会堂の南面 (by U. Peschlow)

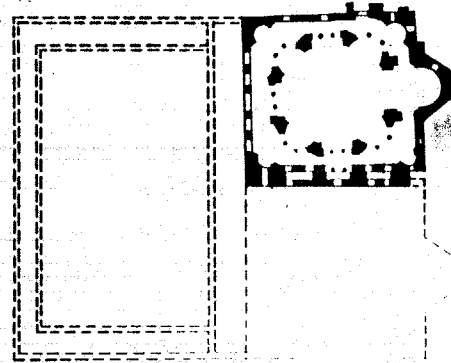


図4-42：セルギオス・バッコス教会堂と  
ベテルス・パウロス教会堂の  
配置概念図

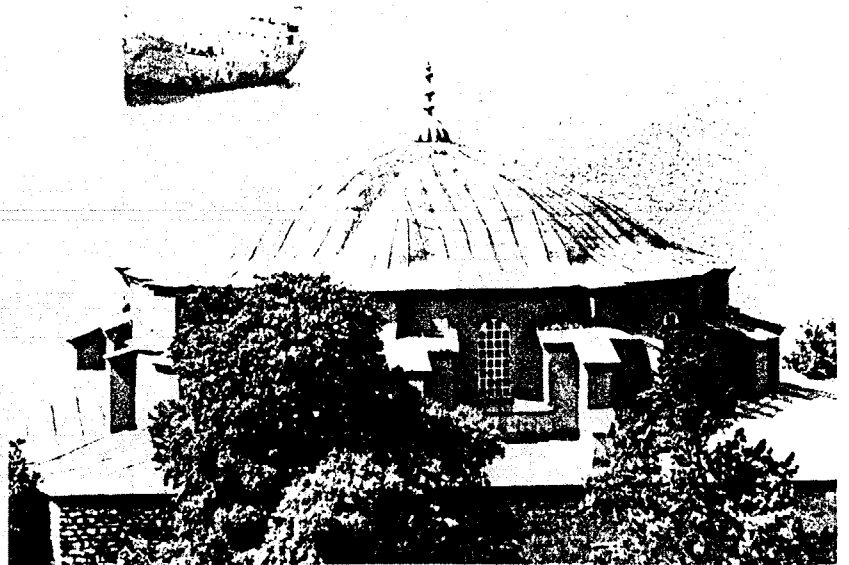


図4-44：セルギオス・バッコス教会堂・  
ドーム外観 (by Mathews)

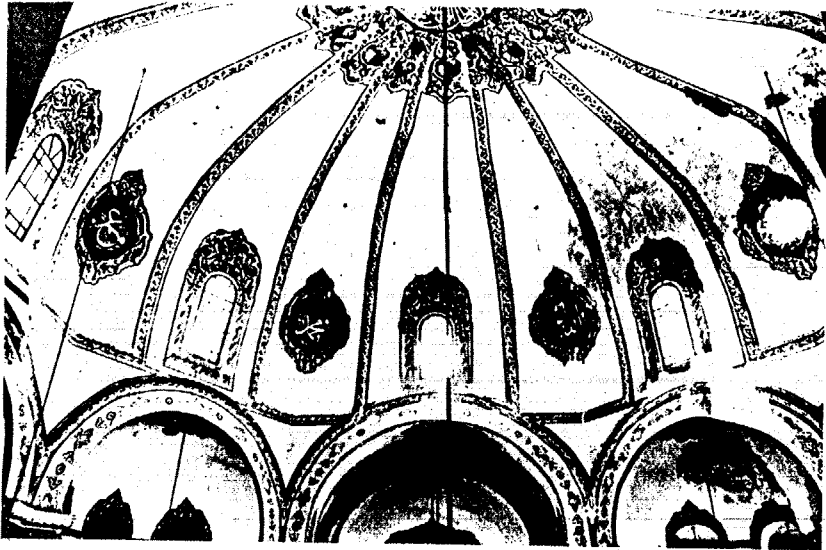


図4-45：セルギオス・バックス教会堂・  
ドーム見上げ (by Mathews)

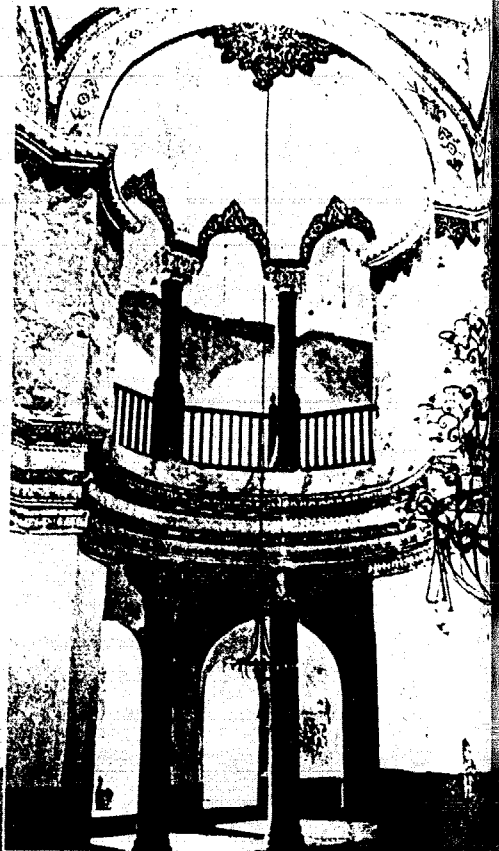


図4-46：セルギオス・バックス教会  
エクセドラ (by Mathews)

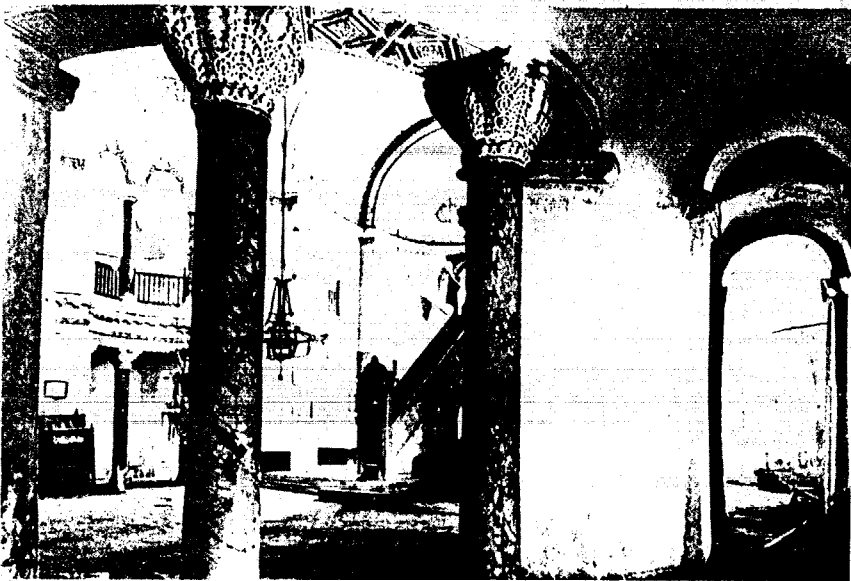


図4-47：セルギオス・バックス教会堂・周歩廊 (by Mathews)

CONSTAN  
TINOPLE.

ECLISE  
DES  
S.S. SERGE  
ET  
BACCHUS.

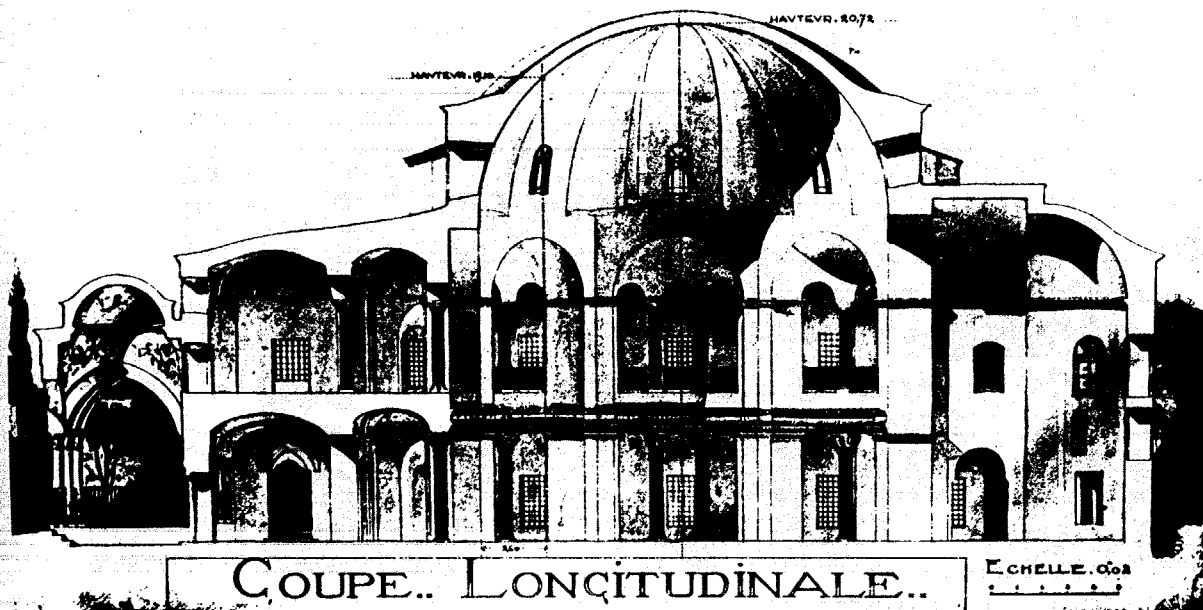


図4-48：セルギオス・バックス教会堂・断面図 (by Ebersolt)

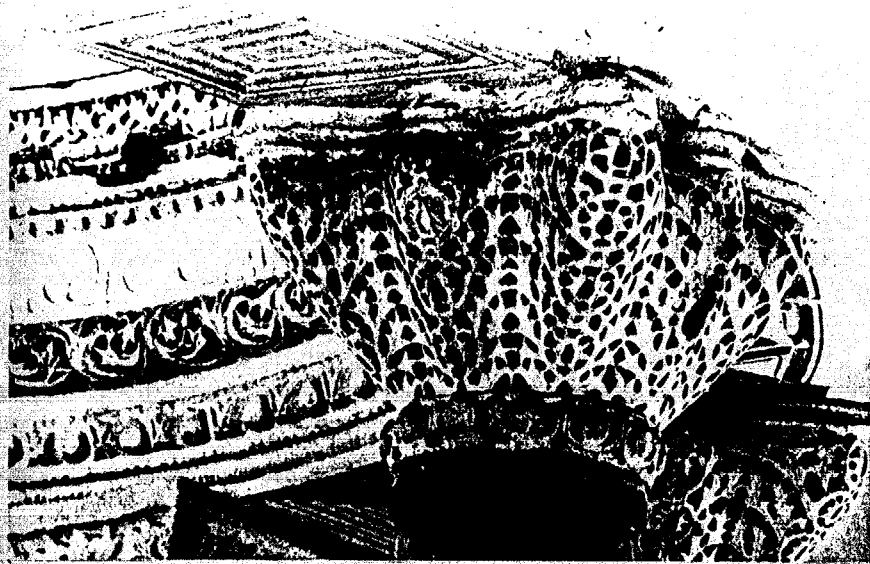
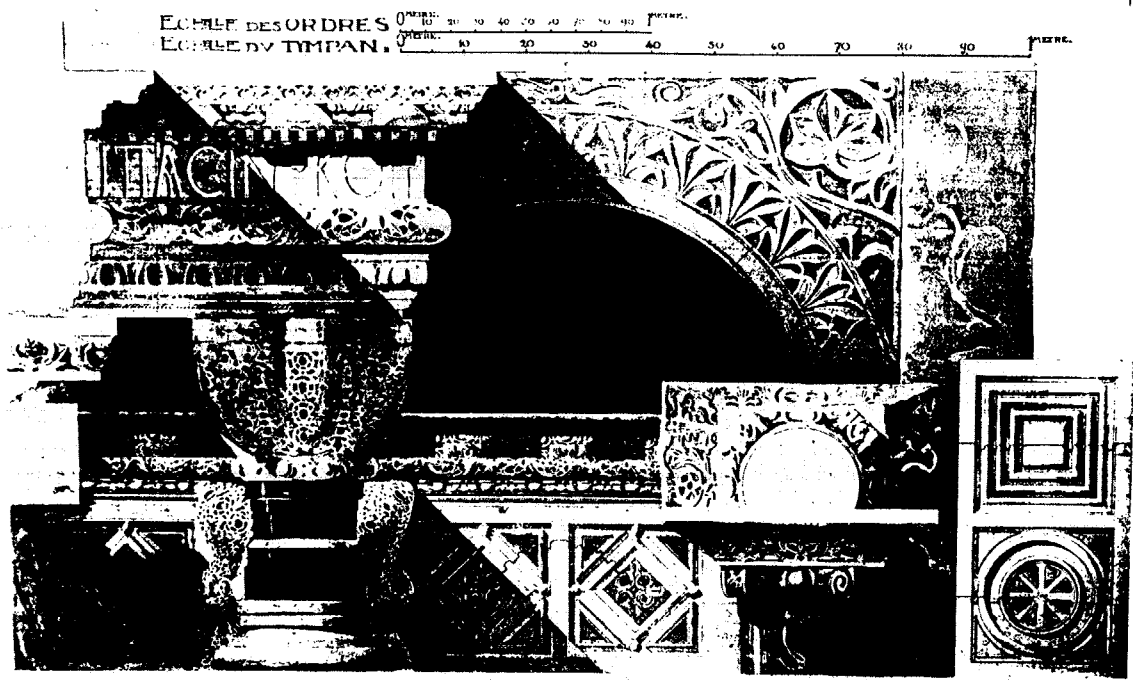


図4-49：セルギオス・バックス教会堂・  
柱頭 (A) (by Mathews)



図4-50：セルギオス・バックス教会堂・  
柱頭 (B) (by Mathews)



CONSTANTINOPLE. Eglise. SS. SERGIUS BACCHUS

図4-53：セルギオス・バックス教会堂・1階エンタブラチュア (by Ebersolt)

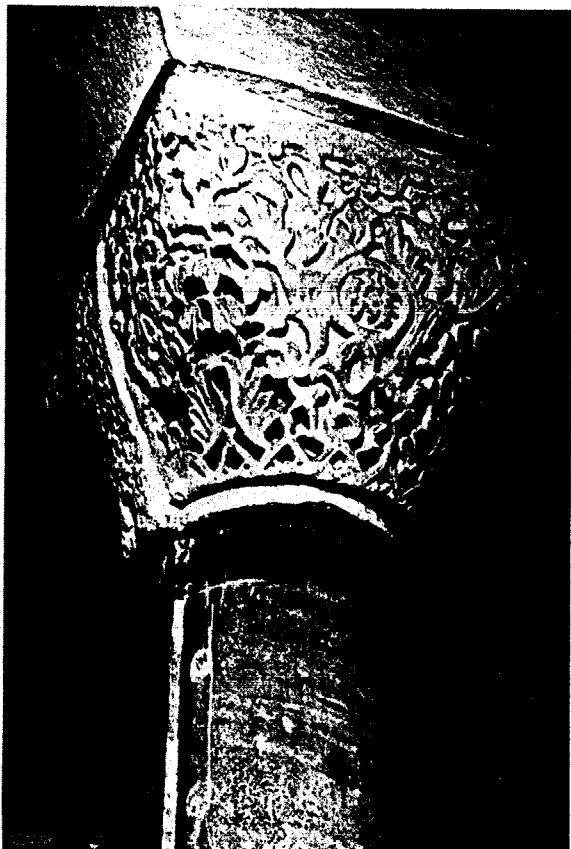


図4-51：セルギオス・バックス教会堂・  
柱頭 (C) (by Mathews)



図4-54：エイレネ教会堂・内観 (by Peschlow)

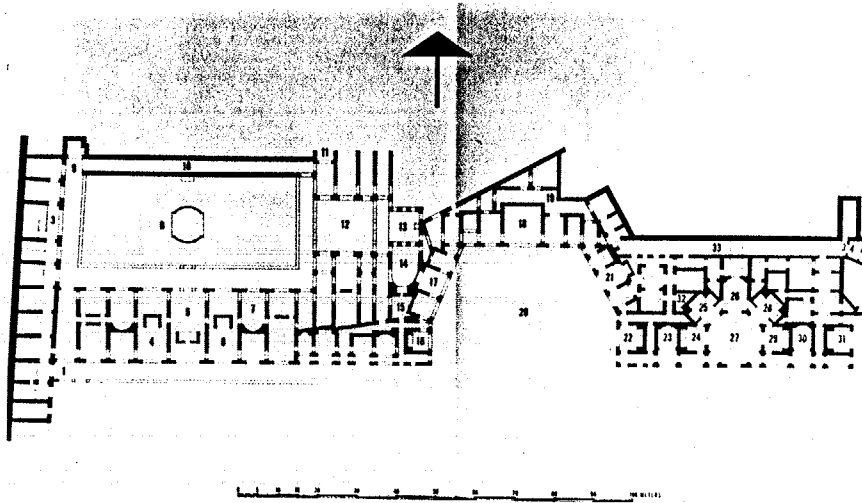


図5-1： ドムス・アウレア (after MacDonald)

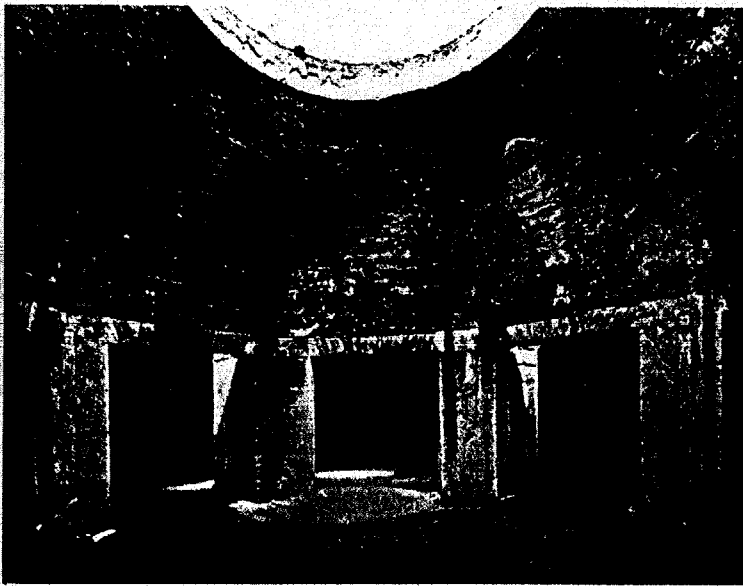


図5-2： ドムス・アウレア、集中形式の部屋  
(after MacDonald)

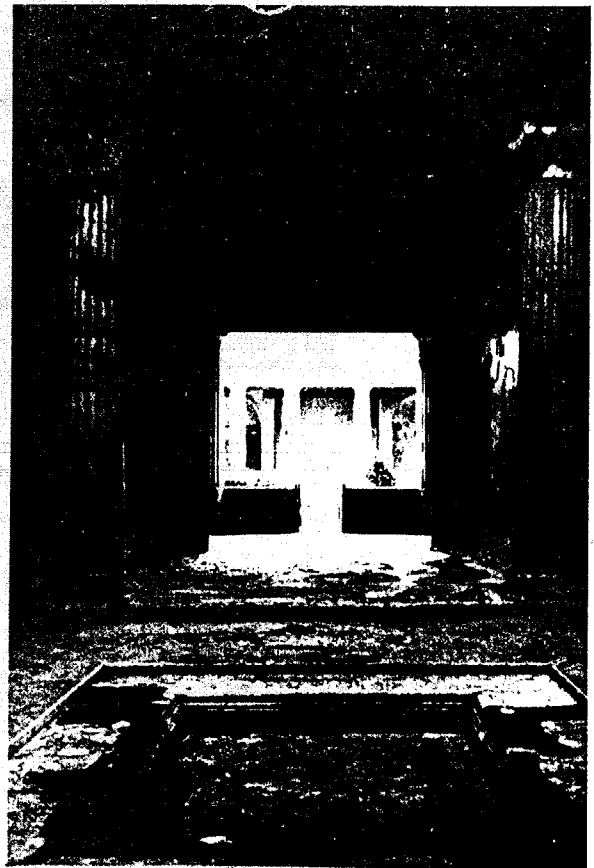


図5-3： ポンペイの住宅アトリウム  
(by Ward-Perkins)

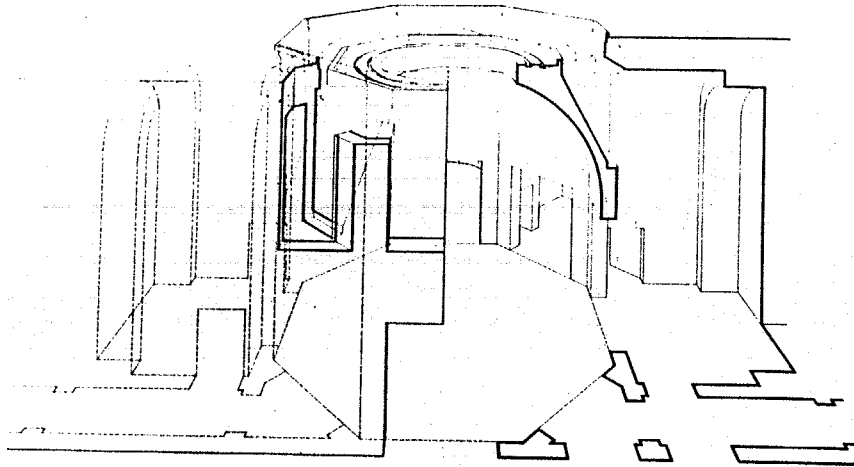


図5-4： ドムス・アウレア、集中形式の部屋の概要 (after MacDonald)

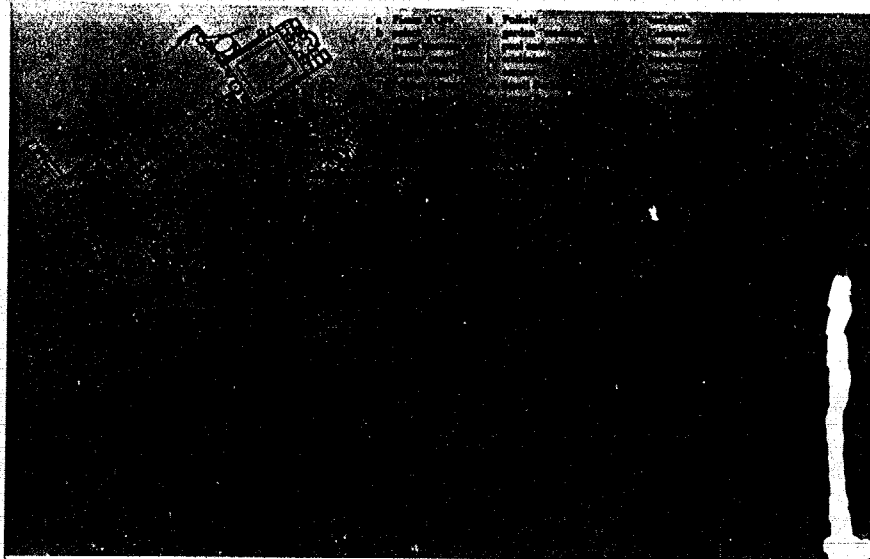


図5-5： ヴァル・アドリアーナ全体図 (by Ward-Perkins)

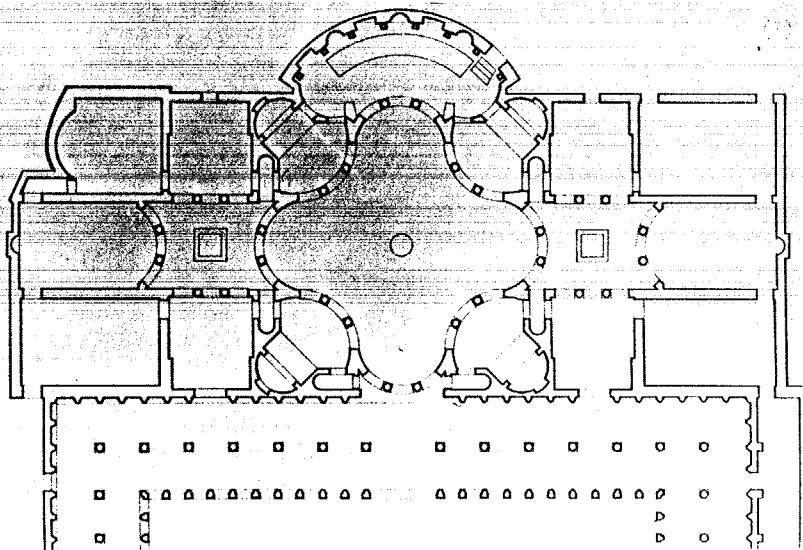


図5-6： ピオプッパ・サビーナ平面図 (from 『ヴィッラ・アドリアーナ』)

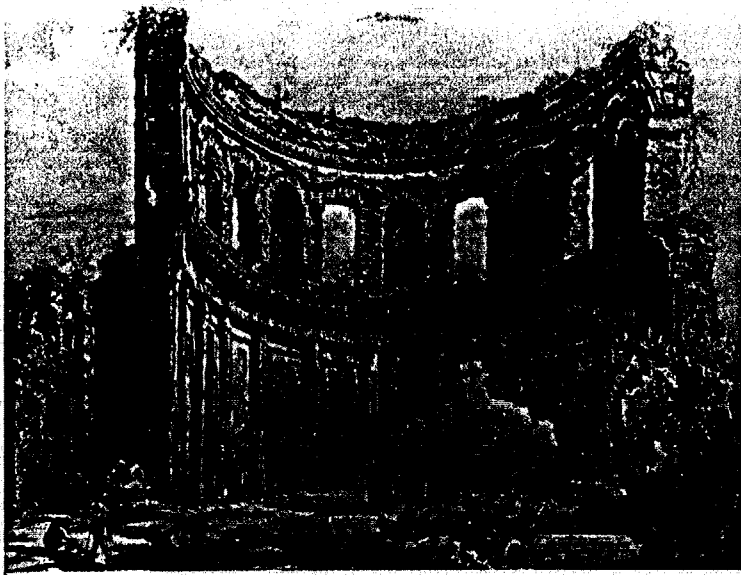


図5-7： アポロ神殿 (from 『ヴィッラ・アドリアーナ』)

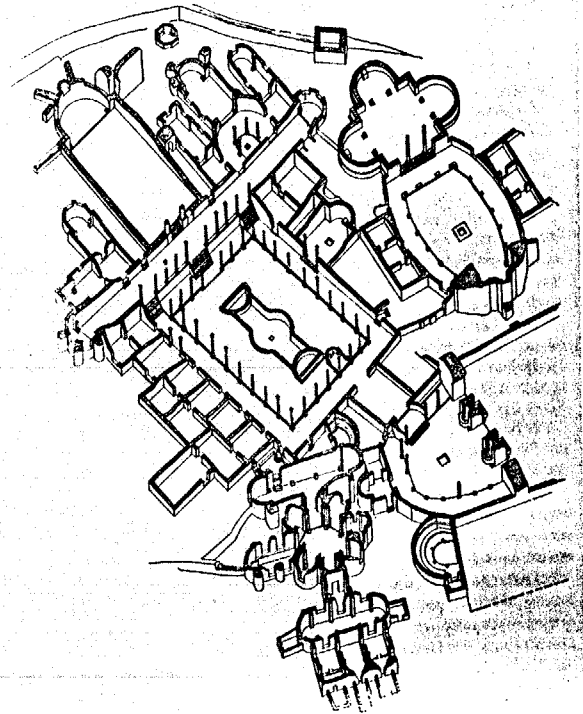


図5-8： ヒ・アツツァ・アルメーナ全体図  
(by H. Mielsch)

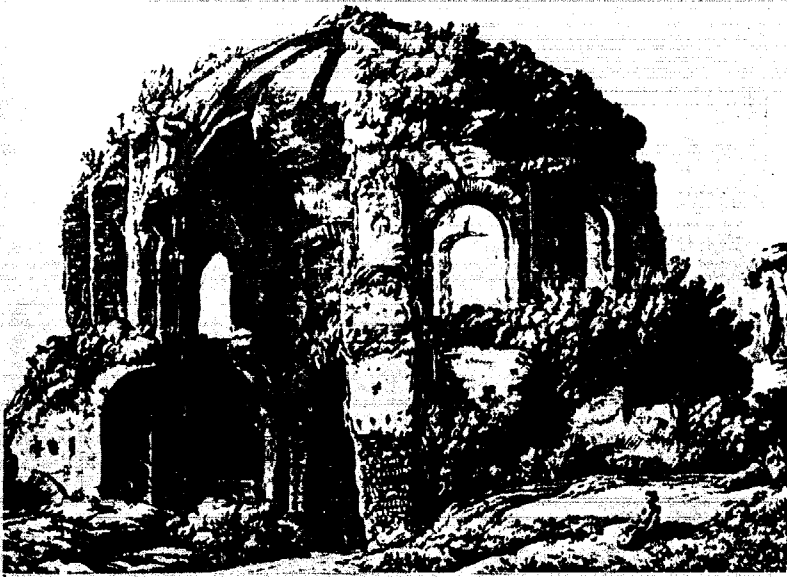
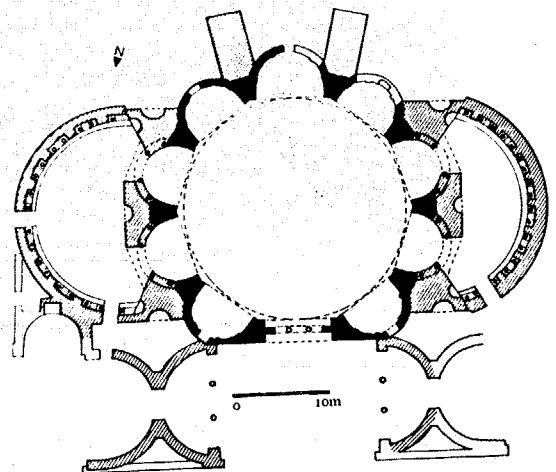


図5-9： ミネルヴァ・メキシコ・平面図、概要図  
(after Ward-Perkins)



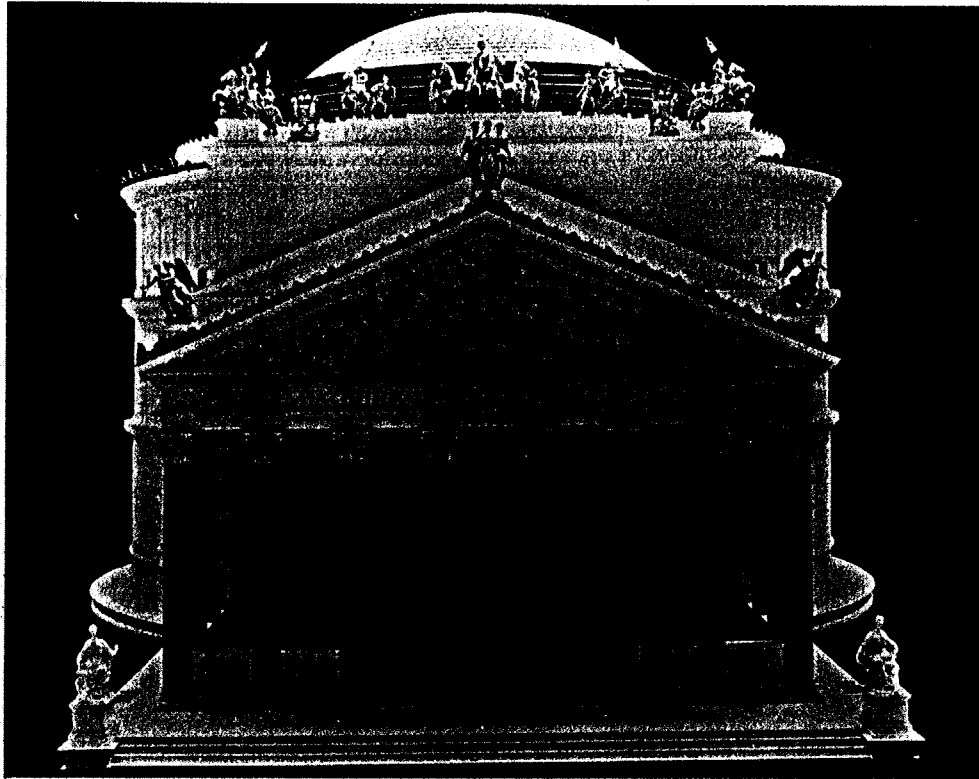


図5-10：パンテオン全景 (after MacDonald)

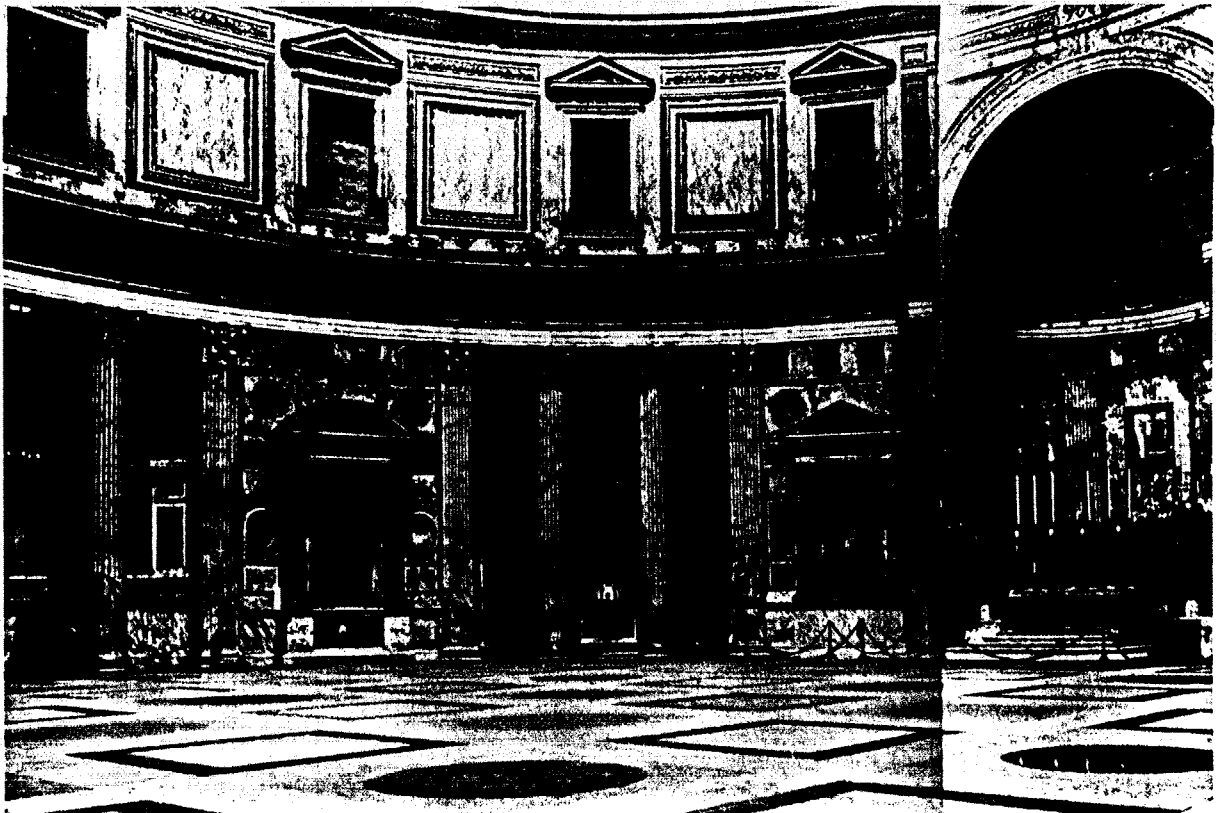


図5-11：パンテオン内観 (by Ward-Perkins)

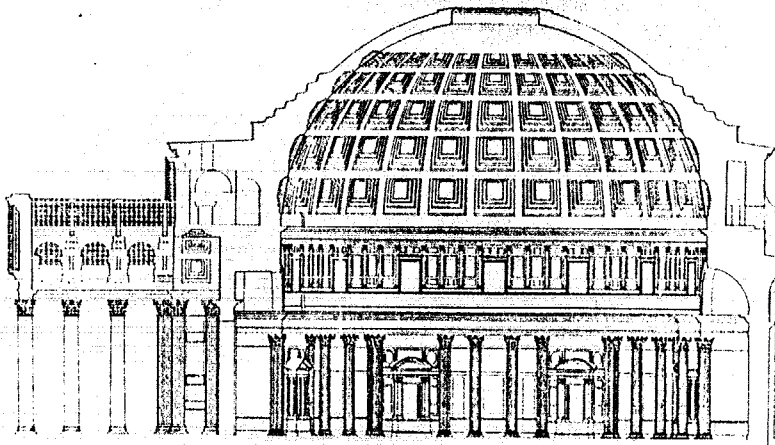


図5-11a：パンテオン断面図 (by MacDonald)

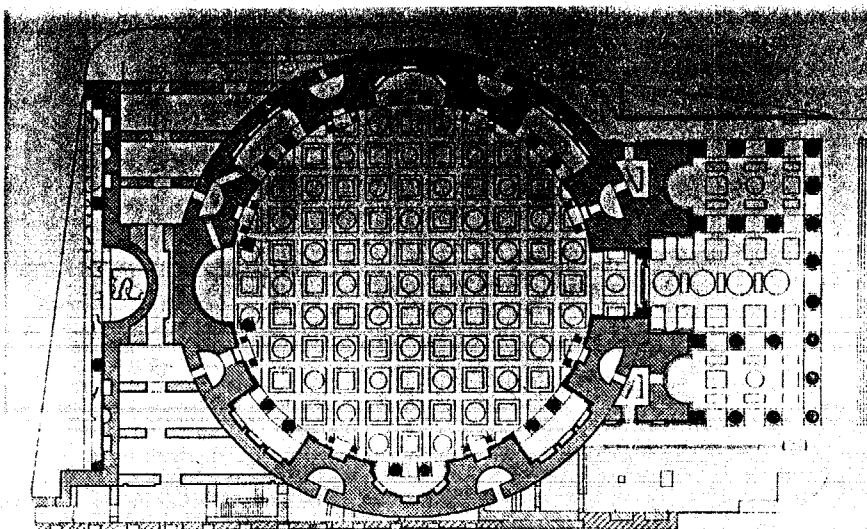


図5-12：パンテオン平面図 (by MacDonald)

5

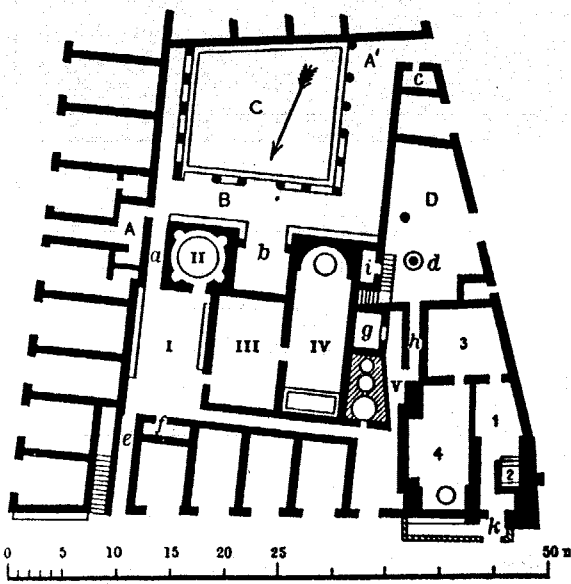


図5-14：ホムパイルフォルムの浴場平面図  
(by Brodner)

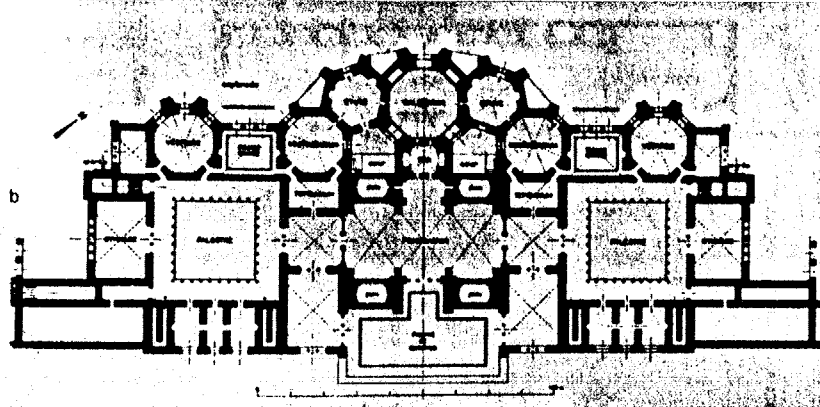


図5-15：カラゴ、アントニヌスの浴場平面図 (by Brodner)

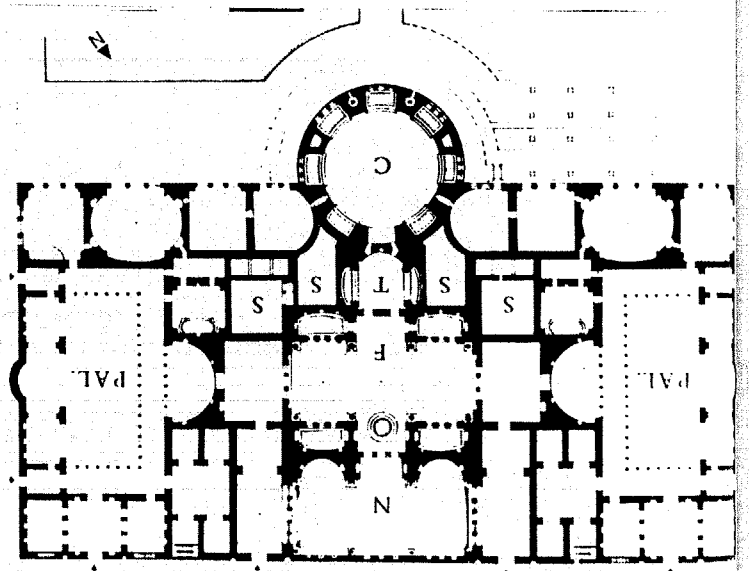


図5-16：カラカラ帝の浴場平面図 (by Ward-Perkins)

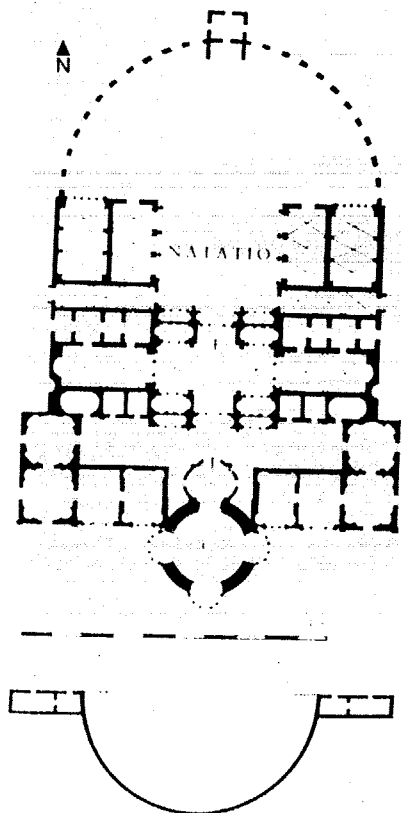


図5-17：コンスタンティヌス帝の浴場平面図  
(by Ward-Perkins)

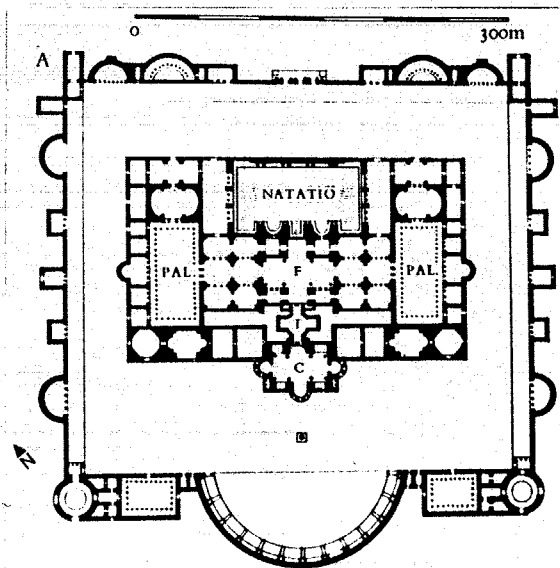


図5-18：ディオクレティアヌス帝の浴場平面図  
(by Ward-Perkins)

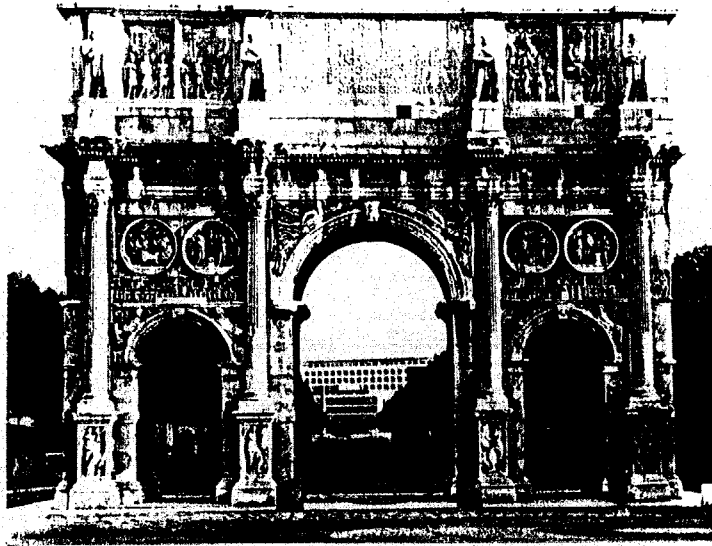


図5-19：ローマ、コンスタンティヌス帝の凱旋門 (by Kitznger)

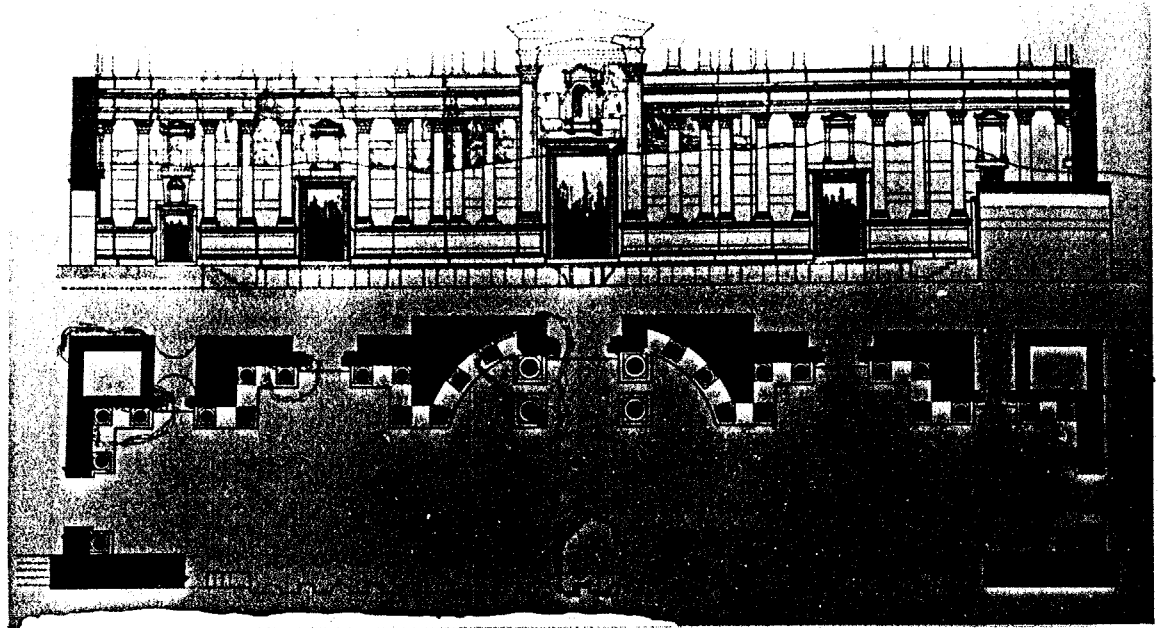


図5-20：パルミラの劇場、スカエナエ・フロン (by M. Bieber)

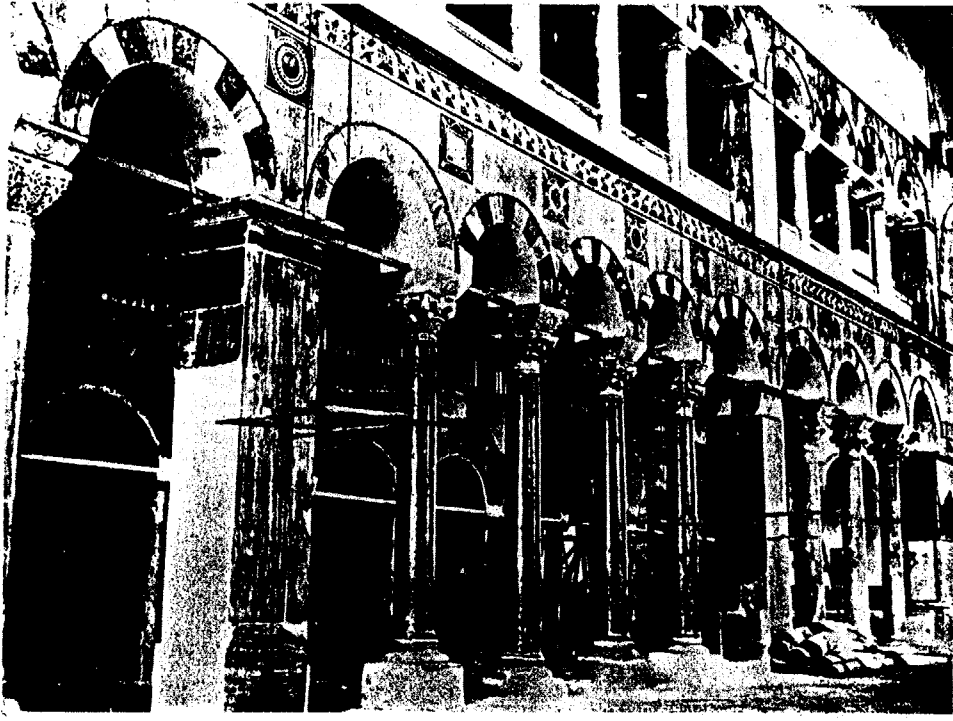


図5-21：テサロニキ、デメトリオス教会堂身廊 (by G. Swthriou)